

(前編)

ツッパリくん

チビデブ、デップリンの入塾

チビガキたちの憧れのお兄ちゃま

チビガキたちの劇作り

「桃太郎」の英語劇発表会

深い目

ツッパリくんたちの高校受験

チビガキたちが高校生クラスを作らせちゃった

ツッパリくん、チーチー塾を卒業する

チビガキたち、中三生になる

青白い少年、ホッホくんの入塾

リーダーシップを学ぶキャンプ

指示の多いリーダー、少ないリーダー

知らないできないホッホくん

名刺で割りばしを切る

不良少年にケンカを売る

ケンカに勝ちたい

決闘

中三生の夏期講習

ブラジル人生徒に日本語を教える

朝日新聞コラムへの生徒の感想

サントスくんとアッキー

空襲

夏期講習一週目の感想

マンジュシヤゲ

(後編)

遊びの合宿（三歳児が合宿に 中二生の喫煙 障害児の抗議 三歳児の親を呼びつける 中一生太郎の追放 ホッホがリーダーに挑戦）

追放された生徒の父親

ホッホの家出

朝日新聞「天声人語」にチーチー塾が載る

チーチー塾はどうやってできたのか

教師としての失敗と反省

中三生の劇「ブレーメンの音楽隊」

ホッホの成長
目立たない生徒が劇の主役に
理王のいたずら
高校合格のとんでもない仕方
デップリンが人を生かせるようになった
中三生の劇発表

チーチー塾のガキンチョたち（前編）

ツッパリくん

町はずれの静かな住宅地に、庭のある小さな古ぼけた平屋がある。<ちいちゃいちゃいちゃい塾>という名前の学習塾であり、生徒たちは<チーチー塾>と呼んでいる。元は畑と作業小屋だった所を、宮坂豪利が借りて学習塾を開いたのである。玄関部屋の本棚には絵本や教材が並び、奥の作業部屋にはキャンプ用品が詰めこまれている。教室は畑に面した六畳間二つをつなげた一つだけで、生徒が十人も入れればいっぱいになってしまう。

春の夕方、塾長の宮坂豪利と中学二年生五人が畑に花の種をまいていると、鋭いブレーキの音とタイヤを地面に激しくすべらせる音をたてて自転車がとまった。迷彩服を着た少年が自転車にまたがったまま入口の看板を見上げた。

「わたしの学校の生徒よ。不良だって言われているやつ」。少女のハヅキがささやいた。

少年が生徒たちを見つめた。鋭い目をしていて。少年はひらりと自転車を降り、自転車をすっと横たえると、大またで庭の中へ入ってきて、豪利の前に立った。

「自分は中二の枝といいまっす。授業見学させてくんさい」

「おお、ちょうど授業が始まるころだ。入りたまへ」

枝少年は生徒たちに顔を向けて、「オッス」と言った。少女マリポンが顔を輝かせて「オッス」と返した。ほかの生徒たちも一瞬遅れて「こんにちは」と声がそろった。

マリポンが枝少年を導くように玄関に入った。生徒たちは玄関で靴をぬぎっぱなしにして上がったが、枝少年は靴をぬぐと、靴先をくると外に向けた。ハヅキがびっくりした顔になった。豪利が笑いながらハヅキの頭を指でちょこんとつついた。

生徒たちは机を軽々と持ち上げて重ね、空間を作って車座になった。

豪利は枝少年に「最初は英語文型の絵カード取りをやるんでね、ああやって空間を作るんだ。机はぼくと生徒たちが十二ミリベニヤを切って、金属の脚をつけたものだ。軽くて便利

なんだ」と説明した。

生徒たちがにぎやかに絵カードを配り始めた。「絵は生徒たちが描いたものだ。ぼくがその絵に合った英文を読み上げると、生徒たちが大きわざでカードを取り合うんだ。枝くんもいっしょにやってみないか？」

生徒たちはすぐに一人分の場所を空けたが、枝少年は「自分は見学したいっす」と言って、輪の外側にすわった。

生徒たちは激しくカードを取りあいながら、ときどき枝少年にうれしそうに視線を送ったり、おもしろい絵のカードをかざして見せたりした。

カード取りが終わると、枝少年は「ありがとざんした」と軽く頭を下げ、何の質問もしないで教室を出ていった。

玄関でがたがた音がした。豪利が出てみると、枝少年が横にすべらせて開け閉めする引き戸がうまく動かなくて、なおそうとしていた。

「この家は古いんだ。おれが後でなおす。そのままでもいいよ」と豪利は授業に戻った。

休憩時間になったとき、枝少年が顔を出した。

「釘ぬきとカナヅチ、かしてくんさい」

「あれっ、きみは授業が終わるのを待っていたのか」

豪利が道具をわたすと、少年はガラス戸をはずし、みぞのレールからさびて曲がったクギを一本引きぬき、クギを石の上に置いて、カナヅチでたたいてまっすぐにのぼした。少年はそのクギをレールに打ちこんでからガラス戸を元に戻した。

「なおったす」。少年は軽く頭を下げると、自転車に軽く飛び乗って帰っていった。

集まってそれを見ていた生徒たちが「手つきがいい」と感心した。少女マリポンがハズキにきいた。「あんた、あの人不良やってる姿、見たことあんの？」

「見てませーん。ごめんなさーい」

★ ★ ★

次の中二の授業の日、枝少年が早めにやってきて、「おっ母が急に来られなくなったもんすから」と自分で入塾手続きをした。

「きみはどうしてこの塾に入ることにしたんだい？」

「あの看板の言葉が気に入ったんす」

「おお、そうか。＜小さな教室、大きな笑顔＞という言葉は生徒が考えてくれたんだ。乾草のさわやかな香りのする少年だよ」

「この塾のやつらは目線が優しいっす」

「目線が優しい？ おお、うれしいね。きみの親もこの塾に入ることに賛成なんだろうね？」

「おっ母が勧めてくれたんす。生徒がのびのびしてる塾がるってんで」

「おお、そうかい。遊んでばかりの塾だって思う人も多いみたいだがね」

「てめえがわかりやすいように理解したがるやつらがいるんす」

少年の腕に傷跡があった。

「きみはケンカをやってるのか？」

「やってるっす」。少年は顔色も変えずにこたえた。「弱い者いじめをするやつらっす」

「そういうやつらとなぐりあいをして、どうにかなるのかい？」

「自分が弱い者いじめをしてるってわかると、弱い者いじめをきっぱりやめるやつもいるんす。黒板に絵を描いていいっすか？」

枝少年は黒板から一チョークで絵を描き始めた。黒い学生服を着て、金髪を逆立て、鋭い目をした少年の絵だった。

ハヅキがやってきた。ハヅキは玄関の前に置かれた派手な自転車を見ると、そっと入ってきて少年の絵を見つめた。ハヅキはあとからやってきた生徒たちに、「静かに」という合図を送った。最後にやってきたマリボンがキャットと声をあげた。その声で枝少年が絵を消そうとしたので、豪利が「消すな。勢いのある絵だ。描き続けてくれ」と声をかけた。

枝少年は描き終わると、「I am TUPPARI-KUN.」と書いてから生徒たちの方を向いた。

「オッス。よろしっく」

「オッス、ツッパリくん！」。生徒たちが大きな声でこたえた。「You are TUPPARI-KUN！」

「ゴリ先生、ツッパリくんの絵を、カード取りに加えたーい！」。マリボンが叫んだ。

「おお、いいね。枝くん、ツッパリくんの絵を、このカードに描いてくれないか」

豪利は白い紙を少年にわたし、生徒たちには「英文は何としようか？」ときいた。

「I am a man. I am strong. I am TUPPARI-KUN! (おれは男だ、強いんだ。おれはツッパリくん)」と、生徒たちがにぎやかにこたえた。

枝少年が中学生用と小学生用に二枚の絵カードを描いている間に、生徒たちは取り合いでいたんだカードを新しいカードに描きかえた。

そのまま授業は絵カード作りと生徒たちのおしゃべりになった。豪利は生徒たちのおしゃべりの時間を大切にしている。おしゃべりを通して生徒たちは相手のことや自分のことを知り、豪利も教師としてのヒントを得ることがあるからだ。次の国語の授業もカード作りとおしゃべりになった。

「ツッパリくん、外に置いてある自転車、自分で改造したの？」

「そのバッジ、ボーイスカウトのバッジだよね」

「そのバッジにいろいろの地名のスタンプが貼ってあるじゃん。自転車で旅行してるん？」

「ねえ、ねえ、百点しか取れない男、門次。あんた、ツッパリくんみたいな人、どう思う？」

ちびでぶデップリンの入塾

チーチー塾の中学生コースは週二日である。次の中二クラスが始まる日の夕方、豪利と生

徒たちが庭で花の苗の手入れをしていると、ブレーキの音を派手にさせて、ツッパリくんがやってきた。それと同時に「こんにちは！ お兄ちゃまはこの塾に入っている人ですか？」というかん高い子どもの声がした。生徒たちが垣根越しに見ると、背が高く、丸々と太って、ほっぺたがばんばんに張った男の子がにこにこ顔で、ツッパリくんの前に立っていた。

「ぼくは小学三年生で保科日出夫です。おうかがいします。この塾はどんな塾ですか？」

「おまえに似合う塾だぜ」

「うれしいです！ お兄ちゃまのお名前はなんておっしゃるのですか？」

「ツッパリくんだ」

「すばらしいお名前です！ ぼくは憧れました」

生徒たちが聴いて笑った。豪利も笑いながら保科日出夫の前に出て行った。

「先生でしょうか？ ぼくもこの塾に入りたいです」

「おお、うれしいね。だがこの塾は勉強のほかに、キャンプやスキーにも行くから、親にも理解してもらわないといけないんだ」

「わかりました。あとで連れてきます」

少年はツッパリくんと豪利にしっかり頭を下げて帰っていった。生徒たちは後ろ姿を見送りながら言った。「でっかい！ あれで小三なの？ 言葉づかいも小三じゃないよ」

その夜の授業が終わるころ、「こんばんは！ さきほどはありがとうございました。母と中学一年生の兄を連れてきました」と力いっぱい声がした。中学生たちがワアッとわいた。豪利は親子を教室の中へ招き入れた。三人ともににこにこ顔の同じ雰囲気、同じ柄のセーターを着ていた。母親の手編みだろう。

中学生たちが興味しんしんの表情で親子を見るので、豪利は日出夫少年に、「どうしてこの塾に入りたいのか、ここにいる中学生たちに説明できるかな？」ときいた。

「できます！」。少年は金色の声で大きくこたえると、自分から前に出て、顔いっぱいの笑顔で年上の生徒たちに語りかけた。

「ぼくはこの塾の子どもたちを、折につけ目にしてきました」

「折につけて、小三が言う？」と中学生たちが開放的に笑った。

「まあ、まあ、まあ、お静かに聞きください」。日出夫少年は両腕を大きく広げた。そのかっこうに生徒たちがまた笑った。

「この塾の子どもたちはのびのびして、ぼくはかねてから興味がありました。すると今日、かっこいいお兄ちゃまが塾の前で自転車をとめました。ぼくは話しかけました。お兄ちゃまはツッパリくんという名前でした。ぼくはすぐにこんなかっこいいお兄ちゃまがいる塾に入りたいと思いました」

生徒たちが大笑いをし、ハズキが問いかけた。「一目見ただけで憧れるなんて、早すぎるじゃないの？」

「いいえ、ご心配なく。ぼくの直感は正しいです」

中学生たちが机をばしばしたたいた。

豪利が母親にきいた。「日出夫くんはずいぶんていねいな言葉づかいをしますね。由緒ある家系なのですか？」

「ちがいます！ ちがいます！」と日出夫とそっくりの兄が大きく笑って腕を振った。「ぼくたちのお父さんの親もお母さんの親も漁師です。海の男の言葉です。こいつが勝手に変な言葉を作ってるんです」

母親がころころ笑いながらこたえた。「ご近所に、お父ちゃま、お母ちゃまと呼びあうお宅があるんです。日出夫はそのお宅の上品な言葉づかいに憧れているんです」

ツッパリくんが日出夫に言った。「言葉を創っていくやつはいいぜ。おまえはおれのダチ公だ」

「感激です！ 今日からぼくは、お兄ちゃまのダチ公です！」

兄の松夫は中一の英、数、国のクラスに、日出夫は英語の低学年クラスに入った。

チーチー塾の小学生低学年クラスの授業は、初めの数分を豪利が悪役になって子どもたちと戦う。女の子もいっしょで、最後は豪利がやっつけられる。

日出夫が入塾した最初の日、豪利がぼんぼんと子どもたちを転がしていると、日出夫が突進してきた。「おっ、重たいな」。豪利がずっしりした体を受け止めて、ころんと転がした。日出夫が金色の声で叫んで立ちあがったとき、小二の理王が日出夫に向っていった。

理王は小二にしては小さい。日出夫は小三にしては大きすぎる。日出夫が腹をぽんと突き出すと、理王はふっとんだ。理王は顔から足の先まで赤くして何回も突撃したが、日出夫はにこにこ笑って腹を突き出すだけで理王は転んだ。それを見て子どもたちが次々に日出夫に向っていった。日出夫は大きな腹で一人ひとりをぽんぽんと飛ばした。

この日をさかいにして、子どもたちの戦う相手は豪利から日出夫に代わってしまった。戦いが終わると豪利が絵本を読んでやり、そのあとは絵カード取りをやる。その絵の中にツッパリくんの絵があった。豪利が英語と日本語で、「I am a man. I am strong. おれは男だ、強いんだ。I am Tuppuri-kun. おれはつっぱりくんだ」と言ったとたん、日出夫が興奮した。

「みなさんはこのツッパリくんというお兄ちゃまを知ってますか？」

日出夫は言葉をいっぱいにつかって、ツッパリくんがいかにカッコいいお兄ちゃまかを説明した。その言葉の量の多さ、しゃべる意欲の強さに、豪利はききほれてしまった。

「ツッパリくんはぼくのことを、『言葉を創っていくやつはおれのダチ公だ』って言ったんです！」

「言葉を創っていくって、どういう意味？」と小三のキララ子がきいた。

「あっ、わかりません」

「ダチ公ってなあに？」。理王がきいた。

「わかりません！ 先生、ダチ公ってなんですか？ 子分ていう意味でしょうか？」

「あっはっは、きみが大きくなって、その意味に出会える日が来るまで、ゆっくり待つんだな。きみにはうれしい意味だぞ」

チビガキたちの憧れのお兄ちゃま

ツッパリくんが顔に青いあざを作ってやってきた。豪利はツッパリくんの母親から、「息子はケンカが多いが、ケンカは一人でやり、群れて歩かない」ときいていた。

「ケンカしたのか？」

「へい、したっす」

「勝ったの？」と生徒たちが目を輝かせた。

「まあな」。ツッパリくんはそれ以上は話さなかった。

数日後、ツッパリくんがまた血をにじませてやってきたので、豪利はツッパリくんに、「この塾の夏の小学生キャンプで、子どもたちの遊び相手になってみないか」と誘いかけた。

豪利はこの少年の行動力と言葉のセンスに魅力を感じていた。この少年がケンカをするのは、つきあう仲間が同年齢ばかりだからであり、もっとほかの年齢の人たちとつきあったなら、彼はものの見方が広がるかもしれない、チーチー塾で野外活動を手伝ってくれている大学生のドラゴンを知ったなら、よい影響を受けるにちがいない、と豪利は思っていた。

数年前の春の日のことだった。豪利がバスに乗っていると、腰の曲がったお婆さんが乗ってきた。すると、「お婆さん、どうぞこちらへ！」と大きな声があって、一人の若者が席をゆずった。若者は双眼鏡を首からつるし、洗いざらしのシャツと、すりへった半ズボンを身に着け、日に焼け、あごひげをのぼし、足は毛むくじゃらだったが、清潔感があった。若者が薬師池公園で降りたので豪利も降りた

薬師池公園は池の周りが樹木に囲まれ、カメラを持った人たちがカワセミを撮りに集まっていた。若者はその群れを通り越して脇の細道に入っていくと、双眼鏡で木々を見まわした後、手のひらにエサをおいた。白と黒の小さな鳥たちが寄ってきて手のひらに乗った。豪利が興味を持って近づいていくと、若者は人なつっこい表情をした。「シジュウカラです。人をこわがらないのです」

若者は東大医学部の学生で、日に焼け、足が太いのはサッカーをやっているからだった。

豪利は自己紹介をしたあと、「小学生の夏のキャンプで、子どもたちの遊び相手になってくれる学生を探している」と話した。学生は興味を持ち、チーチー塾の幼児クラスを見学して、すぐに夏のキャンプに行ってくれることを決めた。そしてその夏、小学生たちはキャンプ地でこの学生といっしょになると、学生の笑いたくなるくらい大きなメガネを見て、「空飛ぶドラゴンだ！」と親しみを持って、学生にドラゴンという名前をつけた。

学生ドラゴンはガハハと大声で笑い、子どもたちといっしょに野を走り、川に入り、火をたき、食事を作り、夜は床に入ると、すぐに眠ってしまうくらいよく遊んでくれた。ドラゴンの人柄を信頼した豪利は、その年から彼に中三生の数学、理科の先生にもなってもらっている。

ドラゴンがチーチー塾の小学生キャンプでツッパリくんを見た瞬間、大またに近づいていき、大きな笑顔で両腕を広げ、「ツッパリくんですね。楽しくやりましょう」とツッパリくんをぐいと胸に抱いた。子どもたちもツッパリくんにまつわりついた。

日出夫は「みなさん、このお兄ちゃまはツッパリくんといいます。ぼくの憧れのお兄ちゃまです。みなさんにとっても憧れのお兄ちゃまになるとおもいます」と紹介した。

「オッス、ガキンチョども。おいらはツッパリくんだ。よろしく。だが日出夫、おいらをお兄ちゃまって呼ぶのはやめてくれ」

このキャンプの第一日目、草原で遊んでいたとき、日出夫がときどきへんなかっこうをして歩くことにツッパリくんが気がついた。

「おまえ、かわった歩き方するな。なんだ、それ？」

「きいてくださってうれしいです！」と日出夫は丸い体をふにゃーり、ふにゃーりと曲げて歩いてみせた。「これはアメリカの喜劇俳優のチャップリンの歩き方です」

「おいらもチャップリンを好きだぜ。その歩き方、みんなに見せてやれ」

「感激です！ チャップリンを知ってる人に出会えたなんて最高です」

日出夫は体じゅうで喜んで、「みなさん、お集まりください」と金色の声で叫んだ。

「みなさんはアメリカの喜劇俳優のチャップリンを知っていますか？ チャップリンはやせていますが、ぼくはこんなにデブです。デブがチャップリンの真似をします」

するとドラゴンのひざの中にすわりこんでいた小一の小春が、「いま、なんて言ったの？ デブプリンて言ったの？」とかわいい声できいた。

日出夫が指をパチーンと鳴らした。「その名前、ぼくは気に入りました。これからはぼくをデブプリンと呼んでください！」

ばんばんにはったほっぺた、半ズボンの下からドーナツのように丸くはみだしたふとももの肉。その日出夫がふにゃーり、ふにゃーりと、骨なし動物のように歩く姿はこっけいで、たちまち子どもたちが真似をした。

休憩のとき、小三の少女二人がツッパリくんのところへ駆け寄ってきた。ツッパリくんは長い手足でしなやかにかけまわっていた少女にきいた。

「おまえの名前はなんていうんだ？ 白鳥が踊っているみたいだったぜ」

「うれしい！ あそこでもぐるぐる回っているチャンちゃんが教えてくれたんだよ。チャンちゃんは小五で、体操をやっているんだよ。わたし、キララ子っていうの」

ツッパリくんはキララ子の隣りでほほえんでいる少女にも目を向けた。「目が優しいぜ」

夜は民宿に泊まった。子どもたちの朝は早い。次の日、子どもたちはツッパリくんとドラゴンを起こそうとしたが二人は起きない。子どもたちは二人の布団の上に乗りはじめた。

とつぜんガバツと布団をはねとばして二人が起きあがり、ガオーツ、ガオーツとほえた。子どもたちは悲鳴をあげ、部屋のすみに逃げ、体を寄せあって息をつめた。

ドラゴンがこわーい顔をした。「おれと戦いたいやつは、どこのどいつだ！ ややっ、おまえはふとっちょデブプリン！ さあ、こい！ こなごなにしてくれよ」

「やっ、おまえはチビンコ理王！ さあ、こい！ こちょこちょにしてやるぞ！」

デップリンが体じゅうで笑って突撃のかまえをとった。理王が体じゅうでにらんで突撃のかまえをとった。デップリンがドラゴンに組みつき、理王がツッパリくん蹴りかかった。ドラゴンはデップリンの巨体をころりと転がし、ツッパリくんは理王の足首を持って、ひょいと逆さまにつるした。

デップリンと理王は向かっていっては投げ飛ばされたが、最後にデップリンがドラゴンを吹き飛ばし、理王がツッパリくん蹴りをいれてのぼしてしまった。

長ながとのびながらツッパリくんがドラゴンに言った。「理王のエネルギーはすさまじいっす。足の先まで真っ赤にして攻撃してくるっす」

「理王は本気で蹴ってきてても、当ててはこないだろう？ 四年前は赤ちゃんで、ゴリ先生の背中に乗ってお馬さんごっこをやらしてもらっていたのにね」

小学生の夏のキャンプが終わって豪利が町田市にもどると、ツッパリくんの母親がうれしそうに訪ねてきた。「息子は中学生になってからケンカが多くて不機嫌だったのですが、小学生キャンプから、いい顔を帰ってきました。ときどき思い出し笑いをしています。ドラゴンさんという大学生にもたいへん刺激を受けています」

「ツッパリくんはおもしろい言葉づかいをしますね」

「ツッパリくんなんて名前をつけていただいて、息子も気に入っています。でも変な言葉をつかってるんでしょうね？」

「いやいや、おもしろい言葉です。彼は本をよく読むんですか？」

「はい、本は手放しません。わたくしも絵本を読んで育てました」と母親は目をくりくりさせた。「でも背伸びして突っ張っているんです」

「背伸びして突っ張っている子は、心に力があります。ツッパリくんはいい」

★ ★ ★

夏休みが終わって中二クラスの最初の日、デップリン、理王、キララ子、リサがチーチー塾の前に立っていた。その真ん中へキキーツと音をたてて自転車をとまった。

「オッス！ おまえら、どうした？」

「ツッパリくんに会いに来ました！」

「そっか。おまえ、デップリンのチャップリン、おもしろかったぜ」

「感激です」。デップリンが太った体をよじって喜んだ。

「やっ、理王！ おれと戦いに来たんだな」

ツッパリくんは自転車から降りて腰をかがめた。理王が一瞬で顔を赤くして、ツッパリくん蹴りをいれた。ツッパリくんはひょいとかわして、理王を肩にかついだ。

キララ子がツッパリくんを見上げた。「わたし、キャンプから帰って、すぐにバレー教室に入ったの！」

「そっか。それで白鳥の白を着てるんか。グーだぜ」

ツッパリくんはキララ子のお尻に静かに立っているリサを見た。「優しい目をしてやってきてくれたんか」

子どもたちがツッパリくんに会えて満足して帰った後、豪利がツッパリくんに聞いた。

「きみはリサに目をかけてくれているが、何か思うことがあつてのことかい？」

「目線がいいんすよ。リサがその場からいなくなった後にも、リサの優しさがその場に残っているんすよ」

この日の中ニクラスの国語は、「人の話に耳をすますこと、考えること、自分を表現すること」を学ぶ授業で、生徒たちは夏に体験したことを語った。ツッパリくん以外はチーチ一塾の中学生の＜遊びの合宿＞に参加したので、それぞれが自分の学んだことを語った。

「なんでも自由にやれて楽しかった」

「ミスしても面白がってくれるから、なんにでも挑戦する気になれた」

「中三生たちのリーダーぶりがかっこよかった。来年、自分たちがリーダーになるのが楽しみだ」

ツッパリくんはボーイスカウトの大会に、アメリカからやってきたリックという少年との交流を語った。

「リックは大草原の真ただ中に住んでいて、海を見たことがねえってんで、おいらのじいちゃんのお家の海辺で三日間すごさせた。やつは海から昇る真っ赤な太陽を見て、『でかい、赤い、ビューティフル、水平線が丸く見える』って大感動よ。おいらの方は地平線を見たことがない。『地平線に沈む太陽を見たい』って言ったら、ヤツの大草原の家に来いって言うんだ。だからおいらは大学生になったらアメリカを横断するって約束した。おいらはくむだにでっかい乗用車やオートバイを作るアメリカって何だ？>って知りてえんだ」

「その人の英語、わかったん？」

「わっからねえ、だいたいのおぼろげさ。だがヤツに俳句のことをきかれて、答えられなかったのはちょっとくやしかったな。やつは俳句に興味があるんだ。SUZUMENOKO SOKONOKESOKONOKE OUMAGATOORU をたどたどしい発音で言ってよ、『日本人はこんなに短い詩の中でどうしてこんなに優しい気持ちを表現ができるんだ？』ってききやがってよ。おいらは日本語でも答えらねえよ」

「ゴリ先生は答えられますか？」とハヅキがきいた。

「いやあ、そんなこと考えたことなかったなあ。ほんとにどうしてだろう？ どうして日本人は短い詩の中でいろいろ表現できるんだろう？」

「日本人は農耕民族で、日本は四季の変化が豊かだから、日本人はそこに心を通わせてきたからでしょうか？」とハヅキがつぶやいた。

「おお、なるほど、そうかもしれない。それに……日本語は一つの音で意味を持っている単語がいっぱいあるから、詩をつくりやすいのかなあ？……たとえばハヅキのハの音だった

らどんな単語があるかな？」

「葉、齒、派、刃、羽……まだありそう」。生徒たちは音をさぐった。「絵、尾、木、気、田、手、いくらでもある！……アの音に一音加わえて二音にしたら、愛、藍、合う、会う、青、赤、秋、朝、麻、明日、汗……まだいっぱいある」

「門次、きみはさっきから何か考えている目をしているが何を思ってるんだ？」と豪利がきいた。「おれはきみがダジャレをノートにびっしり書き連ねてあるのを見たことあるが、きみは言葉に興味があるんじゃないのか？ 今は何を考えていたんだ？」

門次はびっくりした顔をしたが、すぐに真面目な表情にもどって宙を見ながらゆっくりつぶやいた。「先生からのとつぜんの ナンモンニ モンジモンモン クモンスル」

一瞬、きょとんとした間があってから生徒たちが笑った。「なるほど！ 日本語はダジャレも作りやすいんだ」「へえ、門次はくそ真面目な顔して、とぼけたこと考えてんのね」

すると門次が真面目な顔でこたえた。「いえ、ぼくはツツパリのく大草原に沈む夕日を見にアメリカへ行こう>って思った感性や、くむだにでっかい物を作るアメリカって何だ？>という発想に驚いてたんです」

「おお、なるほど。それにそういう驚きを持った門次もいいなあ。ではハヅキにきく。きみは門次のことを『百点しか取れない男』とからかっているが、今の門次の言葉をどう思う？」

「すいませーん。もうからかいません。ごめんね、門次。その感想を続けてください」

門次は言葉を続けた。「すずめの子そこのけそこのけお馬がとおる、を外国の少年がく優しい気持ちの俳句>って、どうして思えたんでしょうか？」

ツツパリくんがバンと机をたたいた。「ナイス、門次！ それだよ！ そこでだ、おいらは質問する。この句を、こわいおっさんが怒鳴り声で、『やいやい、スズメっこ！ どけ、どけ！ じゃまだ！ おれさまの馬が通るんだ！』って解釈したらどうなる？」

「それはない！」

「雀じゃなくて、すずめの子としたところに優しさがある」

「馬じゃなくて『お馬』としたところに心が表わされている」

「お馬の『お』にこめられた気持ちを、英語ではどうやって表現するんだろう？」

チビガキたちの劇作り

十二月になって英語劇の練習が始まった。チーチー塾では毎年三月に、幼児クラスから中三クラスまでが集まって英語劇の発表会をおこなう。

子どもは劇遊びが好きだ。劇では子どもをほめることがいっぱいできるから、豪利も劇の指導が好きだ。「もっと大きい声で言ってごらん」と言っても子どもができなければ、豪利がやってみせると子どもはできるようになる。少しでもよくなれば「おっ、よくなったぞ」とほめてやれる。「いい声だ」「笑顔がよかった」「腕の振り方がいい」など、ほめることは

いくらでも見つかる。子どもはほめられるとやる気を出してよい表現をし、ほかの子どもたちはそれを見て刺激を受ける。

台本は生徒たちと豪利が相談しながら作る。やりたい劇を決まり、日本語で練習をしながらセリフを決め、そのセリフを豪利が英語になおし、録音して生徒に渡し、生徒は家で聴いて英文を覚える。小学生の英語クラスは週一回一時間だが、発表会まで三か月あれば、子どもはみごとに英語で表現する。英語を覚えられないところは日本語で言ってよいことにしているが、今まで英語で言えなかった子どもはいない。

小低クラスは三年生のデップリン、キララ子、リサ、二年生の理王、一年生の小春の五人である。子どもたちは「桃太郎をやりたい」と言った。

「桃太郎の話は単純で同じセリフが何回も出てくるから、英語は覚えやすいよ」

「鬼と戦うところがあるの？」

「戦いたいのなら作ればいいさ」

「戦いたーい！」

「そうだな。子どもは戦うのが好きだもんな、作ろう。桃太郎の役はだれがいいかな？」

「デップリン！」と子どもたちの声ははじけた。デップリンは英語劇は初めてだったが、その顔と巨体がにっこり、にっこり笑った。

犬の役は理王、サルはリサ、キジがキララ子、川に選択に行つて桃をひろうおばあさん役は小春になった。

リサが「小春ちゃんのおばあさん役は桃を拾ったらおしまいなので、もっと出してあげたい」と言った。するとデップリンが「桃太郎はどうして鬼が島に鬼退治に行くのですか？」ときいた。

「鬼たちが村の食べ物をうばったからよ」とキララ子がこたえた。

「それでしたら、ぼくは今、思いました。小春はおばあさんともう一つ、村のむすめの役になって、鬼にさらわれることにしたらいかがでしょうか？」

「ほう、おもしろいアイデアだ」

「さらわれたむすめを桃太郎が助けに行くのです。そうしたらむすめの場面を作れます」

「おお、いいねえ！ デップリンはそうやって発言してくれるから、クラスが活発になってありがたいなあ」

「先生がほめてくださるから、ぼくはとてはげ……はげます……励ますられるのです」

「おれの方こそきみたちに励まされるよ」と豪利がみんなに問いかけた。「デップリンのアイデアをいれると、むすめを助けるために桃太郎たちは鬼と戦う場面が作れるね。だけどこの人数では数が足りなくて、鬼をやる人が作れないなあ」

「ツッパリくんに出てもらいたーい！」

「あっは一、わかった、きみたちはツッパリくんと戦いたくって、桃太郎を選んだんだな」



おばあさんが川で桃をひろって帰ってくる場面から練習が始まった。ふんわりと咲く花のような雰囲気の小春がおばあさん役になって、腰をまげてちょこちょこ歩いた。

「かわいいおばあちゃん！」とリサが言い、「元気な女の子みたい」とキララ子が言った。

二人の言葉をきいて豪利がひらめいた。「ここはおばあさんじゃなくて、村の女の子にかえようか？」

小春がチーチー塾に入ってすぐのころ、デップリンがきいたことがあった。「小春さんはどうして学校へ行かないのですか？」

「目がこわいんだもん」

「目がこわいって、どういうことですか？」

「みんながつめたい目で見ると」

そこで豪利は小春が学校を休んでいる理由を子どもたちに話した。「小春は小学校で『のろま』と言っていじめられている。クラスに強い女の子がいて、その子が小春の動きの遅さにイライラして腹を立てるので、他の子どもたちが従ってしまう。担任の先生は小春をかばってくれたが、子どもは子どもに相手されないと悲しい。小春はがまんして学校に行っていたが、ある日、母親が『あなたの心は風邪をひいているのよ。学校に行ったら熱が出るわ。また行きたくなくなるまで学校はお休みしようね』と言って、背中からランドセルをはずしてくれた。その日から小春は学校に行っていない。そして近所に住んでいるリサのすすめでチーチー塾に入ったのだ」

小学生キャンプに参加した小春は走りまわっていて、のろまではなかった。ただ小春には競争心がなく、なにをやるにもおっとり動きだすからのろまに見える。

あるとき、デップリンがきいた。「小春さんはどうしてカードを取らないのですか？」

小春は首をかしげたままで説明できなかった。

すると「見てるのが楽しいんじゃないかなー」と理王がぼそっと言った。

「うん？ 理王、それってどういうことだ？」と豪利がきいた。

理王はころんとひっくり返ると、自分が取ったカードを見ながらつぶやいた。「みんなが楽しんでるのを見てるのが楽しいんじゃないかなー」

「それはなかなかよい説明です」とデップリンが大きくうなずいた。「小春さんは優しいお母さんみたいな人なのですね」

豪利は吹きだした。「なるほど。小春はみんなの姿を優しい目で見ているお母さんなんだ」

豪利はリサとキララ子の言葉から、小春についていった子どもたちの言葉を思い出して、この桃太郎の劇で小春の雰囲気を生かす方法を考えた。「小春ちゃんの役をおばあさんではなく村の女の子にかえようね。チーチー塾の劇ではね、桃の実や桃を切る包丁も道具を使わないで、手振りで見振りだけでやるんだよ。心を入れて演技をすれば、見ている人にも桃の実や包丁が見えてくるんだよ。では小春ちゃん、桃をひろうところからやってみよう。桃がどんぶらこ、どんぶらこ、と流れてきたと思ってやってね」

小春は突っ立ったまま桃をひろうかっこうをした。

「うん、動きがいいね。じゃあ、桃をひろうとき、女の子はなんて言いそうかな？」

「あっ、桃！って言う」

「おお、いいね！　じゃあ、桃がこっちからそっちへ、どんぶらこ、どんぶらこ、って流れていくよ。しっかり見て、それからひろってごらん。どんぶらこ、どんぶらこ」

小春の頭が川の流れを追うように動いた。体も少し動いて、「あっ、桃」と言ってひろうかっこうをした。

「感じ、出てる！」。子どもたちが叫んだ。

「いいぞ、小春ちゃん！　ほんとうに桃があるように見えたよ！　よーし、桃をひろった。女の子は次に何て思うかな？」

「おいしそう、って思う」

「おお、いいね！　では、おいしそう、って言うところまでやってみよう」

小春が「あっ、桃！」と指をさして流れを見つめ、すと動いて桃をひろった。手のひらの上に桃を乗せ、目の高さにかざして、「おいしそう」と言った。

「おいしそう！」とリサが喜んだ。

小春は桃を家に持ち帰る場面では自分から走った。

「リズムがいい。もっとやれそうだね。キララ子、やって見せてやれ」

キララ子が軽やかにスキップをふんだ。小春が真似をした。理王が床の上をごろごろ転がった。「小春がはねてる」

デップリンはにっこにっこした。「小春さんはすてきです。のろまなんてことはありません」

次にデップリンが桃のみになって、太った体で床をころころ転がって出てきて丸くなった。小春が桃を切ろうとして包丁になった腕を振り下ろすと、デップリンがぴよこんと体をおこし、ぱんぱんにふくらんだほほに両手の人差し指をあてて言った。「やあ、生まれたぞ！おじょうちゃま、ぼくをこの世に出してくださって、ありがとうございます！」

小春がキャッと笑った。キララ子が「デップリン、やりすぎ！　かわいすぎ！」と叫び、豪利は「おもしろい、デップリン！　思い切ってやれ！」と笑った。

続いて犬、サル、キジの場面にうつり、理王、リサ、キララ子が日本語でやったみたが、三人ともすっきりしない顔をした。

「どうした？　おもしろくないのか？」

「『キビ団子ください。鬼退治について行くならあげましょう』って三人ともが同じこと言って歩くだけ。つまんない」と小二の理王が説明した。「戦いたい」

「あっはー、そうか。理王は毎年戦う役をやってるものな。じゃあ理王は犬の役をどうやりたいんだ？」。豪利がいたずらっぽい目をした。理王の顔が一瞬で赤くなった。

理王は庭にぱっと飛び降り、はだしで一周してきて、床の上にすべりこんだ。

「イノシシやりたい！　デップリンにとつげきしたい！」

「あっはー！　カード取りの絵に、理王が描いた金色のキバ持ちイノシシがあるもんな。で

も大きな金色のキバだぞ。戦ったら桃太郎がけがしちゃうんじゃないのか？」

理王はまた飛び出し、戻ってきてすべりこんだ。「キバが折れて、桃太郎に助けてもらう」

「おっ、おもしろい！ だが……どうしてキバが折れてしまったんだ？ どうやって桃太郎に助けてもらうんだ？ どうやってキビ団子をもたらうことに話をつなげるんだ？」

みんなで考え、考え、考えた。

「イノシシがキバをきたえようとして、木の幹に突進する」

「キバが幹に深くつき刺さって、ぬけなくなってしまう」

「力持ちの桃太郎がイノシシをかかえて引きぬく」

「キバが折れる。イノシシが痛がる」

「桃太郎がキビ団子をあげる。イノシシがキビ団子を食べ、傷がなおる」

「うん、いいねえ、おもしろい。じゃあ、この場面のセリフを作りながらやってみよう」

次のサルの場面に移った。デップリンが「ぼくに提案があります。ぼくは思いました。リサさんみたいな上品な女性の方に、サルの役は似合いません。ほかの動物にかえるべきだと思います」

「上品な女性の方か」と豪利は吹き出したが、キララ子も「鬼と戦うところで、リサみたいな上品な女性が鬼をひっかくなんて似合わない。ほかの動物にかえたい」と言ったので、「なるほど、。デップリンはいろいろな言葉を考え出してくれるな。きみがいると助かる。きみはほんとうにツッパリくんのダチ公だ」とほめた。デップリンが体じゅうで喜んだ。

豪利が「じゃあ、リサにはどんな動物がいいかな？」ときいたが、子どもたちは「えーと」とうなるだけで動物の名前を出せなかった。

「リサの得意なものは何かな？」

「リサちゃんね、木琴がじょうずだよ」と小春が顔を輝かせた。

「おお、木琴か！……バチで木琴をたたく……強くたたく……軽くたたく」と豪利が宙に腕をのぼしてバチをたたき、その音を聴く顔をすると、デップリンが自分の太ったお腹をたたいた。

「でっかいお腹！ タヌキのお腹！」と理王がデップリンのお腹をさわった。

「それだ！ タヌキのお腹だ！ 月夜の晩にタヌキがお腹のたいこをたたいて踊る。たたきすぎてお腹の皮がやぶれて苦しむ。桃太郎がやってくる」

「キビ団子を食べる助かる！」

「お腹のたいこをポンポコポン」

「リサのまーるい目は、まんがのタヌキのまーるい目」

「わたしのキジの役も白鳥に変えたーい！」

「おお、そうか！……キララ子はツッパリくんに白鳥の踊りを見せたいのか？」

「見せたーい！」

「よし、白鳥だ！ じゃあ、この話を白鳥が踊ることにどうやってつなげるかは来週考えよう。来週の授業では鬼と戦うところを先に考えてみよう。そうしたら桃太郎がタヌキと白鳥

に出会う場面の言葉も思いつくかもしれないぞ」



次の週の授業で、「鬼の城に着いた桃太郎と動物たちが鬼の子分たちをやっつける。鬼の親分役のツッパリくんが最後にやっつけられ、さらわれたむすめが助け出される」ということになった。

この最後の場面を日本語でやってみたところ、村の女の子のセリフは「助けてくれて、ありがとう」しかなかった。

「先生、女の子の言葉、もっとふやそう」

「だけどきみたちが考えたストーリーでは、この劇は『助けてくれてありがとう』というセリフで終わるのが自然なんだけどなあ」

「鬼っていつつも悪い人ばかり」。理王がデップリンの大きな背中に太ももで寄りかかりながらつぶやいた。「いい鬼って、いたらいいのにな」

「うん？ 理王、それ、おもしろいぞ。鬼がいい人たちだとしたら、どんな話になるんだ？ いい鬼がどうして女の子をさらったんだ？」

「お料理を教わるため！」

「野菜作りを教わるため！」

「鬼たちは食べ物を作ることを知らなくってお腹をすかせてた。それで食べ物をうばって、女の子もさらったら、その女の子が料理を教えてくれた。鬼たちは野菜を作ることも習った。鬼たちは感謝してむすめを村に返す……」

「うん、心が温まる話になるな。だけど、そうしたらきみたちが鬼の親分のツッパリくんと戦うというのはへんだぞ。戦いの場面はなくなっていいんか？」

「だめーっ！ ツッパリくんと戦う！」

「そうか、だめか。じゃあ、どうやったらいい？」

考え、考え、考えて、アイデアが浮かんだ。それを日本語で何回もやってみてから英文にし、録音し、子どもたちは家で聴いて覚えた。

デップリンはチーチー塾に入ってまだ九か月しか経っていないなので、英語の音が聴き取れず、覚えられなかった。発音もイントネーションもへんてこりだった。劇の練習に入ってもデップリンがつかえるので、劇の流れがとまってしまった。するとデップリンが自分から言った。「主役のぼくがこんなに言えないのでは、みなさまに迷惑をおかけします。先生、英語にフリガナを振ってください」

豪利はデップリンの意欲を尊重して、台本の英文にフリガナを振ってやった。一週間後にはデップリンはもののみごとにセリフを暗記してきた。だが劇の練習を始めると、子どもたちがとまどったり笑いだしたりした。

「どうして笑うのですか？」とデップリンがきいた。

「だって変なんだもん」と子どもたちは答えたが、豪利は「そのまま続けろ」と白鳥の場面まで一気にやらせた。そこまでやってから「デップリンや」と豪利が言った。「きみはたった一週間でセリフを覚えてしまった。意欲がまったくすばらしい。それなのにみんなは笑った。どうしてかな？」

「ぼくは笑われているうちにわかりました。ぼくは録音してくださった英語を聴かないで、フリガナを読んで覚えました。だから音が変わったんだと気がつきました」

「おお！ よく気がついたねえ！ 子どもは目よりも先に耳で覚えてしまうものだが、デップリンは目で覚えてしまった。しかしきみは勉強がよくできるんだらうな？」

「はい、クラスで一番です。勉強はぼくの得意技です」

「得意技？ ではツッパリくんのダチ公に向かって言うぞ。ダチ公のしゃべった言葉は、英語の国の人が聴いたら何を言っているのかわからない音になっているんだ。たとえば英語のcatを日本の音でキャットと発音したら、英語の国の人は猫とは思わないんだ。それに言葉は音の流れ方が大切なんだよ。このセリフを言ってみてくれるか」

デップリンは大きな声で「アイヲントトーゴートーオニガシマ」と読んだ。

「うん、その言い方だとね、英語の国の人は『ぼくは鬼ヶ島へ行きたい』と言っているとは思ってくれない。だからフリガナは参考でいどにして、CDを何回も聴いて英語の発音や音の流れになれるようにしてごらん。そうしたらやる気のあるデップリンだ。きっとできる」

「はい、ぼくは『サルも筆のあやまり』をやってしまいました。反省して努力します」

豪利は「あっはっは」と笑いながら考えた。デップリンは人柄がかわいいし、表現意欲は強烈だ。それを「正しい英語に」といちいちなおしていたら、デップリンの魅力をそこなうし、劇を楽しもうとしている子どもたちの遊び心もとめてしまうことになる。子どもたちが笑わないでいどでいいから、デップリンの英語を上手にさせる方法はないかと考えた。

豪利は夏の小学生キャンプで、デップリンがオー・ソレ・ミオをイタリア語で口ずさんでいたことを思い出した。

「きみはオー・ソレ・ミオをイタリア語で歌えるんだって？ 歌ってみてくれないか」

デップリンはにっこりにっこり、金色の声で歌った。子どもたちも金色の笑顔で聴いた。

「きみはどうやってこの歌を覚えたんだい？」

「はい、近所のおじいちゃまがエンリコ・カルーソーが歌っているレコードをよくかけているんです。ぼくはそれを聴いているうちに覚えました」

「聴いているうちに覚えちゃったのか！ それにエンリコ・カルーソーはおれが生まれる前のイタリアの歌手だぞ。きみはカルーソーといい、チャップリンといい、ずいぶん古い人に心をひかれるんだなあ」

「はい、エンリコ・カルーソーの声はイタリアの明るい空、青い海から生まれたんです」

「おじいちゃまがそう言ってるのかい？」

「ぼくが考えました。言葉を創っていくヤツはいいぜ、ってツッパリくんは言いました」

一週間後にはデップリンはセリフをきれいな英語で言っていた。豪利が間違えたところ

まできれいに間違えていた。

チビガキたちの英語劇発表会

三月、英語劇の発表会の日が来た。チーチー塾は生徒数四十人ほどの塾である。会場は近くの藤の台ホールを借りた。藤の台団地は住民に地域活動が盛んで、住民たちがバザーをやった売り上げを積み重ねて行って建てたホールである。

チーチー塾の発表会の準備や会場の案内は高校生や中三生がやる。年上の生徒たちのきびきびと動く姿に年下の生徒たちは憧れであり、親たちも自分の子どもたちが大きくなったときの姿を彼ら彼女らの姿に重ね合わせる。

今年の発表は幼児クラスから中三クラスまでの七クラスである。借りたホールには少しだけ高い舞台がある。演技をする子どもたちは客席から出て、客席にもどる。生徒は前の方の床にすわり、親たちは後ろの椅子にすわった。

幼児クラスの劇から始まった。歌と踊りと短い言葉を組み合わせたもので、力いっぱい叫んで走って会場を笑わせた。

「次は小低クラスの桃太郎です。小春ちゃん、前に出なさい。川は客席の方だよ。お客さんの方を見てやってね。デップリンはすぐに出られるように、客席の一番前にすわれ！」

小春が前に出て、客席の方を向くと、小春の雰囲気がかたくなった。豪利が「始め！」の合図をしないうちに、小春は「あっ、桃」と言って劇を始めてしまった。スキップするところも、練習のときのやわらかさがなくなっていた。するとデップリンも体を丸めて桃になって、ころころ転がって出るところで、大きな石のようにかたくなって出てきた。小春が桃を切って、デップリンが起き上がってほほに指をあて、「やあ、生まれたぞ」と客席の笑いを誘うところも、デップリンの顔がひきつっていた。

豪利は「そうか！」と低く叫んだ。(小春が冷たい目を思い出したのだ。デップリンは小春の異常を感じてかたくなっているのだ)

豪利は二人の気持ちをほぐすように、のんびりした声で叫んだ。「あーれ、あれ、あれ、二人ともあがってしまったねえ。やりなおそうねえ。はい、やりなおし！」

客席の生徒や親たちがおおらかに笑った。豪利は前へ出ながら、客席に向かって小声で伝えた。「小春ちゃんは学校をずっと休んでいます。にこにこ顔で見てやってください」

豪利は客席の生徒たちに声をかけた。「気分をかえよう。小低クラスは一度みんな前に出て歌って行進しよう。キララ子、リードしてくれるか。ドラゴンも手伝ってくれ！」

劇を見に来ていたドラゴンが前に飛び出してきて、大きく笑いかけながら小春と手をつないだ。ツッパリくんもさっと出て、デップリンの背中を軽くぽんぽんと叩いた。

「もーもたろさん もーもたろさん おこしにつけた きびだんご」。キララ子を先頭に小春とドラゴン、リサ、理王、デップリン、ツッパリくんをつなげて、歌いながら円を描いて行進した。客席も歌った。小春の表情はやわらかくなっていた。

「小春ちゃん、客席の人たちを見つめてごらん。どんな顔をしているかな？」

客席の生徒たちが小春に手を振った。

小春が豪利を見て言った。「にこにこしている」

「そう、みんな優しい目をしているね。じゃあ今度は生徒たちの頭が川の中のきれいな石だと思ってごらん」と豪利が客席を指した。「石だと思えば、頭が石に見えるようになるんだよ……。おやっ、石の間を魚が泳いでいるね。見えるかな？」

客席の生徒たちが腕をゆらゆら泳がせた。「見える」

「見えたね。ではここは今、川の岸なんだよ。小春ちゃんは岸に立って魚を見ていてもいいし、川の中に入って魚を追いかけてもおもしろいよ」

小春が川の中に入った。

豪利が客席に向かって言った。「それでは小学校低学年クラスの『桃太郎』を始めます。子どもたちがアイデアを次々に出してくれました。みなさんの知っている桃太郎とはずいぶん違ったお話になりました」。豪利がナレーター役にもどった。

ナレーター：昔むかし ある村に 元気な女の子がいました。ある日、女の子が川で遊んでいると、(小春が川の中を歩く) どんぶらこ、どんぶらこ、と桃が流れてきました。

女の子： (桃をひろいあげ、手の上に乗せる) おいしそう。持って帰って食べよう。

(デッドデップリンが桃になってころりころりと転がって出てきて丸くなった。小春が腕を振り下ろして桃を切った。デップリンがびよこんと体を起こして、ぱんぱんにはったほっぺたに指をあてた。)

桃太郎： やあ、生まれたぞ！ ああ、おじょうちゃま、ぼくをこの世に出してくれて、ありがとうございます。(デップリンが立ちあがって客席にあいきょうをふりながら、ふにゃーり、ふにゃーり、と歩いた。会場が大笑いになった)

豪利が言った。「彼が人気者のデップリンです。この歩き方は彼のお得意のチャップリン歩きです」

「アンコール！」。生徒のお爺ちゃんらしい人が叫んだ。「チャップリンよりうまい！」

桃太郎： ありがとうございます！ 感激です！

ナレーター：桃太郎はぐんぐん成長してりっぱな若者になり、女の子も成長してすてきなむすめになり、二人は結婚することになりました。ところが結婚式が近づいた日、鬼たちが村をおそって、むすめをさらって行ってしまいました。桃太郎はむすめを取り返すために鬼退治に行くことにしました。そしてキビ団子をたくさん作って持っていきました。

桃太郎： これは世界一のキビ団子 (キビ団子があるようにかぎす)。これを食べれば力持ち。けがも病気もたちまちなおる。

ナレーター： 桃太郎が鬼が島に向って歩いていくと、うんうんうなっているイノシシに出会いました。

桃太郎： おやっ……。イノシシじゃないか。イノシシくん、どうして木と相撲をとってるんだい？

イノシシ： 相撲をとってるんじゃないんだ。キバをきたえようと木にぶつかっていったら、キバが木からぬけなくなっちゃんだ。助けてくれよ。

桃太郎： おやすいごようだ。(桃太郎はイノシシをかかえて大きく一歩さがる) ほら、ぬけた。

イノシシ： ありがとう！ あっ、キバが折れてしまった。いたいよう！ いたいよう！

桃太郎： おっと、お待ちよ、だいじょうぶ。このキビ団子を食べてごらん。たちまちなおり、力持ち。(イノシシ、キビ団子を食べる) 痛いの、痛いの、飛んでけーっ。

イノシシ： あっ、痛いのが飛んでった。傷がなおったのか、きみのでっかいお腹でためしたい。

桃太郎： いいとも、どんとやってこい！ (太った桃太郎がお腹を突き出す。小さいイノシシが突進する。桃太郎が吹っ飛ぶ)

イノシシ： おおっ、なおった！ ありがとう。ところきみはだれで、どこへ行く？

桃太郎： ぼくの名前は桃太郎。鬼が島へ鬼退治。

イノシシ： それならおいらもお手伝い。ついていきます鬼ヶ島。

ナレーター： 桃太郎とイノシシは鬼が島へ向かっていきました。するとお腹をかかえてうづくまっているタヌキに会いました。

桃太郎： タヌキどん、悲しそうにお腹をさすって、どうしたんだい？

タヌキ： お腹のたいこをたたきすぎ、皮を破いてしまったの。ポンポコポンの音が出ない。

桃太郎： それならこれをお食べなさい。たちまちなおるポンポコボン。

タヌキ： (キビ団子を食べる) あれっ、お腹の皮がくつついた。たたいてみようポンポコボン。

桃太郎 イノシシ： (踊り出す) おっ、腕が上がった。足が出た。体が勝手に踊り出した。これはゆかい、おもしろい。あっ、やめられない。とめられない。たたくのをやめてくれ！

桃太郎： すばらしい！ あんたのお腹のたいこを、鬼との戦いに使おうぜ。

ナレーター： 桃太郎とイノシシとタヌキがしばらく行くと、白鳥に出会いました。

イノシシ： おやっ、緑の草の中にきれいな白鳥がいる。もがいているぞ。

タヌキ： 白鳥さん、そんなにもがいてどうしたの？ きれいな羽がだいなしだ。

白鳥： 猟師に弓で射られたの。矢がぬけない。痛くて、痛くて、もう飛べない。

桃太郎： ぼくがぬいてあげましょう。(ぬく) ほら、ぬけた。白鳥さん、このキビ団子をお食べなさい。羽を広げて大空へ。

白鳥： (食べる。羽を広げる) あらっ、羽がのびる。羽ばたいてみよう。まあ、わたしの羽が風を呼ぶ。あら、うれし。(舞う) これがわたし。わたしは白鳥！

桃太郎たち： おお！ 風だ、光だ！ 飛んでいこうぜ、鬼ヶ島へ！

ナレーター： こうして桃太郎とイノシシとタヌキと白鳥は鬼が島へやってきました。島

はがんじょうな壁で囲まれていました。

ここで豪利が客席に向かって言った。「ここからは日本語でやります。中二生たちが鬼をやってくれることになり、小低クラスの子どもたちとは合同練習をやったのですが、子どもたちは中二生たちをやっつけるのが、うれしくてうれしくて、何度も戦ったものですから、練習はそこだけで終わってしまいました。このあと、村のむすめが登場する場面からはぶっつけ本番です。中二生たちが助けてくれます。では、始めます」(鬼になった中二生たちが登場)



桃太郎 : こんなに高い壁に囲まれていたんじゃ、中のようすがわからない。白鳥さん、空を飛んで鬼たちのようすを見てきてくれないか？

白鳥 : おやすい御用よ。(空を飛び、戻ってくる) 鬼たちはのんびりと食事中よ。

桃太郎 : よし、今だ！ イノシシくん、体当たりをして壁をこわそうぜ！ (桃太郎とイノシシ、壁に突進するが跳ね飛ばされてしまう) うーん、どうにもならない。

イノシシ : なんの、なんの。キビ団子を食べれば、あんたは力持ち。

百太郎 : おっと、合点、しょうちのすけ。(食べる)。おおっ、力もりもりになった。イノシシくん、さあ、壁に突撃だ！ (桃太郎とイノシシ、壁に突撃する。壁が大きな音を立て、ゆれる)

白鳥 : (空から) 鬼たちが音に気がついたわよ。こっちを見ている。タヌキさん、お腹のたいこをたたいておくれ！

タヌキ : 待っていました！ ポンポコポーン！

白鳥 : ほらっ、鬼たちが踊りだした！ 桃太郎くん、イノシシくん、壁をこわせ！

鬼たち : (踊りだす) なんだ、なんだ！ 腕が勝手にあがる！ 足が勝手にステップを踏む！ 体が踊りだす！ こりゃあ、おもしろい！ ゆかいだ、ゆかいだ！

桃太郎 : (桃太郎とイノシシ、壁をぶちぬき、城の中に突入する) タヌキくん、たいこをとめてくれ！ (鬼たちに向って) やあ、やあ、やあ！ 遠からんものは音にもきけ、近くば寄って目にも見よ！ われこそはももたん村の桃太郎なるぞ！ ええと……あれっ、言葉を忘れちゃいました。

(すかさず客席からさっきのお爺さんが、「われと思わんものは出会えや出会え、じんじょうに勝負、勝負！」と声をはった)

桃太郎 : (ありがとうございます、と頭をさげ、客席は大笑い) われと思わんものは出会えや出会え、慎重に勝負、勝負！ 鬼の親分、ツッパリくんはどこにいる！ 勝負、勝負！

鬼の親分 : わしが親分だ！ 勝負だと？ おっ、小僧、どこかで見たことあるぞ。おまえ、チャップリンに似てるなあ。よし、勝負だ！ さあ、こい！ (桃太郎、突進する) おっ、強

いぞ、強いぞ。

イノシシ：おいらも勝負だ！ おいらの突進、受けてみろ！

鬼の親分：うん？ おまえはイノシシ。チビンコ理王に似てるなあ。さあこい！（両軍、戦う）

鬼たち： 白いばけものが空から降りて来た。羽で顔をぶったたかれた！ タヌキがおれをくすぐる！ ひーっ！ くすぐるのをやめてくれ！

（豪利がチャイコフスキーの「白鳥の湖」の曲の一部をハーモニカで吹く。白鳥が踊る。みんな、戦いをやめてみとれる）

鬼の親分：おお、スワン！ スワン！ ビューティフル！

むすめ：（小春が登場）ケンカをやめてください！ 鬼さんはいい人たちなんです。（みんな、ケンカをやめる。）

鬼たち： おれたち鬼がなぜいい人たちなのか、桃太郎に説明してやってくれ。

むすめ： 鬼さんたちは食べ物がなくて村をおそったの。わたしをさらったの。

鬼たち： おれたちはあんたをなぜさらったんだ？

むすめ： えーと、えーと、鬼さんたちはお野菜を育てたり、お料理を作ることを知らなくて、それで……わたしから教わりたかったの。

鬼たち： 教わって、どうなったんだ？

むすめ： お野菜作って、お料理をおぼえたの。

鬼たち： だから？

むすめ： だから……もう鬼さんたちは村をおそわないの。

鬼の親分：そうとも、おれたち鬼は人間をもうおそわない。ところで、そこにいるどでかいやつは何者だ？ あんたのお兄ちゃまか？

むすめ：わたしのおむこちゃまになる人なの！

桃太郎： そうです。この人はぼくのおよめちゃまになるのです。

鬼の親分： それはめでたい。みなのもの、祝いだ！ パーティだ！（豪利に向かって叫ぶ）ミュージック、スタート！

（豪利がレコーダーのスウィッチを押す。ビートルズの曲が始まる。ツッパリくんが全身を使って踊り出す。中二生たちが小学生と手をつないで踊る。マリポンがデップリンのとなりに小春を並ばせる。客席の生徒、親たちも踊る）

ナレーター：こうして桃太郎と村のむすめはめでたく結ばれ、それからというもの鬼たちが村をおそうこともなくなりました。めでたし、めでたし。

ツッパリくんの目

ツッパリくんが中学三年生になって間もない数学の授業のときだった。ツッパリくんがとつぜん机を激しくたたいて、「なんでおれには数学がわからねえんだよ！」とわめいて、

机につっぷした。数学の先生のヒューモくんと生徒たちが息をつめて見ていると、ツッパリくんはゆっくり起きあがり、黙って教室を出ていった。ハズキが玄関まで追った。

ヒューモくんとは今年から中三生に数学、理科を教えている大学生である。ドラゴンがこの三月に大学を卒業し、ティーチャー塾の講師を終わることになったので、後輩の医学部の学生を自分の後の講師として連れてきたのである。

ヒューモくんはおだやかで品のよい学生である。彼の最初の日の自己紹介が終わるとハズキがみんなに言った。

「先生に、いい。ニックネームをつけない？」

「ユーモアがあるから、ユーモアくんとかにしたらどうかな？」

「ヒューマニズムを感じます」

「それなら、ヒューモくんがいい！ 先生、その名前、気に入る？」

学生はニコッと笑ってピースのサインを出した。

そんなヒューモくんの授業はわかりやすかったから、今のツッパリくんの態度に生徒たちはとまどったが、ハズキが戻ってきて言った。「だいじょうぶよ。悪い態度じゃなかった」

翌日、ツッパリくんの母親が豪利を訪ねてきた。「息子は帰ってくると、『数学がわからない』と大泣きしたんです。泣いたことがない子です。私は言葉を見つけられませんでした。まだケンカもやっています。どうしたらいいのでしょうか？」

「ではツッパリくんがよそのお子さんだったら、あなたは彼をどう思いますか？」

母親はパッと手のひらで顔をおおった。手はずしたときには輝く表情になっていた。

「すてきな子です！」

「そのすてきな子が自分で解決するんじゃないでしょうか？」

次の授業の日、ツッパリくんはみんなに謝った。「でっかい声出して、悪かったす。数学がわからなくて、情けなかったんす。むしゃくしゃしてることもあったもんすから」

ヒューモくんが「数学は基礎をていねいにやるのが一番だよ」と言って、自分の子ども時代の話をしてくれた。「ぼくは長いあいだ入院していて、病院のベッドの上で一人で勉強していたんだ。学校の教科書というのは、基礎的なことがていねいに書かれているから、ぼくは教科書をしっかりやった。その上で問題集の基礎問題からやった。そうすると難問も解けるようになっていった。ツッパリも基礎勉強とその復讐を楽しんだらいいと思う。夏期講習は中一、中二の復習を徹底してやるつもりだけれど、その前に、中一、中二の総復習テストをやって、それぞれの数学力をはかってみたい。そのテストだけやっても、力がつく問題を作るつもりなんだ」

豪利がツッパリくんにたずねた。「きみはむしゃくしゃしていることがあった、と言ったが、ケンカをしたのか？」

「そおっす。自分はケンカする気がねえのに、相手ににらまれるんす」

「ふーん、だがきみは強そうに肩で風切って歩いたりはしないよな？」

「しないっす。自分の目つきが悪いんす」

「それはちがうんじゃないかな」。ヒューモくんがやわらかな表情で言った。「ツッパリは深い目をしているよ」

ツッパリくんが意外そうな顔をした。「深い目？……自分の目がっすか？」

「そう。深くって、優しい目だよ」

「おおっ」と豪利が声を出した。「深い目か……そうか、子どもたちがツッパリを好きになるのは、その深くって優しい目なんだ」

「あははっ」っと、少女マリポンが軽やかに笑った。「そうなんよ！　リサたち女の子を見るときなんか、優しい目をするんよ。男の子には、おっかない目をするみたいだけだよ」

「なあ、ツッパリ、きみは相手からにらまれたら、どうしてるんだ？　にらみ返すのか？」

「そおっす」

「目をそらすことはしないのか？」

「しないっす。まだガキなんすよ、自分は」

「『おれは男だ、強いんだ。おれはツッパリくんだ』ってやるわけだ」

「まあ、そおっす……だけど、そんな自分がめんどくさくなってきてるんす」

「そうか……ツッパリの目を好きな子たちがいる。同じ目にケンカを売る中学生もいる」

「自分の心の持ち方ってこってすか？」

「そうだろうな……なあ、ツッパリ、合氣道を学んでみないか？」

「合氣道？」

「うん。合氣道は人を優しく見つめる武道だ。自分をも優しく見つめるようになる武道だ。きみはその深い目で自分を見つめたら、きみは何かを発見するんじゃないのかな」

次の日、ツッパリくんは合氣道の道場を見学して入会した。「合氣道には人間にとって真実があるっす」。ツッパリくんの豪利への報告はそのひと言だけだった。

★ ★ ★

ヒューモくんが中一、中二の復習問題を図形問題、計算問題に分けて作ってきて、二時間にわたってテストをやった。

ツッパリくんがとつぜん大声をあげた。「なんちゅうこったい、この問題は！」

みんなぎょっとしたが、そのあとにツッパリくんのつぶやきがあった。「この問題の作り方には、学ぶ者への愛情がある」

ヒューモくんが「わが意を得たり」という表情をした。少ししてからまたツッパリくんが、今度はおだやかな声できいた。「この問題はヒューモくんが作ったんすよね？」

ヒューモくんは両手の指をピースの形にして、首を左右に振った。女の子たちがキャッと声をあげた。「だめ、ヒューモくん！　テスト中にそんなことやったら。手が笑って、字が書けないじゃん！」

テストが終わって生徒たちが帰るときに、ツッパリくんは「おいらの数学史上、最高得点

になるはずだぜ」とガッツポーズをした。

生徒たちが帰ると、豪利とヒューモくんにきいた。「ツッパリの言葉をどうだった？」

「あれ以上の光栄はないっす」とヒューモくんは答えた。「ツッパリは国語力が素晴らしいときいていましたから、数学もできるはずだと思って、彼を念頭において問題を作ったのです。うれしい言葉でした」

「おれもツッパリがあんなとらえ方ができるとは思わなかった。きみがツッパリに『深い目をしている』と言った言葉と、ツッパリがきみの作ったテストには『学ぶ者への愛情がある』と言った言葉との間には、教師と生徒のみごとな関係あることをおれは目の当たりにした」
「ありがとうございます。ところで先生、門次は満点と思いますが、彼はそれ以上に理解の仕方が深いですね」

「おお、それ、門次に言ってやってくれ。おれは数学はそこまではわからない。テスト業者の学力テストで、門次は五科目総合偏差値はいつも七十七とか八だ。この偏差値ってなんだ？ よくわからねえ」

「チーチー塾は偏差値は考えなくていいです。偏差値は人間としての魅力を表すもじゃないです」

「うん、わかった。それで門次のことだが、勉強はできるが、それ以外のところでときどき自信のなさそうな顔をするんだ。それが何なのか今のところおれにはわからない。俳句のことではいい発言をしたことがあってほめたんだが、表情が少ないから、彼の励みになったのかどうかかわからない。きみに『理解の仕方が深い』と言ってもらえたら、彼の自信になるんじゃないのかなあ」

ツッパリくんたちの高校受験

一学期が終わって通知表の成績が出たので、高校受験に向けて中三生六人と親、豪利による三者面談をみんないっしょにやった。

「相談は入塾順でやりましょうか？」と豪利がきいた。

「成績のいい生徒さんからやってくださいませんか？」とマリポンの母親が言った。「ぬけているマリが最初ですと、自分たちの話が終わったら、マリも私もほっとして、あとの皆さんのお話に集中できなくなってしまいます」

マリポンが「あははは」と笑った。「お母さんがぬけてるから、わたしはぬけてるんよ」

「じゃあ、ぬけてない生徒からにしましょう。門次、きみはどの高校に行きたいのかな？」

「都立町田原高校です」

「理由は？」

「ぼくは人間関係が弱かったのがチーチー塾に入って少し強くなっています。だから小さいときからの友だちが多い地元の学校に行って、人間関係のあり方を学びたいと思います。それに町高の部活は面白って聞いていますから」

「お父さんはどうですか？ 国立大学の付属高校へ行かせたいとおっしゃってましたね？」
「いやあ、好きなようにさせます。こいつがこんなにはっきりしたことを言えるようになるなんて、今日まで思ってもいませんでした。うれしいですわ」

「よし、町高だ。ところで門次、きみは発言を求められると自分の考えを表現し、内容もいい。だがきみは指名されないかぎり黙っていて、きみのよさが人に伝わらない。なぜ表現しないんだ？」

門次はちょっと考えてから「失敗が……」と言いかけたが言葉を続けなかった。豪利は声をかけずに待った。

「こわいんです」

「うん、そうか。だがなあ、門次、きみは失敗を乗り越える力を持ってるぞ」

門次は驚いた顔をして豪利を見た。

「だがおれは慎重な門次が失敗するとは思えないなあ。お父さん、いかがですか？」

「いやあ、こいつが失敗するのを見た記憶はありません。こいつは何をやるにも慎重で、なかなか踏み出さないで歯がゆく思っていました。失敗をこわいがっていたとは気がつきませんでした」

「なあ門次、チーチー塾を開いたとき、小学生のきみはそのチラシを持って一人で訪ねてきたんだよ。門次にはそういう積極性があるんだぞ。それを表に出せ。出せば出会いがある。失敗はあるさ。だけど成功より失敗から学ぶことの方が多いんだ。若いときの失敗は未来を創る財産だと思って、高校では思い切り活動するんだぞ」

次はハヅキだった。ハヅキはテストの点数も通知表の評価点も高いから、すんなり町田原高校に決めた。「町高では吹奏楽部に入ります」

「おお、いいなあ。ハヅキは楽器を演奏しているとき、自分の奏でた音の行方を追っている目をしている。いい目だ」

ツッパリくんは昨年できたばかりの都立高校に行くと言った。「えっ、町田原高校じゃなくていいの？」と生徒たちが驚いた。

「おいらは歴史のない学校に行って、自分に何ができるかやってみたいっす」

「おお、そうか。ツッパリはそういう男だ。それでいい」

もう一人の男子生徒の明は料理コースのある私立高校を希望した。「中一のときのチーチー塾の＜遊びの合宿＞で、ぼくが料理をしていたら、先生が『きみは料理をうれしそうに作っている。雰囲気がいい』って言うてくれたので、ぼくはコックになりたいと思いました」

もう一人の少女咲子は「高校を終わったらセイカ職人になりたい。そのため高校生のうちからフランス語の塾にも行きたいので、その勉強の時間がとれるように、高校は家の近くの学校がいい」と言った。

「ほお、咲子が花を扱ったら、花はあっそう奥ゆかしい香りを漂わせるなあ」

「その生花でなくて、パティシエのほうです」

「パティ……？ なんだ、それ？」

「お菓子を作る人、製菓職人です。昨年の〈遊びの合宿〉で、わたしが作ったケーキを、先生がおいしそうに食べてくれた顔を見て、私、パティシエになりたいって思ったんです」

母親が言葉を継いだ。「咲子は自分がやったことで人が喜んでくれた表情を見たのは、ゴリ先生がはじめてなんです。合宿から興奮して帰ってきました」

「あっは一、そうか！ うん、咲子は奥ゆかしいケーキを作る人になる！……しかしおれのひと言や表情で、生徒が二人とも進路を決めちゃうのか！ 教師って責任重いなあ」

「ゴリ先生！」とマリポンが叫んだ。「天然まぬけの少女マリポンは都立高校へ行きたいです。天然まぬけに都立高校はむりですか？」

「おおっ！……むりじゃないぞ。五科目合計で、あと百点上げればいいんだ。少女マリポンならできる」

「でもわたし、平均点三十点くらいじゃん！ どうやったら上げられるん？」

「その前にきくが、少女マリポンはなぜ都立高校に行きたいんだ？」

「お父さんとお母さんが離婚して、うち、お金ないから」

「それだけか？」

「それだけじゃない。天然まぬけの少女マリポンが勉強したくなったの！」

「えっ、ほんとに？」。ハヅキが両腕を空にのぼした。「やったー！ ついにその日が来た！」

「ほら、ついにその日が来たってさ。なあ、マリポンよ、きみは勉強のことをのぞいたら、友だちの中で遊んでいるときの自分を、どんなふうに評価しているんだ？」

「賢い子だと思ってる！」とマリポンは悪びれずにこたえた。「遊び方知らない友だち、多いもん。工夫できないし、思いっきり遊べないし、食べ物の味もあんましわかんないんだよ」

「どういうこと？」。コックとパティシエ希望の二人が同時に反応した。

「だってさ、友だちのお弁当の色がきれいでさ、それにくらべたらうちのお母さんの色、あんましきれいでないの。『わたしもきれいな色のお弁当食べたいな』ってお母さんに言ったら、ある日、お母さんが『あんたの好きな色のお弁当を作ったよ』ってわたしてくれたの。うれしくってさ、学校でみんなに見せながら食べたの。そしたらさあ、お母さんのいつもの味と違ったん。それで家に帰ってお母さんにきいたら、お惣菜を使ったんだって。『お惣菜ってよくできてるわね』ってお母さん言った。でもわたしにはお母さんがいつも作ってくれてる味が好きって思った。だって色は地味だけど、母の愛の味がするもん」。マリポンはそう言って「あはははっ」と笑った。

「マリポンちゃん、いい子ね。母の愛の味に気がついたなんて、ここにいるお母さんたち、うれしいわ」

「ふーん、そんなことがわかるマリポンが、なぜ勉強できないんだ？」

「できなくたって困らないもん。お母さんも勉強しなさいって言ったことないもんね。でもさあ、勉強って、おもしろいん？」

豪利は壁にかけてある日本地図を指して「北海道はどこか？」ときいた。マリポンはさっさと出て行って、さわやかな表情で九州を指した。生徒たちが楽しそうに笑った。

「えっ、ちがうん？ 北海道って、はじっこにあるじゃん。日本で一番寒いんでしょ？」

「うん、北海道がはじっこにあって一番寒い所、って知っているだけでマリポンはたいしたもんだ。北海道は日本の一番北にあるんだよ」

「わたし、北とか西とかってわかんない」

「おお、そうか。じゃあ、太陽の出る方はどっちだ？」

「こっち！」。マリポンは立ち上がって、朝の光でまぶしい庭に体を向けた。

「うん、そうだ。太陽が出る方、つまり体の正面が東、背中の方が西だ。右と左はわかるか？」

「わかる！ こっちが左！ わたし、左ききだもん」

「そのまま両腕を広げてみな……うん、そうすると左腕のあるほうが北だよ」

「右腕が南！ わかった！ わたしの家が薬師池公園の南側って意味がわかった！ おもしろーい！ わたしはもう天然まぬけじゃなーい」

「マリポン、その天然まぬけって、だれがつけたんだ？」

「自分でつけた！ 勉強ぜんぜんできないから」

「おお、そうか。だがマリポンはまぬけなんかじゃないぞ。子どもって遊ぶことで成長するだろ？ マリポンは遊ぶときには目がいっぱい開いて、頭が働いて、工夫ができる。体はまりのようにポンポンはずむ。マリポンは頭と体を使って、一番いい成長の仕方をしてきているんだ。その好奇心とエネルギーが勉強に向かう時が来たら、マリポンは勉強でも伸びる。証拠を見せてやろうか。声を出してここを読んでごらん。三学期になって学ぶところだ」

豪利は英語の教科書をわたした。マリポンはつかえながらも読みきった。

「えーっ、マリポン、よく読める！」とハヅキが喜んだ。

「でもわたし、訳せない」

「まだ学んでないところだから訳せなくて当然だ。だがチーチー塾では、だれもがついてこられるようにゆっくり声を合わせて、たくさん読んできたろう。だからマリポンも英文にそって目が横に速く動かせるようになってるんだ。だからこれからは英文の形や法則を理解しようとしたら、びっくりするくらいわかるようになるぞ」

「マリポン、あんた、日本語の本もよく読むから、ほかの科目もできるようになるよ」

「でもわたし、テストで漢字書けない」

「漢字は読めればいい。漢字で書く必要があるときは辞書を引けばいいんだからな」

「マリポンちゃんのお母さん」と母親の一人がきいた。「こんなに生き生きとしたおじょうさんに、どうやって育てたのですか？」

マリポンの母親は「あははは！」とマリポンと同じ声で笑った。「マリはお腹の中にいたときから暴れまくっていたんです。生まれてくると知らない人たちに笑いかけて、アーウー、アーウーっていっぱいおしゃべりしたんです。わたしは『生きていく力の強い子だなあ』とおもしろくって、そのじゃまをしないようにだけしてきました。わたしは働いていますから、家にいるときにはだっこして、たくさん話しかけて、絵本もたくさん読んでやったんです」

夏期講習はマリポン中心の授業になった。チーチー塾では夏期講習では全員が同じことを学ぶというやり方はしない。学力に応じてコースを分けてある。教材は夏期講習用の問題集で中一、中二の復習になっている。英語は豪利が作り、数学は「この問題には学ぶ者への愛情がある」とツッパリくんがつぶやいたヒューモくんが作った。

問題集には優しい問題から高度な問題まで四つのコースに分かれていて、生徒は自分でコースを選び、家で問題をやってきて質問をする。

基礎ができていない生徒のための「お手手をかしてくださいコース」、基礎を身につけ、足元をしっかり見つめて歩く「ハイキングコース」、高い所まで登って眺めを楽しみたい「見晴らしコース」、そしてはるかな高度で遊ぶ「宇宙遊泳コース」に分かれている。

英語では門次とツッパリくんが「宇宙遊泳コース」、ハヅキ、明、咲子が「見晴らしコース」、数学では門次が「宇宙遊泳コース」、ツッパリくんとハヅキが「見晴らしコース」、明と咲子が「ハイキングコース」となり、マリポンは英語も数学も「お手手をかしてくださいコース」となった。

授業は、遊びに好奇心の強いマリポンが、英語でも数学でも「どうして、そうなるの？」とききたくなるような方法をとったところ、ほかの生徒たちも面白がった。理科と歴史と地理は前もってテーマを与えておいて、門次、ハヅキ、ツッパリくんには「マリポンが興味を持つような講義をしろ」と、二回ずつ授業をさせた。

マリポンはわからないところがあると生徒たちにききまくった。「わかった！ できた！ おもしろい！」と、マリポン中心のにぎやかな夏期講習だった。

半年後、高校入学試験でそれぞれが志望校に合格した。マリポンは五科目総合成績で、夏より百三十点ほど伸びていた。

チビガキたちが高校クラスを作らせちゃった

三月に英語劇発表会があり、そのあと小学生、中学生がいっしょのスキー合宿が北アルプスの榎池高原でおこなわれ、中三生を卒業したツッパリくん、門次、ハヅキは、これでチーチー塾を終るつもりで参加した。

みんなで遊んでいるとき、小三のデップリンが「あーあ、ツッパリくんともう遊べないなんてつまらないなあ」と何度もため息をついた。

「チーチー塾が中学三年でおしまいなんてぼくは許せません。ツッパリくん、お願いします。高校生クラスを作ってください。そうしたら、ぼくが中一るときツッパリくんは高校三年生です。ぼくはツッパリくんに遊んでもらえます」

「ぼくはまだ小六」と、理王がデップリンの背中にもたれながらつぶやいた。

デップリンが勢いこんだ。「みなさんの愛の心を、ぼくたちにもっと教えてください」

ツッパリくん、門次、ハヅキの視線が一点に集まった。

「わかったぜ、高校クラスを作る」とツッパリくんが言った。

「それって男の約束だよ」。理王の言葉だった。

四月。新年度の中一生の最初の授業が終わったあと、夜九時に、高校生になったツッパリくん、ハヅキ、門次が「高校クラスを作ってください」と言ってやってきた。

「高校クラス？……何だ、急に？……高校生を教える知識なんて、おれにはねえよ」

「ゴリ先生には独自の考え方や生き方の知恵がありませ」

「生徒はそれに触れられるのがおもしろいんです」

「だが大学受験指導なんておれはできねえよ」

「そんなのはしなくっていいっすよ」

「じゃあおれは何をすればいいんだ？」

「そこにすわっているだけでいいです」

「質問したときにこたえてくださればいいんです」

「おいおい、おれが高校生の質問に答えられると思うのか？ そんな教科、おれは持ってねえよ」

「教科はやらなくていいです。何をしてもらいたいかはぼくたちで考えます」

「チーチー塾の目的はよ、先生、チビガキどもが、あんなふうなカッコいい兄ちゃん姉ちゃんたちになりたいって思うような生徒たちを育てることじゃないっすか？ おいらたちはそういう憧れの兄ちゃん姉ちゃんになったんす」

「チビガキたちはぼくたちに触れたいのです」

「あのね、先生、『愛の心を教えてほしい』って言われたんです」

「愛の心を教えてほしい？……そんなこと言うのは中学生か？ 美音か？」

「小三のデップリンです」

「デップリン？……ああ、あの子は熱い心を持っているからなあ」

「理王もキララ子もです」

「高校クラスを作ってほしいって強く頼まれて、わたしたち『うん』てこたえました」

「男の約束をしたんす」

「男の約束？ 何だ、それ？」

こうして豪利は高校クラスを開くはめになってしまった。三人の高校生たちは週二回、夜九時にやってくると、トランプやおしゃべりを楽しんだり、お互いの高校生活の様子を語ったりした。ツッパリくんはできたばかりの高校で野外活動部を作って部長になり、ハヅキは町田原高校の吹奏楽部に入った。門次は何をやるかを考えちゅうだった。

だが豪利の気持ちはあいまいなままだった。「こんなことやっていていいのか？ きみたちは大学受験もあるんだろう？」

「先生よ、おいらたちはゴリ先生の考え方が面白くって来てるんでっせ」

「先生は『自分の言葉を持って、自分の足で歩くことができる人間になれ』って生徒たちに言ってきています。ぼくたちはそうなろうとしています」

「ねえ、門次、ツッパリくん、チーチー塾ってカード取りで燃え上がるじゃん。高校クラスも英語のカード取りをやろうよ！」

「それだよ！」。ツッパリくんがパンと机㊟たたいて、いい音を立てた。

三人は意思表示や人との交わりに必要な英文を選び出し、豪利に CD 録音を頼んだ。

「は一、おれの下手な英語を高校生用に録音するのか？」

カードの絵は小学生、中学生たちにも描いてもらうことにして、高校生たちは子どもたちの絵が集まってくるのを毎回楽しみにした。

そうやって高校生たちが子どもたちの描いてくれた絵カードを整理していたある日、豪利が門次に問いかけた。「門次、何か考え事をしているのか？」

「ほーら、門次、言われちゃった」とハヅキが門次に顔を向けた。「あんたは田沢の言葉で悩む必要はないよ。考え方をゴリ先生に相談してみなよ」

絵カードをいじっていた門次の手がとまった。門次は松葉杖をついていた。

「うん？……何があったんだ？」

「……ぼくは『自己責任』てやじられたんです」

門次のクラスは学校の文化祭で劇発表をすることになり、門次と田沢が主役に立候補し、両者が主役をゆずらず、生徒たちの挙手の結果、大差で門次が主役に選ばれた。ところが劇の稽古が始まって間もなく、門次は足を捻挫し、松葉杖を使うことになってしまった。門次が田沢に主役を代わってほしいと言ったところ、「自己責任だ。自分でやれ」と断られてしまった。それで門次は劇の稽古に臨んだが思うように動けず、もう一度田沢に交代を頼むと、田沢はみんなの前で門次を「自己責任だ」とやじり、「松葉杖をつきながらやれ」と鼻の先であしらった。

「ひかえめな門次が主役に立候補したとはたいしたものだなあ」

「田沢くんが女子を見る目は侮蔑的なんです。あんな奴に女子は誰も手を挙げていません」とハヅキが不快そうに言った。

「門次、松葉杖をつきながらやったら面白いぜ」とツッパリくんが言った。

「おお、そうだよ門次、松葉杖を演技にとりいれてみる。その役を松葉杖をついている人物にしたらいいじゃないか。かえって演技がふくらむぞ」

「門次、クラスの人たち、期待するよ」

「それでだ、門次、きみは自己責任という言葉に悩まされているんだろ？」

「自己責任なんて言う奴ほど、いざとなったら逃げだす奴だぜ」とツッパリくんも応じた。

「うん、人を声高にけなすものは、本当は自分に自信のない奴だ。門次は誠実で、人に批判されたことがないから、そういう刺激的な言葉にとまどっているのだ。門次は真面目だから逃げないで、劇発表に向かって稽古を重ねる中で、考え方、対処の仕方が見つかるかもしれないぞ。応援する」

一か月後の演劇祭で、門次は主役を見事に演じた。門次が松葉杖を巧みに用いたことで、真面目な人物がユーモアのある人物にふくらみ、会場から喝さいを受けた。

七月になって高校生三人が中学生たちの夏の〈遊びの合宿〉にも参加したいと言い出した。門次も足を引きずりながらでも参加したいと言った。豪利は三人の気持ちを受け入れ、合宿での高校生たちの在り方をいっしょに考えた。

中学生たちがどうしていいか迷っているときでも、高校生は、「口は出しても手は出すな。やってみせてもやってやるな」を心得とした。年下の生徒たちがうまくできないときでも、「やり方を教えたり、やって見せるのはいいが、代わりにやってやってはいけない。うまくいってもいかなくてもやらせてやれ。自分でやるから反省もできるし満足もできる」。「失敗はけなすな、おもしろがってやれ」と確認し合った。

こうして夏の〈遊びの合宿〉に高校生三人も参加した。三人は中三生たちが年下の中学生たちを指導するリーダーぶりにはめったに口を出さず、中三生の成長を見守り、自分たちも班員の一人として働き、遊んだ。

豪利は高校生という若い年齢が考え、響きあい、自力で成長していく姿に感動し、今まで豪利や講師の大学生たちが担ってきた合宿のリードを、来年からは高校生を〈カウンセラー〉という名前にして、〈遊びの合宿〉のリードを任せようと思いついた。

ツッパリくん、チーチー塾を卒業する

二年後、ツッパリくんたちは高校三年生になった。小低だったデップリン、キララ子、リサも中学生になって、またツッパリくんと遊べることを喜んだ。だがデップリンが愛してやまない理王がチーチー塾を休むことになった。

理王が小六になるとき、豪利は母親から理王の算数の指導を求められた。

「中学受験だったら、理王には受験勉強は必要ないんじゃないですか？」

「いいえ、受験じゃなくて、理王は算数の面白さをもっと知りたがっているのです」

「それはすばらしい。でも理王の知的関心にこたえられる力はぼくにはありません」

理王が幼児でチーチー塾に入って以来もう八年目になる。理王はずっとやんちゃ坊やをやりとおしてきたが、豪利はふとした理王の表情の中に知性の輝きを感じてきた。その輝きが何であるかはわからない。豪利は庭に飼っているチャボが産んだ卵を、理王が幼時の時にあげたことがあった。理王はそれを家に持って帰ると母親の布団の中に入れ、母親はそれを踏みつぶしてしまった。理王は「お母さんの布団の中は温かいから卵がかえる」と思ったのだ。お母さんは喜んで、生命誕生の本を理王にたくさん読んでやったそう。豪利はそんなことを思い出し、「理王はチーチー塾を十分楽しみ、豪利も理王を楽しませてもらった。これからは彼の科学への興味や感性を刺激し、育ててくれる別の出会いを求めたほうがいい」と思ったのである。

理王は自分でいくつかの塾を見学し、算数の奥深さに導いてくれる塾を探し出した。そこ

で受けた刺激で深夜まで勉強を楽しむようになった。豪利は小六で二つの塾に通うことには無理があると考えて、理王にチーチー塾を休ませた。(これで理王とは永遠の別れになるだろう。それでいい) と思った。

だがデップリンの嘆きは大きく、「ぼくは理王に、もう会えない」となげいた。

秋になって、門次が大学受験について豪利に相談をしてきた。高校クラスは生徒三人で始まってから二年半になり、今では一年生から三年生までの合同クラスで八人の生徒がいる。大学受験の指導はしない高校クラスだったが、せっかく門次からの問いかけがあったので、大学受験について話し合ってみることにした。

門次は日本の古典文学や芸能に関心あるから京都大学に進むのがいいと豪利は思っていたが、門次は「学者になって研究している姿は、自分に似合いすぎていてぞっとします。ぼくはもっと別の世界を知りたいです。日本の古典や芸能はぼくには趣味でいいです」と言った。

「じゃあ東大か。きみの将来の姿が見えすぎだな」

「都立大学へ行って、合氣道をやります」

「合氣道？……」。豪利はあっけにとられた。

門次は「合氣道には人間にとっての真実がある」とツッパリくんが中三生のときに言った言葉に強い印象を受け、自分もいつか合氣道を学ぼうと思ってきたので、豪利が学んでいる流派の合氣道部のある都立大学に行きたい、と説明した。

「ぼくが中学生になったとき、チーチーには中学生はぼくだけで、ゴリ先生とこたつにあたりながら勉強しました。先生はぼくの知らない世界のことを話してくれました。それがぼくの視野が広がったもともになりました。今度は自分を深めるために、合氣道を学びたいと思っています」

「ああ、驚いた。おれはきみにもっと自己表現をしろと言ってきた。そのきみが高校で劇の主演をやったり、文化祭の実行委員長になったときには感動した。それが今度は合氣道か！」

ハヅキが口をはさんだ。「きょねんの秋、熱を出した先生に代わって、門次が小学生たち十人を、一人で伊豆高原の一泊旅行に連れて行ったのはすてきでした」

「おお、あれはな、おれは門次に頼むことにちゅうちょはなかったよ。慎重な門次なら電車、バスの乗り換えをしっかりとできると思っていた。それに門次が子どもたちをリードできたら、門次の自信になる、と思って頼んだのだ。そしたら伊豆からいい顔して帰って来た」

「自信になりました。あれがあって、文化祭の実行委員長の立候補へつながったんです」

「納得だ。大学生活と合氣道、張り切ってやれ。ではハヅキだ……ハヅキはどうするんだ？」

「音楽大学に進もうかと思っています。和太鼓サークルの友だちに太鼓を打たせてもらったから、その友だちから『あんたデブで力がある。音がいい』って言われたので、大学に行って、ドラムか太鼓のどっちがいいか見極めたいと思っています」

「町高の演奏会できみのドラム、かっこがよかった。リズムがいいんだよ」

「わたしは和太鼓を打ったときの余韻が好きなんです」

「余韻が好き？……そういう感じ方って、本物なんじゃないのか？ ハヅキが自分の打った音を追う雰囲気印象深い。品がある。きみの大きな体は均整がとれている。その長い腕で太鼓を打ったら、かっこいいだろうな。よし、よし……さて、ツッパリは憧れの早稲田マンかい？」

「いや、桜美林大学に行きます」

「えーっ！」と年下の高校生たちまで驚きの声をあげた。「早稲田の男になるんじゃないの？ 桜美林が町田にあるからですか？」

「いや、ボーイスカウトでおいらを教えてくれたおっさんリーダーが、来年から桜美林大学で講座を持つことになったんす。だからそこで学んだり手伝ったりしたいんす」

「そのおっさんには話したのかい？」

「おまえは早稲田だ、って言われました。確かにおいらは早稲田の荒っぽさや在野精神に憧れてきたんすが、早稲田に行って学びたい学問とか学びたい先生とかっていう具体的なものを見つけたわけじゃないんす。だがそのおっさんが大学の先生になるんなら、そのおっさんがおいらが学びたい具体的な人となるんす。門次を広い世界を導いてくれたのがゴリ先生なら、おいらにおもしろい世界を見せてくれたのはそのおっさんなんす」

「おお、いいねえ。ツッパリらしい気持ちのいい選択だ」

半年後、門次、ハヅキ、ツッパリくんとも志望大学に合格した。そして理王が筑波大学付属駒場中学校に合格して、チーチー塾に戻ってくることになった。理王の母親によれば、「理王にはチーチー塾が一番気持ちが休まる場所なんです。それに男の約束があるって、へんなことを言っています」であった。

豪利が理王がいなくなって、いつも腰のあたりにいた大切なものがなくなった感じをしていたが、その理王が戻ってくることになってうれしかったが、戻ってきた理由をきいて、（長い間いっしょに遊んだのに、おれは理王の心に気がつかなかった）と自分を恥じた。豪利は理王をデップリン、リサ、キララ子のいる中二クラスに入れることにした。

その理王が英語劇発表会にやってきた。デップリンの喜びはひとしおで、ずっと背の伸びた理王を横だきにして、「理王、理王、わが友理王！」と跳び回った。

デップリンは英語劇を見ながら理王に言った。「ツッパリくんがぼくのことをダチ公って言ってくれた意味がわかったんだ。ダチ公って友だちって意味なんだ。ぼくはツッパリくんの友だちなんだよ」

高校生の劇は「ブレーメンの音楽隊」だった。歳をとって飼い主のところから逃げ出してきた四匹の動物たちを演じる憧れの兄ちゃん姉ちゃんに、子どもも親もわいた。

この高校生たちは技を持っていた。ロバになったツッパリくんはギターでビートルズの曲を全身を振って弾き、犬の役のハヅキはのびのびとしたバチさばきでドラムをたたき、猫の美音は、「ツゴイネルワイゼン」の曲をバイオリンで強烈に奏で、オンドリ役の門次はイタリア民謡の「フニクリフニクラ」をバイオリン伴奏で歌った。森の中で四匹の動物が泥棒

たちと出会う場面では、動物たちが泥棒たちをやっつけ、派手に投げたり投げられたりして、客席の子どもたちを興奮させた。この劇を最後にしてチーチー塾を卒業するツッパリくん、ハヅキ、門次の三人に、生徒も親も感謝の声援を送った。

発表会のすべての演目が終わると、デップリンとキララ子が理王をツッパリくんのところへ連れて行った。ツッパリくんは理王を三年ぶりに見た。「チビンコ理王か？ いいツラになった。チーチーに戻ってきたのか？」

「いいえ、休んでいただけです」

「そうか」とツッパリくんは笑った。「おまえは男だな。おいらも男の約束を果たしたぜ。おいらたちはこれでチーチーを卒業する。愛の心というバトンをおまえらに渡す」

ツッパリくんは大学生になり、理王は中学生になった。

四月、ツッパリくんは雑誌の広告で、ハーレイダヴィッドソンの旧式のオートバイが仙台で売り出されたことを見つけた。広告には「故障中。修理可能」とあった。ツッパリくんは売り主の男性に連絡し、「購入したい。アルバイトをして資金をつくるので夏まで待ってほしい」と申し入れた。

夏、ツッパリくんは仙台に行き、売り主の車庫を借り、部品を買い集めて自分で修理をし、夜は広瀬川の河川敷で野宿をした。売り主は野性的なおじさんで、ツッパリくんの気ぶのよさを気に入って、我が家に泊まれと勧めたが、ツッパリくんは「こうやって苦労して修理すると、オートバイに愛着がわきますから」と辞退した。修理が終わって別れの時、ツッパリくんが「このむだにでっかいオートバイが愛しくなりました」と言うと、おじさんは大笑いし、愛用のレイバーンの濃緑のサングラスを目からはずし、「こいつにきみのアメリカ横断のお供をさせてやってくれ」と言って、ツッパリくんの額にかけた。濃緑のサングラスは、ツッパリくんの濃緑の衣服にピッタリだった。

おじさんの奥さんもツッパリくんを眺めた。「ほれほれするくらいかっこいいわ。これから安曇野にまわるの？」

「ガキンチョどもがハーレイダヴィッドソンに乗ってやってくる自分を待っているものですから」

ツッパリくんは仙台から山を越え、生徒たちが今か今かと待っている長野県安曇野の丘の上に、轟音と派手なクラクションを鳴らして、古い型のばかでかいハーレイダヴィッドでつっこんでいった。濃緑の衣服と濃緑のサングラスのツッパリくんが「オッス」と高々と腕をあげると、「オッス」と生徒たちがいっばいの声でこたえた。デップリンは太った体をこんにゃくのようによじって喜び、キララ子は遠くを見るように見つめ、リサは優しく笑い、理王はチビンコ理王に戻って体を熱くした。

ツッパリくんはほんの一時間の再会で生徒たちを満足させると、大学のゼミの準備のために、今度はエンジンの音を軽やかに響かせて東京へ帰っていった。

理王は中学生合宿でイタズラ小僧になっていた。わっと騒ぎが起ると、その中心に理王

がいた。生徒たちが自由にグループを組んで好きな所へキャンプへ行く日、中一の元気のいい女の子三人が中二のキララ子とリサ、女子高生カウンセラーのキイロを誘って、女の子だけでキャンプに行くことにした。「チーチーのキャンプでは、いつも男子が女子をかばってくれるので、女子の力だけでキャンプをやってみたい」と豪利に許可を求めてきたのだ。豪利は男子高校生のヒッポをいっしょに行かせることにして許可した。

中学生の女子たちはキイロにもヒッポにも荷物を持たせず、自分たちでテント、ナベ、カマ、水の入った重いタンクを持った。

「男子って、いつもこんな重い物持ってんだね」「でも、チーチーの男の子たちは女の子をかばいすぎよ」「精神的には女の方が強いんだよ」「そうよ、男なんてすぐにへこたれるんよ」「女に腕力があつたら、男なんて絶滅動物だよね」

ヒッポが大きな口を開けて吹きだした。「それって中学生の女の子が言うこと？」

キイロは女の子たちに言った。「チーチーの男子ってかっこいいのよ。高校生になって、周りの男子たちとくらべたらわかるわよ」

女の子たちは水タンクを交代で持ちながら長い道のりを歩いて、鹿島川の土手にテントを張った。中一の女子三人はテントを張るのは初めてだったが、キイロにもヒッポにもアドバイスを求めず、大きすぎで工夫しながらテントを張り、「見て、ヒッポ、女の子だってできるんだよ！」とはしゃいだ。

テントの設営が終わるとヒッポが女子たちに声をかけた。「一時間、散歩に行こう。ぼくね、植物に興味があつて、学校の理科の先生になりたいんだ。このあたりは高原だから、東京にはない花がいっぱい咲いているんだ。荷物の整理は後にして、ぼくについておいで」

一時間後、七人がにぎやかに帰ってきてテントを見たとき、リサが「テントの中にだれかいる」と緊張した声をあげた。テントがゆれていた。中一の女の子たちがぎよっとなった。

ヒッポが「この辺にはカモシカがいるから、カモシカかもしれない」と言った。

「でも、テントの入口がしまっている」

「じゃあ、サルかな？ サルは知恵があるから」

「ヒッポ、行って見てきて」と中一の女の子たちが体の大きなヒッポの後ろにかくれた。

「ぼくだってこわいよ」

「あらっ、水タンクの場所が違っている」とリサが声をひそめて言った。

「テントの中に、だれかいますか！」。キララ子がどなった。テントがゆれた。

「どなたですか！」

またテントがゆれた。キララ子がテントにそっと近づいた。テントの入口に大きな靴が二足あった。キララ子がリサを手招きし、靴のそばに置いてある紙を指さした。「リサ、誕生日おめでとう」と書いてあった。

「理王！」とキララ子が呼びかけ、「もう一人はデップリン！」とリサが叫んだ。

「どうぞお入りください」。中から声があった。

中一の女の子たちが「キャーッ」と叫んで駆けよった。そして五人でテントの入口を、「い

っせーのせーっ」と開けてのぞきこんだ。

理王とデップリンが正座して「リサさん、誕生日おめでとうございます」と朗らかに言った。テントの真ん中に大きなケーキが置いてあった。

「ケーキだ！ えっ、今日はリサちゃんの誕生日なのですか？」

「あー、こわかった！ ヒッポ、知ってたんでしょ！」

「知らなかった。でも理王から、テントを張り終わったら一時間だけみんなをどこかに連れて行ってくれ、って頼まれたから、何かいたずらするな、って思ったけど、ここまでは想像しなかった」

「私も知らなかったわよ。でもヒッポが一時間にこだわっていたし、テントのゆれ方が変わったし、優しさもわざわざ表していたから、私はデップリンと理王を想像できたわ。リサちゃん、すてきな誕生日になったわね。おめでとう」

「リサさん、お誕生日おめでとう！」とみんなではしゃいだ。

理王はリサの誕生日を知っていて、母親からケーキの作り方を教わってきて、リサを祝うつもりだった。すると、女子だけでキャンプに行くことを知ったので、このいたずらを思いつき、女子が出かけて後、デップリンに協力してもらってケーキを作ったのだった。

この年も樺池高原スキー場で、チーチー塾の小学生から高校生までいっしょのスキー合宿が高校生のリードで行われた。毎日満足ゆくまで滑り、夕食が終わると、小学生たちが男の子も女の子もたばになってデップリンに挑んでいった。大きな大人なみになっていた中二のデップリンは汗だくになりながら遊んでやった。

豪利が「きみはよくそこまで徹底して遊んでやれるものだな」と感心すると、デップリンは「ツッパリくんがぼくたちガキンチョと徹底して遊んでくれましたから」と答えた。町田に帰ってから豪利がその言葉をツッパリくんに話すと、「違うっす、違うっす、ドラゴンがおいらたちガキンチョと徹底して遊んでくれたんす。自分はそれを引き継いだけなんす」と軽く答えた。豪利がその言葉を今は海外にいるドラゴンに送ると、ドラゴンから手紙が来た。「わたしのやったことがそのようにして伝わっているとはたいへん光栄です。でもわたしはそれをゴリ先生から学んだのです」

チビガキたち、中三生になる

デップリン、キララ子、リサが中三に、理王は中二になった。このクラスに二年前にサッカー少年剣矢が加わり、一年前にのんびりオッチャンと呼ばれる鉄平が入り、中三なったこの四月に、青白い顔の江川という少年が、細々とした少女のような顔立ちの母親といっしょに訪ねてきた。少年は有名な私立中学校に通っていた。

母親は「代々続いてきた医院を夫が引き継がなかったので、この子に復活させてもらいた

いと思っています。この子は東大医学部に行くつもりでいます」と言った。

「ほう、いいですね。ですがこの塾はそういうところを目指す指導はしていません。息子さんはそれを目指してしっかり教えている塾へ行った方がいいですね」

「でもこちらではみなさん、よいところに合格しているとうかがっていますけれど」

「それは生徒たちが自分で勉強しているからです。この塾は教科の基本を教えるだけです」

母親が納得のいかない顔をした。「偏差値がたいへん伸びる塾だそうですが、受験指導をしないのにそんなことってあるのですか？」

「偏差値？……ああ、あるんじゃないのかな」。豪利は「マリポンの偏差値が半年で二十あがった」と喜んでいて四年前のハヅキの顔を思い出した。マリポンは明るいキャラクターが愛されて、今、テレビでお茶の間の人気者になっている。

「受験成果は親の子育ての成果です。子どもを外で遊ばせたり、子どもとたくさんおしゃべりしたり、絵本を読んでやったりして、養分たっぷりの心に育てていれば、子どもは自分の力で伸びていくんじゃないですかね」

「この子もピアノや絵や習字をやっています」

豪利は青白い少年を見て「スポーツは？」と聞いた。

「水泳を少しやりましたが、疲れると言うのでやめさせました」

豪利は（親が子の心を疲れさせている。この親子にチーチー塾は合わない）と思って、話を終わらせようとして立ちあがった。「この塾には、＜遊びの合宿＞というのが夏にあるんです。生徒たちは、遊んで、作業して、めし作って、しゃべって、人と響き合うっていうやり方で八泊を過ごします。教科の勉強はしません」

母親は理解できない顔をして立ち上がった。ところが息子は下を向いたまま動かなかった。豪利は少年の青白い顔をじっと見た。

「江川くん、お母さんが帰ろうとしているよ……どうした？」

少年が顔を上げて豪利を見つめた。「ぼく、この塾に入りたいです」。声は小さかったが、目に光があった。

母親はびっくりした。「なに言ってるのよ、幸夫ちゃん！ あなた、こちらの塾だとお医者さんになれないのよ」

「ぼくはちゃんと勉強します！」

「でも幸夫ちゃん、あなたがこちらの人たちとやっていける自信、お母さんにはないわ。あなた、お靴のひもも結べないのよ」

「なんですって！」。少年の青白い顔が一瞬で赤くなった。「ぼくに自信が持てないですって？ そんな子に育てたのはだれですか！ あんたでしょ！ あんたの自信の持てない子は、あんたが育てたんでしょ！」

母親の表情が凍りついた。豪利もあっけにとられた。人間がこれほど急に赤くなるのを見たことがなかった。

少年の体がこきざみにふるえていた。豪利は少年の正面にすわった。

「江川くんはどうしてこの塾に入りたいんだい？」

「ここの塾の人たちは……」と少年の目が何かを訴えるように豪利を見つめた。

「うん、なんだい？」

「……なにか輝いているんです」

江川少年はチーチー塾の近くに住んでいて、自分の家の前を通る塾の生徒たちの姿を目にしていた。

「きみは友だちは多いのかい？」

「一人もいません」

「いじめられているのか？」

「いいえ、だれも話しかけてくれません」

「きみが話しかければいいじゃないか？」

「話しかけ方がわかりません。人と遊んでるひまがあったら勉強しろ、って言われ続けてきましたから」

「そうか……では、きみの長所は何かな？」

「長所なんかないです。靴のひもだって結ぼうとすると、この人が手を出すし……何かやろうとすると、それダメ、これダメ、こうしろって言います。ぼくに長所がないことを、この人が教えてくれています」

少女のような母親がしぼんでしまった。豪利は少年を安心させようと、気楽そうに乱暴な言葉をつかった。「長所のない人間なんていねえよ。よーし、おれがきみの長所を見つけてやらあな。おれが見つけられなきゃあ、生徒のだれかが見つけてくれるぜ」

豪利は母親に言った。「息子さんは自分から扉を開けようとしています。背中を押してやってください」

このときチーチー塾に調べものに来ていた剣矢が話の一部始終を聴いていた。剣矢はさっそく生徒たちに知らせた。「お靴のひもも結べないやつが入ってくるよ。東大に行って医者になるんだってさ。この塾から東大に行けるわけがねえ！」

「そーんなことありません。そーんなこと言わないでください」とデップリンがほほをふくらませた。「ぼくたちには理王がいます！ 高校生のヒッポやアズミがいます」

青白い少年ホッホくんの入塾

数日後、江川少年が中三クラスに姿を現した。

「あっ、きみ、江川じゃん！」。デップリンが歓迎の声をあげた。「この人、ぼくと小学校でいっしょのクラスだったの！」

だが江川少年は顔の筋肉を動かさないうでささやいた。「ああ、保科日出夫さん」

「なんだよ、こいつ！ 表情ねえよ！」と剣矢が叫んだ。「気持ちわりーい！ こんなやつが手術したら、患者、もっと悪くなっちゃうよ！」

パシーンと剣矢の背中で手のひらが鳴った。キララ子だった。「なんてこと言うんだ！このクソガキ！ せっかく入ってくれた人に、その言い方はねえだろう！」

「この席が空いてますよ」。理王が江川少年に自分のとなりの席を示した。

「ありがとうございます」と少年は小さな声でこたえた。リサが立ち上がって、「どうぞ」と椅子をひいてやった。少年はこれにも「ありがとうございます」と頭を下げた。

江川少年が入塾を決めたあと、母親はもう何も言わなかったが、息子がチーチー塾でやっていくことには不安を感じていた。親の不安は子どもに移り、子どもは自信をなくす。少年のかたい表情は親の不安の表れだった。

ある日の数学の授業のとき、剣矢が江川少年に言った。「おまえさあ、知らない問題が出てくると、前にやった問題かどうか探してさあ、やってないってわかると、もう考えようとしなないじゃん。それって、だめなんじゃねえの？」

すると江川少年が「ホッホッホ」と笑った。

「なんだよ、その笑い！ 人をバカにしたように、ホッホッホなんて笑うな！」

江川少年はそれに対してもホッホッホと笑った。すると数学の学生講師の象兄ちゃまがつかつかと寄ってきた。「おれもその笑い方、気に入らない。そういう笑い方をするやつがいるんだ。その笑い方、やめなさい！」

この象兄ちゃまはヒューモくんの大学の後輩で、二人は囲碁道場で知り合った。ヒューモくんはこの学生の囲碁の指し方が大らかなのが気に入って、自分の後任の講師としてチーチー塾に紹介してくれたのである。

この学生が中三生の前に初めて立ったとき、黒板に＜大平原象造＞と書いて「ぼくの名前です」と自己紹介をした。

「何て読むんですか？」と生徒たちは首をかしげる中で、剣矢がげらげら笑った。「大平原に象がいるぞう、って読むんだよ！」

学生が楽しそうに笑った。「おひらはら しょうぞう、と読みます。おやじがよくアフリカが好きで、大平原の象を見に行くのです。それでぼくにこんな名前をつけたのです」

デップリンが「いい感じのお兄さんです。お兄ちゃまと呼びましょう」と提案した。

「だったら＜象兄ちゃま＞にしよう！」と剣矢が叫んだ。

象兄ちゃまは愛情が体からにじみ出てくるような学生で、どんな幼い質問にも答えてくれるのだが、江川少年の笑い方にはめずらしく厳しい顔をした。デップリンが「ホッホッホって笑う人は、どうしてそんな笑い方をするんですか？」ときき、剣矢は「勉強が中途半端にしかできないからさ」と言い、みんなで考えた。

結論は「自分に自信のない者が、相手をコバカにすることによって、自信のなさをかくそうとする行為だ」となった。理王は「自分自身に対しても自信のなさをかくそうとしているのだ」と断定した。

江川少年は「ホッホくん」と呼ばれるようになった。名づけたのは剣矢である。豪利はその呼び方をやめさせようとしたが、江川少年は「その呼び方がいいです」と言った。その理

由がわかったのは、もっと後になってからである。

次の週で、数学の図形問題の復習をやっている時のことだった。ホッホのノートのをのぞき込んでいた剣矢が「ちょっと見せて」とノートを取りあげ、「おれ、六行で証明できたよ。なんでホッホはページいっぱい書いてんだ？」と独り言を言って、ノートを理王のところへ持って行った。理王はそれを読み終わるとホッホをじっと見た。「この問題はある定理を使えば、すぐに証明できるけど、おまえ知らないのか……知らなくて、これだけやったんだ」

今度は理王がそのノートを象兄ちゃまに見せた。デップリンが「定理を知らないでやって、答えに行き着いたんですか？」と象兄ちゃまにきいた。

「いや、答えに行き着いたかどうかということではない」と言って、象兄ちゃまはノートを読み続けた。そしてホッホを見た。「きみは江川くんといいましたね？」

ホッホの青白い顔に赤みがさしていた。「はい、でもホッホと呼んでください」

「ではホッホ、きみのこれを解こうとする姿勢にはひたむきなものがあるね。これはすばらしい……剣矢がそれに驚き、理王がその驚きをぼくに共有させてくれたのだね」

中三生たちが帰ると、豪利は象兄ちゃまに「良い光景におれは出会わせてもらった」としみじみとした表情で言った。「ホッホ、剣矢、理王、象兄ちゃまと、驚きと感動の連携だったな。ホッホは入塾したいと訪ねてきたとき、母親はチーチーは息子には合わないと思って帰ろうとしたんだが、ホッホは動かないで、この塾に入りたい、とおれの顔を見つめた。あれはひたむきな思いだったのか。自分に長所は何もないと言ったから、この塾の誰かが長所を見つけるさ、とおれは言ったんだが、今日はそうだったのかな。象兄ちゃまには感謝だよ」

「ぼくはノートを見せてくれた理王に感謝です。その理王のことなんですが」と象兄ちゃまが豪利に言った。「ぼくの授業のとき、ノートをとらないんですが」

「うん、おれの授業のときもそうだよ。黒板を見つめたままだろう？ 理王は黒板の向こうを見ているんだと思う」

「彼は頭の中で何かを描いているんでしょうね」

「うん、おれも好きな科目はノートをとらなかった。頭の中で想像が勝手にめぐっていた」

「理王は何かを発見する道を歩んでいるのですかね？」

「そうかもしれない。理王の科学的関心はすさまじい」と豪利は言って、理王が幼時のとき、母親の温かい布団の中にチャボの卵を入れてヒナにしようとした話をした。「理王の頭の中は科学的な関心でいっぱいなはずで、おれはそれには応えられないから、どこか理王に合った塾を探せと、チーチーをやめさせ、理王はそんな塾を探し出してずいぶん刺激を受けたんだけど、一年したら、またチーチー塾に戻ってきたんだ。ここは心が落ち着く場所だと言ってな。理王はその年齢に応じた子どもをみごとなまでにやってきている」

「きょねんの夏の合宿では、高校生でも思いつかないようないたずらをやりに来ていたんです」と象兄ちゃまの授業見学に来ていた高二の新井アズミが言った。でもあの人のいたずらには優しさがあるんです」

「理王に対して、この塾の人たちは偏差値がどうのってことを言わないですね」

「偏差値なんてレベルに理王を引きずり降ろして解釈してはいけない、って思います」

「おれもそうだよ。おれは理王の人的成長にはかかわるが、彼の頭の中をのぞきこんで解釈するようなことをやってはいけないと思っている。おれは子ども時代の理王を楽しませてもらっているので十分だ。理王は知性と優しさといさぎよさの人になる」

リーダーシップを学ぶキャンプ

チーチー塾は夏に北アルプスのふもと、長野県安曇野の町で、中高生の〈遊びの合宿〉を八泊九日間かけて行う。ひたすら遊び、仕事をし、しゃべり、キャンプに行き、友と触れあって暮らす。合宿への参加は強制ではないが、毎年ほぼ全員が参加する。今年は三十名が行くと思われる。

食事は生徒四人が一つの班になって全員分を作る。食事作り当番、後片付け当番がそれぞれ三ずつ回まわってくる。日帰りキャンプ、好きな所へグループを組んで一泊二日のキャンプにも行くのも三回ある。この全てを中三生がリードするから、中三生は一人ひとりが九回のリーダーをつとめる。

新年度になって高校クラスの最初の授業で、高二の女生徒キイロが生徒たちに相談した。「中三のリサちゃんが夏の合宿に参加するかどうか迷ってるの。自分にはリーダーなんて荷が重すぎるって思ってるんです」

「リサは年上の人たちのリーダーぶりいっぱい見てきているはずだよな？ どうしてそんなこと思うんだろ？」とモトキンと呼ばれている高一の江畑元樹が心配そうに言った。

高二の女子チャンちゃんも考え込んだ。「リサちゃんはそっと人助けをするのが向いてるの。リーダーをむりやりやらせたらリサの良いところをつぶしちゃうのかな？」

「でもチーチーでリーダーをやることは、その後の生き方に大きな影響を与えるはずだから、リーダー経験をさせてやりたい」と高三のヒッポが強く言った。「やる気にさせるにはどうしたらいいか、みんなで考えよう」

「リサが草原に立っていると、空も風もリサをそっと包んでいる。リサは安曇野の景色に合っている」と高二のアズミが優しい表情をした。

「わたしもそう思うわ。それでね、リサちゃんをかわいがってきたツッパリくん相談したら、合宿前に中三生のためにリーダーシップを学ぶキャンプをやって、リーダーの役割を学ばせたらいいんじゃないか、って言われたの」

「それって、いいアイデア！」と高校生たちが張り切った。

豪利が「ちょっと待て」と水をさした。「合宿で九回もリーダーをやるんだらう。そうしたら自然に成長するよ。そこまでやらなくてもいいんじゃないのか？」

「えっ、ぼくたちはリサをやる気にさせる方法を考えようとしているんです。生徒の提案に

は『おお、そうか。やってみろや』って励ますゴリ先生が、そんなこと言ってはいけません」

「そうですよ、先生。中三ってまだ子どもで世界が狭いんです。ぼくたちだって中三でリーダーやることになったときには不安だったんです。前もってリーダーの心構えを学んでおけたら、もっと意識的にリーダーに取り組めたと思います」

「大事なことはリサの不安を取り除いて、合宿に行かせてやることじゃないでしょうか？」

ヒポガ「おお、そうか」と豪利の口調を真似た。「やってみろや。話を進めてくれ」

「はい、わかりました！ では話を進めます」

「最初に考えたいのは、ぼくら高校生がリーダーシップのとり方を指導していいのかどうかということなんだけど」とアズミがみんなを見まわした。「ぼくらだってまだ子どもじゃん。指導の仕方が一方的になったり、中三生を教わるだけの受け身の人にさせてしまいかねないよね。中三生が主体的にかかわるにはどうしたらいいか考えてみて」

「リーダーの中三生の指示で、班員たちが何かを作るといえるのはどうかな？」

「それ、いい！ リーダーが言葉をいっぱい使って指示する作業がいい。何がある？」

「食事作りがあるじゃん。食事作りは、リーダーが自分の作りたい料理のイメージや作り方を、年下の班員にわかりやすい言葉で説明する必要があるよね」

「班員は料理の作り方や火のおこし方など、あえて何も知らない素人ということにして、リーダーが何もかも教え、指示しなければならない、としたらどうかね？」

「おもしろーい。班員たちはその命令に対して『はい、わかりました』と言うことと、作業が終わったら、『終わりました』と報告することしかできないことにする。『次は何をしたらいいですか？』『塩の量はどのくらいですか？』などと、質問をしてはいけないことにする」

「なるほど、自分の指示が悪ければ、それは班員の動きの悪さに表れてくるから、リーダーは自分の指示の仕方を考えて、修正できるよね」

「リーダー以外の生徒は、リーダーの指導ぶりを観察し、食事の後に合評会をやって、リーダーぶりを評価することにしよう」

一泊二日のキャンプにして、夕食と次の日の朝食を兼ねた昼食作りと決まった。

「ゴリ先生、どこかキャンプ場を探してください。整備不十分の所がいいです」

「おお、そうか、わかった。よく考えたものだな。やってみよう。ただしリーダーには向いていなくても、よいものを持っている生徒はいる。そういう生徒がうまくリードできなくて落ちこんでしまう、というようなことがないようにしてくれ」

「だいじょうぶです。これはひと先ずのルールにしかすぎません。この塾には『絶対だめ。絶対こうしろ』という言葉はありません。中学生が迷ったら助けてやります」

「それならいい。うまくリードできなくても、その人間の長所や持ち味を見つけ、ほめてやってくれ。ほめるということは、人を見る目が温かくないとできない。人をほめることは自分自身を育てることにもなるからね」

「夕食、朝食とも二班ずつにして、みんなでリーダーぶりを観察しよう。人選はゴリ先生にお願いします」

「うん、きみたちはだれにやらせたいんだ？」

「リサとデップリンです」

「そうだろうな。しかし二人とも今回はやらせない方がいい。リサは自分が先頭に立って人を導く姿を想像できないんだ。だからほかの生徒たちのリーダーぶりを見て、『リーダーのあり方は人によって違っていい。自分はどういうリーダーになろうか』とリサが考えられるようになるのを待ってやった方がいい。デップリンの方は熱い心が生み出す熱い言葉をいっぱい持っているが、しゃべりすぎて『間』がない。見ているきみたちが『なるほど』とか『違うんじゃないのか』と思っても、彼がしゃべりだしたら暴風みたいでとめられない。きみたちの案にはリーダーがとまどっている姿、どうしようかと考える姿、その姿を見て、『どうやって励まそうか』ときみたちが頭をめぐらす『間』が必要だろう？ デップリンにはその『間』がないから、初めての試みにはふさわしくない。おれは鉄平にやらせてみたい」

「えっ、鉄平オッチャンに？ あんなしゃべらない人にリーダーさせてみるんですか？」

「うん、きみらのその驚きは当然だ。鉄平は合宿の経験も一回だけだから、リーダーをやればとまどうだろう。だがそれを見たきみたちは、考えながら励ますはずだ。それを受けた鉄平もきっと成長するはずだ。きみたちが人を励まし、成長させる体験をするには鉄平がいい。次の日の朝食のリーダーは剣矢にする。剣矢は感性がよくってものの見方がいい。だがケンカ速くてひどい言葉で人をやっつけてしまうことがあって、バランスが悪い。おれはこのガキがどうふるまうかを合宿前に見ておきたいんだ」

「ぼくが班員をやしましょう」

「おおヒッポ、頼むわ。剣矢がやりすぎたら、やっつけていい。このガキはへこたれない。もう一人の班員はちょっと気がかりだが、入塾したばかりのホッホという生徒にする」

数日後、高校生と中三生との話し合いがチーチー塾の庭でおこなわれた。中三生たちは<リーダーシップを学ぶキャンプ>に張り切った。キャンプは五月の中ごろの土日に、町田市からほど近い道志川のキャンプ場でやることになった。

デップリンが「リーダーは命令する人、班員はその命令に従う人、と分けたのですから、親分、子分という呼び方にしましょう」と提案し、そうなった。

「ゴリ先生、このアイデアをくださったツッパリくんは食事作りに来てくださるのですか？」とキララ子がきいた。

「ツッパリは大学二年生の夏にアメリカをオートバイで横断すると言っていたから、夏の合宿には日本にいないが、五月はまだいるから、喜んで来てくれるだろう」

「ぼく、提案があるのですが」とアズミが言った。「中三生に数学と理科を教えている象兄ちゃまという東大生の授業を見学したんだけど、人柄に温かさ人と見る視点に深さがあるんです。夏合宿に参加してもらったらどうでしょうか？」

中三生たちがたちまち賛成し、高校生たちも興味を持ち、豪利も喜んだ。

「みなさん、みなさん！」とデップリンが大声で呼びかけた。「ぼくに親分をやらせてください。夏の合宿にツッパリくんが行かないのでしたら、ぼくはツッパリくんにはぼくの親分ぶ

りを見てもらえませえん。ぼくはツッパリくんに、ぼくの親分ぶりを見てもらいたいんです」
「わたしも賛成です。デップリンの心にはツッパリくんが住んでいるのです。明けても暮れてもツッパリくんです。デップリンにはツッパリくんの言葉が神様の言葉です」

「そうです。ぼくの心にはツッパリくんが住んでいるのです。ツッパリくんの言葉は神様の言葉です」

「それからわたしは理王の親分ぶりも見たいです。小さいころの理王はやんちゃでしたけど、理王のちょっとした言葉をきっかけに、ものごとがおもしろく展開することがありました。でも今の理王はわたしたちより一歳下ですから遠慮しているのか、大きくなるにつれてリーダーシップを見せなくなりました。わたしは理王を見たいです。今のしゃべらない理王と、おしゃべりのデップリンが並んで親分をやったら、わたしたちはタイプの違うリーダー像を学ぶことができるのではないのでしょうか」

「おれは遠慮しているつもりはないが、このクラスは面白いので、つい見てしまうんだ。今のキララ子の言葉だけど、おれはキララ子こそ、秘めたセンスを持っていると思う。このキャンプの指揮官をキララ子がやったらおもしろいと思う」

理王の発言に生徒たちはびっくりし、それから納得する表情をした。すると夏の合宿をリードする高校生カウンセラーたちのボスに決まっている高二の新井アズミが言った。

「チーチーはぼくたちに成長の機会をたくさん与えてくれますし、生徒の発言やアイデアを尊重してくれます。理王の発言にぼくは賛成します」

こうして<リーダーシップを学ぶキャンプ>の全体の指揮官は中三生の神矢キララ子となり、キャンプ一日目の夕食作りの親分はデップリンと理王、二日目の朝食の親分は鉄平オッチャンと剣矢になった。5月10日、11日、道志川のキャンプ場と決まった。「5月11日はわたしの誕生日です。良い思い出となるようにします」とキララ子がさわやかに言った。

「では、メニューはこれです」とアズミがレシピをわたした。「子分は<何も知らない人>ということにしますから、親分は火のおこし方、料理のイメージ、作り方の手順をわかりやすく説明できるように言葉の練習をしてきてください」

「おれ、自信ない」と鉄平がぼそっとつぶやいた。

「えっ！ 鉄平オッチャンが自信ねえって？」と剣矢がふしぎそうな目をした。「おまえ、にこにこのんびりしていて、頼りになる近所のオッチャンみたいじゃん！ 懐かしい感じがするよ」

「おれ、しゃべれないもん。心の中、からっぽだもん」

「そんなことねえよ！ おまえの『ぼそっと言葉』には心が入ってるよ。リサだってしゃべんないけど心が入ってるじゃん」

「リサの目、優しくて人を動かす。おれの目、優しくない」

「おお、鉄平、いいことを言ったぞ」と豪利がうなずいた。「鉄平はふだん単語しかしゃべらないから、おれは鉄平のことがよくわからなかったが、今の言葉はよかった。そんなことを言える人の心の中がからっぽなんてことはない」

高校生のキイロがおだやかな声で鉄平に言った。「親分やってみな。子分たちをうまくリードできなくたっていいのよ。そこから学べるからね。わたしたちも応援するわ」

「おれ、やり方、ぜんぜんわかんない」

「ぼくが教えてやるね」。江畑モトキンが鉄平の肩に手を置いた。「二日目の朝、早起きして親分の練習をしよう。ぼくが相手になるからね」

「では二日目の朝食の親分は鉄平オオッチャン、と子分は高校生はモトキンとで中三生は理王。もう一人の親分は剣矢で、子分は高校生がヒッポで、中三生はホッホ……」と言ってアズミはホッホに目をやった。「ホッホってきみのことだよな？」

剣矢がけたたましくわめいた。「やだよ、おれ！　こんなヤツ。何にもできっこねえよ！　足手まといだよ！」

「なんだと、このクソガキ！」と豪利が怒りの表情で立ちあがった。ヒッポがあわてて剣矢に駆け寄って大きな胸にかかえこみ、こぶしで頭をゴリゴリゴリとこすった。「あんたはね、思ったことをすぐに言っちゃいけない人なの。一呼吸おいてから言いなさい」

「げんこつもらってもよかったのに」とアズミがあきれた。「剣矢はどうしてそんな失礼なことを言うんだ？」

「だってこいつ、休み時間になってもだれとも話さないで、しょぼしょぼしてんだもん。親の反対を押し切ってチーチーに入ってきたってのにさ」

「まったくですよ、ホッホ。あなたは小学生のときのままです」。デップリンが強い口調で言った。「あなたはあいかわらず勉強以外やらないし、何もできないじゃないですか。そんなことしていたら、あなたの人生どうなるかくらい、中三生になったらわかるでしょ？」

「でもね、ホッホがこのミーティングに参加したってことは、自分を成長させようと思ってるからよ」とキララ子がホッホを見て言った。「ゆっくり変わっていけばいいじゃん」

「だけど、下向いてないで、顔、上げてほしいな」と鉄平がつぶやいた。

「そうだよ、ホッホ」と理王も言った。「目を開いて人を見つめなよ。そうしたら人が見えてくる。自分も見えてくるようになるよ」

「ホッホくん、いっしょにキャンプに行こうね」とリサがホッホくんを包むように見つめた。

リサの言葉を聞いて、高校生たちが小さなガッツポーズをキイロに送った。

豪利は（剣矢によって傷つけられたホッホの気持ちをどうやって励まそうか）と言葉を探していたから、生徒たちに救われた思いがした。「みんな、いい言葉をホッホにありがとう。ホッホや、顔を上げて、目を開いて、ゆっくり歩んでいこうな」

指示の多いリーダーと少ないリーダー

五月の土、日。午後三時に中三生全員、高校生は競技会で参加できないチャンちゃんをのぞく五人、豪利と象兄ちゃまが道志川のほとりのキャンプ場に集まった。

中三生たちは高校生のアドバイスを受けながら、子分に伝える言葉の練習をし、包丁とナタの使い方を班員に教える練習も終わった。

みんなとおしゃべりをしながら、ときどき耳をすまして何かを待っていたキララ子が小さく叫んだ。「ツッパリくんが来た。オートバイの音がする」

「へえー、なんでツッパリくんだってわかるんだ？ オートバイなんていっぱい通ってるじゃん」と剣矢がきいた。

「キララ子にはわかるのよ」とリサが言った。「デップリンにもわかるわ」

「はい、ぼくにはわかります。でも、キララ子ほどではありません」

かすかに聞こえてきた音がみるみる轟音となり、激しいきしみ音をたてて、キャンプ場の入り口でとまった。

浅緑の木々の葉の中から、長身に真っ黒な上下服をまとい、革のロングブーツをはいた金髪の若者が現れ、「オッス！」と呼びかけた。

「オッス！」。生徒たちが初夏の光の声でこたえた。

象兄ちゃまが豪利に「あの方がツッパリくんですか？ カッコいいですね」

「そう、ツッパリは生徒たちの期待に応えて、ああやってカッコよくしてくれているんだ」

ツッパリくんは豪利に挨拶すると、象兄ちゃまにまっすぐに体を向けた。「象兄ちゃまですね。参加を感謝します。自分はチーチー塾のOBで、桜美林大学二年の枝です」

「ぼくは東大二年の大平原です。ツッパリくんのごことは中三生たちからたくさんうかがっています。ごいっしょさせていただけで光栄です」

ツッパリくんの言葉づかいを真似しているうちに、男ことばが好きになってしまったキララ子は、二人ががっちり握手をするのをきららの眼で見つめた。

炊事場に生徒たちが輪になった。今日の食事作りは二班が同時に行うことになっていて、親分はデップリンと理王である。

メニューは二班とも同じミネストローネと野菜サラダ、白いご飯である。ミネストローネの材料と作り方は、前もって与えられているが、レシピ通りにやるかどうかは親分の自由である。

二つの班が数メートル離れてカマドを囲み、その間に指揮官のキララ子が立ち、高校生四人、ツッパリくん、豪利が場所をとった。

二人の親分がそれぞれの子分を集め、料理作りの説明を同時に始めた。するとデップリンの声が大きすぎて、理王の言葉が聴こえなくなってしまった。もともとデップリンは善意の大声で情熱をこめて話す姿が愛されているのだが、今日はツッパリくんが見ているものだから張り切っているのだ。

キララ子がストップをかけた。「二人いっしょに話し出すと、どっちも聞き取れなくなってしまいます。それぞれの説明を聞きたいので、一人ひとり説明することに変えます。最初にデップリンがやってください」

デップリンはもう一度張り切って説明を始めた。「ミネストローネとはトマト味で煮こんだ野菜スープです。イタリアの明るい陽射しと青い海から生まれた家庭料理です」

観察役のヒッポが「へえっ、そうなの。知っていた？」とキイロにきいた。

「知らなかったわ。ゴリ先生、ご存知でしたか？」

「いや、知らなかった。イタリア民謡が好きなデップリンの気持ちが表れた説明だな」

デップリンはとうとうと語った。「先ずニンニクをきざんで、このオリーブオイルでいためて、油にニンニクの香りをしみこませ、ベーコンを小さく切っていためます。そこへきざんだタマネギとニンジンを入れ、タマネギが透き通るまで炒め、さらにきざんだキャベツを加えて炒めてから、水とトマトジュースとコンソメ、香りをつけるためのローリエというこの葉っぱを入れて、ことこと三十分煮ます。それからジャガイモを一センチ角に切って加え、弱火で十五分煮てから、塩とコショウで味を調えてできあがりです」

デップリンは材料を切る大きさも、塩、コショウの量もきっちり指定した。

キイロが「食べたがり屋のデップリン、おいしそうな顔で説明するわね」と感心した。

「あの説明力、ぼくは真似できない」と高校生のアズミが言い、ヒッポは「手順がこまかすぎて、チーチー塾の野外活動には合わないんじゃない？」と首をかしげ、モトキン「言葉量が多くって、剣矢は聴くのをやめているよ」と言った。

デップリンはミネストローネ作りを剣矢、火を焚いて米を炊く役をリサに与えた。すると剣矢がほほをふくらませた。

「なんだよお！ リサは火のおこし方知らねえんだよ。だから米はおれが炊くんだと思って、ミネなんかの作り方なんか聴いてなかったよ」

「でもわたしは火おこしやってみたいです。わたしは夏の合宿で子分たちに火おこしの指導ができるように学びたいです」

「はい、ぼくがリサさんにきちんと教えます」

「だったら最初から役を言えよ。そしたら、おれ、作り方きいてたよ」

「そうだよ、デップリン」とキララ子が観察席から口をはさんだ。「あんた、相手が理解できているかどうかを見ないで説明しているんだ。一度にそんなにべらべら説明されたって、料理をやったことない人の頭にゃ入らねえだろ。もう一度やりなおせってんだ」

「あっ、はい、わかりました。アドヴァイス、ありがとうございます」

デップリンが剣矢にもう一度ネストローネの作り方の説明を始めると、剣矢が「おまえは説明がうまい。料理のイメージもおれの頭に浮かぶ。けどおれ、料理の素人だから一度に説明されるとわかんなくなっちゃう。途中まで説明をきいたら、おれが復唱するから、それが正しく言えていたら、次の説明をしてくれよ」

高校生たちが「復唱とはいいね」とささやいた。デップリンは剣矢に説明を終ると、リサにつきっきりでナタの使い方、火のおこし方を教え、自分の役のサラダ作りにもとりかかり、巨体をゆすって走って行って剣矢に声をかけ、また戻ってきてリサの面倒を見た。デップリンの自信に満ちた姿は、いつもは生徒たちにとっては頼りになるものなのだが、今日はしば

らくすると剣矢がデップリンに食ってかかるようになった。

「さっき、おまえ、そのこと、説明したよ！」「何度も同じこと言うな！」「おれにまかせたんだから黙ってろ！」

「そーんなこと言っではいけません。ぼくは親分です。あなたは子分です。子分は親分の命令に『はい、わかりました』としか言っではいけないんです」

「だけど、おまえ、おせっかいだ。少しくらい失敗したっていいじゃねえか！」

「よくありません。ぼくはみなさんにおいしい物を食べてもらいたいのです」

キララ子が厳しい顔で豪利に相談にきた。「デップリンは一方的で、剣矢の気持ちにもリサの気持ちにも気がついていません。やり方を変えさせていいでしょうか？」

「いや、あのままやらせてみよう。デップリンは強烈な表現意欲と人柄の良さで、どこでもリーダーをやってきていて、失敗してもだれからも注意されていないはずだ。反抗される経験をさせてやろう」

「でもリサがかわいそうです。やっと合宿に行く気になったのですから」

「うん、だが、ほら、見てごらん」

豪利の視線の先にキイロがいて、リサのところへ寄って行くところだった。それを見たキララ子は、さりげなく近づいてリサの後ろ立った。

キイロがのんびりとした口調できいた。「リサちゃん、どうかしら？」

リサの目に涙が浮かんだ。「わたし、デップリンみたいな親分できません。剣矢みたいに反抗されたら、どうしていいかわかりません」

「そうね、リサちゃんはデップリンの真似なんかできないわよね。それに真似しちゃだめよ」

キララ子が言った。「理王の班が説明を始めてください。デップリン班は手をとめて見てください」

キイロは「リサをちょっと借ります」とデップリンに声をかけると、リサの手を引いて理王の班の前に連れて行って並んで座り、リサの頭を自分の肩の上に乗せた。

理王の前に、子分役の鉄平オッチャンと高一のジュニアが集まった。

「野菜サラダは親分のおれが担当します。ではどの役をやりたいか言ってください」

「ぼくがご飯たきやりたいです！」とジュニアが勢いよく跳びあがった。「ぼくは火のおこし方もご飯のたき方も知りません」

生徒たちが笑った。ジュニアはボーイスカウトに入っていて、野外活動にくわしいが、今は何も知らない役を真面目な顔で演じたからである。理王も真面目な顔で「ではジュニアがご飯たきね。火のおこし方はおれが教えます」と言った。

「じゃ、おれ、トマトのスープやる。おれ、料理できないから、ゆっくり説明してほしい」

「うん、じゃあ、オッチャンはミネストローネをお願い。作り方はね、ベーコンとここにある野菜を切って、トマトジュースと水を加えて全部いっしょに煮こむ。食材の表面積が大きくなるように切ってね」

「表面積って何のこと？」

「切り口の面積のこと。このジャガイモを一回だけ切ったら切り口は一つだよ。これをサイコロのように立方体にきったら、切り口はいくつある？」

「六つ」

「そう。小さく切ると切り口がいっぱいできて表面積がふえるよね。そうしたら材料から、いい味がスープにたくさん出る……ん、じゃ、ないか、なあ……材料も多いから、ダシは使わない……煮こんでいってスープにいい味が出たら、塩だけ加えて、オッチャンがみんなに食べさせたいと思う味にしてよ。チーチー塾の料理は山賊料理みたいなもの。テキトーでいいからね。それからジュニア、おれね、米をたいたことはあんまりないから、いっしょに相談しながらテキトーにやろう。先ず米をといで水につけ、米が水を吸っている間に、薪に火の付け方をやろう」

そう言うてから、理王はジュニアの前に同じ大きさの薪を二本置いた。

「この二本のどっちが燃えやすいかわかる？」

「同じように見えるけど、見てわかるの？」

「どっちが古そう？」

「あっ、そうか、こっちは皮が新しくてみずみずしいね。理王の肌みたいだ。こっちは水っ気がなくてかさかさしている」

「ゴリ先生みたいだね、もうすぐミイラかな。どっちが重い？」

「こっち。中がつかまつてるんだね。理王の脳みそみたい。こっちは軽いから、中がすかすかかってことだね」

「だれかに似てないかな？」

「それ、ぼくに言わせるの？」

「言わない方がいいね。では二本を比べて、どういうことがわかった？」

「軽い方は水分がぬけているから燃えやすいつてことがわかった」

リサとキイロの目の前に、鉄平オッチャンとジュニアが移動していた。オッチャンは野菜をおぼつかない手つきで切り、ジュニアは釜の下の火の落としどころを理王にきくと、理王は「テキトーに」とこたえた。「はい、テキトーにやります」とジュニアは言って、ナベのふたを開けた。湯気がもうもうとわきあがった。

「理王！ 理王！ ちょっと来て！ 米がダンスしている！」

理王とオッチャンが鍋の中のをのぞきこんだ。三人でわっと笑った。理王が長い料理用の箸で釜の中をつつき、また笑った。

キイロも笑った。「あら、あら、あんなふうにあふたを開けっぱなしにしていたら、お水が蒸発して、ご飯がこげちゃうわ」

理王は野菜サラダを作りながら、オッチャンの野菜切りを手伝ったり、ジュニアに話かけたり、ごみをひろったり、役目が終わった道具をかたづけたりした。その様子はゆったりしていた。

キイロは理王の班の姿をリサに見せながら、「リサちゃんの長所って何かな？」ときいた。「人を優しく思う心でしょ？ ツッパリくんは『リサの本質は誠実さ』だって言っていたわ。リサはそういう自分の心を言葉にすればいいのよ。そうしたらリサに反抗する人なんていないわよ」

リサはキイロの肩に頭を乗せたまま聴いていた。「こうやっていると落ち着くなあ。キイロちゃんの心からは、雪のしんしんと降る音が聴こえてくる、ってゴリ先生が言ってたけど、ほんとうだわ」

「さあ、ご飯作りに戻りましょう。デップリンが火かげんを見てくれたわ」

キイロはキララ子と豪利に（リサはだいじょうぶ）というサインを送った。

理王の班で大笑いがおこった。「ご飯がこげちゃった！」「水がなくなってる！」「ミネストローネにぶちこんで煮ちゃえ！」「ミネストローネのおじやだ！」

みんなで二つの班の料理を食べくらべながら食事をした。

食後の片づけが終って二人の親分のリーダーシップ振りを検討する合評会がキララ子の司会で始まった。

日はとっぷりと暮れていた。初夏の道志村はまだ寒い。生徒たちはしっかり着こんで、枯れ木で小さなキャンプファイアーを作り、その周りに腰をおろした。アズミが小さくなっていた火に薪をくべた。炎がはじけ、真っ暗な森がそこだけ明るくなった。

デップリンのたいたご飯はおこげまで上手について、「さすがデップリン！ 薪でたいた味が出ている」と好評だった。

「デップリンの班のミネストローネは手がこんでいたけれど、剣矢は文句を言いながらもよく作ったじゃないか」

「理王のミネストローネは大ざっぱな作り方だったけれど、ダシをいれてないのにうまかった。デップリンみたいないねいな作り方は、キャンプでは必要ないんじゃないか」

「いや、きちんとした料理作りが楽しい人もいると思う。あれはあれでいい」

「ミネストローネをぶちこんだオッチャンのおじや、ニンニクもローリエもコショウもダシも使ってないのに、よく煮こまれ、ご飯とミネストローネの味がマッチしていた」

「オッチャンは表情も動きも生き生きしていたよ」

「理王の班の子分の感想をききます。ジュニア、お願いします」

「ぼくは火のおこし方も米炊きも経験がないことにして、理王に質問したら、理王がテキストに言うから、釜の中の様子が不安になったことにしてふたを開けたら、米が踊っていたので、理王を呼んだら、理王が『この米は男、この米は女。ダンスをさせよう』って言って、箸でつついて遊びました。そのうちに水が少なくなったら、オッチャンが……オッチャン、話してください」

「おれ、『ご飯。焦げそう。ミネストローネのスープをご飯に入れようかって言った。そしたら理王が『ミネストローネおじやだ』って騒いでスープをぶちこんだ」

「チーチーに新メニューの誕生ですね！」とキララ子が笑った。「それでオッチャンの感想はいかがですか？」

「理王の説明、よかった。具は表面積が大きくなるように切るってことと、塩の量は人に食べさせたい濃さでいいって言って、あとはおれに任せてくれたから、おれ、やる気になった」

「うまかったよ、オッチャン！」

「理王の親分ぶりについて、高校生のみなさんはどう思いますか？」

「理王は見ているだけが多かった。動くときは自分たちの仕事の隙間をうめる程度の作業をしただけで、口は出さなかった。のんびりした雰囲気よかった」

「テキトーといういいかげんな言葉でも、人はあんなに責任をもって働くんだね」

「小さいときの理王はツッパリくんやデップリンに突進する子でした。それが今は品がよくなっちゃって」とキララ子が言った。「それって、何なの、理王？ それにテキトーという言葉はどうしてあんなにつかったの？」

理王はこたえなかった。

「自分たちが一つ年上だから命令するのがてれくさくて、テキトーに、って言ったの？」

「それはない。おれはずっとおまえらとやってきたから、そういう感情はない」

「じゃあ、なんで？ なんでテキトーを使ったんだよ？」

「うん。おれはよきリーダーってのは、仲間の人たちの長所を響き合わせて、グループを創造的に活動させることができる人だと思っている。でもおれはそんなことはまだできない。オッチャンとジュニアの長所も少しはわかってるけど、じゃあその長所をどうかみ合わせればいいのかなんてわからない。おれにできるのは、作業の基本をグループの共通認識にして、あとは自由にやらしてもらうことだけで、そうすればグループが創造的な活動をできるんじゃないかって思って、それでテキトーにと言ったんだ」

「ぼくは理王にききたいことがある」。アズミが思慮深い目を理王に向けた。「チーチー塾ではリーダーの役目とは、先頭に立って体を動かすことではなくって、仲間の人たちが気持ちよく動けるように頭を働かせることで、体は仲間の作業の隙間を埋める程度に動かせばいいんだよね。ぼくはそれを高校生になって学んだ。けれど理王はもうわかってるみたいだ。中二でどうしてそんなことがわかったの？」

「それほどはわかっていません。ただ、去年、中一で夏の合宿に参加したとき、高校生や中三生の動き方を見ているうちに、そんなことを感じたんです。それでおれに合っているスタイルは何かってことを考えてきました」

「わかったわ」とキララ子がおだやかな目になった。「理王には人間はこうあってほしいという……なんていうか……人間への願い……祈りみたいなものがあるんじゃないのかしら……ツッパリくん、そう思いませんか？」

ツッパリくんはキララ子をじっと見つめてから言った。「おまえもいーぜ。おまえは透き通った目をしている」

キララ子が少女の恥じらいの顔になった。「ではデップリンの指導力に話を進めます」

高校生たちのデップリンへの評価は、「デップリンの指示は見ていて圧倒されるが、剣矢の反抗的な態度も理解できる」となった。

「だけど」とキララ子が剣矢にきいた。「納得できないことに反論するのは剣矢の長所だと思っているけど、それにしてもどうしてあんなに親分に突っかったの？」

「デップリンがしつこいんだよ」

デップリンが大きな目をむいた。「なんで？ 親分が子分の仕事ぶりをチェックするのは当たり前でしょ！」

「おせっかいなんだよ、おまえは！ こまかいことまで指示するから、やってる方はリズムが狂って、やる気をなくすんだよ。おまえ、最初にうまい説明したんだぞ。あとは子分に任せりゃいいじゃねえか。しゃべってばかりいやがって」

「おしゃべりはぼくの得意技です。変えるつもりはありません」

「おっと、ちょっと待て、デップリン」。生徒たちの議論には口を出さない豪利が割って入った。「今の剣矢の『リズムが狂う』って言葉は見逃しちゃいけない言葉だ。おれは生徒たちが英語劇の練習をしているとき、『発音が違う』とか『その歩き方はこうしろ』などと言って、いちいち注意をしてきたか？」

「あーっ、していません」

「していないね。じゃ、なぜおれは細かな注意をしないんだ？」

「あ、はい、注意は子どもの遊んでいる気分やリズムをこわすからです」

「そうだよな。おれは子どもたちが一つの場面を演じているときは、その場面が終るまでは注意をしない。子どもは演じているとき、遊びという大切なことをやっているんだ。リズムに乗って生きているんだ。そういうときにいちいち注意したんじゃ、子どもの遊び心やリズムを壊すことになって、子どもの生きる力をじゃますることになる。剣矢がいらいらしたのはそういうことなんじゃないのか？」

「あー、はい」

「ねえ、デップリン、剣矢を自分の子分に指名したのはあんだだよ。どうして剣矢を子分に選んだの？」とキララ子がきいた。

「はい、ぼくはいつもみなさんのリーダーみたいなことやらせてもらっています。そういう自分がかっこいいと思っています。でもそれはうぬぼれかもしれないと思うことも少しはあります。もしぼくにうぬぼれがあるとしたら、それをチェックしてくれるのは剣矢とキララ子と理王だと思っています。だから今日は剣矢を子分に選びました」

「おおっ、と高校生たちがどよめいた。「やっぱりデップリンは雄大な心の人だ」

「あんた、その考え方、何から学んだの？」

「ゴリ先生からです。ゴリ先生は全会一致がきらいです。反対意見や批判があるべきだと思っています。だからぼくも、もしかしたら剣矢がぼくをチェックしてくれるかもしれないと思ったのです。でも、ぼくはあんなに反抗されるとは思っていませんでした」

「きみは剣矢を指名したことを後悔している？」とヒッポがきいた。

「後悔していません。剣矢の意見には腹も立ちますが、学ぶことが多かったです」

「すばらしい。ぼくは剣矢にも感心したよ。やる気がある剣矢みたいな人は、指示をされすぎると嫌気がさして、投げやりになったりするけど、剣矢は手抜きをしなかった」

「剣矢って、へこたれたり、ふてくされたりしない人なんです」。キララ子が言葉をそえた。

「だけとおれ、作っててつまんなかった。何もかもきっちり決められ、しゃべり続けられ、自分で作ってるって気がしねえんだもん」

「それって大事なことよ。デップリンはどうしてあんなに次々にしゃべり続けられるの？」

「ああ、はい……ぼく、しゃべってないと不安なのです」

「不安？ デップリンが？ 想像できねえー」

理王が静かに言った。「子どもはいつも不安なのです。子どもは自分をほめることができません。子どもをほめるのは大人の役目です」

豪利が受けた。「子どもをほめるのは大人の役目か……重たいこと言われたなあ……デップリンは雄大な心の持ち主か……これもデップリンの将来の姿を想像させる言葉だ……ではデップリン、きみは自分の長所を何だと思う？」

「……おしゃべりということでしょうか？」

「じゃあきみのおしゃべりの長所は何だ？」

「はあ……考えたことはありません」

「では、きみの周りには、年上から年下まで、いつも人が集まってくる。なぜだ？」

「……話がおもしろいからですか？」

「それだけか？ ほら、今、いい言葉をもらったじゃないか」

キイロがにこにこした。「雄大な心よ」

「ありがとうございます。たいへんうれしい言葉です。では、もう一人の子分のリサさんはぼくをどう思いましたか？」

「わたし、デップリンに説明されているうちに自信をなくしてしまいました。わたしはあんなにしゃべったり命令したりできません」

「ああ、ショック！ ぼくはすばらしいリーダーをやっていて、みなさんがほめてくれるだろうと思っていました。ぼくはゴリ先生がほめてくださる言葉を期待していました。ああ、それなのに今日は反対だ。ぼくはリーダーとして失格なんではないですか！」

デップリンの悲鳴のような声に生徒たちがくすくす笑った。

キララ子はツッパリくんに向かって。「デップリンに何か言ってやってください。デップリンはツッパリくんをほめてもらいたくて親分をやったのです」

「そうですとも、ツッパリくん！ ぼくをほめてください！ 子どもは自分をほめることができません。子どもをほめるのはおとなの役目です」

ツッパリくんは鋭い目をデップリンに向けた。「おまえは剣矢とよく話をするのか？」

「はい、しょっちゅうしています」

「うそだあ！ おまえが一人でしゃべりまくってるんじゃないか！」

「だったら、とめたらいいじゃないですか？」

「とめられねえよ！ おまえはボーボーと燃えあがる火みたいにしゃべってるし、話はおもしれえんだ。どうやったらその火を消せるってんだよ」

「ああ、ツッパリくんもぼくがしゃべりすぎて思われますか？」

「しゃべりすぎだ。おまえは相手のしゃべる機会をうばっている。だから剣矢の長所に気がつかねえんだよ。おまえは言葉数を少なくして、相手にしゃべる機会を与えろ。相手を生かしてやれ。そうしたらおまえはもっと魅力的な人物になる」

「ありがとうございます。うれしいです。でも言葉数を少なくするなんて、ぼくはどうすればよろしいのでしょうか？」

「てめえで考えろ」

「そんなのはぼくには地獄です。これは挫折です。ぼくの人生で、初めての挫折です！」

デップリンは立ち上がって、情けなさそうに巨体をひねった。「ぼくはボーボーと燃えあがる火みたいにしゃべりたい。口数をおさえるなんてぼくにはできない。ああ、地獄だ」

理王がやわらかな声で言った。「デップリンは感動する心がずばぬけているんだよ。おまえの感動する心はおれたちに勇気を与えてくれているんだ」

「おおっ！ 理王！ わが友、理王！ わが生涯の友、理王！」

デップリンは理王の両肩をつかんでぐらぐらとゆすった。

豪利が笑った。「なあ、デップリン、『自分でやりたい』という者には任せたらいいじゃないか。自分で考え、工夫し、失敗してもへこたれず、前へ進む者もいる。言われたことの意味を考え、言われたこと以上のことをする者もいる。素直に従う者もいる。良きリーダーとは、いろいろの人間の特徴や長所を尊重し、響きあわせ、学びあわせ、全体を前に進ませることが出来る人だぞ。きみは感動する心が強く、表現意欲があり、意地悪なところが少しもないから、人に愛され、受け入れられてきた。おれはそれはきみの天性だと思っていた。ところが今日、きみは自分を批判するかもしれないと思う剣矢を共同作業の相手に選んだ。おれは中学生がそんな考え方ができるとは思っていなかったから、ひじょうに驚き、感動している。きみは人からの批判を受けとめ、公正でふところが深い人に成長していくことをおれは確信した。そこでみんなにも言いたい。＜雄大な人物＞という語は使いすぎると、うすっぺらなからかい言葉になってしまうからもう言うな。デップリンも胸の中にしまっていて、ていねいに育てていくんだぞ。さて、ツッパリや」と豪利が呼びかけた。「理王、リサ、キララ子もきみに出会って以来、きみに憧れ続けてきている。そのきみがアメリカに行ってしまう。別れの言葉を言ってやってくれるか」

「そうっすか」と、ツッパリくんは理王を優し気に見た。「理王といえば、おいらには真っ赤な顔で蹴りをいれてきた姿なんだが、去年三年ぶりに会ったおまえは理知的な少年になっていた。あの激しいチビンコ理王と今の理知的な理王、どっちがおまえだ？……両方おまえだ……リサ、おまえの体には誠実って血が流れている。何をやっても誠実だぜ」

「ツッパリくーん！」。デップリンが大きな声を出した。「キララ子に何か言ってやってくだ

さい。キララ子はツッパリくんの言葉に恋い焦がれているんです」

「だめっ！ やめてーっ！ 言わないで！」

「いいえ、ぼくは言います！ ぼくは言いますとも。キララ子の心の中にはツッパリくんが住んでいるのです」

ツッパリくんがじいっとキララ子を見つめた。「おまえは男ことばを続けるのか？」

「女の子らしくしなさい、ってことでしょうか？」

「おまえの目は透き通っている。その目に合った言葉を育てたほうがいいんじゃないか？」

「はい、ありがとうございます……では象兄ちゃま、感想を言っていただけますか？」

「はい……今、ぼくの頭の中は、いい意味でのパニック状態です。こんなに自由で、勝手に、しかしみんなの心が通じ合っている姿は、ぼくの想像をこえていました。ぼくは明日は大学の研究室の仕事があるため、今夜はこれでさよならしますが、夏合宿には喜んで参加させてもらいます」

生徒たちが歓迎の叫びをあげ、ツッパリくんは立ち上がった。「へい、へーい、最寄りの駅まで、おいらのハーレイダビッドソンが送りたがっていまっせ」

「最後にゴリ先生、今日の締め言葉をお願いします」

「うん、だがその前に、理王とデップリンを並べて親分やらせようと考えたのはキララ子だ。キララ子の感想をききたい」

キララ子はきっぱりとした表情になった。「一番大切なことはおいしい料理を作ることよりも、料理作りを通して協力し、響きあって、人として成長することだと思います。その意味では理王は言葉が少ないのに、班を生き生きさせていました。一方、細かく先へ先へと指示していたデップリンの班では、剣矢がいらいらし、リサが自信をなくしました。誠実なりサの自信をなくさせるなんて、わたしはデップリンをゆるせません」

生徒たちが静まり返った。「でも、でも、きいてください。今日のデップリンはツッパリくんにほめてもらい一心で、張り切りすぎてしまったのです。聴く人の心を見ないで、一人で朗々とイタリア民謡を歌いまくっていたようなものです。でも今日の学びから、デップリンは心の深い人に自分を育てていくことを、わたしは信じます。みなさん、今日のご苦労さまでした」

生徒たちから熱い拍手がおこった。豪利はキララ子の肩を抱いた。「意義深い一日だった。ありがとな。キララ子はすてきな女性になるぞ」

「誕生日、おめでとう」と、理王がキララ子に花束を差し出した。理王が森の中の野花で作ったものだった。

知らない、できないホッホくん

二日目の早朝、鉄平とモトキンが道志川の土手の立っていた。鉄平の目が水辺の一点に止まった。「セリが生えてる。土手にミツバもある。おれ、若草の入ったおかゆ、作ってみたい」

「おかゆ？……うん、それおもしろい！ おかゆにしよう！」

「だけど、おれのメニュー、肉じゃがって決まってる」

「チーチーではね、個人の発想を大事にするんだ。やってみて失敗しても非難されることはないよ。おかゆにしようよ」

鉄平はおかゆ作りの手順や子分に伝える言葉を、モトキンに手伝ってもらいながら練習した。「うん、それでいい。子分たちは自分の行動の仕方が見えてくるよ。もし子分たちがとまどったり、動きにキレがなければ、自分の指示の仕方に問題があったと思って考えなおし、指示をやりなおせばいいからね。もう一つ、親分は指示の仕方に迷っても、『どうしたらいいですか？』って質問してはいけないことになっているけれど、それは単なるルールだよ。困ったら質問しな」

朝のしじまをぬって、「オッチャーン！ モトキーン！」と呼ぶ声がした。二人が炊事場に戻ると、全員が円になった。アズミが困惑した顔で言った。

「ホッホから携帯電話に連絡があって、今、家を出たところで、二時間ほど遅れると言ってきました。事情はききませんでした、どうしましょうか？」

前もってホッホからは、学校のテストに備えて勉強したいので、二日目の朝、母親の車で送ってもらって参加していいかと申し出があり、生徒たちは了解していた。

「八時に来るって言ってたのに、なんで遅刻すんだよーっ！」と剣矢がわめいた。

「言いにくそうだったので、事情はきかなかった」

「なんだよー、あいつ！ 今からじゃ十時になるじゃん！ それまでメシ作り、待てねえよ！ だれかホッホに代わって、子分やってください！」

「そうです。ホッホは頼りになりません。待つ必要はありません」

アズミが重苦しそうな顔になって豪利を見た。だが豪利は気楽そうに応じた。「おお、そうか、こんなことは人生の中でよくあることだ。一種の危機管理能力を養うものとして、どうしたらいいか、みんなで考えてみな」

アズミは穏やかな表情に戻って高校生たちに言った。「このキャンプはキララ子がリードすることになっています。キララ子にまかせようね」

キララ子は少しの間をとった。朝の木漏れ日がキララ子の顔で遊んでいた。

「大事なことはこのキャンプの目的は何かってことです」

「おれが親分をやるってことです！」。剣矢が気取って言った。

「だったら、ホッホが子分をやるってことも目的にしないといけないんじゃないの？」

デップリンがすぐに反応した。「ぼくの言葉、取り消します。ホッホを待つべきです」

「ありがとう。だけど、食べたがり屋のあんたが朝食なしで待ってられるの？」

「あーっ、いられません！」

そこで、オッチャンの班は予定通り食事作りをする、その隣で高校生たちがオッチャンの班と同じものを作り、みんなで朝食と合評会をすませる、ホッホが来たら剣矢の班の食事作りを始めよう、となった。

「オッチャン、おかゆ、うまかったよ！」

「おかゆの中の緑の葉がきれいだった。道志川の春があったよ」

「チーチー塾の食事にワラビのおひたしが出たなんて、かっこよすぎる」

「オッチャンの声は低くて聞こえなかったけれど、班がのどかな雰囲気、オッチャンの人柄が感じられた」

「オッチャンの声、とちゅうから聞こえるようになった。自信、ついたんだと思う」

「リサちゃん、見ていてどう感じたかしら？」

「オッチャンみたいなのんびりした人は、のんびりリーダーやっていいことに驚きました。子分に助けてもらう姿を見て、リーダーって、助けてもらってもいいんだって知りました」

オッチャンの感想は「自信、まだない……けど、おれ、成長できそう」だった。

ヒッポが「ちょっと知りたいことがあるんだけど」と喜んできいた。「オッチャンはナタの使い方が上手だったし、料理の説明もよかったけど、そういう訓練を受けているの？」

「家族でキャンプに行く」

「じゃあ、よく遊んでるんだね。それなのに口数が少ないのはどうしてですか？」

「母さんも姉ちゃん妹もおしゃべりで、面倒見てくれるから、おれ、しゃべらなくていい」

豪利が楽しそうに質問した。「ふだん単語一つですましている鉄平が、今日は主語、述語のある文で語ったんだねえ。どうしてそうできたのかな？」

「おれ、チーチーに入ったとき、みんながしゃべるんで、あせった。おれ、心の中でしゃべる練習、いっつもしてた。そしたら今日、しゃべれたです」

「成長できそう、という言葉はよかったなあ。それにオッチャンの人柄がグループをまとめていたんだ。こういう言葉数の少ない人でも、人柄を生かせばリーダーをやれるのだね。モトキン、オッチャンのアイデアを受け止めてくれてありがとう」

ホッホがやってきた。いつものようにおずおずしていた。剣矢が料理の説明をしているとき、ホッホの携帯電話が鳴った。(なんにもできねえやつが遅れてきやががって) とぷりぷり腹をたてていた剣矢は、「携帯は禁止だ！」と言って、ホッホから携帯電話を取り上げ、生徒たちの携帯電話の置いてある所に投げるように置いた。

「それは失礼です！」。デップリンが大きな声を出した。「どうして携帯が禁止なのか、説明してやってください」

剣矢は乱暴な声で、「キャンプに来たら外の世界のことは忘れて、ここにいる仲間と顔を

見て話せ」と言うと、「米を洗え。八人分だ」と命令した。

川に水をくみに行ったヒッポが剣矢の耳もとでささやいた。「ホッホが米を食器用の洗剤で洗っているよ」

剣矢が川へすっとなでいくと、ホッホがナベの中の米をおぼつかない手つきでかきまわし、あわだてていた。

「なにやってんだ、おまえ！ 米を洗剤で洗ってどうすんだよ！」

ホッホはおどおどして、「洗えって言われましたから」とこたえた。

「米を洗剤で洗うやつがいるか！ おまえ、中三にもなって、そんなこともわかんねえんだ。ああ、あ、もうこの米、食べねえ。すてろ！」

ホッホは米を川に流し、流れてゆく米を情けなさそうに見た。

「おまえ、米はもうやるな。火をおこせ」と剣矢は新聞紙とマッチをわたした。

ホッホはマッチを見たままぼんやりしていた。リサが剣矢のところに寄ってきた。

「ホッホくんはマッチ、使ったことないんじゃない？ 教えてやって」

「こうやってやるんだよ！」。剣矢はマッチをすって、新聞紙に火をつけてみせた。「あとは薪を燃やすだけだ」と言って向こうに行ってしまった。

理王が剣矢のところへ来て、カマドの前のホッホの方を見ながらさとした。「火のおこし方、教えてやれよ。いつまでも腹をたててるんじゃないやねえよ」

ホッホは太い薪の上に新聞紙を乗せて火をつけていた。新聞紙だけがめらめらと燃え、燃えかすがいくつも薪の上にあった。

「なにやってんだ、ホッホ！ こんな太い薪の上に新聞紙乗せて火をつけたって、薪に火がつくわけねえだろう！ ああ、おまえ何にも知らねえ！」

剣矢はホッホのとなりで歌いながら踊りだした。

ぼーくのなまえは ホッホくん。

知らないできない 中三生。

こーめをせんざいであらったら

だーれも食べてはくれません。

剣矢のきみような歌と踊りに、みんなは手をとめて笑い出した。（ホッホをどうやって導こうか）と考えていた豪利も笑ってしまった。

ぼーくのなまえは ホッホくん。

まーきのうえのしんぶんし

もえたがまきには火がつかない。

ぼーくはお医者になりたいが……

リサが豪利を振り向いた。「ホッホくん、親からなんにも教わってないんでしょ？」（しまった！）と豪利は思った。そのとき、強い声が響いた。

「剣矢、やめろ！」

ツッパリくんが剣矢をにらんでいた。「そこまでやっていいのか！」

ツッパリくんは剣矢のところへ大またで向かった。生徒たちが息をとめた。ツッパリくんが剣矢をひっぱたくと思ったのだ。だがツッパリくんは剣矢には目もくれず、ホッホの前に立った。

「すまん。ゆるせ。おれがあやまる」

ツッパリくんはホッホをだきよせた。生徒たちはホーツと息をはいた。

豪利はツッパリくんの言葉がホッホの心にしみこむだけの間をとってから、「いったん作業中止。集まってくれ」と声をかけ、ホッホのとなりに立った。

「ホッホ、すまなかった。悪いのは、おれだ」

豪利は生徒たちをゆっくり見まわした。「ツッパリ、感謝する。おれは笑ってしまったが、きみたちは何を笑ったのだ？ ホッホをか？ 剣矢の歌と踊りをか？」

生徒たちが複雑な顔になった。

「剣矢のやることに疑問を持った者はいるか？」

「わたしは笑いました。でも笑いながら疑問を持ちました」。キイロがこたえた。

「そうか。だが、ツッパリがいなかったら、みんなの笑いが、いつのまにかいじめに発展したなんてことにならなかったか？」

「ならねえよ」。ツッパリくんだった。「チーチー塾のガキンチョに、それはない」

「それはないです」。キララ子が豪利を見つめた。「剣矢はおもしろすぎました。でも笑った後で、だれかが何かをしたと思います」

静かな拍手がおきてつながった。

「そうか……こうやって、おれこそ生徒たちに励まされ、育てられているんだな」

ホッホの目から涙が流れていた。リサがかけよって、ホッホにハンカチをわたした。ホッホは空を見上げた。

高三のヒッポが言った。「みんなが集団になって人を笑ったり、同じ行動をとるとき、『ほんとうにそれでいいのか？』と、いったんは立ちどまって考えてみようね」

「おかしいと思ったら声に出しましょう。ぼくはそれができなかったけれど」。アズミがホッホと同じ空を見上げながら言った。

「受ける人が出てくる」

「黙って見ているだけの人にならないようにしたい」

生徒たちはホッホに「ごめんね」とあやまり、剣矢はホッホの真正面に行って、「ごめんなさい」と腰を曲げた。

「ところで剣矢、きみはこのあと、ホッホをどうするつもりだ？」と豪利がきいた。「ホッホをこのままにしておくのか？」

剣矢はこたえられなかった。デップリンがきいた。「ホッホはどうしたいですか？」

顔を空に向けていたホッホが前を見た。「ぼくは何か一つだけでも覚えて帰りたいです」

「それなら決めました」。剣矢が明るい顔になった。「ホッホは班をぬけ、理王に火のおこし方を教わってください。理王は優しく教えてくれます」

豪利がホッホに言った。「すまなかったな、ホッホ。だがな、人から参加を誘われ、どうしようかと迷ったときには参加した方がいいぞ。参加しなければ学ぶことはゼロだが、参加すれば、よい出会いがある。今のように傷つくこともあるが、マイナスの経験は、心の持ち方でプラスに変えることができるからね」

そう言ったとき、豪利は「あれっ、もしかしたら、きみはお母さんの心配を押しきってやって来たのか？ さっきの電話はお母さんからなのか？」ときいた。

「はい」

「そうか、お母さん、まだ心配してるんだ。それなのに、よく来たじゃないか。よく来た、よく来た。これからのきみには、よい出会いが待ってるぞ。お母さんに電話しときなさい。明るい声でだぞ」

「ツッパリくん、質問があります！」。剣矢が緊張してきいた。「ツッパリくんは、どうしておれをぶんなぐらなかったんですか？」

「あのとき大事なことは、おまえをぶんなぐることじゃねえだろう」

ホッホは理王に誘われて、火のないカマドの前に立った。

理王は「火とは作るもの、育てていくもの」と言って、新聞紙をくしゃくしゃと丸め、「こうやって空気を含ませてからね」と新聞紙の上に杉の枯れ葉を乗せ、割りばしほどの細い枝を置いて、新聞紙に火をつけた。小さな炎が新聞紙、枯れ葉、細い枝と移って、大きくなっていくと、もう少し太い枝を乗せ、それに火が移るとさらに太い枝を乗せ、火を育てていくことをやってみせた。理王はそのあとホッホに最初からやらせた。

「火を育てるって……なんか火に命を感じます」

「今の時代、こんなこと知らなくたって、生きていくのに困らない。だけど、こういうことをやってると、おれは自分の中にある野性みたいなものに出会えるような気がするんだ。想像力が刺激されるんだね」

ホッホは理王を尊敬のまなざしで見つめた。少し離れた所からリサといっしょにホッホを見ていた豪利は「ホッホの目に火がともったみたいだな」と言って、ツッパリくんの隣りに立った。「ホッホを抱いてくれてありがとう。ホッホは救われたと思うよ」

「そうだったらうれしいっす。自分も目つきが悪くてからまれ、嫌気がさしていたときに、ドラゴンから抱きしめられ、ヒューモくんから『深い目をしている』と言われ、気持ちが楽になったんす」

紙の名刺で割ばしを切る

「割ばし切りを始めます。ツッパリくん、指導をお願いします」。高校生のアズミの声が響いた。

二週間前、チーチー塾の庭でキャンプの説明会が終わった後、生徒たちはこのキャンプの

炊事用の薪作りに、太い丸太を長い柄のついた重いオノを振り下ろして割ったが、腰がふらついてた。そこで豪利が軽くオノを振り下ろすと丸太がきれいに割れた。生徒たちがどよめいた

「ゴリ先生はお歳で、もう力がないでしょ？ どうして割れたのですか？」

「うん、おれの子どもころは、カマドもストーブも薪を燃やしていたから、中三くらいになると、男の子の仕事は薪割りだったんだ。だからなれだな」

「ゴリ先生は合氣道をやっている、紙の名刺で割りばしを切ることができるって聞いたんですけど、ほんとうですか？」

「ああ、できる。力をぬいてやれば、きみたちだってできる」

「ええっ、本当？ 先生、やり方、教えて！」

そういうわけで、今日の食事作りが終わったあとで、ツッパリくんが教えることになったのだ。

最初にツッパリくんは生徒たちを二人一組にさせ、脚も背筋もびんと伸ばして胸を張り、気をつけ、の姿勢をとらせ、おたがいに相手の背中を軽い力でじわっと押させた。すると押された方はかんたんによろけた。そこで体の力をぬいて、つま先で立ち、ゆっくりかかとを下ろし、リラックスした姿勢にさせると、今度はさっきと同じ力で押されてもぐらつかなかった。

次にそのリラックスした姿勢で、腕をしなやかに振り下ろす練習をしたあと二人一組になった。一人が二十センチほどの長さの割りばしの両端を指先で持って相手の胸の前に差し出すと、相手は指先で持った名刺を、割りばしを目掛けて振り下ろした。どの組も名刺が破れただけだった。

ところ「切れた！ リサが割りばしを切った！」という華やかな声がおきた。

キララ子が真ん中から十センチずつに切り分けられた割りばしを高々とかざしていた。

「こっちもできました！ キイロちゃんが切りました！」

わあーっ、と生徒たちは沸き、「本当に切れるんだ！」と張り切って、おたがいに相手の割りばしに向かって腕を振り下ろした。だがもうだれも切ることができなかった。

「なんで女ができて、男ができねえんだよ！」と剣矢がわめいた。

「力がぬけてねえんだよ。力を抜ければできる」とツッパリくんがこたえた。

「くやしい！ ゴリ先生！ おれも合氣道をやりたいです。道場を紹介してください！」

豪利は剣矢を見つめた。豪利は剣矢が子どもながら生きかたの原則を持っていることを高くかっていた。それと同時に、剣矢は自分の原則と異なる人間の気持がわからないと思っていた。

「そうか……剣矢が合氣道を学んで、自分を見つめられるようになる？……人の立場に立ってものを考えられるようになる？……こりゃおもしれえ……だが剣矢はなんで合氣道を学びたいんだ？」

「おれ、七月十五日に決闘するんです」

「決闘？……決闘？……決闘って、おいおい、命をかけて戦うことだぞ。その決闘か？」

「はい、その決闘です」

「だれと？」

「不良三人と」

「不良三人と！」。生徒たちが目をむいた。「相手は中学生か？」

「中三か高一だと思う」

不良少年にケンカを売る

数日前の夕方のことだった。剣矢がクヌギ林に入っていくと、細道の先に三人の少年の姿があった。一人はひょろりと背が高く、制服からシャツがでれっとはみだし、ズボンはずり落ちそうだった。ころころ丸い少年は木に向かってパンチをくりだしていた。もう一人はごっつい体をして倒木に座っていた。

（不良か？）と、剣矢が木のかげにかくれようと動いたとき、パンチをくりだしていた少年が動きをとめてこっちを見た。剣矢はかくれたことを見られたと思って、木のかげから出ると、彼らの方に向かって進んでいった。

剣矢は進行方向にしっかり目を向けて彼らの前を通りすぎた。

「おい！」と声がかかった。剣矢はどきっとしたが、振り向いて、「なんだ！」とこたえた。

「おまえ、名前はなんて言うんだ？」

ネギのようにひょろりと長い少年が、木に寄りかかってタバコをくわながらきいた。足元にはすいがらが散らかっていた。

「人に名前をきくんなら、おまえの名前を先に言え！ 不良ども！」

ヒョロネギがゆらりと木からはなれ、くわえタバコで両手をポケットにつっこみ、肩をいからせ、剣矢に向かってきた。

「なんかぬかしたな」。そう言ったはずみに、ヒョロネギの口からタバコがぽろりと落ちた。

「火を消せ！」。剣矢が鋭く言った。ヒョロネギは反射的にタバコを踏みつけた。そして二人の仲間を見て、てれたように笑った。

「ガキのくせに、タバコなんかすうんじゃねえ！」

「なんだと」。ヒョロネギが剣矢の肩をついてきた。剣矢が軽く身をかわすと、ヒョロネギは前につんのめった。

「へっ、弱っちょろいやつめ！ すいがら、片づけとけ！ 明日、見に来るからな」

次の日、剣矢はクヌギ林に行った。少年たちはいなかった。タバコのすいがらは一つも落ちていなかった。

剣矢がひょうしぬけがした気分で帰りかけたとき、木のかげから、黒いものがゆらっと剣矢の前に立った。

「きのうはハジをかかせてくれたな」。ヒョロネギだった。ヒョロネギはドスをきかせよう

としたが、かすれたソプラノみたいだった。

剣矢は相手の目を見つめたまま黙っていた。ヒョロネギは長い腕で剣矢の胸ぐらをつかんで木に押しつけた。強い力だった。

「おまえ、カネ、持ってるか？」

「持ってねえ」

「持ってこい」

「いくらだ？」

「百円」

「百円？」

「せ、千円」

「いつ？ どこへ？」

「あした、五時。ここへ」

ヒョロネギはそう言うと、剣矢をつきはなし、ふらつくように去っていった。

次の日の五時、剣矢はクヌギ林に行った。千円は持って行かなかった。

剣矢は少年サッカーチームに入っている。動きは機敏で足は速い。ボールが来ると、自分一人でゴールをねらってしまうことが多い。体が小さいから相手の選手にぶつくとふっとばされる。それでもぶつかっていくからファールをとられ、相手に得点の機会を与えてしまう。「自分一人で試合やってんじゃねえよ」と仲間からしょっちゅう言われている。

そんな剣矢だから、(ヒョロネギなんか、一発ぶんなぐって、はなれ、ぶんなぐって、はなれ、とやって戦えば、くたびれてへたりこむはずだ。そしたら二、三発ぶんなぐって、さっさとたち去ろう)と決めて行った。

待ち合わせの場所には三人の少年がいて、こっちを見ていた。

「あのやろう、仲間を呼びやがって！ 卑怯者はゆるせねえ」

剣矢は足もとの土をすくってポケットに入れ、もう一つかみを右手に持った。三人におそわれたら、土だんごを相手の顔にたたきつけて、目つぶしにしてやるつもりだった。

剣矢は三人の前に立った。ヒョロネギは下を向いていた。

「おまえらん中の親分はだれだ！ デカ、おまえか？」

剣矢はごっつい体の少年を左手で指さした。少年はぎょろつとした目をしていた。

「親分？ 何のことだ？」

「おまえらん中の一番強えやつだよ。デカ、おまえが親分か？ おれと決闘しろ！」

「……決闘？……なに、それ？」

「こいつが」と剣矢はヒョロネギを指した。「カネ持って来いって言ったんだ。おれはそんな卑怯者は認めねえ。だから卑怯者の親分と決闘するんだ」

「ちょっと待て」とコロ丸が剣矢に向った。「そのちっちゃえ体でこいつと戦って、勝てると思うんか？」

「思わねえ。だから決闘は七月だ」

「二か月も先だぞ。なんで？」

「勝つ方法、考えるんだ」

「武器、使うんか？」

「そんなことするか！ 素手だ。七月十五日。おれの誕生日だ。朝八時。ひなた台公園の石垣下の草原だ」

剣矢はこぶしの中の土をデカの足元にたたきつけると、くるっと背を向けた。(ああ、助かった)と思った。ヒョロネギみたいに肩をいからせ、かっこよくポケットに手を入れた。「うえっ!」。ポケットの中の土は湿っていた。

剣矢がキャンプ場でそこまで話したとき、しばらくだれも声を出さなかった。

「そんなやつらから逃げたって、卑怯じゃないんだよ」

「おれは逃げるのはきらいです」

「相手はおまえの決闘の申しこみを受けたのか？」

「受けてません。でも受けます」

「行くな」

「おれ、言っちゃったもん。男の言葉に二言はねえもん」

生徒たちは吹き出したが、笑いきれなかった。

豪利がきいた。「きみはサッカーの脚で、相手を蹴るつもりなのか？」

「蹴りません。サッカー選手の脚は強いから、人を蹴ってはいけないって、コーチから言われています」

「剣矢は逃げるのは嫌いだ。力では勝てない。だが蹴るのはやらない。それでも戦うのか？」

「女子が名刺で割りばしを切ったのですから、合気道を習って力をぬいて戦えば、小さなおれでも、でっかいやつと戦えるんじゃないでしょうか？」

「ばか、そんなことは長い長い訓練の上でのことだ」と生徒たちがあきれた。

「さーてさて、どうしたもんずら？」と豪利がうなった。「教え子から助けを求められて、『おれは知らねえ』とは言えねえし……親は何と言ってるんだ、剣矢？」

「バカおやじにはバカ息子ができる、っておやじは言って、バカはバカらしくやり通せ、っておふくろは言ってます。けがは男の子のくんしょうだって」

「あの母ちゃんの言いそうなことだ……」

「でも、先生、剣矢は良いものや他人の長所を感じとる力が優れています。剣矢は合気道の中に、自分にとって大事なものを、直感的に感じているのだと思います。剣矢が合気道を学ぶのは興味があります」とキララ子は言った。「ではこれでリーダーシップを学ぶキャンプを終わります。高校生のみなさん、中三生のためにご指導ありがとうございました。わたしたちは学んだことを確認しながら、少し歩いて帰ります」。

ホッホが豪利のところへ駆けていって、「お母さんに電話しました」と報告した。

「お母さんの反応はどうだった？」

「あの人、すぐに泣くんです。ぼくの元気な声をきいて、涙声になってしまいました」

「おお、そうか。お母さん、安心したんだな。よかった、よかった」

ツッパリくんが立ち上がった。「ゴリ先生、自分はこれで帰ります」

ツッパリくんは生徒たちに言った。「おいらはアメリカの若者の家へ行く。ヤツの家は大平原のど真ん中であって、周りに家がねえんだってさ。ヤツの家で過ごしてから、ヤツが見つけてくれた古いハーレイダヴィッドソンに乗って、大平原を突っ走ってボストンまで行くつもりだ。どんな出会いが待ってるか楽しみだ。おまえらとはもう会う機会はないが、出会いをだいじにしる。さらばだ」

ツッパリくんはさっときびすをかえした。生徒たちはキャンプ場の出口まで見送ろうとしたが、リサがキララ子の背中を押しているのを見て、歩みをとめた。

ツッパリくんがオートバイにまたがり、別れの手をあげて振り返ると、キララ子が近づいていた。ツッパリくんはオートバイを降り、キララ子を待った。二人はほんのひととき向きあった。ツッパリくんは土手に咲いている黄色い花を一本摘んでキララ子にわたした。キララ子はそれを花束にさした。

ハーレイダヴィッドソンが轟音を立てて去っていった。その音が山道に吸いこまれるまでキララ子は立っていた。豪利はキララ子を待った。

「先生、わたし……もう男ことばをやめます」

「おお、そうか。透き通った目に合った言葉を育てるのだな」

ケンカに勝ちたい

中三生たちは道志川の川幅の広い所で休憩をとり、リーダーシップのあり方について確認し合った。そのあと、みんなで向こう岸へ石投げをしたとき、ホッホの石が、横にいた生徒の方へ飛んできた。生徒たちが驚いてホッホに石を投げさせると、ホッホは腕の振り方も、石の放し方もできていなかった。

「おまえ、遊んでこなかったんだ。おれが投げ方教えてやる」と剣矢が立ち上がった。

剣矢はホッホに根気よく投げ方を教えた。ホッホは投げたい方向へ石をなんとか投げられるようになると、「ぼくも剣矢くんといっしょに合氣道を学びたいです」と言った。

数日後、ツッパリくん連れられて、剣矢とホッホが合氣道の道場の吉野館長を訪ねた。

「この男が一木剣矢です。もう一人連れてきました」

館長先生はにこにこしておだやかな人だった。「剣矢くんのごことは宮坂豪利先生から聞いています。きみは決闘に勝つために合氣道を習いたいのですね？」

「はい。そんなのダメですか？」

「動機はなんでもけっこうです」

館長はツッパリくんにきいた。「剣矢くんはサッカー選手の脚は相手に危険だから、ケン

カには使わないと決めているそうですね」

「はい。こいつはこいつなりの生き方の原則を持っているのです」

「ほう、どんなですか？」

「自分は若いから、電車やバスにはすわらない、とかです」とツッパリくんがこたえた。

「すいていてもですか？ どうしてですか？」と館長先生が剣矢にきいた。

「中途半端な年寄りや女の人に来て、席を譲ろうかどうしようかって悩むよりも、座らなくて決めておく方がぼくは楽だからです」

あははは、と館長は笑って、「わたしも中途半端な年寄りですかね？ 剣矢くん、きみは逃げるのがきらいだそうですが、きみにとって、逃げるとはどういうことを言うのですか？」

「相手に背中を見せることです」

「なるほど」。吉野館長は周りを見まわして、「技をやってみせるように」と指示した。若いお兄さんとお姉さんが前に出て、向かい合った。

「今からお兄さんがお姉さんにおそいかかります。剣矢くんはお姉さんが背中を見せて逃げるかどうかを見てください」

大きな男の先生が小柄な女の先生に向かって腕を振り下ろした。女の先生はずっと動く男の先生をきれいに前方へ投げ飛ばした。男の先生はくるりと一回転して立ち上がると、振り向いてストレートパンチをくりだして女の先生を襲った。女の先生はまた少し動いただけで、男の先生を投げとばした。

剣矢には優雅な踊りのように見えた。動から静へ、静から動への変化がきれいだった。

「どう見えましたか？ お姉さんは背中を見せて逃げていましたか？」

「いいえ、投げたあと、すぐに次の攻撃に備えて、相手と向かいあっていました」

「ほう。そこまで見えましたか」

「あの先生みたいに動けば、ぼくは決闘に勝つことができますか？」

館長先生は楽しそうに笑った。「あのよう動くことができれば勝てますね。それには心を静め、相手の気を尊重することです」

（心を静める？ 気？ 何のこと？）と剣矢は思ったが、目の前で演じられた動きの美しさと、「合気道には人間にとっての真実がある」と言っていたツッパリくんの言葉に導かれて入会した。

ホッホは「ぼくは運動神経が鈍いんですが」とおずおずと言うと、館長先生は「まじめに稽古をすれば、だれでも上達します」とにこにこした。

二人は子どもクラスに入った。稽古はいつも受け身から始まった。くるりくるりと前へ転がる受け身、走って行って前方へ跳びこみ、回転して立ち上がる受身などだ。サッカーで転ぶことになれている剣矢の上達は速かったが、ホッホは前へ転がることができなかった。そんなホッホを先生たちは根気よく指導した。

立っているときの姿が安定しているかどうかのテストが毎回あった。剣矢は押されるとすぐにぐらついたが、ホッホは剣矢よりぐらつかなかった。

「なんでおまえみたいなへなちょこができて、おれができねえんだよ」

指導の女の島田先生が笑った。「剣矢くんは力をぬいたつもりでも、押されると、動くまいと思って体に力を入れてしまうから動くのよ。江川くんは素直で、力をぬくことができるから動かないの。とてもいいわ」

ホッホは耳まで赤くなった。運動でほめられたのは初めてだった。

投げ技も毎回学んだ。初心者が黒帯の先生たちを投げ飛ばすことなどできないが、技に「氣」が入っているときには、先生たちは投げられてくれた。投げられてくれないときには、剣矢は「力をぬいて」と言われ、ホッホは「氣を出して」と言われた。

剣矢が道場に入って一ヶ月ほどしたとき、ツッパリくんが剣矢の稽古を見にやってきた。ツッパリくんは豪利から「剣矢がいらいらしている。決闘のことを気にしているのだ。稽古の様子を見に行ってくれ」と頼まれたのだ。

剣矢の稽古を見ていたツッパリくんが「力んでやがる」とつぶやいて、吉野館長に頼んだ。「剣矢は勝てない相手を倒そうと思ってあせっています。むりだってことを教えてやってください。ただ、剣矢は言葉で言われても納得しません。あいつが納得できるようにやってください」

「宮坂先生は決闘のことを何と思っているのですか？」

「剣矢には好きなようにやらせたほうがいい、と言ってます。ただ決闘の相手がどういうやつらかわかりませんから、万一に備えて自分が決闘に立ち会います」

「それならわたしたちも安心です。では、こちらも少し荒療治をやってみましょう」

館長は島田先生に、あまり手かげんしないで剣矢の相手をするようにと命じた。

最初に剣矢が島田先生を攻撃することになって、こぶしを突き出して突進した。剣矢は体がふわりと浮いたと思ったら畳の上に転がされていた。次に島田先生が剣矢に打ちかかった。剣矢はその腕をつかんで投げようとしたが、この小柄な女の先生はそのまま動かなかった。剣矢がもう一度投げようと力んだ瞬間、剣矢はコマのように回って横たわっていた。

剣矢はさっと立ち上がると島田先生に一礼して、道場のすみに行き正座し、道場で教わっている呼吸法をやった。目をつぶって、息をゆっくりすい、ゆっくりはいた。くりかえしていくうちに気持ちが落ち着いてきた。目を開けると、小学生から中学生までが楽しそうに稽古していた。(おれ、楽しく稽古してねえ。けんか腰でやってる)

島田先生がやってきて、「だいじょうぶ？」ときいた。

「だいじょうぶです」。剣矢は大きな声でこたえた。「力ではだめなことがわかりました。おれには静かな心ありません」

島田先生は剣矢の言葉を館長に伝えた。

「ほう、理解の仕方がいいですね」。館長はツッパリくんに言った。「このあとどうするかは、きみが剣矢くんに問いかけてください。宮坂先生の教育方針があるでしょうから」

ツッパリくんが剣矢を呼んだ。「おまえはほんとうに決闘をするのか？」

「します」

「どうやって戦うつもりだ？」

剣矢は館長に向かってきっぱりと言った。「攻撃の受け方だけにしぼって学びたいです」

館長は島田先生と男の清水先生に命じた。「間合いをとること、心を静めること、相手の氣を尊重することを指導してください。投げ技を教える必要はありません」

すぐに清水先生の指導が始まった。「間合いをとる、ということがわかるかな？」

「よくわかりません」

「相手が一步踏みこまないと、自分に届かない距離のことだ」

立っている清水先生に対して、教えられたように剣矢が間合いをとった。

「では、ぼくの肩をつかまえにきてごらん」

剣矢が先生の肩をつかまえにいった。先生がずっと動いて、剣矢は肩にさわることもしなかった。

次は清水先生の番で、剣矢が間合いをとった。先生の姿には攻撃をする雰囲気はなかったが、剣矢がアッと思ったときには肩をつかまれていた。

「もう一回やってみよう」と、今度は先生が攻撃の姿勢をとった。剣矢が身がまえると先生が笑いだした。

「そんなにこわい顔でにらんではいけない。にらむということは、力が入って、体がかたくなっているということだから、相手の動きに対応できない。力をぬいて、心を静め、おだやかな気持ちで相手を見るようにしてごらん」

先生がこぶしを突き出して攻撃をしてきた。剣矢が後ろに大きく跳んだ。

「そんなに大きく跳んだら、体に力が入って次の動きが鈍くなり、相手に踏みこまれてしまう。こぶしに打たれないでいどに体を開き、相手の氣を尊重して、『どうぞ』という気持ちで、相手に道をゆずってやるといいんだ」

稽古の帰り道で、剣矢がホッホに言った。「氣って、<やる氣がある>、の氣だろう？ おれ、いつだってやる氣を出してるよ。だけど力をぬけて言われる。氣を出すことと力をぬくことって、どうやれば両立できるのかなあ。心を静めるってことも、おれの一番できないことなんだ」

「剣矢くんは水曜日の放課後、薬師池公園で一人稽古をしているのでしょうか？ ぼくでもよかったですら、お相手します。今日、学んだこと、練習しましょうよ」

「おまえが？ なさけないおまえが、おれの相手をする気？」

決闘日までの水曜日、二人は薬師池公園の林の中で練習した。ホッホが攻撃し、剣矢が受けた。逃げるのがきらいな剣矢は後ろを向かないでさがるから、一回目の攻撃はよけることができても、続けて攻撃されると、ホッホにつかまえられてしまった。

「今みたいな攻撃は、どうやってよければいいのかなあ？」

ホッホくんが遠慮がちに言った。「剣矢くんはぼくが攻撃のかまえをとると、ぼくが何もしないうちに動き始めるから、ドタバタしていて、次の動きが見えてしまうんです」

「そうか」と剣矢は思って、次に心を静めたつもりになってやってみたが、やはりつかまえられてしまった。

「よけ方がわからねえなあ」

「よける、って言葉、逃げる、って言葉と同じじゃないでしょうか？」

「よけるが、逃げると同じ？……どういうこと？」

「逃げるは、剣矢くんのきれいなマイナスの心ですよ。よけるも、マイナスの心じゃないでしょうか？ 先生たちは、攻撃してくる相手の気持ちを尊重して、『どうぞ』と、道をゆずる気持ちでやるんだって言いました。それは余裕のあるプラスの心ですよ？」

「そうか……なんか、わかったような気がする」

剣矢は立ち上がって、相手が攻撃してくる姿を想像して、「どうぞ」「お先にどうぞ」と言いながら、見えない相手に腕を差しのべて道をゆずった。

「ほんとうだ。気持ちにゆとりができる」

剣矢はまじまじとホッホを見つめた。「おまえ、そういうことがわかるんだ。おれ、おまえのこと、生きていく知恵もない、へなちょこ坊やだと思ってた」

二人は向き合って間合いをとった。ホッホが跳びかかり、剣矢が軽くステップを踏んで、「どうぞ」「お先にどうぞ」と声を出して道をゆずった。次にホッホはゆるゆると小走りに近づいて行って、剣矢をつかまえた。

「なんだよ！ ゆっくり攻撃なんてすんなよ。跳びかかってこいよ」

「あのう、決闘やるのに、相手に攻撃のしかたの注文をつけていいんですか？」

「ああっ、そうだよね！」と剣矢は若草のじゅうたんの上にひっくりかえって笑った。

「そうやって草の上に寝るって、どんな感じですか？」

「おまえ、草の上に寝転がったことねえの？ おまえ、裸足になったこともねえんだ……じゃあ靴ぬいで、靴下ぬいで、横になってみな。いい気持ちだよ」

ホッホは靴ぬいで、靴下ぬいで、裸足になって、草の上に寝転んだ。

「草のおいがするだろ。光の中で葉っぱがゆれている……さわやかだなあ」

「さわやか……ああ、さわやか、ってこういう感じを言うんだ……空が青い……ツツパリくに抱きしめられたときも、道志川の空が青かったなあ」

「あのとき、おまえ、泣いたよね。おれ、ひでえことやったもんね」

「そうじゃないんです。あのとき、ぼくは空が青いことを初めて知ったような気がしたんです。ぼくはものを見てこなかった、これからはものをしっかり見よう、って思ったら、何かが始まるように思えて、涙が出たんです」

「ふーん、何かが始まったの？」

「扉が開いて光がさしこんできました。目がくらむほどです」

「よくしゃべるようになったもんな。おまえ、友だちいないんだって？」

「人がこわかったんです。そんなんじゃ、だれも相手にしてくれません。テストでいい点とったときだけ、みんなは幽霊を見るみたいにぼくを見ます。だけどそれっきりです。だれの

目にもぼくって人間が存在していなかったんです。でもチーチーに入ったら、ホッホ、ホッホってみんなが呼んでくれて、ぼくは存在しているんだ、って思えたんです」

「あっ、そうか！　それでゴリ先生が、ホッホって呼び方をやめさせようとしたとき、おまえ、ホッホがいいって言ったのか」

「ホッホッホって笑うな、って剣矢くんにやっつけられて、その通りだと思いました。それにホッホって、いい音ですしね」

「へんなやつ……そーかあ、おれも成長しなきゃなあ。心を静めるって、おれの課題だな」

決闘

ひなた台公園の林の中に小さな草地がある。周りは土手で、その一辺は石垣である。剣矢、デップリン、ホッホが草地で緊張して待ち、ツッパリくんは土手に寝転んでいた。

「来ました！　三人です。やつらです」

ツッパリくんはむっくり起き上がった。「剣矢は真ん中に立て。二人は土手にさがれ。挑戦的な態度はとるな」

林の中から三人の少年が現れた。少年たちは金髪のツッパリくんを見て、顔を寄せあった。「こんにちは！　応援の人はこちらです！」。ホッホがにこにこ呼びかけた。

「いっしょに応援しましょう！」。デップリンが腕を大きく振った。

ちょっとの間のあと、デカが大またに近づいて、ツッパリくんの顔を見ないで通り越し、剣矢の前に立った。

「決闘に来たんだな？」。ツッパリくんが後ろから声をかけた。

「はい」。デカが振り向いてツッパリくんを見た。デカのギョロ目がぎぎーっと音をたてるくらい大きくなった。

ツッパリくんがにやっと笑った。「おいらは枝だ。大学生をやっている。この勝負、おいらが審判をつとめる。おたがいに向き合って名をなのれ」

「中三、一木剣矢」

デカが我に返ったように剣矢に向きなおった。「中三、青木清」。低音の分厚い声だった。

「じゃあ、決闘とやらを見せてもらおうおう……さあ、やってくれ」

ツッパリくんはのんびりした声に、身構えていた剣矢とデカはきよとんとした。

「へい、へーい、はじめろー、はじめろー」

二人がとまどった顔になってツッパリくんを見た。

「へーい、剣矢、おまえから動いた方がいいんじゃないか」

「動けません。青木が攻撃してこなければ、おれは動けません」

「それはおかしい。あんたが勝手に決闘を決めたんだ。あんたがしかけてこい」

だが剣矢は動かなかった。ツッパリくんが土手にいるコロ丸とヒョロナガを呼んだ。

「おまえらはなんで決闘を受けたんだ？」

「おれです！ おれに原因があります！」

「おまえか？ かつあげしようとしたのは？」

「はい！ もうしわけありません！」。ヒヨロナガが地面にくつつくくらい体を曲げた。

あの日、ヒヨロナガは剣矢に恥をかかされた腹いせに、「カネを持ってこい」と、思ってもいなかったことを口走ってしまったのだった。その次の日、ヒヨロナガはクヌギ林でふるえながら剣矢を待った。そこへ仲間の二人がやってきた。ヒヨロナガはかつあげを白状した。

「青木がおれの責任をとって、決闘を受けてくれたんです」

「ぼくたち、小さいときからいっしょに育ってきたものですから」

「そうか、剣矢、どうする？ これでよしとして、おしまいにしようか？」

剣矢が中途半端な顔になった。

「そうさ、このまま別れたんじゃあ、サマにならねえ。けじめをつけなきゃしょうがねえ」

ツッパリくんはきりっとした声になった。「よし、ルールを決めて戦う」

ツッパリくんは、何か言いたそうにしているコロ丸とヒヨロナガを土手にもどし、デカに、剣矢は逃げることをしないこと、サッカーをやっているから、その脚で人を蹴らないと決めていること、を話した。

「禁じ手は、青木はなぐること、剣矢は蹴ることだ。勝負は、青木が剣矢をつかまえるか、剣矢が背中を見せて逃げるかしたら、青木の勝ち。剣矢は青木に捕まえられなければ勝ちとする。試合時間は三分」

剣矢とデカが向かいあった。間合いをとった。

「はじめ！」。ツッパリくんの凜とした声が林の中に響いた。

デカが低くほえ、両腕を高く上げ、ゆうぜんと近づき、剣矢をつかもうと腕を振り下ろした。剣矢は横へ一步、スッと踏み出した。デカは目標を失って、あれっ、という顔になった。

デカはもう一度、声を出して走り、腕を振り下ろした。空振りだった。振り向くと目の前に剣矢が立っていた。デカの顔から笑いが消えた。デカはほえるのをやめ、勢いよく走って腕をのぼした。わずかなところで剣矢によけられた。

デカが本気になった。とつぜん、「メーン」と叫んで鋭く踏みこみ、竹刀で打つように両腕を振り下ろした。剣矢があやうく身をかわずと、デカはまた「メーン」と叫んで跳びこんできた。剣矢は瞬間的にその場に四つんばいになった。デカは剣矢の体につまずいて転んだ。

ツッパリくんが声をかけた。「青木、おまえ、剣道の段、持ってるな？」

「はい。持ってます」

「剣矢、勝てねえよ。今みたいに連続攻撃されたら、おまえにはさばけねえ」

「でも、やります」

デカと剣矢は中央にもどって向かい合った。デカが刀を持つようにして正眼のかまえをとった。デカは剣矢が間合いをとるのを待って、「メーン」と打ちこんだ。剣矢は大きく跳んで、バランスをくずしながらもよけた。剣矢の気持ちに余裕ができた。

デカはまた剣矢が間合いをとるのを待って、正眼のかまえから打ちこんだ。剣矢がずっと横に動いて、デカに道をあけてやった。

デカは攻撃方法を変えた。じりっ、じりっ、と前へ進み、剣矢を石垣まで追いつめた。剣矢はもう後ろにさがることはできない。左側には木があり、右に動けばそこに打ちこまれ、つかまえられてしまう。

デカがぐるりと広い背中を見せ、大またで中央に戻っていった。剣矢は走ってデカの前に立った。

剣矢はデカに導かれるように、間合いをとるのが速くなり、デカの打ちこみも鋭くなった。

「清ちゃん、今だ！ もっと攻撃しろ！ 休むな！」

「清、まじめにやれ！」

「まじめにやってるよ、こいつ！」と剣矢がどなった。

それが一瞬のすきになった。デカが「メーン！」という気合とともに跳びこんで、剣矢の肩をつかみ、地面に押し倒した。デカが上から見つめた。

「あんた、きれいな動きだった。いい稽古になった」

デカは剣矢を引き起こすと、ツッパリくんに向かって深々と頭を下げた。コロ丸とヒヨロナガが駆けよってきた。

「清ちゃん、もしかして、この人……」

「うん、枝のお兄ちゃんだよ」

「いやーっ！ いやーっ！」と二人は飛び上がって叫んだ。「枝のお兄ちゃんだ！ 枝のお兄ちゃんに、ついに会えた！」

「おまえら、あのときのマンガ三兄弟だな」

「はい！ おれたち、あのときのマンガ三兄弟です！ あのときは助けてくださって、ありがとうございました！」

六年前、小三の三人がこの石垣に向かってサッカーボールを蹴っていたとき、一人の中学生がやってきて、三人からボールを取り上げると、自分の前に三つのボールを置き、体の大きなデカをキーパーにして立たせ、ボールを次々に蹴りこんでいった。

中学生はボールがそれで石垣ではね返ると、コロ丸とヒヨロナガにひろいに行かせ、持ってくるのが遅いと言って、どなったり突いたりした。蹴ったボールがデカにとられると腹をたて、二メートルまでデカに近づいて蹴りこんだ。小三のデカは中学生が蹴る強いボールを体に当てながら耐えた。コロ丸とヒヨロナガが「やめて！ やめてください！」と泣いた。

そこへ中二のツッパリくんが通りかかり、中学生を突き飛ばし、取っ組みあいになった。ツッパリくんは強かった。相手が戦闘意欲を失うまでやっつけ、土手下の草むらに突き落とした。

そのあとツッパリくんは、恐怖でひきつっている少年たちの心をほぐすために、サッカーボールで遊んでやった。ツッパリくんは三人を「マンガ三兄弟」と呼んでかわいがり、少年たちは「枝のお兄ちゃん」と言ってなついた。

「ぼくたち、枝のお兄ちゃんに会いたくて、ときどきここへやってきたんです」

「そうか、おいらも剣矢が話す三人の様子と、すいながら片づけられていたという話から、不良少年三人とは、マンガ三兄弟だろうと想像したよ」

コロ丸はツッパリくんの周りを跳ねながらパンチをくり出し、ヒョロナガはポケットに両手をつっこんで、ゆれながら泣いた。デカは大きな目から涙を流した。

「青木くん！」とデップリンが呼びかけた。デカがぬれた目でデップリンを見た。

「ぼくは保科です。子ども剣道クラブで青木くんといっしょでした。ぼくは小四で剣道をやめてしまいましたが、青木くんにはいつも負けてばかりで、泣いていた保科です」

剣矢たち三人は、チーチー塾で待っている生徒たちのところへ戻り、決闘の様子とマンガ三兄弟の姿を、デップリンとホッホがおもしろおかしく語った。

豪利が剣矢にきいた。「剣矢はこの決闘で何を学んだのかな？」

剣矢が立ち上がって素直な顔で挨拶をした「ぼくは二つのことを学びました。一つはみんなと協力する大切さです。ぼくは自分勝手なヤツだけど、今度の決闘の練習で、相手の気持ちを尊重すれば、ものごとがなめらかにいくってことがわかりました。ぼくは勝手をなおそうという気持ちになってます」

「もう一つ学んだことは何なの？」

「人間の長所に目を向けるってことです。これはホッホのおかげでわかりました」

生徒たちはへえーっという顔になり、ホッホはきょとんとした。

「ぼくにひどいことをやられた人が、頼みもしないのに決闘の練習相手になってくれました。ぼくは驚いて、感謝の気持ちでホッホを見たら、ホッホのいいところが見えてきました。先生やキララ子はぼくが人の長所を見つけるのがうまいって言うてくれました。ぼくは人に言われて初めて気が付きました。ぼくはそれを自分の長所として、人の長所に目が行く人になります」

中三生の夏期講習

中三生の二週間にわたる夏期講習の初日、豪利は生徒たちに渡してあったチーチー塾手作りの英語と数学の問題集について感想をきいた。

「中一、中二の復習が一人でもできるようになっていて楽しそうです」

「ツッパリくんが『学ぶ生徒への優しさがある』ってヒューモクんに言って、そこからできたのがこの数学の問題集なのですか？」

「そうだよ。ツッパリの言葉を受けて、ヒューモクンが張り切って作ってくれたのだ」

「チーチーでは入試の面倒は見ないってことですけど、先輩たちは志望校に合格してますよね？」

「入試の面倒を見ないと言うわけではないが、手取り足取り、ひたすら教えこむってやり方はしないってことだ」

「それはふだんの授業から想像できますけど、もう少し詳しく説明してください」

「おお、そうか。じゃあ、志望校をもう決めている人はいるのかい？」

「ぼくとキララ子は都立町田原高校です。余裕で合格です」

「わたしは獣医大の付属高校です。たぶんだいじょうぶです」

「おれ、サッカーやりたいから多摩丘陵高校を受ける。入試が今あったら不合格だけど、ゴリ先生はおれのこと、『伸びる』って言うてるから、数学さえできるようになれば合格すると思う。象兄ちゃまも、おれ、伸びると思うよね？」

「伸びます」と象兄ちゃまがいい顔でこたえた。

「それは楽観しすぎじゃないですか？」とデップリンが心配顔で言った。「剣矢、あなたが多摩丘陵高校に合格するには、今から数学で五十点以上は上げなければなりません。数学嫌いで三十点くらいしかとれないあなたが、五十点以上も上がるとは思えません」

「なんだよーっ！ おまえはそうやってすぐ人を弱気にさせるんだ」

「まあ待て、剣矢。きみが五十点上げて八十点になるのはそんなに難しくないぞ」

「おれ、数学苦手だよ。五十点なんて、てんで無理」

「きみは数学の基礎をしっかりと頭に入れてないだけだろう？ それでわからなくてあきらめてしまってるんだ。きみはセンスがいいし、理解力が高いんだ。基礎からやり直せば、五十点を上げるのは難しくない」

「本当？ おれ、やろう！ ほら、見ろ、デップリン、おまえはおれを弱気にさせたけど、ゴリ先生は一瞬でおれをやる気にさせたよ。その違いは何だ？」

「あーっ、痛い！……あー、目の当たりにしたこの違い。あー、ぼくの心配性、反省します」

「だいじょうぶだよ。デップリンはそうやって反省しながら、ふところの深い人物に向かって歩いていくんだ。きみの豊かな心は、いずれ自分を大きな山のような人物に育てるよ」

「ありがとうございます。おほめの言葉、この上なくうれしいです」

「先生は子どもが好きで、そうやって最初から子どもをほめることができたのですか？」

「いや、いや、いや、最初からじゃない。おれは子どもが好きかどうかなんて自分に問うこともなく塾を開いた。だけど子どもの成長に携わりたくて塾を開いたのは確かだから、子どもはほめてやれば伸びることがわかってからはほめられるようになったんだが、初めはマイナス面をなおしてやろうとする気持ちが前に出てしまって、叱ったことが多かったな」

「先生が怒ると怖い顔しました」とデップリンが言った。

「そうかな？ わたし、先生の叱った顔見たことないわ」とリサが言った。

「うん、小さい子たちには叱ってないと思う。見ていて面白かったし、伸びようとする力が強くて、引きこまれてしまったから、きみたちがチビの時は叱ってないはずだよ」

「そうよ、わたしたちが大きくなってからよ」

「うん、そうだと思う。初めのころは、大きい子たちに対して、ほめることがなかなか身に

つかなくて悩んでいた」

「そういうことで悩めるなんて、ゴリ先生、かっこいい！」と剣矢が喜んだ。

「いや、いや、いや、悩んだと言ったのはおおげさな言い方で、おれはそんなことで悩めるほど誠実な人間じゃない」

「でも悩んだんでしょう？」

「うん、まあな。そうしたとき、ある生徒のたった一言でおれは励まされ、生徒たちに対するおれの態度が決まった」

「どんな一言だったんですか？」

「夏の合宿で、中学生たちが鷹狩山でキャンプファイアの火を囲んでおしゃべりをしていた時、おれはたまたま耳にしたんだ。一人の中二生が『ゴリ先生は必ずおれたちの長所をほめてくれる』と言ったんだ」

豪利は朝の光を浴びている庭に目をやった。「庭にいろいろの花が咲いている。あの中で一番目立たない花はどれだろうか……そう、おれがあまり心を止めていなかった生徒がそれを言ったんだ。おれはその生徒にどんな言葉をかけてほめたかも覚えていなかった。おれは感動し、反省した。その時から、おれは生徒の長所に目をこらし、言葉に出してほめてやることに努力するようになった」

「ぼくは先生にほめてもらいたくてチーチーに来ているんです」とデップリンが言った。

「おお、そうだな。きみはその気持ちを書いた作文はすばらしかった。いつかその作文を披露しようかな……では高校の話に戻すぞ。オッチャンの志望高校はどこだい？」

「おれ、高校、どこでもいい」

「ほう、それはまた、どうして？」

「おれ、みんながなんで高校に行くのかわかんない」

「だめですよ」とデップリン大きな声を出した。「ちゃんと高校生になってください」

「なるけど、高校生になるって、なんかよくわかんない」

「そうか……おれもそうだったよ。おれは高校生のとき剣道ばかりやっていて、ほかのことは何も考えなかった。高三になって、みんなが大学のことを話し出したときに、なんで大学に行きたがるのかわからなかった」

「でもゴリ先生は早稲田大学を出ています」

「うん、ある人との出会いがあったからだ。その出会いがなければ早稲田には行かなかった」

「どんな人と出会ったのですか？」

「おれが高校に入ったときの生徒会長で、幅上さんといった。素朴な先輩で、おれはその雰囲気憧れまくっていたが、高一では生徒会長なんてえらい人と言葉を交わす機会はなかった。だが高三の秋にその先輩と駅でばったり出会って、先輩から名前呼びかけられたんだよ。えらく感激した。先輩の話によると、高一のおれが剣道の稽古で、指導教官から突き倒されたり、道場の板壁にたたきつけられたりしても、泣きながらかかっていく姿を見て、気骨のある生徒だと感心したんだって。だが教官はやりすぎだと思って、生徒会長として教

官に抗議したんだそうだ。そしたら教官が『しごきではない。打ちこんでくるときに力が入りすぎているから、軽く突き飛ばしているだけで、これは彼の希望だ。それに彼はおもしろい。枠にはまらない広い考え方をする生徒だ』と答えたので、おれのことを記憶したんだって。そして『早稲田に来なよ。やる気のある者には自由で勝手ができる校風だ。個性の強い学生が多い。変な学生もいるけど、変なっぷりが面白い』って言われて、それで『おれは早稲田に行く』って決めたんだ」

「人との出会ってことになるんですね」

「うん、言葉との出会ってことにもなるかな。だが良き出会いというものは、日々を一生けんめいに生きている者とか、何かを真面目に求めている者にしかやってこないよ。のんびんだらりんとしている者は、良き出会いがあっても気が付かない。おれの場合は剣道にひたむきだったことと、おれなりにものを考えていたことが、駅での偶然の出会いを良き出会いに昇華させたってことになるな」

「おれ、一生けんめいに考えたことない」とオッチャンがぼそりと言った。

豪利が、あっはっは、と笑った。「高校へ行く意味を考えていない人に、受験勉強は意味があるのかな？ おれはこの夏期講習を受験勉強対策にするつもりはないが、それでもみんなに同じ問題集で勉強させようとしてるんだよな……そんなのはやめようか？ 理王はまだ中二、ホッホは系列の高校に進学する。デップリン、キララ子、リサは合格だろうし、剣矢はぐんと伸びるはずだから、この講習はそれぞれがテーマを見つけて、自分の将来の力になるような学び方ってものを探ってみても面白いかもしれない」

「賛成！ おれ、数学だけやってみたい！」

「おお、いいね。剣矢は隠れている力がある。それを自分で引っ張りだせ。小説やマンガを読みたい者がいたら、好きなだけ読んでもいいんじゃないかな」

「だったらわたしは地理の勉強だけします。わたし、学校の授業で先生から『ヤマタイコクの女王はだれか』ってきかれて、『エリザベス女王』って答えたらみんなに笑われました。だって先生がカタカナでヤマタイコクって書いたから、外国の人だって思ったんです」

「それって歴史です。リサさんはそんなこともわからないのですか？」とホッホがちよっと馬鹿にしたように笑った。デップリンは「リサさんは知らなすぎです。中三生として恥ずかしいです」と本気でほほをふくらました。

理王がきつとなった。「二人の言い方、違うんじゃないのか？ ホッホさ、ゴリ先生は怒ることはあっても、生徒を馬鹿にすることはないよ。おまえはそういう塾に入ったんだ。それを学べよ。それとデップリンみたいな言い方されたら、たいていの人は落ちこんで、発奮なんてしないよ」

「わたしはまたまたデップリンを許せなくなった」。キララ子が目を鋭くしてデップリンをにらんだ。「リサは『リーダーやるんなら合宿に行きたくない』って震えたんだよ。それをツッパリくんの言葉をヒントに高校生たちが<リーダーシップを学ぶキャンプ>を考え出して、リサは前向きになったんじゃないか。それを今のあんたの言葉は台無しにする

ものじゃないか。ツッパリくんは『リサの目の優しさは、リサがほかの場所に動いた後にも、元の所にその優しさが漂っている』って言ったんだよ。あんたはツッパリくんに死ぬほど憧れているんだろう？ だけどあんたはツッパリくんの人間性を表す言葉を持ってないんじゃないのか？」

「持っています、持ってますとも！ ツッパリくんは、深く鋭い、かっこいい人です」

「深く鋭い、かっこいい……そういう言葉をリサのために創り出して励ましてやってよ」

「あー、ぼくは理王とキララ子の言葉に深く反省します。ぼくは決めました。ぼくはみなさんのプラスの面に目を向けるようにするために、この夏期講習中は口にガムテープを張って、マイナスの発言をしないように絶対がんばります。リサさんを表す素敵な言葉を創り出します」

剣矢がケタケタっと笑った。「デップリンさあ、おまえ、おれがチーチーに入ったとき、『この塾ではゼットイとか、ガンバレ、ガンバルとかって言葉は使わないんだ』って、おれに注意したんだよ。それなのに今、『ゼットイにガンバル』って言いやがった」

「はい、言いました。それならぼくは自分の言葉に責任をもって、口にガムテープを貼りつけて、マイナスの言葉を言えないように、ゼットイにガンバリます。リサさんをほめる言葉を見つけ出します」

ホッホは緊張した顔で言った。「リサさん、ごめんなさい。ぼくはマイナスに思うことが多いです。ぼくはこの夏期講習中は教科の勉強はしないで、みなさんのやることを観たり聴いたりして、それをプラスに評価する言葉を考え続けます」

「なんだか面白いことになったなあ」と豪利が笑った。「おしゃべり屋のデップリンが黙り続けたら、何かを発見するかもしれないぞ。やってみろ。ただしガムテープは明日と明後日の二日間だけにしろ。肌にも悪い。それからホッホ、人をしらっと見下すのはきみには合わないぞ。それに知識と知恵は違うんだ。知恵のある人になれ」

「知識と知恵はどう違うんですか？」とデップリンがきいた。

「ホッホ、どう違うのかな？」

ホッホはしばらく考えた。「知識はぼくがチーチーに入る前に必死で積み上げてきたテストの点数みたいなことで、知恵はチーチーに入ってから学んでいる生き方のことです」

「そうだな。積み上げた知識で、いい学校とやらに入れたとしても、それが役に立つのはごく最初のうちだけだ。いったん社会に出たら問われるのは知識じゃない、知恵だ。つまり学んできた知識を生かしていく力だ。それができない者は人として魅力を蓄えていないから、人が共感してくれず、一人ぼっちの生涯を送ることになる。今の世の中の変化はおそろしく速い。おれが子どもの頃にはテレビなんてなかった。それが洗濯機、冷蔵庫、エアコン、ありとあらゆる便利なもの、そして携帯電話だ。おれの子どものおやつはナスの漬物だった。学校から帰ってくると漬物桶を開けて、ナスをぎゅっとしぼって丸かじりさ。これがきれいな紫色に染まっていて、うまかった。それが今じゃ形、味、色どり豊かなあまーい菓子だろ。江戸、明治、大正、昭和の初めまでのゆっくりとした社会の変化が、猛烈なスピード

で変わっている。この先どうなるのかな？ 自分の責任外で起こったことでも我が身に及ぶことはある。憧れて入った会社がつぶれてしまうなんてことはざらにある。だがそういうとき、自分の考え方、生き方を持っている者は、どんなことがあっても自分の力で生き方を見つけようとする。それにそういう人には良い友だちがいる。相談すれば知恵を貸してくれる人がある。人が喜んで助けてくれるような人間になってほしいな」

「先生も困っていた時に助けてくれた人がいたのですか？」

「いなかった。というか、おれは薄っぺらな小生意気な若僧で、そういう人を求めなかったし、アドバイスされても受けつけなかったと思う。これはだめね。人のアドバイスに耳を傾けられるような柔軟な心を持ってない者には良き出会いはない。幸いおれの場合は三十歳の半ば、会社勤めをしているときに、とてつもなく面白い男に出会ったんだ」

「昨年の夏合宿で話をしてくださった牛山さんのことですか？」とキララ子がきいた。

「おお、そうそう、あの牛山美信くんだよ。やあ、おもしろい男だ。彼は松本市出身で、アメリカの大学を卒業すると、たくさん国々を、とびこみのアルバイトで日銭をかせぎながら歩き回った男でな、ものの考え方がとてつもなくでかいんだ。二人でよく話をした。彼はおれに『あんたは上等な人せ。そういう人はいつまでも人に使われてなんで、さっさと独立して、世のためになることをしましょ』って安曇野弁で言ってくれたんだ。おれはその会社の仕事が好きだったんだが、牛山くんの言葉で、自分を見つめるようになって、今こうして子ども相手の仕事に行きついたってわけだ」

「先生は大学で演劇をやったそうですが、それも出会いだったのですか？」

豪利はまた、あっはっは、と笑った。「おれは大学で剣道をやるつもりだったんだ。それがさ、新入生勧誘の机がずらっと並んでいるところで、えらいきれいなお姉さんに誘われてな、田舎から出てきた山猿の子はボーっとしちまって、言われるままに入部したのが、「早稲田大学劇団こだま」という学生劇団だったんだ。演劇をやりたいなんてまったく思っていなかったのにな」

「剣道はきっぱりあきらめたのですか？」

「いや、あきらめられなくてうじうじしてた。一つは早稲田で文科系のサークルなんていったら、へんてこりんなやつが多くって、サルトルだ、ニーチェだ、ドストエフスキーだ、小林秀雄だとか言って、田舎で竹刀を振り回していた山猿の子には聴いたこともない名前を言うやつらがいて、やつらの難解な言葉、キザな言葉におれは圧倒されて、演劇部に入ったことを後悔した。それで剣道部の道場の前に行って竹刀の触れ合う音を聴いて、やるせなくなったり、全国から集まってきている剣道の俊才たちの激しい稽古姿を見て、「おれだって厳しい稽古を乗り越えてきたんだぞ」なんて思いながら、「おれはレギュラーは無理かな」とうじうじしながら、演劇部の稽古場にも毎日顔を出していたんだ。そうして上級生たちが芝居の稽古に打ちこんでいる姿を見て、『何が面白いんだろう？』って思うようになって、自分がいまいな態度でいることにも気がついて、「演劇がどんなものなのかがわかるくらいまでやってみよう」って思ったんだ。そうしたら周りが違って見えてきた。今までキザな

奴らだった演劇部のやつらがおもしろい人間になった。おれの雰囲気もよくなったんだろう。入部して一か月ほどしたとき、上級生の演出家から、役者をやれって言われて、一年生として一人だけ、かなり大きな役を与えられ、早稲田の大隈講堂の舞台に立ち、スポットライトを浴びて、それ以来演劇にのめりこんでしまったってわけだ」

「早稲田には深く鋭い、かっこいい人がいたのですか？」とキララ子がきいた。

「ツッパリくんみたいな人のことか？ うん、いた。個性の強いやつ、哲学を語るやつ、何事か一生懸命なやつ、自由気ままに振る舞って何ごとかに出会おうと、その道を追いかけてさっさと中退していったやつ。おれはそういうやつらから刺激を受けまくって、背伸びして、小生意気な軽薄学生になった。演劇の場合は演出家、俳優というきらびやかな表方と、大道具、照明、衣装などの目立たない裏方とがあって、おれは派手な表方ばかりやった。縁の下の力持ちという、苦勞もあれば喜びもある裏方を知らないで学生時代を過ごしてしまった。だがこの裏方を知らない軽薄さと背伸びを、くそ真面目にやったことが、後のおれの人生に大きく意味を与えてくれることになったんだな」

「学生劇団で学んだことが、チーチーの劇で子どもを励まして成長させる指導法に結び付いたんですか？」

「いやいや、それがまったく違うんだ。おれの演劇観を変えたのは赤ちゃん理王との出会いだ。理王が一瞬で登場人物に変身するのを見たとき、おれの演劇への考え方と指導法が、<子どもから学ぶ>という方法に変わったんだ。理王、これ、初めて言うけど、本当だよ。話が長くなるから今日はここまでにする。ではホッホがリサを馬鹿にした言葉に戻る。ホッホの周りの人たちがああいう言葉を使うのか？ それでうっかり使ってしまったのかな？」

「ホッホ、下向いてないで言えよ！」と剣矢が迫った。「表現意欲のない奴だ」

「剣矢」と豪利がいさめた。「ホッホはきみの決闘の練習相手を申し出てくれたんだ。それこそ立派な表現じゃないか。それでだ、ホッホ、そのうっかりがいけない。うっかりであっても、マイナス言葉はマイナスの心を育てるぞ。『あいつはいいやつだ』と思えばその人の良いところを見つけようとする。逆に『いやな奴だ』と思えば、心はそいつの悪いところばかり見つけようとする。言葉が心を創るんだ。だから心の中からマイナスの言葉を追放しろ。この夏期講習中、きみは『人のやることを観察し、発言に耳を傾け、プラスに評価する言葉を考え続ける』と言ったが、それをやり通してみろ。何かを発見するかもしれない。それを期待していいほどに、ホッホは成長しているよ」

「さて、リサ」と豪利はリサの地図帳を手にしながらか言った。「リサは地図帳を開いたことがないみたいだな。リサ、ちょっと前に出てきてごらん」

豪利は黒板に大きな日本地図を張りつけた。「北海道、東京、九州はどこかな？……おお、そうそう。ではきみが住んでいる町田市はどこだ？……おお、いいね。じゃあきみのお婆ちゃんがいる福島県は？……おお、そうだ……ではこの講習が終わったあと合宿に行く大町市はどこだ？……わからないか。去年、一昨年、大町へはどうやって行ったんだ？」

「キララ子にくっついて行きました」とリサは顔を赤くした。

「女の子ってね、先生」とキララ子が快活に言った。「ついこのあいだまで、おままごとや着せかえ人形で遊んでいましたから、社会科ってびんどこない子が多いんです。わたしは歴史がぴんときません。だから、わたしは先生が作った<手作り日本の歴史>をやります。物語になっていて面白いです」

「おお、そうか、じゃあ、リサはキララ子の隣に座って、地図帳だけを見る夏期講習にしたらどうかな？ 地図帳には情報がいっぱいあって、おもしろいんだぞ。おれは質問がない限り手は貸さない。リサなら地図帳をていねいに見ることで、今まで関心のなかったことが見えてきて、面白くなるはずだ」

「おれだって、頭の中、ドラエモンばっかだった」とオッチャンはデップリンを見た。「おれ、チーチーに入ったとき、『ジャイアンて、チーチーの人だったんだ』ってびびったもん」

「そのオッチャンは何を学びたいんだ？」

「おれ、国語やりたい。おれ、テストで長文読解できない」

「長文読解なんか、本、いっぱい読めばいいんだ。それにチーチーにいれば国語は自然にできるようになる」

「先生、それちょっと不親切です」とリサが遠慮がちに言った。「ちゃんと答えてやって」

豪利がびっくりした。「リサちゃんにそんなこと言われるようじゃいけないねえ。そうか……では、『チーチーにいれば国語は自然にできるようになる』というおれの乱暴な言葉をきみたちはどう思う？」

「おれ、チーチーに入ってから、国語の点が上がったんだ！」と剣矢が自慢気な顔をした。

「どうしてなの？」とリサが真剣にきいた。

「あー、わかんない」

「チーチーでは何をやっても考えることが多いからかしら？」

「わたしもリサと同じです。今、話していること、食事作りキャンプでやったり見たり、感想を言ったりすること、みんなわたしたちの生き方につながっているから、国語力を高めていることになるのだと思います」

「そうだよ。おれ、ツッパリくんにも怒られたことで、ものの見方変わった。ホッホはツッパリくんにも助けられて、プラスに生きることを知った」

「おお、そう思うか。だが『テストで長文問題ができない』というオッチャンの言葉には、おれはちゃんと応じなければいけないなあ。考えて、明日、考えを言おう。これでそれぞれが夏期講習中に何を勉強するかが決まったな。午前中はおれが英語と社会科、午後は象兄ちやまが数学と理科だが、好きな勉強をやってもいいからな」

「理王はどうするんですか？」とデップリンがきいた。

「理王は自由」

ブラジル人生徒に日本語を教える

昼食が終わってトランプ遊びで騒いでいるとき、玄関にノックがあって、中二のアッキーが「こんにちはー！」と元気に飛びこんできた。

「えーっ、アッキー！」と生徒たちがびっくりした。「イギリスから帰って来たの？」

「あーっ、あーっ、デップリン、リサ、キララ子、みんないる！」

「あらっ、理王のおばちゃん！ どうしてここに？」

「リサちゃん、キララ子ちゃん、おひさしぶり！ 今日はブラジルから来ているお友だちを連れてきたの。こちらがサントスくん、中一、こちらがお母さんです」

おそろしく色白で、目のパッチリした少年とその母親が入ってきた。生徒たちが華やかに挨拶をすると、サントスくん親子もにこにここと笑って日本語で挨拶を返した。

サントスくんは隣の町の中学一年生で、日本に住んで数年になるが、日本の文字が読めなくて学校の授業についていけない。父親は日系四世だが日本語は話せない。母親はブラジル人である。サントスくんはボランティアの先生から日本語指導を受けているが、やる気になれない。八月に父親が群馬県の工場に移るのでサントスくんも転校する。

「サントスくんの日本語の勉強のことで、ゴリ先生にヒントをもらいたくって、お連れしたのよ。ゴリ先生はアッキーくんの日本字を、短期間で読めるようにしたでしょ」

サントスくんはものおじせずにしゃべった。彼が理王と話すときの言葉は日本の子どもと区別がつかなかった。こんなにみごとに日本語を話す生徒が、字が読めなくて勉強についていけないということを豪利は不思議に思った。

サントスくんは理科のテストがいつもレイ点だと言うので、豪利が理科の教科書を開いて読ませてみると、漢字が一つも読めなかったし、読めるようになるうとする気持ちもなかった。

豪利はサントスくんが学んできた日本語教材を見せてもらった。それは「わたしは日本に住んでいます」「わたしは日本の東京都に住んでいます」といった具合に少しずつ単語を重ねていたり、「わたしはいま音楽をきいています」「わたしはいま字を書いています」と語句を変えていたりする教材だった。よくできてはいたが、そこには子どもがわくわくするようなイメージもストーリーもなかった。

「サントスくんはこの教材は向いていないということになるが、日本語はみごとに話せるのに、字がまったく読めるようになっていないということは、何か別の問題があるのではないのかな？」と豪利は生徒たちに言った。

「動物は好きかい？」と豪利が質問すると、サントスくんは「だい好き」とすぐにこたえた。

豪利は一冊の絵本を取り出した。サントスくんは表紙の絵を見て目を輝かせた。

「ぼく、ブラジルで子ヤギ飼ってたんだよ。お爺ちゃんがヤギいっぱい飼ってるんだ」

「かわいがったのかい？」

「うん、かわいがったよ。草の中でだっこして遊んだ」

「この絵本の題名……読めるかな？」

サントスくんは絵本の表紙の題名の字の中から、「き、の、や……の、ら、ら……ん」を真剣な顔で読んだ。

「おお、サントスくん、ひらがなが読めるじゃないか、いいぞ！ この最初の字はね、漢字で書かれた数字だよ」

「わかった！ やぎが三匹いるから『三びきの』、『や』があるから『三匹のやぎの』……あと、わかんない」

「がらがらどん。やぎの名前だ」

「三びきのやぎのがらがらどん！」

「サンちゃん！ 想像力がある！」と理王が喜び、生徒たちは声に出して感心してやった。

「サンちゃん。きみは絵から想像して漢字を読めてしまったんだ。きみは成長するぞ！」

サントスくんはびっくりした表情で母親に顔を向けて、「ぼく、初めてほめられた！」と日本語で言い、そのあとはポルトガル語で早口にしゃべった。母親の透きとおった白い顔がみるみる赤くなり、目がくりくりになって、高いきれいな音がサントスくんに戻ってきた。

「サンちゃんは優しいんだなあ……ところできみの日本語の先生はどんな人なんだい？」

サントスくんが不服そうになった。「ぼくのこと、ダメってばっか言ってた」

「ほめてくれたことだってあるんだろう？」

「ないもん」

「そうか。ボランティア活動の人って、相手をだいじにしてくれる人たちなんだけどなあ」

母親は「サントスはやる気をなくしてしまった。優しい先生に代えてもらったが、サントスはもう心を開かなかった」ということを、たどたどしい日本語で語った。

「サンちゃん、もし理王くんがきみに日本語を教えてくれるとしたら、どうかな？」

「〜〜〜！」とサントスくんまだ声変わりしていない声で何か叫ぶと、ぱっと立ちあがって理王の首に抱きつき、「教えて、教えて！ 理くん、ぼくの先生になって！」と叫んだ。

「理王だったら、サンちゃんをどう導くかな？」

「読むことだけにしぼって、やさしい絵本から始めます」

「おお、それがいい。よし、理王、夏期講習中、きみがサンちゃんの相手をしてくれ」

「えっ、先生！」と理王の母親がすっとんきょうな声をあげた。「理王はまだ中二です。そんなの乱暴すぎます」

「いや、だいじょうぶです。理王は相手の立場に立ってものを考え、そこから組み立てていきます。そうだよな、理王」

「はい、そうです」

「ではサンちゃんの日本語指導をどうやってやったらいいかを、みんなで考えてみようか。だが、その前にアッキーをここに呼んだ理由を話す。知ってる人もいるが、アッキーは脳に軽い障害があって、文字学習に行きづまっていたんだが、おれが思いついた方法と本人の真面目さで、思いがけない習得力を見せたんだ。初めはアッキーはどんなふう読んでいたか

というどだな……アッキー、みんなに話していいよな？」と豪利は確認してから、黒板に「そらにしろいくもがうかんでいます」と書いた。

「小四のアッキーが算数をやっていたとき、文字が読めないことにおれは気がついて、これを読ませてみたんだ。そうしたらアッキーはこれを『そらに・はし・ろいく』といったふうを読んだんだ。つまり字を読むのが精いっぱい、内容はまったくとらえていないことになる。そこでおれは、日本に住んでいて日本字が読めないのは困る。算数はいずれできるようになるから、いったん、算数をやめて国語の読み方の勉強一本にしようと切りかえたんだ」

「どういう指導に切りかえたんですか？」

「どうしたと思う？」

「先生の後についてリピートするようにした」

「ゴリ先生だから、絵本を読むことに変えた」

「そうなんだ。ではなぜ絵本にしたと思う？」

「絵本は文節ごとに一字ずつ空けてあるから読みやすい。意味がとりやすい」

「サンちゃんが絵の助けで想像力が働いて『三匹のやぎのらがらどん』と読めたように、想像力を働かせられるから」

「おお、そういうことだ。ひらがなが読めるのだから、絵を見ながら自分で想像力を使って読んだ方が満足感があるし、内容も楽しめる、と考えて自分の力で読ませた。読み間違えがあっても、そこを間違えて読むと内容が理解できなくなるというところだけ助けたが、ほとんどはアッキーの力で読ませた。そうやってとつとつと読んでいって、内容が楽しめるようになっていくと、アッキーは面白くなって、自分でも努力して、みごとなくらい急速に読めるようになっていった。だが、父親の海外勤務で二年ほど日本を離れていた間、日本語に触れる機会がなかった。先日、日本に帰ってきたので、サンちゃんの相手をさせながらいっしょに学ばいい機会だと思って呼んだんだ。二人への指導方法は、以上のやり方を参考にしてもらえれば、あとは理王の知恵にまかせる。きみたちも必要な時には協力してやってくれ」

このあと理王はサントスくんとアッキーを町田市の図書館に連れて行き、図書館というものがあること、その利用の仕方を教えた。理王としても二人がどんな本に興味があるかを知る手がかりになった。

朝日新聞のコラムへの生徒たちの感想

講習二日目の朝の挨拶が終わると、デップリンがカバンからガムテープを取り出して、左の耳の下から口の前を通過して右耳の下まで、幅の広いテープをべったりと張り付けた。

豪利が「チーチーにいれば国語力は自然に上がる、と言ったおれの荒っぽい言葉の意味について説明する」と言った。「数年前のことになる。おれはこの塾に似合った内容の国語の長文読解問題を作ろうとした。テストによくあるように、文の一か所に線を引いて、『～と

あるが、この意味を正しく表している文はどれか』という問題を作り、答えの選択肢も定番の四つにしようとした。だが正しい答えと間違っている答えはすぐに作れたんだが、残りの二つの選択肢がうまくできないんだ。どうしてだと思う？」

「正しいのか正しくないのか迷うような答えを、二つも作るのが難しかったからですか？」

「おお、そうなんだよ。おれはその時に思った。受験者が正しいのか正しくないのか迷うような答えを作る、というつまらない作業のために、おれは長い時間をかけていたのか、と思った。それで以後は選択問題を作るのはやめて、『～とあることに対して、あなたの考えを述べなさい』というふうに変えたんだ」

「それで、チーチーのテストは自分の考えを書く問題が多いんですね」

「そういうこと。それで選択問題を作るときには、選択肢を二つにして、正解、不正解がはっきりわかる文にした」

「でも先生、入試問題は選択肢が四つあるじゃん。どうやって答えを選ばばいいの？」

「じゃあ、おれが受験生時代にやった方法を紹介しよう」

「あーっ、考えます！ 先生、その先、言わないで！」と剣矢が騒いだ。

「わかった！ 質問に対して自分の答えを考えてから、答えの選択肢を読むようにした」

「おお、その通りだ！ ではおれはもう一つやったことがあるんだが、何だか考えてみろ」

「そんなのわかんない。でも、理王がわかったみたいな顔をしてる」

「おお、そうか、理王、言ってみてくれ」

「文章を読んでいって、線を引かれた文まで来たら、その質問文を読まないで、自分だったらどんな質問をするかを考える。それから質問文を読む」

「おお、そうなんだ」

「先生が考えたこととその質問文は同じことが多かったのですか？」

「同じでないことが多かった。だが同じでなくても、『こういう質問が成り立つのか』とおれ自身の視野が広がったし、そうやって考えたことで、それまでの文章の内容が理解できていたから、質問文を読んだとき、選択肢の中に正解を見つけることは簡単だった。まあ、これはおれの方法だが、オッチャン、参考になるかな？ そこでだ、この『バカロレア』という文章を読んでみてくれ。数年前の朝日新聞に載っていた文章だ」

豪利はそのコピーを配った。「バカロレアというのは、フランスの大学入学資格試験のことだ。この文章はそのバカロレアについて考えさせる面白い内容だったので、その年の中二の学力テストに、『この文章を読んで、思うことを述べよ』という形で出題したんだ。おれは中学生にこの感想を求めるのは無理なことだとは思ったが、チーチー塾では『話に耳を傾け、考え、表現し、自分の足で歩くことができる人になってほしい』という願いを持って授業も行事も組み立てているから、生徒たちは少しは答えられるかもしれない、という程度の気持ちで出題したんだ」

その文章は、筆者である記者が「バカロレアの試験を終ったばかりのフランスの女子生徒に様子をたずね、彼女の取り組んだ問題をきいてびっくりした」という書き出しから始まっ

ていた。「哲学の問題に、＜人はなぜ法律を書くのか＞＜芸術には必然的に宗教性が存在するか＞＜物体を測ることはこれを知ることになるか＞などが出題され、一問を選び、解答は字数制限なしである。フランスの子どもは、街頭でいきなりマイクを突きつけられ、意見を求められても、自分の考えを理路整然と述べる」という内容だった。

中三生たちは黙って読んだ。だれも口をきかなかった。

理王は黙って宙を見つめ、剣矢はめずらしくじっとし、リサはおっとりとし、キララ子はきりりと静まり、オッチャンはほーっとし、デップリンはガムテープの上からニキビをおさえ、ホッホは青白くなっていた。

豪利が口を開いた。「おれは中二生には無理を承知で出題したんだが、なんと彼らは実に真面目に感想を書いてくれた。おれは感動した。＜チーチーは教育の王道を歩いている＞と自信になった。それ以来、毎年の中二生に出題してきている。生徒たちの感想文の中からよく考えられているものを幾つか集めたものがこれだ」と豪利は新たなコピーを配った。

生徒たちは感想文をていねいに読んでから言った。「正悟くんの指摘、ぼくは同感です」「資季くんのようなとらえ方、わたしにはできない」「女山猿の藍ちゃんの見方にびっくりする」などだった。

剣矢が「おれも感想を書きたかったなあ」とつぶやき、キララ子は「わたしたちには、どうしてこのテストやらせなかったのですか？」ときいた。

「おお、そうか……おれは（こんな難しい感想を中二生に求めてはいけない）と思うことがあったんだ。実は、きみたちの一つ上の生徒の一人に、『ぼく、こんなことわからない』って涙を流されてしまったんだ。彼は哲学のテストで出された問題に答えるのだと思ったんだよ。おれはあわてて、『そうではない。おれが求めたのは、この記者が書いていることについてのきみの感想を書け、ってことなんだ。おれだってこんな哲学の問いは難しくて答えられないよ』と彼をなぐさめたんだ。そんなわけできみたちのときには出題をやめたんだ」「先生、その泣いた人って……」

「待った、剣矢。だれかって思うのはいいが、名前を言ってはいけない。まして名前をあげて、おたがいに顔を見合わせるようなことはするな」

「でも先生、この記者の文章はチーチーの生徒たちには読んでほしいです」

「おお、そうか……きみたち、読みながら真剣に考えていたものなあ」

「この感想文、朝日新聞に送ったらどうでしょうか？ 記者の人、自分の文章を、こんなふうに真面目に考えてくれている中学生たちがいるって知ったら、うれしいと思います」

「おお、なるほど。合宿がすんで、秋になって落ち着いたら、考えてみようか」

サントスくんとアッキー

十時にサントスくんがやってきた。二人はデップリンのガムテープの顔を見

てさんざん笑った。

「笑うのはもうおしまい」と理王が言った。「サンちゃん、みんなの前で『三びきのやぎのがらがらどん』を読んでみな」

サントスくんは真面目な顔にもどって、アッキーとならんで絵本を開き、アッキーに顔をくっつけて読み始めた。一字一字、指で追いながら読んだ。読めないところではアッキーがその字を言ってやると、サントスくんはそれに導かれて読み進めた。読み終わったときには生徒たちがいっばいの拍手をしてやった。

「一生懸命に読もうとしている姿が真剣でかわいい」

「アッキーって、優しいんだ」

「サンちゃん、きみはたった三年間で日本の子どもと区別できないくらい日本語が上手になったんだ。どうしてそんなに上達できたの？」

「ぼく、いっばい友だちと遊ぶから。ね、理くん」

「そう。サンちゃんは心が活発だから、すぐに上達した」

理王とサントス、アッキーは障子一枚へだてた台所部屋へ移った。生徒たちが行き来していいように障子は開けっ放しにした。

理王はサントスくんの教材は絵本、アッキーの教材は民話と決めて、一人が読んでいるときに、もう一人も同じ文章を目で追えるように、二冊ずつ用意した。

一字ずつ拾うように読んでいたサントスくんの声が、日を追うごとに言葉のまとまりになっていく様子が三年生たちに聴こえていた。生徒たちは「サンちゃん、じょうずになっているよ」などと声をかけてやっていた。

アッキーは同じ中二生と比べたらつたない読み方だったが、内容ははっきりわかる読み方だった。指で字をたどっていたサントスくんは、ほんの数日の間に指で字を追わなくなって、アッキーの読みに合わせて、目で字を追うようになっていった。

サントスくんとアッキーは、相手がいることが励みになった。二人の勉強時間は朝の九時から二時間という約束だったが、いつも十二時になった。二人とも弁当を持ってきて、昼食時には三年生の中に入って食べ、終わるといっしょになって遊んだ。

空襲

講習三日目。「キララ子に空襲って何かときかれたので、空襲の話をする」

「きみたちは日本が第二次世界大戦でアメリカやイギリス、中国と戦争をして負けたことは知っているよな？ この戦争で日本人は戦死した人、原子爆弾で死んだ人、アメリカによる空襲で死んだ人など、実に310万人が死んだのだ」

「310万人て、どのくらいですか？」

「うん、地図帳に現在の日本の各県別の人口が載っているページがあるから見てみろ……」

それによると、キララ子？……」

「わたしのお爺ちゃんの住んでいる山梨県とゴリ先生の出身地の長野県の人口を足したくらいです……ということは、えーっ、山梨県と長野県から人間が一人もいなくなっちゃったってことじゃん！」

「そうなんだ。その頃の日本国民の22人、23人に1人が死んでしまったということだ。自分が知っているあの人も死んだ、この人も死んだってことだ。おれは親族のうち4人が戦死している。きみたちのおじいちゃんおばあちゃんだって、親族が死んでいると思う」

「空襲で人がいっぱい死んだって、どうしてですか？」

豪利は<空襲>という字を書いて説明した。「昭和20年の3月10日、東京の下町をアメリカの飛行機が爆弾を落としまくって、一般市民10万人を殺したんだ。日本の家は紙と木でできているから燃えやすい。だからアメリカの飛行機は、油の入った焼夷弾という爆弾を空からばらまいて、あたり一面を火の海にして、人は逃げ場がなくなって焼け死んだ。赤ちゃんを背負ったまま黒こげになった母親、お腹の下に子どもをかかえて死んだ父親。火から逃げようとして隅田川に飛び込んでおぼれた人。10万人が一晩で死んだんだ。その5月には三歳だったおれのワイフが住んでいた品川区も空襲を受けた。ワイフは小学生の姉、乳飲み子の妹といっしょにお爺ちゃんとお婆ちゃんにあずけられ、二組に別れて逃げた。母親とお手伝いの姐やは家を守るために残って、無事だったら洗足池で落ち合おうと決めて別れたが、火がおさまってから母親が約束の池へ行ってみると、だれにも会えなかった。みんな死んでしまったと母親は思った。だが幸い、次の日に全員無事で会えた。火にさえぎられて前へ進めなかったんだ。それからみんなで家に戻ってみると、家のあったあたりは焼け野原になっていて、その中に自分の家だけが一軒、焼けなくて立っていて、その後数年、家を失った近所の人たちがいっしょに暮らしたんだってさ」

「一軒だけ立っていたって、どうしてですか？」

「うん、ワイフの母親はオリンピック選手に選ばれた人で、気力、体力があった。お手伝いの姐やも気力のある若い女性で、焼夷弾が落ちてきたら火を消してやろうって、二人で空をにらんでいたんだって。実際、家には何発か落ちてきて、庭にあった物置は焼け落ちたが、あとの焼夷弾は火を吹き出したところを、二人で庭の井戸水をぶっかけて消したんだ。家族が住んでいた母屋にも、一発が屋根を突き破って部屋に落ちたが、不発弾で、母親がそれを抱きかかえて庭に放り投げ、火事にならずにすんだってさ。この二人の女性の活躍は新聞に大きく取り上げられたそうだ」

「チャンちゃんはその人の孫なんだ！」

「チャンちゃんやわたしたちくらいの女の子って、どんな学校生活をしてたんですか？」

「その時代は小学校までが義務教育で、義務教育さえ受けさせない親もいた。まだ日本は貧しくて、きみたちの年齢くらいの子どもの多くが働いた。日本は森林が多くて、農作に適した平地が少ないから、農家の跡取り以外はふる里を出て、工場や商店勤め、男の子は幼くして住み込みの小僧、女の子は台所仕事や子どものお守などだ。「夕焼け小焼けの赤トンボ」

はい歌だけれど、ここで歌われている『十五でねえやは嫁に行き』の姐やとは、他人の家に住み込んで働いた少女のことで、この歌の姐やは子どものお守をした十歳くらいの少女かもしれない。『自分が子守の姐やの背中におんぶされて、赤トンボを見たのは何歳のころのことだったろうか。姐やといっしょに桑の実を摘んで、口の周りを紫色に染めて食べたのは幻のような思い出。その姐やは十五歳でお嫁に行った。姐やの実家からネギやリンゴが届いたのも、もう遠い昔のことになったよ』といった意味で、貧しい時代の日本のごく普通の姿だ」

「わたしたちくらいの年齢で学校に通っている女の子たちはお金持ちの家の子だったの？」

「男の子は中学校、女の子は高等女学校に試験に合格した子どもが入ったから、勉強ができないと入れないが、教育熱心だったり、金持ちの家の子たちではあったろうな」

「高等女学校の女の子たちは戦争中はどんな学校生活だったんですか？」

「しょっちゅう工場に行って手伝ったり、戦争用の物を作ったり、男子は鉄砲もって突撃訓練、女子は竹槍訓練をしたんだ」

「竹槍訓練て？」

「直径四センチくらいの竹の先を鋭くとがらせて、アメリカの兵隊が日本に上陸してきたときにそれで突き殺す練習だ。女の子がそんなものでアメリカの男たちを突き殺せると思うか？ そんなことは不可能とわかっていながら、国や軍隊の指導者は子どもたちにやらせたんだ」

「なんのためにですか？」

「戦意高揚、つまり戦争に向かって行く国民の意欲を高めるためさ。命令でやらせている大人たちの中には疑問の思う人はいても、口には出せなかったろう。＜卑怯者、売国奴、裏切り者＞ってやられるからな。一方やらされている子どもたちは＜お国のために＞を信じて真面目にやったと思う。おれなんかも、「アメリカ、イギリスは鬼だ、畜生だ、明るい日本の未来のために、鬼、畜生をやっつけろ、大和魂で突き進め」と素直に信じるぴっかぴかの軍国少年をやっていたと思う。教育の恐ろしさだよ」

「先生は＜卑怯者、売国奴、裏切り者＞とののしったりしないよね？」

「しないと思うな……おれは子どものときから、人はそれぞれの考えがあっていいと思うタイプの子だった。親に教育されたのではなく、そういう子だった。おれは＜日本男児＞＜大和魂＞なんて単語の勇ましさを感じる子どもにはなったと思うけれど、＜卑怯者、売国奴、裏切り者＞という人を決めつけるような言葉は嫌いだ。そういう言葉を使う者こそ、いざとなったらそういう奴になる、とおれは思っている」

夏期講習一週間目の感想

夏期講習第一週目の最後の授業が終わると、生徒たちはそれぞれの感想を述べた。

リサ：「地図帳をめくっていくとページごとに発見があった。今まで関心がなかった地理が面白くなった。テレビや新聞で知らないことが出てくると、地図帖や地球儀で調べるようになった」

キララ子：「空襲には胸が痛みました。戦争時代の少女たちの中にわたしがいたら、竹槍訓練を一生けんめいにやったんだらうな、って思います」

オッチャン：「いろいろの県の入試の国語の長文問題を、先生に教わったようにやったら、正解が増えた。入試の長文はためになる内容だったので、読んでおもしろかった」

「デップリンはこの一週間、しっかり英作文をやったみたいだな」と豪利がデップリンのノートを手を取った。「おお、よく考えた日本語を創ったじゃないか。自分のこと、日本のことがしっかり書かれている」

豪利は生徒たちにデップリンの日本語を読んでやった。「ぼくはチャップリンがだい好きで、真似をするのが得意です。チャップリンはやせています。ぼくは太っています。日本語では太っている人のことをデブといいます。デブがチャップリンの真似をするので、友だとはぼくのことをデップリンと呼びます。みなさんもぼくをデップリンと呼んでください」

「先生、ぼくのその英作文をチェックしてください」

「おれはそんな難しいことできねえよ」

「あーっ、英語の先生がそんなこと言っているの！」と剣矢がはやしたてた。

「いいさ。デップリンの相手になる人たちはデップリンに魅力を感じている人たちだよ。そういう人たちにとって、デップリンが文法的に正しい英語を使っているかどうかなんて気にしない。デップリンという人物、この魅力的な人物の言いたいことに関心を持つんだ。だから文法のことなど気にしないでどんどん表現すればいい。そうやっているうちに、デップリンの知力とおしゃべり意欲なら、すぐにちゃんとした英語を使えるようになる」

キララ子が笑った。「剣矢は中一の一学期の中間試験で英語ができなかったって言って、チーチーに入ってきたんだよ。あんた、その時、生意気なこと言ったんだけど、覚えてる？」

「ぼくは剣矢の言葉を覚えています」とデップリンが言った。「『中一にもなった者が、ディス イズ ア ペン、 ホワット イズ ディス？ イト イズ ア ブック、なんて、こんな内容のないこと、ばかばかしくてやってられない』って言ったんです。ぼくはそんな頭の使い方できる人が脅威でした」

リサは懐かしそうに行った。「剣矢がそれを生き生きした表情で言うのを見て、わたしは剣矢がチーチーに入ってくれたこと、うれしかったわ」

「おれ、学校でそれ言ったら、生徒たちに『生意気』って言われた。でもゴリ先生は『面白いことを言う』って言ってくれた。おれ、それで英語やる気になった。象兄ちゃま、おれ、数学やる気になってるよね」

「どうしてなの？」とリサがきいた。

「象兄ちゃまが、数量問題は書かれている日本語を素直に式にしていけばいいんで、きみの国語力なら数学もできるようになるって言ってくれたから、おれ、わかるようになろうと思

ったら、わかるようになった。でもさあ、ゴリ先生、国語は一つの問いにいくつも答えがあつていいのに、数学は答えが一つしかないじゃん。どうして？」

「おお、おお、またまた難しいことを言うなあ。ところで剣矢がこの塾に入ったのは、人から勧められたからなのか？」

「ちがう。おれ、この塾の前を通ったとき、看板の絵の子どもたちの笑い顔の中に、『おれもいたい！』って思ったから」

「おお、そうか。あの看板の絵はおれの長女の友だちが描いてくれたんだ。剣矢はいい感覚だ。将来に向かってどんな歩き方をするのか。きみは失敗しても立ち直ることができるから、失敗や反省が良きものに変化して、自分を育てていくんだらうな。それで、今の『国語には答えが幾つもあるのに、数学には答えが一つしかないのはなぜか？』という問いは、おれには不意打ちだ。象兄ちゃまが答えてくれるか？」

象兄ちゃまがおおらかに受けた。「剣矢の疑問に、剣矢はもう答えを出しているんだよ。図形問題をやっていた時だったけれど、きみはホッホのノートを取り上げて、それを理王に見せたことがあったよね？」

「あ、覚えている。定理を使えば数行ですむ証明を、ホッホは定理を使わないで根気よく証明していたんだ」

「そう。科学だって答えは一つとはかぎらない。その答えにたどり着く道はいろいろあるし、解く過程の中で発見をしてきたのが科学だよ。剣矢は無意識だったけれど、きみの感覚はそこに気がついたんだと思う。剣矢は後半の夏期講習は図形問題だけをやって、問題を解いていく過程を体験してみようか。剣矢だったらその面白さがわかると思う」

マンジュシャゲ

「ゴリ先生はマンジュシャゲって知ってますか？」とリサがきいた。「福島県に住んでいるおばあちゃんからの手紙に、『マンジュシャゲがそろそろ咲き始めるわ』ってあったんです」

「彼岸花のことだ。野原や土手で、長い茎の先端にぽっ、ぽっと花をつけて咲いているよ」と豪利は野草図鑑を開いて見せた。

「あ、この花なら薬師池公園で咲きます」

「おお、そうか。おれはこの花を見るとな、花のかげに隠れているキツネの姿が見えるんだ」

「へー、どうしてですか？ 町田でキツネを見ることなんてないですよね？」

「ない。だがこの花に出会うと、おれは『マンジュシャゲ 咲く野の日暮れは なにかなしキツネが出ると思う おとなの今も』という短歌を思い出すんだ」

「先生は昨年の大町の合宿でも、リサが『いい匂いの花！』って摘んできた紫色の花を、クズの花、って教えてくれて、クズの花の短歌を口ずさみました。先生はどうしてそんなふう

に歌が口から出てくるのですか？」

「恩師の影響だ。リサが持ってきた花を見たら、『クズの花 踏みしだかれて 色あたらし
この道を 行きし人あり』って短歌がふっと浮かんだんだな」

「恩師の影響って、どういうこと？」

「うん、おれが大町中学校に入学した時の担任が伊藤利夫先生とって、前任の長野市の
柳町中学校で、池田万寿夫という生徒の担任だったんだ。池田万寿夫は版画家で、小説でも
芥川賞をもらってる人だけれど、先生は中学生の池田万寿夫の絵と文学の才能を発見し育
てた人だ。万寿夫さんの本にもそう書いてある。その伊藤先生が毎週月曜日の朝のホームル
ームで、黒板の片隅に短歌か俳句を一つ書いて、それを毎朝ゆっくり読んで、生徒たちも一
回だけ声をそろえて復唱させたんだ。先生は歌や俳句の意味を説明したことはないし、覚え
ろとも言わなかった。朝一回だけ読むことを一週間やるだけだった。そして次の月曜日には
別の短歌か俳句になって、また同じようにくりかえしたんだ。中学生は脳がみずみずしいか
らそれだけで覚えてしまった。おれは大人になった今でも何かの情景に出会うと、それに合
った歌や句がふっと口をついて出てくるんだ。これはちょっと豊かな気持ちになる」

「他にどんな歌を思い出すんですか？」

「うん、伊藤先生が一番最初に書いたのが、『不来方の お城の草に 寝転びて 空に吸わ
れし 十五の心』だった。これは十三歳の心にもすっとしみこんだな。先生は源実朝の歌が
好きで、『大海の 磯もとどろに よする波 われてくだけて さけて散るかも』というの
があって、先生は『たいかいの』って読んでいた。ところがおれが大人になったとき、ある
詩人がこれを『おおうみの』って読むのをラジオで聴いたが、おれは伊藤先生の『たいか
いの』で覚えたし、その方が勢いを感じるので、なおす気にはなれない」

「情景に出会って、詩が口をついて出てくるってすてき。わたしたちもやりたい！ ゴリ先
生も黒板に短歌や俳句を書いてください」

「それ、チーチー塾お得意のカルタ取りにしましょうよ」

「歌の上の部分先生が読んで、下の部分を書いたカルタを生徒が取る！」

「そうしようよ、ね、理王、リサ、デップリン！ 小さいとき、いつも絵本を読んでもくれた
ゴリ先生の声は、わたしたちには子守歌なんだよね」

「おいおい、きみたちは半年後には高校入試だぞ。そんなことやっていていいのか？」

「いいで一す。四月からきちんと勉強してきました。夏期講習はリラックスがいいで一す」

「まあ、まあ、まあ、みなさま、ちょっとお待ちください」。デップリンが両腕を大きくゆ
っくり広げてみんなを抑えた。「反対意見を言ってください。ありませんか？……ありませ
んね？……ではしかたがありません。カルタ取り用の短歌と俳句を選びましょう」

「どうやって選ぶの？ おれたち、そんなに短歌や俳句知らないじゃん。先生は明日から小
学生キャンプでいないんだよ。後期夏期講習まで一週間も休みだよ」

「いいものがある」と理王が本棚から一冊の本を取り出した。「これ、＜教科書に出てくる俳
句、短歌＞という本だよ。この中からおれたちが気に入ったものを選ぼう」

「よっしゃー！ 先生、不在の間、教室を使わせてください。みんな朝九時に集合！」

次の日から俳句と短歌の選定が始まった。生徒たちが交代で本の中の句、歌を詠み、聴いている生徒たちは気に入ったものに手を挙げ、挙手の多かったものを、理王がその場で素早くパソコンに打ち込み、コピーして配布し、それを読みあい、イメージがわかりやすいもの、リズムのよいものを、カルタ取りが三十分で終わるくらいの数を選び、カルタ用の厚紙に、サインペンで読み札と取り札を書き上げた。俳句は芭蕉と蕪村と一茶が多く、現代の俳句では「咳をしても一人」「分け入っても分け入っても青い山」が人気だった。短歌では「草わかば色えんぴつの赤き粉の散るが愛しく寝てけずるなり」など、中学生がイメージしやすい歌が選ばれた。

チーチー塾の授業は英語文型のカード取りで始まるが、中三生のクラスにはこのカルタとりが加わった。豪利が「咳をしても」と上の句を読むと、生徒たちは「一人！」と下の句を大きわざで取り、「四万十に 光の粒を まきながら」と読むと、「川面をなでる 風のてのひら！」ともうれつな早口で言って、ぶつかりあうほどの勢いで取り合った。

「そんなに激しく取り合ったら、歌の意味を味わえないんじゃないのか？」

「だいじょうぶ。体がちゃんとう味わっていまーす」

「象兄ちゃまにもこの面白さを味わってもらいたい」という生徒の言葉で、数学の授業の前にもやることになり、象兄ちゃまも生徒たちに負けずに奮闘した。

地図帳を楽しんでいたリサが、サントスくんが落語の本を読む声を聴いて言った。「先生、男の子でも自分のことを『あたい』って言うのですか？」

「おお、江戸時代の町人の男の子は、自分のことを『あたい』って言っていたらしい」

すると剣矢がきいた。「英語には自分を表す単語は『I』しかないんだよね？」

「おっ、いいことに気がついた。うん、そのことをやろうか」と豪利は台所部屋の三人も呼び入れた。「英語には自分を表す単語は『I』だけだ。日本語はいくつあるかな？」

「いっぱいある！……わたくし、わたし、あたし、あたい、おれ、おら、おいら、わて、わし、あっし、おいどん、てまえ、それがし、せっしゃ……まだ、ありそう」

「『私は犬を飼っています』の『私』を他の言い方に変えてみる。どんな文になる？」

「ツッパリくんだったら、『おいら』って言うから『おいらは犬っこ飼ってるぜ』。文明開化のころの貴婦人だったら、『あたくしは』と気取っちゃって、『お犬様を飼ってるざーます』ってやるのかな」「西郷隆盛だったら、『おいどんは犬を飼ってるでござす』」

「ほら、主語の言い方を変えただけで述語の言い方も変わってしまう。これも日本語の特徴を表すことになるんじゃないかな」

「日本人の心がこまやかかってことかしら？ だったら、どうして日本人はこまやかな心の持ち主のなれたのかな？」

「日本語っておもしろーい」とサントスくんが叫んだ。「ぼく、日本語しっかり勉強しよう」

講習の最終日、サントスくとアッキーが中三生の前で、「三びきのこぶた」の絵本を持

ち、アッキーが地の文を読み、サントスくんがこぶた、こぶたが出会ったおじさんたち、オオカミのしゃべり言葉を読んだ。

「えーっ、サンちゃん、素晴らしい！ 登場人物らしい読み方になっていた」

「ひろい読みだった人が、どうして十日そこそこでそんなに読めるようになったの？」

「理王、どんな指導をしたの？ おまえの声、ほとんど聞こえてこなかったじゃん？」

「それってどうしてなのですか、先生？ サンちゃんとアッキーの成長には、成長の本質にかかわる何かがあるんでしょうか？」

「おれも驚いている。理王、この絵本をサンちゃんは今、初めて読んだのかい？」

「いえ。昨日読ませたら、しゃべり言葉の読み方がおもしろかったので、中三生たちに聴いてもらおうって言ったら、サンちゃん、寝るまで練習して、親も面白がって付きあってくれたんだそうです」

「親まで巻きこんでか？ そりゃ、たいした変化だ」

「サンちゃんはしゃべり言葉がじょうず。俳優に向いているかもよ」

「二つの国の言葉を話せるから、ブラジルと日本をつなぐ人になりなよ」

サンちゃんは思い切りうれしい顔をした。「だけど、ぼく、漢字が書けない。書くのきらい」

豪利が笑った。「きらいなものはやらなくていい。漢字を使いたいときは、辞書で調べて書けばいいんだからね。だけど、漢字は筆順に従って心をこめて書けば、三回くらいで覚えられる。それで覚えられない字は気持ちが入らなかったということだから、それ以上やっても覚えられない。読む方に力をいれな。そこでサンちゃんとアッキーにこの本を二人のプレゼントしよう。小学生で学ぶ漢字の読み方と筆順が書いてあるからな。それでだ、キララ子のさっきの問い、『二人の成長には成長の本質にかかわる何かがあるのじゃないか？』ということについて考えてみようか。サンちゃん、アッキー、きみたちはわずか十日間でそんなに読めるようになった理由を説明できるかい？」

「できる！ 理っくんの教え方が上手だったから！ それに理っくんは、ぼくが下手に読んでも、おもしろがって聴いてくれたから、ぼく、やる気になった。それとぼくがこの教室に最初に入ったとき、みんながにこにこ迎えてくれたから」

「それ、ぼくがやる気になったのと同じです」と静かだったホッホが声を出した。「ぼくは学校でテストの点数はいいけれど、テストが終るとぼくの存在なんか誰も気にしてくれませんでした。それはぼくが友だちを持とうとしなかったからなのですが、そんなぼくをこの塾の人たちは迎え入れてくれました。そのときぼくは『チーチー塾に存在したい』って思ったんです」

「ぼくも言っている？」と今度はアッキーが跳ねるように声をあげた。

「おお、言ってくれ」と豪利が喜んだ。「この十日間で、きみは読み方が深くなった。どうしてそうなったんだ？」

「ぼくがなめらかに読めなくっても、理王が『登場人物の心がきこえてくる』って言ってく

れたんで、その心がぼくにきこえるように読んだ」

「おお、いいねえ！ きみはイギリスへ行く前は授業で発言する生徒ではなかったのに、どうしてだ？」

「イギリスの子はどんどん発言するから、ぼくも遊ぶときにはしゃべるようにした」

「英語で？」と生徒たちがびっくりした。

「日本語でだよ」とアッキーがけらけら笑った。「手振り身振りで通じたよ」

豪利が理王に感想を求めた。理王は短く言った。「サンちゃんは人の心を開くね。サンちゃんが求めれば勉強を教えてくれる友だちはいくらでもいるはずだから、新しい学校では勉強も積極的にやったらいいね。アッキーは今のゆっくりした読み方が似合っている。心が見える読み方を大切にしてほしい」

みんなでサンちゃんとアッキーを胴上げした。デップリンはすらりと背の伸びた理王を肩にひっかつぎ、のっしのっしと歩いた。

夏期講習終了

「夏期講習はこれで終了です！ 一週間後、待ちに待った遊びの合宿で一す！」

デップリンの声に、全員が「イエーイ！」と応じた。

「おれも学ぶところが多かった。では合宿の話をしよう。リーダーをやりたくないと思っていたリサ、オッチャンは<リーダーシップを学ぶキャンプ>を経験して、今はどう思っているかな？ リサらしく、オッチャンらしくできそうかな？」

「みんなに相談しながらやればいい、ってわかりました。でも、『リサらしく』って言われても、<らしく>って、どんなことなんでしょうかな？」

「おれもやる気になってるけど、<鉄平らしく>って言われても、よくわかんない」

豪利が「うーん」とうなった。「<らしく>って何だ？」

「あーっ、『言葉を大切にしろ』とおっしゃっている先生でも、<らしく>を考えないで使っているのですか？」

「その人の本質、ってことかしら？」。キララ子が言葉を探すように言った。

「その人間の精神を支えているもの……かな？」。理王は宙を見つめた。

剣矢がけろっと言った。「なにをやったって、『まさにリサだ』ってやつだよ」

「おお、なるほど。ではリサが『リサらしくって何ですか？』ってキイロにきいたら、キイロは何とこたえるんだろうな？」

「リサの長所は、いつも人を優しく見つめる目よ、って言ってくれると思います……そうか……わたしはそうやって人を見つめて、考えて、行動すればいいんだわ」

「おお、リサの答えに感動だ」と豪利は言って、オッチャンを見た。「<鉄平オッチャンらしさ>というの、おれはすぐには言えないなあ。象兄ちゃまはどう思う？」

「はい」と象兄ちゃまがすっきり受けた。「ぼくはオッチャンには<自然>というものを感

じています。ぼくはオッチャンを一目見た時から、森の緑や川を渡る風をオッチャンに感じています。ぼくにとってのオッチャンは、人の存在で<自然>というものを感じさせてくれた初めての人です」

「おれ……それ、うれしい。『おれっていいじゃん』って、おれ、今思った」

生徒たちが音のしない拍手をした。豪利は深い声を出した。「リサ、オッチャン、良い言葉だ。象兄ちゃま、良い言葉を引き出してくれて、ありがとな。さて……」と豪利はホッホに目を向けた。「ホッホ、きみには初めての合宿となるが、ずいぶん合宿のイメージができたんじゃないのか？」

「はい、ぼくも親分をヤル気にならないといけないと思っています。でも怖いですが……最初は誰かの下で合宿を体験させもらってから、親分をさせてください」

そのとき玄関をノックする音がした。ホッホがあわてた。「すみません。ぼくのお母さんが先生に相談に来たんです。もう授業が終わっていると思って来たんです」

豪利がドアを開けた。「おや、ホナミちゃん、エリちゃん、タイヨウくん、何の用かな？」ホッホの妹の小一のホナミと母親、小一の田中エリと弟の三歳のタイヨウ、母親がいた。ホナミとエリは小低の英語クラスに来ている。タイヨウもみそっかすで入っている。

ホッホの母親が言った。「エリちゃんたちのお婆ちゃんが亡くなられて、そのお葬式と田舎の家の処分でお父さんお母さんが十日ほど田舎に帰るので、エリちゃんとタイヨウくんをわたしの家で預かることにしたんです。二人とも小学生のサマーキャンプに参加しなかったのも、わたしがチーチーの中高生の夏合宿に参加させてもらえないか頼んでみよう、ってお連れしたんです。ご迷惑でなければが参加させていただけないでしょうか？」

「あはっ、中高生の中にこんなチビちゃんがか！ そうねえ、ホナミちゃんも行くのなら、チビ同士で遊べるからいいかな。おい、中三生たち、おチビたちの参加はいいかい？」

生徒たちがオーケーというサインをよこした。「オーケーです。この生徒たちは小さい子にもちゃんと対応できます。だけど生徒は現地集合です。親が車で連れて行くのはダメ。ホッホが連れて行くことになるが、どうかな？」

「わたしとリサもいっしょに行きます」とキララ子が声をよこした。

「おお、そうか、そうしてくれるか！ では今、大事な話をしているところなので、くわしい話はできませんから、案内を江川くんに渡します」

豪利はあっさりとしり出を受け入れた後、中三生たちに言った。「あの子たちの面倒はホッホが見ることになる。カウンセラーは面倒見のいいチャンちゃんをつけよう。各班メンバー表と料理メニューはきみたちが共同装備品を取りに来た日に渡す。さてと、今から合宿の親分たちの中の大親分を決めることにするぞ」

豪利はその話題が出るのを待っていた生徒たちの顔を見回した。「大親分はおれと高校生で決めるんで、先日話し合っ、デップリンかキララ子のどちらかとなったが、高校生が言は、『今年は<リーダーシップを学ぶキャンプ>をやったし、中三生たちはおたがいをわかりあっているから、自分たちで決めたらどうか』となったんだ。どう思うかな？」

デップリンが顔を紅潮させた。「ぼくに大親分をやらせてください。ぼくは合宿の大親分になることを、チーチー塾最高の名誉と思っています。ぼくは<リーダーシップを学ぶキャンプ>で、リーダーは自分の言葉を少なくして人に場を与えれば、人の長所が見えてくることを学びました。ぼくは成長しています。みなさん、そんなぼくを大親分に推薦して下さい」

生徒たちが強い拍手をすると、デップリンが両腕を大きく広げた。「まあ、まあ、まあ、お待ちください。このクラスの知性の代表、澄んだ目のキララ子の言葉を聴きましょう。キララ子さん、どうぞお話しください」

キララ子はさわやかに笑った。「わたしはデップリンを推薦します。だれもがデップリンをリーダーだと思っているから、それに応えるべきだというのが第一の理由です。またデップリンは小三のときに、ツッパリくんに『高校生クラスを作って、愛の心をぼくたちにリレーしてください』と言いました。そんな言葉をずっと大事にしてきているデップリンは素敵です。そして中三になってリーダーの在り方を学び、今、自分が成長していることを自覚しています。デップリンがそういう自分を検証するためにも、デップリンが大親分になってください」

チーチー塾のガキンチョたち（後編）

遊びの合宿、一日目

北アルプスのふもと、安曇野の木崎湖のほとりの小高い丘の上から、高校生六人と象兄ちゃん、豪利が湖畔の道路を見下ろしていた。

「来た、来た、キララ子とりサだ！ チビちゃん三人もいる！ ホッホがいっしょだ」

道路からキララ子とりサが丘の上を見上げて、「ヤッホー」と手を振ってきた。キララ子とりサは大きなリックを背負い、両腕には合宿でみんなで使う共同の備品を吊る下げ、勢いよく坂を上ってくると、「チャンチャーん！」「キイロチャーん！」と抱きついた。

「先生、こんにちは！ 到着しました！」

「おお、きたか！ おお、おお、高校生たちは女の子にこんな荷物を持たせたのか！」

「二人の希望なんです」とキイロが笑いながら言った。「女の子がこんな物を持っていると、大人の人たちがびっくりして声をかけてくるんです。ちょっと自慢なんです」

リサは錆びかかったブリキのバケツをつる下げ、バケツの中には火吹きだけ、火バサミ、

ナタなどが入っていた。キララ子は四十人用の大鍋を両腕でかかえ、大鍋の中には二升五号炊きの大釜、釜の中にはキャンプ用の鍋セット、包丁、まな板が入っていた。

「先生、わたしとリサね、大糸線の電車の中でお婆ちゃんに話しかけられたんだよ。それで合宿の話をしたら、『大町で合宿をやる子たちね。きょねんも電車の中で会ったのよ』って言われて、このオヤキっていうおまんじゅうを五つももらったんです。みんなで食べたらおいしかった。オヤキって信州の食べ物なんでしょ？ 先生、作り方教えて」

ホッホといっしょに、チビたちが大きなリックを背負って上ってきた。三歳児のタイヨウが「シェンシェー、クマくんもきた」と言って、熊のぬいぐるみを見せた。

女子高校生のチャンちゃんがかがみこんで、「あらー、クマくん、きたのねえ。うれしいねえ」と言って、タイヨウの手をにぎった。「わたしの名前はチャンちゃんよ。タイヨウくんと遊ぶ人なの。仲よくしようね」

中二のとてつもなく元気の良い女子五人が坂を駆け上ってきて、キララ子とリサを見ると、「キャーッ」と歓声をあげ、チビたちを見て、「えーっ、どうしてこんな小さい子がいるんですか？」と奇声をあげた。

林の中から、「こんにちは！ 到着しました！」と大きな声がして、デップリンと理王が現れた。中一の桜木雷介と木上茂樹もいっしょだった。デップリンがでかい声で言った。「みなさーん、きいてください。雷介と茂樹は昨日から、ぼくらの後を隠れてつけてきたんです」

雷介と茂樹は、デップリンと理王が松本城や松本市の伝統的な街並みを見学してから大町に向かうことを知っていたので、二人とも町田駅から八王子駅、八王子駅から松本駅まで、隣の車両に隠れて乗り、松本では見学する二人の後を見つからないようにして歩いた。日が落ちると、デップリンたちは大糸線に沿って歩き出した。

「あの人たち、大町までの数十キロを歩くつもりだよ。どこかで野宿するんだね」

途中でデップリンたちが食材を買ったので、二人も食材を買った。人家が少ない安曇野の田園の中を歩き続け、大糸線の最終電車が通り過ぎると、デップリンと理王は無入駅の屋根のないプラットフォームに入って、キャンプ用の携帯コンロや鍋を出して料理を始めた。雷介と茂樹もプラットフォームに入って、二人と離れた場所で料理を始めた。

しばらくして理王がいぶかし気に近寄って声をかけてきた。二人はさりげない風で「こんばんわ」と返事をした。冷静な理王がぽかんとした顔になった。あとはデップリンのびっくり仰天大きわざ。四人で肩を組んで踊った。

その夜は駅のベンチの上で寝袋に入り、満点の星空と天の川を眺めながら眠った。朝食は一つの鍋で、昨夜の冷や飯を雑炊にして食べ、一番列車がやって来る前に出発した。

「誰がそんなイタズラ考えでしたんですか？」。シオ子がいたずら目できいた。

「雷介だよ。雷介は理王くんが、スキー合宿で柵池高原スキー場の長いスロープを、ダンボールの厚紙に乗って滑り降りて行くのを見て、自分もいたずらしたかったの」

(中高生の合宿に三歳児が参加)

デップリンはホッホが大きな荷物を両腕で抱えているのを見て、「そんなでっかい荷物、どうしたの？」ときいた。

「タイヨウの敷き布団です」

「ママがちゅくった」とタイヨウが自慢そうにした。ところが、姉の小一のエリが、「タイヨウはおねしょするから、二枚持ってきたんだよ」と言ったとたん、タイヨウが「ダメ！ バカ！ おねえちゃんのバカ！」と腰を折って怒鳴り、空に向かって口を大きく開け、わあっと泣きそうになった。だが泣かなかった。くちびるをぷりんと突き出し、手の指で、くちびるをはさんだ。

チャンちゃんがさっと寄って、タイヨウを抱いた。豪利は突然の変化にとまどったが、すぐにのんびりした調子の声を出した。「おお、おお、タイヨウ、先生はね、小学生になってもおねしょしてたんだよ。子どもはおねしょするものなんだよ。ここにいるお兄ちゃんお姉ちゃんたちもおねしょしてたんだぞ。おーい、お兄ちゃんお姉ちゃんたち、タイヨウより大きくなってもおねしょしてた人、手を挙げてくださーい！」

「はーい」

中一生たちが何組かに分かれてやってきた。七年前、小一だった小春と小三だったキララ子が久しぶりに会って、手を取り合って喜んだ。

「十七時になりました。剣矢とオッチャンがまだ着いていませんが、みんなそろいましたので合宿を始めます」

アズミの声で木崎湖を望む庭に大な円ができた。合宿参加者は中一生が八人、中二生、中三生が七人ずつ、高校生六人、象兄ちゃまと豪利の三十名とチビンコ三人である。

豪利は生徒たちにチビンコが参加した理由を話してから言った。「チャンちゃんとホッホが主に世話してくれるが、小さい子の動きは予測できないから、きみたちも三人の動きをいつも目端に入れるようにしてくれ」

豪利は八泊九日間の宿舎となるこの信濃木崎夏期大学について説明した。「ここは北アルプスのふもとの安曇野の大町市で、おれは地元の高校を卒業するまで大町で育った。この巨大な木造の建物が信濃木崎夏期大学の講堂だ。この夏期大学は、地方の文化や教養を育てるために、学者や文学者、芸術家、ジャーナリストなどが、一般の人たちを相手に、毎年夏に講座を開いているのだ。大正六年に始まって、戦争中も休むことがなく、現在まで続いているもので、この地域の人たちの誇りだ。おれの知人から、夏期大学の理念はチーチー塾の教育に合っているから、この施設を借りて合宿をやったらどうかと勧められて、この施設を使わせてもらっている。感謝の気持ちを忘れないで楽しんでくれ」

「全体ミーティングは夕食の後にします。では夕食作りの当番の第一班は夕食作りにかかってください。それ以外の方はみんなで使う共同装備品を出し、高校生カウンセラーたちはチェックし、決めた場所に置いてください。もう一つ。講堂と新館をつなぐ渡り廊下でアッキーが食事作りをします。それについてはゴリ先生から話してもらいます」

「アッキーには強い食物アレルギーがあるので、アッキーは八泊九日間の自分の食事は全て一人で作る。アッキーの食料は何から何まで家から送られてきた物で、農薬、化学肥料が使われていない。冷蔵庫と食材置き場に、アッキー用とわかるように置いてあるから、手を触れないようにしてくれ」

生徒たちがさっと動いてそれぞれの作業に入ったが、鉄平オッチャンの妹の中一の桃香は丘の下を見ていた。「兄ちゃんのこと、心配か？」と豪利がきいた。

「心配じゃないけど、携帯電話に連絡くれてもいいのにさ」

「桃香は携帯電話なんてしゃれた物を持っているのか？ 便利な物らしいな？」

「父さんが持って行って無理やり貸してくれた。兄ちゃんにはこの電話番号を書いた紙を渡してある。たぶんアイツ、その紙を忘れたんだ」

「兄ちゃんは忘れ物が多いのか？」

「多い。ぼーっとして、人の話を聴いてない。何考えているかわかんない」

「夏期講習では自発的に勉強したぞ」

「そうだよ。家でも勉強した。ドラエモンしか読まない人がどうしちやっただろうって、みんなでびっくりした」

そこへ「シェンシェー、とった！」とタイヨウが走ってきて、にぎっていた手を開いた。

「おお、いいものをとったなあ。これは何なの？」

「セミのお洋服。あっち、いっぱい、いる」

「おお、セミのお洋服か！」

「軒の柱に抜け殻がいっぱいとまってるんです」とホッホが言った。

「見たいなあ。先生を連れて行ってくれるかな、タイヨウ？」

タイヨウは豪利の手を引いて、林に面した玄関に連れて行った。軒下の数本の柱に茶色の抜け殻が幾つもとまっていた。

「おお、お洋服をたくさん脱いであるね。ほら、地面を見てごらん。穴がいっぱい開いているね。これはね、セミが土の中から出た跡なんだよ。セミはこの土の中で、タイヨウが生まれる前から暮らしてきてね、すっかり大きくなったので、今朝、この穴から出て柱に上ったんだ。そして『やあ、出られたぞ！』と言って、このお洋服を脱いで、『さあ、歌おう。ぼくたちの歌を聴いておくれ』と、ほーら、歌っている。耳をすましてごらん」

湖面を渡ってきた風といっしょに、セミの声が木々の葉を揺らしていた。

「セミが飛んだ！」。中一の太郎が、タイヨウの隣りで腰をかがめて指をさした。「また飛ぶよ……ほら、飛んだ」

台所では食事作りが始まっていた。班は中学生四人と高校生一人のグループで、各班が交代で三十三人分の食事を作る。今夜のメニューは牛丼と野菜たくさんのスープと地元の牛乳である。今夜の親分は手際のいいキララ子だが、それでも中学生が作るから時間がかかる。生徒たちは文句を言わずに待つ。

二時間かかって夕食ができあがった。キララ子が自分たちの作った食事の説明を終って、それぞれが持参の食器に、二升五号だきの大釜と四十人鍋から、ライスと牛どんの煮こみを自分で盛り付け、全員そろって「いただきます」と言ったとき、ドタバタドタバタと廊下を走ってくる音がして、オッチャンと剣矢が勢いよく飛び込んできた。

「遅刻して、ごめんなさい！ ヒッチハイクで大型トラックに乗せてもらったら、大町と違う所へ行っちゃったんです」

「ヒッチハイク？ 大型トラックで？」

「新宿から高速バスに乗ったんだけど、途中のサービスエリアで、オッチャンが、『バスはつまんない。トラックに乗せてもらおう』って言って、長野ナンバーのトラックのドライバーに次々に話しかけて、乗せてくれる大型トラックを見つけたんです」

「オッチャンが？ そんなことやったんだ！」

「運転台が高くって、てんで気分よかった。でもさあ、おれたちまぬけ。大町は長野県だから長野までって言って乗せてもらってさ、長野市へ着いてから、『大町はどこですか？』ってきいたら、ドライバーのお兄さんが、『大町はあの山のずっと向うだ』って笑って、ここまで送ってくれたんです」

「いいお兄さん。だけどオッチャン、なんで連絡寄こさなかったんだ？ 桃香の携帯電話の番号を持ってるんだろ？」

「携帯電話ってなんだっけ？」

「やっぱりね。だけど兄ちゃんがヒッチハイク頼んだなんて、信じられない」

「本当だよ。おまけにオッチャン、ドライバーのお兄さんと川釣りのことで話が合っちゃってさ、ぼそぼそいっぱいしゃべってさ、合宿が終わったらそのお兄さんと釣りに行くって約束までしたんだ」

食事が終わってアズミがみんなに言った。「後片づけは第二班、親分は剣矢です。後片づけの班が次の食事当番になりますから、片づけ班は次の食事作りに必要な鍋、釜、包丁、食器、その他の置き場所をしっかりと頭に入れながら働いてください。油物やカレーなどは、ロールペーパーでおおざっぱに汚れをふき取ってから、洗いかごに入れてください。水のむだ使いをしないためです。入浴でも水を出しっぱなしで洗わないようにしてね。片づけが終わったら、高校生カウンセラーと中三生親分との合同ミーティングをやります」

片づけが終わるまで、小学校の体育館くらい大きいタタミ敷きの講堂で、円になってチビたちもいっしょにハンカチ落としをした。タイヨウが追いかけられ、キャーキャーとはしゃいで捕まえられる様子を、豪利は象兄ちゃまと並んで見た。「タイヨウはおねしょのことで、どうしてあんなに怒ったんだろ？」と、豪利はホッホとチャンちゃんを呼んだ。

「ホッホはタイヨウのおねしょのことを親からきいているのか？」

「はい、タイヨウのお母さんがタイヨウの前でぼくに言いました。でもそのときタイヨウはふつうにしていました」

「きみの家とタイヨウの家とはどんな関係なんだ？」

「タイヨウのお母さんがぼくの母の後輩です。でもタイヨウの家の様子は母から聞いたことがありません」

「そうか。じゃあきみとチャンちゃん、タイヨウのリュックの中の持ち物を点検してくれ。タイヨウもエリもいっしょにな」

しばらくしてチャンちゃん、ホッホが豪利の元へ報告に来た。

「いろいろの物がしっかりそろって、小さなナップザックもありました。紙おむつもあって、それをはいて寝るんだってことをタイヨウはわかっていました。動物の絵本が三冊もあったの」

高校生と中三生の合同ミーティングとなった。

「今年の合宿ではゴリ先生はなるべくしゃべらないし、指示もしないという方針です。合宿全体のリードはぼくたち高校生カウンセラーが指揮し、食事作りと後片づけとキャンプは中三生が親分となってリードします」

「いつもそうじゃん」と剣矢が言った。「夏も冬も合宿はゴリ先生はあんまり指示してないよ」

「先生は今年の合宿ではそれをもっと徹底したいと思ってるわけなの。そこにはリーダーというものについての先生の考え方があるから、先生、それについて話してください」

「一つの組織が生き生きと活動するかしないかは、リーダーの在り方によるとおれは思っている。先頭に立ってぐいぐい組織を引っ張っていくリーダー、それぞれの人柄や長所を生かしてお互いを響き合わせるリーダー、みんなに慕われてグループが自然にまとまってしまふタイプのリーダーなどいろいろいる。どのタイプであっても、魅力あるリーダーであってほしい。おれはきみたちに一番の人になってもらいたいとか、競争して一番になれとは思っていないが、人は年齢が上がるにつれて、何らかの理由でリーダーになる。そういうとき良きリーダーとは、そのグループを生き生きさせること、仲間にそのグループの一員であることが楽しくなるようにさせることだと思う。今年は、<リーダーシップを学ぶキャンプ>をやって、タイプの違うリーダーの姿を見たのだから、その経験を生かして、自分らしいリーダー像を描きながら、今日からの合宿を楽しんでほしい」

「ぼく、新井アズミがカウンセラーのポストとなってみなさんとやっていきます。去年はヒッポがポストでしたが、ヒッポは高三になったので、ぼくたちのアドバイザーになってもらいます。先輩としてヒッポ、何か話してください」

「ぼくはこんなに自由を大事にしている子どもの学び場に、八年もいられたことがうれしい。だからみんなもカウンセラーや親分として、人の長所に目をこらす、その長所をみんなの財産にさせる、ということを意識してやってほしい。ぼく個人として心がけたことは、ぼくにはく上から目線がある」とチーチーの仲間たちに言われたので、そうならないように気を付けたつもりだった。そしてできた、という自覚がある。ね、先生？」

「おお、できたよ。ヒッポの上から目線は、ものがよく見える証しで、それはヒッポの長所

だな。ヒッポの視線は『見くだし目線』にはならなかった。見くだし目線は相手を落ちこませるか反感を持たせるだけで、いいことは一つもない。ヒッポはそこに気をつけたから、気力、体力、知力抜群のリーダーになったよ」

「おれも相手が見えすぎて、相手を口汚くやっつけちゃうんだ」と剣矢がつぶやいた。

「やっつけたことを、あんたは反省ができるからだいじょうぶだよ」

「さて」とアズミがきいた。「この人はジュニアと呼ばれている高一生だけど、剣矢、オッチャン、ホッホは初対面だね。この人はどんな人に見える？」

「穏やかな人、安心できる人って感じです」

「この人はツッパリくんの弟だよ」

「えーっ！」と剣矢とホッホは直線的に立ち上がって、直角に体を曲げた。

次にキイロがきいた。「ホッホはチャンちゃんにも初めて会ったんだけど、どんな印象を受けたかしら？」

「はい、朗らかで、ぼくの妹たちを見る目も優しいです」

「そうなの。人が好きで、お年寄りや弱い人には自然に心を寄せてしまう人なのよ」

「では今年のカウンセラーはジュニアとモトキン、チャンちゃん、キイロ、ぼく、ヒッポの六人です。続いて象兄ちゃま、改めて自己紹介をお願いします」

「ぼくは東大工学部の学生です。先輩のヒューモクんの紹介で中三生の数学、理科の講師をさせてもらっています。ぼくはヒューモクンからチーチー塾の講師をやらないかと言われ、生徒たちの姿を説明されたとき、すぐに心を動かされて、講師を引き受けました。じっさいに授業で、チーチー塾の大らかさに心を惹かれています。ぼく自身、自分を考えるよい機会にめぐまれ、張り切って合宿を楽しみます」

「続いて、ゴリ先生、カウンセラーの役割分担のことですが、ぼくたち生徒で決めてしまっているんですか？ 誰が何の役をやるかは、一番大切なことですけど？」

「おれが決めれば、きみたちはすぐに納得してしまう。きみたちが決めたら、おれが思っていたこととは違う結果になるかもしれない。それがおもしろいんだ」

「だったら、ぼくにキャンプ用品の係をやらせてください」とモトキンがさっそく手を挙げた。「当然ジュニアの役だと思うんですが、ぼくは来年もカウンセラーをやりたいので、ボーイスカウトで活躍しているジュニアから、キャンプのいろいろを学びたいんです」

「ほら、おれが思っていたこととは違ったことが出てきた。おれはモトキンが、よき心やかかわいそうな人に出会ったとき、すぐに涙を出すということは、モトキンの天性の優しさから来ると思っているから、合宿ではみんなの心の状態に気を配ってくれる役をやってもらいたいと考えていた。だがモトキンの希望で別の展開になった。それがおもしろい。おれはチーチーを始めたとき、こんな生きのいい塾になるとまでは思っていなかったよ。こうなったのは生徒たちが考え、工夫し、主張してくれた結果だ。そんなわけで今年の合宿の進行は生徒たちにまかせる」

カウンセラーの役割が決まり、続いて全体ミーティングとなって、生徒たちが広い講堂に

集まった。豪利が空の段ボール箱を三つ持ってきて畳の上に置いた。しばらくすると、ホナミが段ボールの中に入り、エリがもう一つの段ボールに入り、タイヨウが三つ目の箱に入った。三人は箱から頭を出したりひっこめたり、箱から出たり入ったりを始めた。豪利と生徒たちはその様子を楽しみながらミーティングを進めた。

「タイヨウの突然の怒りにはたまげたな。タイヨウは毎晩おねしょをするらしい。きみたちはおねしょを目にしても、気にしない態度をとってくれ。チビたちは明日の日帰りキャンプでは、ホッホといっしょに第六班に入れる。六班の親分はデップリン、カウンセラーはチャンちゃんだ。男の子は火で遊びたがるから、タイヨウには好きなようにさせてやれ。危ないときは注意していいが、デップリンは声がでかいから、こわがられないようにしろよ」

ミーティング中に、ホナミが「お兄ちゃん」と走ってきた。ホッホが「今、お話しをしているから、あとにして」と言うと、豪利が「ホナミちゃん、話してごらん」と呼びかけた。

ホナミが「タイヨウくん」と大きな声で呼んだ。「先生に、クマくんも段ボールが欲しいって言ってごらん」

タイヨウがはっきりした声で言った。「クマくん、ほしい」

剣矢がバツと立ち上がって走り、段ボール箱を持って戻ってきて、タイヨウの前に置いた。「おお、剣矢、ありがとな。それからホッホ、小さい子が『お兄ちゃん』と言ってくるのには、小さい子なりの大切なことがあるのだから話を受けてやれ。声をかけていいかどうかは繰り返すうちにホナミはわかってくる。それと妹に対するきみの態度は優しくてよかった」

ボスカウンセラーのアズミが話しを続けた。「全体ミーティングは十五分で終わるようにします。その理由は人の集中力は長くは続かないからです。チーチーでは『言いたいこと、結論に近いことを最初に言い、続いて、なぜならば』と言うようにしています。それは、最初に結論を言うと、聴く方は『どうして?』と興味を持ち、話す人は聴く人の興味に沿って話すことができるからです。では、このあと、デップリンにもそうやって話しもらいます」

「みなさん、こんにちは！ ようこそ、安曇野の町へ！」

「こんにちは！」

「力みなぎる声を、ありがとうございます。ぼくは中三生親分たちの中の大親分をやる、ご存知デブのデップリンです。ぼくはチーチー塾をこよなく愛しています。なぜならチーチーには<愛の心>があるからです。この塾が始まったところに、ドラゴンやヒューモくんという大学生がいて、愛の心をツッパリくんに伝えました。ツッパリくんはその愛の心をここにいる高校生たちやぼくたちに伝えました。そしてぼくたち親分は愛の心というバトンを、みなさんにリレーしていくつもりです。みなさんも愛の心を後輩たちにリレーできるように、この合宿で、楽しみ、挑戦し、失敗し、反省し、また挑戦してってください。ではぼくのあとを、力いっぱい復唱してください。愛の心をリレーするぞ！」

「愛の心をリレーするぞ！」

「みなさん、わたしは高校生カウンセラーのキイロです。よろしくね。では明日は木崎湖キ

キャンプ場で日帰りキャンプをします。朝十時に出発、三十分ほど歩いてキャンプ場、そこで各班ごとに野外炊飯をします。昼食が終わったら湖で遊びます。水着を持って行ってください。午後三時にキャンプ場を出発して帰ります」

「以上で今日のスケジュールは終わりです。このあとは好きなだけ遊んで、しゃべって、交流してください。今年は小さい子がいますが、一度眠ったら目を覚まさないそうですから、大騒ぎをしてもだいじょうぶです」

「タイヨウくん、もうねんねしちゃってまーす」

タイヨウは畳の上で、小さな体をコロんと丸め、指をしゃぶって眠っていた。ホッホが小さな布団を広げ、ヒッポがタイヨウを抱いて布団に寝かせ、ホナミが熊のぬいぐるみをタイヨウの顔に当てた。太郎は枕もとに、セミの抜け殻の入っている虫かごを置いてやった。

エリがタイヨウの洋服を脱がせ、紙おむつをはかせようとしたので、豪利は「エリちゃんはおむつの世話までできるのか。えらいねえ。でももう眠っているから、今夜はこのまんま寝させてやったらどうかな？」

「タイヨウ、おねしょしなかったことない。パパにいつも叱られてるもん」

「あ、そう。でもここでは叱らないよ。このまま寝させてやりなさい」

「エリちゃんもホナミちゃんも、もう寝る時間だ。おしっこしておいで」

「トイレ、こわい」

「チャンちゃんがついて行ってあげる。今夜はわたしもホッホくんもそばに寝るから、夜中におしっこしたくなったら、起こしてね」

中二の女の子たちがにぎやかに笑った。「わたしたちもこわいもん。暗い廊下を渡って、トイレも深い汲み取り便所だもん。わたしたちもチャンちゃんを起こしていいですか？」

布団部屋から布団が持ち出されて講堂の隅に広げられ、おしゃべりする者、トランプする者などのグループができた。

豪利はタイヨウの寝姿を見ながら象兄ちゃまに言った。「三歳の子なのに、おねしょをしたらパパに叱られるのか」

「タイヨウは親指と小指でくちびるをはさみましたが、泣くまいとしたんでしょうね」

「うん、無理があるな……さて、今日一日ごくろうさん。何か気づいたことはあるかい？」

「デップリンには授業で見ている以上に、独創性を感じました。彼の熱い心は人を動かします」

「おおそうかい。彼の言葉はおおげさだが、必ずしも独創的ではない。だがきみが今言った『彼の熱い心は人を動かす』とは、彼の心は独創的ということなんだな。ありがとな。さて、おれは夜はガキンチョの騒ぎには付き合えない。静かな教育会館で寝る。きみはどうする？」

「ぼくは生徒たちとしゃべりながら、講堂で寝ます」

(中二生がタバコを吸う)

朝、台所のにぎやかな音で豪利が目覚め、台所をのぞくと、剣矢の班が朝食の準備をして

いた。メニューは食パン、町田市の名産の独逸屋のソーセージ、スクランブルエッグ、野菜サラダ、牛乳である。大きな金ボールの中に四十個の卵が割られて、金色に光っていた。それを剣矢のかけ声で、中一の少年と中二の少女が「シャカ、シャカ、シャカ」と声を合わせながらほぐし、巨大なフライパンに入れて、スクランブルエッグに作っていった。

豪利は講堂に行って「おはよう」と声をかけると、「おはようございまーす」と生徒たちは勢いのよい挨拶を返してきた。豪利がタイヨウの寝ていた方へ眼を向けると、タイヨウは着たままで寝た洋服を、エリに脱がせてもらっているところだった。

「タイヨウ、おはよう。エリ、ホナミ、おはよう」

タイヨウが幼児の困った顔で豪利を見上げた。

「いいんだ、いいんだ、おねしょはしていいんだぞ」

エリが「お尻を洗ってやりたい」と言うと、チャンちゃんが「お風呂場へ行こう」とお尻を出したままのタイヨウの手を引いて行った。エリとホナミ着替えを持って追いかけた。

朝食の片づけの後、アズミが中三生親分とカウンセラーを集めた。「大親分のデップリン、お言葉をどうぞ」

「かしこまりました。では大親分からお言葉を差し上げます。ぼくがこよなく愛するチーチー塾の、こよなく愛する夏の合宿が始まりました。張りきっていきましょう。でも張りきりすぎると、ものが見えなくなりますから、リラックスしていきましょう」

「それって、おまえのことじゃん」と剣矢が笑った。

「でもね剣矢、デップリンの言葉は、やる気にさせるよ」とアズミが目を三日月にした。「では今日は日帰りキャンプです。高校生は生徒たちを指導するときのカウンセラー心得を復唱してください」

「口を出しても、手は出すな！ やってみせても、やってやるな！ ミスは責めるな。おもしろがれ！」

「親分さんたち、ご飯の火かげんは指導できますね？」とキイロがきいた。

「できます。初めチョロチョロ、中パツパ、赤子泣いてもフタとるな」

「そんなのおれ、判断できないよ。赤子の泣き声が弱くなりだしたら、でき具合を見るために、フタ取って中を見ていいでしょ？」

「そうよね、中を見て、お米たちが仲良く肩を組んで、表面がふっくら盛り上がっていたら、さっとフタをして、火を落とせばいいわよね、ジュニア？」

「いいです。だけどフタを取らなくてもできます。箸を持ってフタに当てると、ぐつぐつが指に伝わってきます。ぐつぐつがなくなったときに火を落とせば、後はカマドの余熱でおいしくできます」

「では今日の野外炊飯のメニューは白いご飯と山賊鍋です」

「山賊鍋って？」

「食事作りキャンプで、理王が『チーチーの料理は山賊料理みたいなものだ』って言ったことを覚えているかしら？」

「覚えている。いろいろの野菜を細かく切って、表面積を大きくして煮こめば、具からスープにいい味が出るって理王は言った」

「そこから山賊鍋という名前にしたの。ここにいろいろの野菜とたっぷりのお肉があります。各班ごとに好きな材料を使ってください。味はお好みです。塩味、しょうゆ味、ミソ、カレー粉、トマトジュース、どれでも使ってください。ダシもあります」

「班ごとに違う味にして、味を確かめあおうよ」

「ぼくの班は牛乳で煮こみたいですよ。大町の松田牛乳は初恋の味です。松田牛乳を加えてください」

「おまえ、しょっちゅう初恋してるじゃん」

「デップリンの心はいつも温かいのよ。わたしもデップリンが幼児のときの初恋の人だったの。では、松田牛乳を加えます。先生、アッキーはどうしますか？」

「理王の班の隣りで煮たきをさせてやってくれ。アッキーは料理はできるが、薪で火をたくのはできないと思う。ジュニアが面倒見てくれ」

「では、準備ができた班から出発してください。十時半に炊事開始です」

「ぼくもどれかの班に入っていいですか？」と象兄ちゃまがきいた。

「おお、オッチャンの班がいい」と豪利が言った。「<オッチャンらしさ>についてのきみの言葉はよかった。その言葉に対してオッチャンが『おれっていいじゃん』と言ったのも感動だった」

「チーチー塾の生徒たちは言葉を大事にしていますね。ぼくは生徒たちが、『やばい、ダサイ、うざったい』とか言うのをきいたことはありません」

「おお、いいことを指摘してくれた。おれは生徒たちがそんな単語の連発だけで、わかりあった気になるような人間にはなってほしくないんだ」

真夏とは言え、信州はもう秋風で、木崎湖の空にはパラグライダーが舞っていた。湖畔の松林のキャンプ場に、チーチー塾の生徒たちの薪を割る音が響き、洗い場では生徒たちが野菜を切り、班ごとにカマドの前で火の準備をしていた。リサの班はリサを囲んで四人がよい顔をし、オッチャンの班では、生徒たちがオッチャンの手に行っているニンジンを見ながらうなずいていた。

理王の班の隣りで、ジュニアがアッキーに説明していた。豪利はジュニアに、「きみには話してなかったが、アッキーには軽い知的障害があるんだ。言葉だけで説明されるとわからないことがあるので、やってみせながら、ゆっくり説明してやってくれ」と言った。

「はい、わかりました。アッキー、もう一度やりながら説明しなすね」

豪利はそのとき、「これがマッチって物なの？　へーっ、これで火が付くんだ！」と驚く中一の次郎の声に気が向き、アッキーの表情が変わったことに気がつかなかった。

そこへ「たいへん、たいへん！」と騒いで、チャンちゃんがタイヨウを連れて戻ってきた。

「岸に立っていたら、モーターボートの立てた波で、タイヨウくんの靴がぬれてしまったの。」

タイヨウが『洗う』で言ったから、『湖の水だから汚くないよ』と言ったんだけど、『靴、きれいにする！ パパ、おこるの』って言ってきかないの」

「パパはおこるのか？」と豪利が言ったところへ、中二の柴崎マキトがやってきた。

「タバコ吸っていいですか？」

「ん？……タバコ？……どうして吸いたいんだ？」

「カマドの煙のにおいをかいでいたら、煙がなつかしくなって、縄文時代を思ったんです」

「ほお、そんな思い方ができるのか？……今はどこの遺跡を手伝ってるんだ？」

「多摩の遺跡です」

「おお、そうか……うん、吸っていい」

「このキャンプ場の中では吸いません。あの岸で吸います」

「かっこよく吸えよ」

「はい、紳士みたいにかっこつけて吸います。親分の理王くんにも許可を求めます」

料理ができ上がった班から食事になった。カウンセラーとリーダーたちは互いの班の山賊鍋を味わった。

自炊生活をしている象兄ちゃまが理王に言った。「これはいいね。味を決めずにたくさん作っておいて、一日ごとに味を変えていけば何日も楽しめるね」

生徒たちは食後の片づけをしてから水着に着替え、アズミの元へ集まった。「木崎湖は周りに人家が少ないので、家庭の排水が流れ込まず、透明度が高いです。北アルプスからの水のため、水温は高くありません。泳いでいると水温が変わるところがあるけど、あわてないようにね。カウンセラーは合宿中、緊急の場合に備えて首から笛を下げていますが、何でもない時に吹くことはありません。笛がなったら、何か起こったと思って、音の方を見て、カウンセラーの指さす方向にすぐに走ってください」

高校生カウンセラーたちは生徒の遊泳力をチェックした後、生徒といっしょに泳ぐ者とボートに乗って見張っている者へと別れた。

生徒たちは水面に反射する光の粒になって、叫び、飛びこみ、戯れ、三時まで遊んだ。

帰りの時間となり、ゴミを拾ったり、忘れ物がないかを点検しているとき、デップリンのでかい声が響いた。

「これはなんですか、タイヨウ！ これはなんですか！ 洗った食器の入っているかごの中に、靴を入れるなんて、とんでもないことです！」

タイヨウがふるえあがった。「おねえちゃん」と叫んで周りを走り、キャンプ場から走り出て行った。

「追いかける！ 夏期大学に探しに行くかもしれない」

豪利が叫ぶ前に、中一の太郎が真っ先に追いかけて、そのあとを生徒たちが追った。

デップリンが豪利のところへ寄ってきた。「もうしわけありません。大声を出してしまいました」

「タイヨウはおびえてしまったぞ」

タイヨウがチャンちゃんと太郎に手を引かれ、生徒たちに囲まれて戻ってきた。

「小川の前に立って川の中を見ていたの。お魚がいたのかね」

姉のエリが熊のぬいぐるみを持ってタイヨウを待っていた。タイヨウが走っていくと、エリは松の木の根元に座ってタイヨウを抱っこした。タイヨウは指をしゃぶるとすぐに眠ってしまった。豪利がタイヨウを車に乗せようとする、ヒッポが「ぼくがおんぶして帰ります。タイヨウが目覚まして、みんながいないと混乱するかもしれませんから」

生徒たちが夏期大学に戻ってくると、豪利はカウンセラー、親分、象兄ちゃまを食堂に集めた。

「タイヨウは自分の靴を洗って、食器カゴの中の食器と並べて置いたんだ。デップリンは、三歳の子がそんなきちんとしたことをやった理由を考えて、ほめてやってから、笑顔で注意したら、タイヨウは理解できたんじゃないのかな」

「はい、深く反省しています」

「それでタイヨウについての疑問なんだが、きみたちも気がついていることがあったら言ってほしい。先ず、おねしょのことをエリに言われたら、タイヨウは表情を変えて怒った。どうしてあんなに怒ったんだ？ その時タイヨウは泣こうとして口を大きく開けたのに、口を閉じて、指でくちびるをおさえた。泣くまいとしたんだろうが、なぜ泣くまいとしたんだ？ そしてきっきはデップリンに叱られておびえた。おれは大人も含めて、人があんな異常なおびえ方をするのを見たことがない。以上がオレの疑問点だ。きみたち何か知ってることはないか？」

「タイヨウが口を開けて泣きそうになったとき、エリが『お口、パッチン』でタイヨウに向かって叫んだんです。それでタイヨウは、指でくちびるを閉じようとしたんです」

「お口、パッチン？ 口を閉じろって意味でか？ 三歳の子に『泣くな』って、七歳が言ったのか？」

「エリは『タイヨウが泣くと、パパが叱る』って言ってました」

「三歳の子が泣くと親が叱る？……なんだ、それ……きみたち、エリから家庭の様子をそれとなく聞き出してくれ」

「わたしはエリちゃん、ホナミちゃんたちと、お人形ごっこで遊びながらきいてみます」

「お父さん役やお兄さん役なら、おれたちもやるよ」

「ぼくはどうしたらいいのでしょうか？」

「きみはもう巨大な恐怖の怪獣になってしまったよ。きみはタイヨウに近づくな。目が合ったときだけにここにこしてやればいい」

ミーティングの後、豪利と象兄ちゃまが話していると、アッキーが「先生に話していいですか？」とやってきた。

「先生はジュニアに、ぼくには知的障害があるって言った。言ってほしくなかったです」

「えっ、そう？ 中三生たちは知ってることじゃないか。どうしてだ？」

「知ってる人たちはいいけど、他の人には知ってほしくなかった」

「ふーん、そうか。ではきくが、きみはジュニアの説明がわかっていたのか？ わかってない顔をしていたぞ」

「よくわかってなかった。だけどそれがぼくだと思ってる。ぼくはこういうことがわかんないんだって思って聴いてる。けど、ほかの人たちは、ぼくのこと、知らないでいい」

「おお、いい覚悟だなあ……アッキーが自分をそんなふうにかえることができるなんて、おれは知らなかった。そうか、きみのことをジュニアに話していいかをきいてから言うべきだった。悪かった。だけどきみが言わないでくれと言っても、おれはジュニアに言ったよ。どうしてかわかるか？」

アッキーは首をかしげた。

「きみが小四のときだったが、ある文章を読ませたら、一人の男の子に、「どうしてそんなに読めないの？」って、いかにも馬鹿にされた言い方をされて、きみが殴りかかったことがあったよな。覚えているか？」

「先生が殴り返せって言って、机をどけた」

「うん、二人は向かい合っただけで終わったけれど、おれはきみに感動したんだ。そしてきみに障害があることを、おれが前もって生徒たちに知らせておけば、きみは馬鹿にされることはなかった、と思ったんだ。障害があるということを知っていて、人を馬鹿にするやつはチーチーにはいない。もう一つ、きみは『口で説明されたらわからない。やってみせてほしい』とおれに言ったことがある。親もおれにそう言った。だからジュニアに障害のことを話したんだ。おれの言っていることがわかるか？」

「全部はわかんないけど、わかる」

「うん、そうか、おれはきみが抗議してきたことに感動してるんだよ。考え方にも感動している。このことは食後にみんなに話すからな。きみが反対しても話す」

そこへキララ子とリサとチャンちゃんがやってきた。「タイヨウくんはおねしょをするとパパに叱られ、赤ちゃん言葉をつかうと叱られ、泣くと、『男は泣くな』ってたたかれるそうです」

「男は泣くな、ってたたかれる？……おい、チャンちゃん、今朝、タイヨウのお尻を洗ってやったとき、体にアザはなかったか？」

「その気で見ないけど、なかった」

「それならいいが、チビたち三人を風呂に誘って、タイヨウの体を見てくれ……エリやママもパパにたたかれているかをききだしてくれ」

(軽度障害者アッキーの抗議)

夕食後、豪利は生徒たちを集めた。「今日、おれはアッキーから抗議を受けたのだが、その抗議の内容がよかったので、きみたちにも知ってもらいたいと思って、アッキーの小四から今日までのことを詳しく話す。アッキーも話すことを了解している」

豪利は、小四のアッキーがひらがなの文を、ほとんど読めなかったこと、そこで絵本を読むことから始め、今ではほととつとただけど読めるようになり、外国人の日本語勉強にも付き合ってくれたこと、そして今日の豪利への抗議の様子までを語った。

「以上だが、アッキー、ほかに何か言いたいことがあるか？」

「……先生は生徒にそんな文句言われて、悔しくないの？」

「きみに抗議をされてうれしい、っておれはさっき言ったぞ……あ、そうか、きみはくこうぎ>って、どういう意味だと思う？」

「ぼくのお父さん、大学の先生で、講義やっているから……」

「その講義とは違うんだ。きみがおれに言ってきたのは……文句か？……いや、もっと質の良い……うん、質の良い文句をきみはおれに言ってきたんだよ。だからおれは悔しくないなあ。おれはさ、子どもの成長に手を貸したくてチーチー塾を開いたんだぞ。教えた子が良い文句を言うようになったなんて、おれの指導の成果だって思えてうれしいんだぞ。教師ってのは、生徒が自分を越えたり、生徒から質の良い文句を受けたりしたら、教師の誇りなんだよ。アッキーの成長はおれの自慢なんだぞ」

中二の柴崎マキトが立ち上がった。「ぼくは昨日、町田から大町までずっとアッキーといっしょでした。アッキーはよくしゃべって、よく笑ったんですけど、ときどきぼくの言ったことが理解できてないみたいで、変だなと思いました。今、アッキーのことを知ることができてよかったです。ぼくは障害のある人たちが真剣に生きている姿に共感しています。将来、そういう人たちと過ごしたいと思っています。ぼくはアッキーと友だちになれてうれしいです」

生徒たちの共感の音がさざ波のように広がっていった。

アズミがアッキーを見ながら言った。「合宿の良い幕開けに明けになりました。ぼくたちカウンセラーはアッキーのことをよく知らなかったから、良い話をきくことができました。これで全体ミーティングを終わります。このままカウンセラーと親分の合同ミーティングを続けます」

中二の少女たちがマキトとアッキーに駆け寄り、二人の手を取って引っ張っていった。剣矢がその姿を見送りながらきいた。「ゴリ先生、おれのサッカーチームにマキトと同じ学校の選手がいて、そいつが『おまえの塾に入った柴崎マキトは不良だ』って言ったんだけど、そうなの？」

「剣矢はどう思う？」

「不良なんかじゃないよね、みんな？」

「ちがう！」。デップリンが叫んだ。「チーチーに、ああいう人が入ってくれたことを感謝します。理王、あなたはマキトを、どう思いますか？」

「清々しい人柄を思っていた。野外活動もやっているみたいで、火おこしや米たきをなめらかにやるし、質問の内容や理解の仕方がよくて楽しい。ジュニアはどう感じましたか？」

「ぼくの兄貴に似ているところがある」

中三生たちが大きく反応した。「先生、マキトはなんでこの塾に入ったんですか？」

「うん、マキトはおれの娘たちと同じバイオリン教室の、生きのいい小さいな生徒で、両親もとてもかわいがっていたんだよな、チアン？」

「そうなの！」とチャンちゃんが応えた。「走り回って、人なつっこくて、かわいかった」

「ところが、マキトは中学生になったらケンカをするようになって、警察にも何度も補導されているんだ。それで親がチーチーに入れてもらえないかと、おれのワイフに相談してきたんだ。おれは、不良をやるくらいの子は、はっきりしたものを持っていて、それが世間の常識とぶつかって、不良と思われてしまうことがあると思っているし、小さい時に親に愛された子は、気持ちが安定しているから、不良をやっているとしても一時的なものかもしれない、と思っているから、おれはマキトに興味を持って、授業見学に来てもらったんだ。そうしたら英語のカード取りを見ながら、マキトが母親によく話しかけるんだ。おれはあの歳では母親といっしょに道を歩くときでも、『この人、おれと関係ない』って顔をして離れて歩いてきたから、マキトの姿には感心して、おれの方が入塾歓迎になってしまった。マキトが入ったときには、アッキーがまだ外国から戻っていなかったから、中二には男子はいなかったんだが、マキトは女の子たちともしっかり話ができたんだ」

「彼は夏期大学の敷地の中ではタバコを吸っていないみたいですね」とヒッポがきいた。

「うん、こういう貴い場所ではマキトは吸わないよ。彼は剣矢と同じで、原理、原則を持っている。『タバコを吸っているところを、警察に呼び止められ時はどうしたらいいか？』ときいたから、『責任はおれにある。きみはきかれたことは何でも話せ』と言ってある」

「マキトの学校での様子を先生はご存知なのですか？」

「担任教師とはよくぶつかるみたいで、それについては相談してくる。ついこの間も担任から、『来年の修学旅行におまえを連れて行けない。よその学校の生徒とケンカするはずだから、学校に残って勉強しろ』って言われたんだって。それで相談に来た」

「えーっ、一年も先のことをですか！」

「まあ、たくさんの生徒を預かる教師としては、マキト一人に振り回されたくないということだわな。それでおれは『行かなきゃいいじゃないか。学校にも行くな。その間、町田市図書館で考古学の本を好きなだけ読むなり、行ってみたいと思っている遺跡を、泊まりがけで訪ねたりしたらいい』と言ったんだ」

「マキトはどう答えましたか」

「ちょっと意外な顔をしたから、『きみは修学旅行に行って、ガンをつけたのつけられたのをやりたいんだろう？』ってきいたら、そんなような顔をした。おれは『日本文化の歴史の地に行くんだぞ。法隆寺の材木のヒノキは、山の中で千三百年間生き抜いたものが切られて使われ、法隆寺になって更に千三百年間が経っているが、カンナで削ると今もいい香りがするんだってよ。歴史に興味のあるきみが柱に触ったら、きみの感性は何かを感じるかもしれないんだ。そんな感性の人間が、仲間にかっこつけるためだけで就学旅行に行くのか？』と言ってやった」

「それでも、『行きたい』と言ったら、先生はどんなアドバイスをするんですか？」

「そうよなあ、旅行のコースは前もってわかっているのだから、『生徒たちのコースとは逆に回って、例えば法隆寺でばったり出会って、担任教師やクラス仲間に逆回りしてきたことを自慢して、そのままバイバイしろ』とでも言おうかな……それとも『山の中とか河原にテントを張って、三泊四日、法隆寺を徹底見学しろ』とでも言ってやろうかな」

「マキトは担任を嫌っているんですか？」

「いや、嫌っていない。担任は若い教師で、説教をしないで、本気になってマキトに怒ってくるんだって。警察に補導されて、担任が引き取りに行っても、それがつまらない理由だったりすると、担任はお巡りさんとケンカするんだってさ。ちょっとかわいくて、マキトは兄弟ケンカをしているような気分になるらしいよ。学校出たてで、いきなり先生って呼ばれることになった若い教師は、くそ真面目に生徒と向き合うんだろうな。『マキトの方が余裕がある。きみが先生を育ててやれ』って言ってやった」

「マキトは何て言いましたか？」

「十四歳が二十四歳を育てるんですか、ってびっくりしたから、『おれはこの歳になっても、生徒たちに育てられていて、それが楽しいんだ。マキトは担任が若い時代に最も手を焼いた生徒の一人になってやれ。心ある教師なら、そこから学ぶよ』と言ってやった」

「はあ、ぼくの親戚は教員、元教員だらけで、チーチーの姿にはみんな感銘を受けているんだけど、この話にはどう反応するかなあ？」

「今日はもういいだろう。ほかにおれに質問のある者はいるか？」

「小春のことですが、あのまま学校へ行っていないんですか？」と理王がきいた。

「うん、小一の五月から休んだままだ。今年中一になったから、おれは学校へ行くことを勧めて、小春は行ったんだが、クラスの女の子たちにグループができていて、仲間に入れてもらえないんで行くのをやめてしまった。『小春のニコニコには、いずれみんなの心を開くよ』って励ましたんだが、『面倒くさい。わたしにはチーチーがあるからいい』とあっさりしたもので、一か月行っただけだ。だけど小春はリサに教わったり、同じような子たちの親がやっている教室で学んでいて、勉強はよくできる。本も読む。精神的に強い子だ」

「太一が中一になりましたが、相変わらず何も言わないままですか？」とモトキンがきいた。

「そうなんだよ。太一が入塾して二年半になるのに、おれは太一のことをさっぱりわからない。太一は塾へやってくると台所の本棚の三十センチ前に正座して、本の背表紙をじっと見つめたまま、だれとも目を合わせないんだ。『授業を始めるよ』と言うと、とことことと輪の中に入ってカード取りをやるのだが、カードに飛びつくでもなく、取れても表情を変えない。親は彼の様子を知らせたメモをよくくれるんだが、なぜ太一がそこまでしゃべらないかはわからないみたいだ。太一は授業は休まない。勉強はすばらしくできる。キャンプもスキー合宿も全部参加しているが、親に言われたから参加、って感じじゃないんだ」

「太一はわたしの班だけど、声をきいてません。キイロちゃんはきいていますか？」

「ごめんなさい。太一のことは気にもなりませんでした」

「そうなんだ。彼の存在が気にならないんだ。でもな、妹を連れて電車で岩手のお爺ちゃんの家遊びに行くことを、小三からやっているんだってさ」

「あっ、そうだ、マキトとアッキーは太一といっしょに町田からここまでやって来たんです」と理王が二人を呼んだ。

「はい、ぼくたちは大町が初めてなので、太一は電車の時刻と乗り換え駅の電車の時刻を、メモに書いて渡してくれました。ぼくたちはそんなこと、太一に頼みもしませんでした。町田駅に行ったら太一が一人でいたので、誘って、ここまでいっしょに来ました」

「その間、太一とはしゃべったの？」

「全然。ぼくとアッキーだけでしゃべってました」

「太一はどんな様子だった？」

「どうってことなかったです」

「ゴリ先生みたいな人が太一のことわからないってことは、太一が不安そうにしてないからかな？」

「でも、太一は内心は不安じゃないのかな？ 放っておいていいのかなあ？」

「ほら、ほら、太一を見て」とアズミが指でさした。「自分の周りを荷物で囲んでいるよ。人を寄せ付けないようにしてるんだよ」

「そうなんです」とモトキンが心配顔で言った。「三月のスキーのときも、太一は宿で自分の階段ベッドの場所が決まると、そこに登って、中からカーテンを閉めてしまったんです。それを茂樹がパッと開けて、『遊ぼうよ』って誘ったんだけど、少ししたらまた閉めたので、『閉めないでよ。見るくらいなことしなよ』って、また開けたんです」

「ありがたいねえ、きみたち高校生は、おれが気がつかないことを見ているねえ。おれの手足どころか、目となり頭になってくれているよ」

「チビちゃんたち、お昼寝から覚めました。チャンちゃん、お風呂に入れましょう。わたしもリサもいっしょに入りませす」

「キララ子、ちょっと待って。ねえ、先生、マキトのタバコのことを、二年生と一年生にも話した方がいいんじゃないでしょうか？」

「その必要ないよ」と剣矢が言った。「マキトがでっかい声でタバコの許可を求めるのをみんな聴いてたよ。二年生の女子たちはマキトのことを知ってるから笑っていたし、一年生もそんなに変な顔してなかったもん」

「そうだろうか？ 小学生クラスから上がってきた子たちはそうかもしれないけど、中学生になって入塾した生徒が、中一に三人いるんだよ」

「ゴリ先生、中一の太郎と次郎はいどこなんですか？ 体つきが似ていますし名前も太郎と次郎です」

「いや、知らない。太郎はデップリンの紹介で入ったんだが、そうなのか？」

「いここではありません。ぼくは子どもの剣道クラブで太郎といっしょでした。太郎は弟の可愛がり方が上手で、お父さんはすばらしい紳士です。二人に親族関係はありません」

「キララ子は どうして その二人のことを きいたんだ？」

「太郎と次郎は寄ると触ると口ケンカばかりしているんです。二人ともこの塾の楽しさがまだわかってません。そういう子はタバコのことを変に宣伝しちゃいます」

「そうよね」とキイロが言った。「わたしの家はお店をやっている、チーチー塾のことがお客さんとの間で話題になることがあるんです。お客さんの中には、チーチー塾は勉強ができる子しか入れない塾、って思ってる人がいるし、逆に遊んでばかりの塾と思っている人もいます。うわさって尾ひれがつきます。喫煙が変なうわさにならないように、先生は説明してやってください」

「そうなんです。ぼくたちは友だちにチーチーの楽しさを語りたくって、合宿のことを話すよね。そうすると、遊んでばかりの塾、と思ってしまう人がいるんです。そんな人にぼくは『勉強はちゃんとやる塾だよ』なんて言いません。けっきょくぼくは<遊んでばかりの塾>にしているんです。中学生に喫煙を許すという常識外れのことをしたんですから、先生は一年生、二年生にきちんとした説明をしてください。司会はキイロがやってね」

ミーティングが終わって、豪利は象兄ちゃんにきいた。「タバコの件をどう思う？」

「生徒たちが、先生に中一、中二生たちへの説明を求めたことには感心しました。先生はどう説明されるんですか？」

「生徒たちが真正面からぶつかってきたのだから、おれも真正面から受ける。太郎と次郎がケンカばかりしているとは、おれは知らなかった。教室でもそんな姿を見ていない。太郎は授業で良い発言をするんだ。入塾を申しこみに来たときのお母さんもいい感じだった。太郎がタイヨウを見つめる目はお母さんと同じ目だよ。その太郎がケンカばかりするって、どうしてなんだ？」

風呂から出たチャンちゃんがやってきた。「タイヨウくんの体に青いアザはなかったよ」

「お、そうか。それはよかった」と豪利は言って、台所にいるキイロに問いかけた。「タバコのことなんだが、みんなにはこんなふうに話してほしいというものがあるかい？」

「マキトが縄文時代を思ったということ、おもしろく話してやってください」

リサがやって来た。「みんながホナミちゃんとエリちゃんに上手に遊んでやっています」

豪利が見に行こうと渡り廊下を通って行くと、アッキーが廊下の隅で夕食の豚汁の準備をしていて、それを見ていた中一の少女サユリが、ふっくらとした表情で話かけてきた。

「アッキーのこれだけの種類のお野菜、お米、調味料が、どれも農薬も化学肥料も使ってないんだってよ。アッキーのお母さんが一つ一つ生産者を探して手に入れたんだって」

「そうなんだよ、おれもお母さんからきいてはいたが、合宿中の全メニューに合わせて材料を用意したんだから、母親ってたいしたものだな」

「わたし、大学は農学部に行くつもりです。だからアッキーのお母さんに話をききたい」

講堂ではいくつかの輪ができて遊んでいた。どの輪にも中一から高校生までが入っていて、一つの学年だけで固まっていたのはなかった。

キララ子とアユ子が段ボールの箱の上で、厚紙に人の絵を描いたり、ハサミで切りだして

紙の人形を作って、エリとホナミを相手に遊んでいた。そばではチャンちゃんがタイヨウに「七匹の子ヤギ」の絵本を読んでやっていた。「これ、タイヨウが持ってきた絵本とスケッチブックなの」

講堂の一つの隅では、壁を三角形の二辺にし、底辺はリュックサック、帽子、水筒、小荷物を並べて作り、その三角形の真ん中に、太一がちょこんと座っていた。その様子を遠くから見ながら、理王とモトキン、中一の小春と茂樹が話しこんでいた。豪利が寄って行った。

「ああやって太一は自分の城を作っているのか？」

「そうなんです。閉じこもっているんです」とモトキンが困った顔をした。

「中一生たちは話しかけないのか？」

「話しかけてます！ だけど、あいつ、こっちの顔見ないから、話が續かないんです」と茂樹が言うと、「アイツをわたし、きっと笑わせてやる」と小春がふんわりと言った。

「あの城を壊そうか」と理王がつぶやいた。「荒療治が必要だ」

「それ、やりましょう！」。茂樹がさっと立ち上がった。「小春、ぼくを追いかけて！」

「うん、わかった！ 追いかける！」

茂樹がとつぜん「キャッ、キャッ、キャ」とサルの真似と大声で走り出し、「待てー、サル！」と小春が追いかけた。二人は大声をあげながら生徒たちの間を走り回り、太一の三角形の中に走りこんで、茂樹が底辺を作っている小荷物につまずいて派手に転んだ。小春が小荷物を拾って「こんな所に荷物が置いてあったら、あぶないよ」と太一の前に行き、「どけていい？」ときいた。太一は目を伏せたままだった。すると小春は座りこんで、太一の顔の三十センチ前まで自分の顔を近づけて、「どけて、いい？……ねえ、こっち見て」と小荷物を自分の顔の高さにかかげた。太一が目を上げた瞬間、小春は荷物と首をリズムよく左右に振ってから、ひょっとこ顔を作った。

「やったー！ 太一が笑ったー！ 笑ったー！」。小春は生徒たちの方を向いて、ぴよんぴよん跳ねた。

夕食の片付けが終わってミーティングとなり、キイロが司会をした。

「明日の自由キャンプの話をしませんが、その前にゴリ先生にお話をいただきます」

「東京っ子のきみたちは天の川を見たことがあるかい？ 安曇野は空気が澄んでいるから、夜は星空がきれいで、天の川も見えるぞ」

「天の川ってどんなふうに見えるんですか？」

「空一面の星の中に、薄く白い雲のような帯が見える。英語ではミルクウェイと言う。ミルクを流したように見える。明日も天気がいいから、真っ暗な中でキャンプファイアーを囲みながら星空を楽しんでくれ。火おこしということを今日初めて体験したという人はいるかい？ おお、次郎とサユリの二人か。中三のホッホもこの四月にチーチーに入って、初めて火おこしを体験したんだ。そのとき火おこしを教えたのが理王で、理王は『火を育てていると、自分の中の野性に出会う気がする』と言ったそうさ。ところで、昔むかしの大

むかし、縄文時代の人々は煙や火に、何を思ったのだろうか？」

豪利は中一生の方を向いた。「縄文時代って、どんな生活をしていたんだろう？」

「狩猟、採集の生活だって、学校で学びました」

「そうだな、縄文時代は一万数千年間もあったらしいが、農業生産はまだ始まってなくて、人々は食べ物を求めて狩をし、草や実を採集して歩いたんだな。後期になると集落の近くに栗林を育てて、実を食べ、木は材料に使ったんだって。鉄器なんてなくて、男たちは石やこん棒でイノシシやシカ、クマとも戦ったんだろうな。一日の狩りや採集を終えて、妻や子ども待つ掘って小屋に帰ってきて、夕げの火を見た時にはどんなにほっとしたんだろうか。タイヨウを抱きあげ、エリやホナミを背中に乗せる。火を囲んで食べる。穏やかな家庭生活があったに違いない……ところで、今日の野外炊飯で、マキトが『タバコを吸っていいか』と許可を求めてきたのに対して、おれがオーケーしたのを、みんな見ていたか？」

「見ていたよ」と小春がのんびり答えた。「マキトも先生も理王も大きな声だったもん」

「おお、そうか。それでだな、中学生がタバコを吸うって、どういうことなんだ？……つっぱってる仲間とか、クラスの生徒たちにかっこつけたくって吸うんだろうな。だけどこの塾で、そんなかっこをつける必要はあるか？……ないよな。マキトはそんなことは分かっている。そのマキトが吸いたいと言ってきたから、おれは不思議に思って『なぜ、吸いたいのんだ？』ってきいたんだ。そうしたら、マキトの答えが意外なものだった」

豪利は中一、中二の生徒をゆっくり見まわした。生徒たちは言葉を探す顔になった。「マキトはな、『カマドの煙のにおいで、縄文時代が懐かしくなったから』と答えたんだ……キャンプの煙のにおいから、縄文時代に想像が飛ぶ……おお、とおれは感動した。マキトの想像を大事にしたくって、おれはオーケーしたんだ」

生徒たちは頭の中に何かのイメージを浮かべる顔になった。豪利はマキトにきいた。「きみは縄文遺跡の発掘の手伝いをやっているが、何に興味があって掘っているんだ？」

「土器にです」

「土器に？……ほう……また、どうして？」

「土の中で何千年も眠っていた土器が現れて、ぼくが触ってる。話しかけたくなるんです」

「おお……土器に話しかけたくなる……うん」

キイロがアルトの声で受けた。「わたしもマキトと思いを共有できました。縄文時代の人たちに会ってみたいです」

マキトが立ち上がった。「ぼく、合宿中はタバコ、吸わないことにします」

キイロがにっこりした。「では、ぼくが明日の一泊二日のキャンプの話をしてします。テントの中で寝袋で寝ます」とジュニアが黒板にキャンプ地名を書いた。「キャンプ地は五か所を選びました。水道があるのは鷹狩山キャンプ場だけで、あとは自然の中のひっそりとした空間です。水は川の水です。飲めるけど、ぼくたち都会のお子さまは無菌生活みたいなものだから、腹をこわすかもしれません。飲み水は水筒に入れて持って行ってください。でも料理には使えますし、煮沸すれば飲めます。生野菜を食べる班は夏期大学で洗っていき、米もと

いで、ビニール袋に入れて持っていてもいいです。空飛山には水はありません。ぼくが二十リットルの水タンクを持っていきます。なお、今夜のうちにキュウリに塩をもみこんで、ラップに包んでおくと、薄い塩分のおいしい果物って感じになります。さーてさーて、トイレは鷹狩山にしかねーぞ！」

えーっ、と中一생たちが声をあげた。桃香が「野グソするの？」ときいた。

わーと笑い声が起こった。「さすがオッチャンの妹！ お品のよいわたしたち女の子も、そう言おうか？」。中二の少女たちが、小さい声で、野グソ、野ウンチ、野シッコと繰り返して、キャッ、キャッと笑ってつつき合った。

「ポータブルシャベルで穴を掘るんだ。男の仕事だよ。用を足したら、掘り上げた土を軽くかぶせ、紙は各自持ち帰って、戻ってから処分するからね。生ごみも含めて、ごみは全て持ち帰ってきてね」

説明が続いた。「食事の班とは別で、だれとでも好きな所へ行ってもいいです。各グループに高校生カウンセラーが一人ずつ付くけど、リーダーは中三生親分ね。各班ごとに夕食と朝食のメニューを決め、食材をメモにして出してください」

キャンプ地はいずれも三時間以内のところである。景色を楽しむのなら鷹狩山と空飛び山で、鷹狩山からは大町が一望でき、正面には峻険な北アルプス連峰が望める。空飛び山は眼下に木崎湖を見降ろし、「その遥かに広がる景色の中へ飛び出したくなる」ということから、生徒たちが空飛山と名付けた。ヒッポはこの地に立ったとき、「交響曲が聴こえてくる」と言った。三か所目は北アルプスの清涼な水が流れる鹿島川の林、四つ目は湿原の林、五つ目は森の中のひっそりとした「お姫池」である。

大親分のデップリンが中心になって、先ず中三生が自分の行きたい所を選んで、黒板のキャンプ地に自分の名前を書き込み、中二生も少女たちでかたまらないようにばらばらになった。中一生は上級生たちのアドバイスを受けながらキャンプ地を選んだ。高校生たちは各キャンプ地の中学生のメンバーを見た上で、自分たちの行く場所を決めた。

どのグループにも中一から中三まで入り、よく考えた構成になったが、一つだけデップリンがきつづく言った。「湿原の人数が多いので、太郎は鹿島川、次郎はお姫池に移りなさい。これは大親分としての命令です。それと、あなたたちはケンカばかりです。特に太郎の言葉にはトゲがあります。ぼくが知っているあなたはそんな人ではないのに、どうしてなのですか？ みんなの和を乱さないようにしなさい」

ヒッポが小さな声で豪利にきいた。「デップリンに権力行使をさせていいんですか？」

「よくないが、デップリンは大親分として責任と、太郎をチーチーに入れた責任とを感じているんだろうな。しばらく様子を見よう」

そのとき豪利は、キララ子が「太郎はタイヨウくんの面倒を見たいんじゃないのかなあ」とささやくように言ったのを耳にしたが、とくに気にとめなかった。

夕食のメニュー決めはみんな張り切った。一つの料理で野菜と肉がたっぷり食べられるものとして、豚汁、ミネストローネ、カレーライス、牛乳味の山賊鍋、サバの水煮缶入りの

山賊鍋のどれかになった。中一の茂樹はギョーザを作りたいと主張し、「野外炊飯にそれは面倒すぎる」とからかわれたが、親分のリサが「おもしろいわ」と受け、豪利も「うまくいってもいかなくても、印象に残るキャンプになる。やってみろ」と言った。「キャベツは夏期大学でこまかく刻んでから持って行く」と茂樹が言ったが、豪利は「ギョーザなんて手のかかることをわざわざやるのだから、キャベツも丸のまま持って行って、みんなで大ききながら切ったらいい」とけしかけた。それにはまな板の数が必要だが、ジュニアが「牛乳パックがまな板にできる。軽くて持って行くのにも楽だ」と教えてやった。「ひき肉はどのくらいの量を買えばいいですか」と豪利はきかれたが、「肉屋に行って、ギョーザの数を言えば教えてもらえる」と答えると、茂樹は「先生は計算力がないから、理王くんに計算してもらおう！」とすっ飛んでいった。

個人が持っていく物とみんなで使う共同備品のリストを黒板に書き出した。高校生が書き出すのではなく、だれもがキャンプに積極的になれるように、作業をイメージしながらみんなで考えた。「天気予報では、今夜はかなり冷えこむという予報なので、温かい衣類と寝袋を忘れないように」とジュニアが言った。

一段落して遊んでいるとき、キララ子が豪利のところにやってきた。「タイヨウが『パパ、こわい。ぼく、パパのおうちへ帰らない。ホナミちゃんのお家へ帰る』って言ったんです。タイヨウのお家がケーキ屋さんなので、みんなでケーキ屋さんごっこをやっていたときにパパのことをきいたら、そう言ったんです」

豪利はホッホを呼んだ。「パパの実家の電話番号を知りたい。きみのお母さんにきいてくれ。タイヨウのことは何でも話していい」

ホッホはすぐに母親に連絡し、電話番号を豪利に伝えた。「お母さんはおろおろしてしまいました。タイヨウたちの合宿への参加をお願いに言ったら、先生があんまりあっさりを受け入れてくれたし、先生はミーティング中でもあったので、くわしいことを言いそびれてしまった、と言って半ベそです」

そう言ってるどころへホッホの携帯電話がなった。「はい、はい、だいじょうぶです。先生は怒ってなんかいません。今、先生とかわります」

豪利は母親の話をきいた。「気にしなくていいですよ。前もっておねしょのことや、少しの間パパから離しておきたい、ということをお話された上で、合宿に申しこまれたとしても、ぼくはオーケーしましたよ。生徒たちが遊び相手をちゃんとやってやれるという自信がありましたからね。ホナミちゃんは生き生きとして、お兄ちゃんお姉ちゃんたちにかわいがられています。幸男くんも張り切っています」

体操選手のチャンちゃんがキララ子といっしょにバク転をやっていると、中二の少女たちも参加して、講堂の夜が華やかになった。ホナミ、エリ、タイヨウも真似を始めたので、豪利が剣矢とホッホに、「バク転は危ないから、後ろ受け身を教えてやれ。これはすぐにできるようになるし、キャンプで山道を歩いて転んでも、頭を打たないようにする」

みんなで練習をしているうちに、「タイヨウくんが眠そうになってきたから、これを読んでやって、寝させよう」とチャンちゃんが<三匹のやぎのがらがらどん>の絵本を豪利に渡した。豪利が絵本を開くと、タイヨウはエリにもたれかかって指をしゃぶり、生徒たちも寄ってきて、畳の上に座った。

「あるところに 三匹のやぎがいました」と豪利が読んでいくうちに、タイヨウの頭がこっくんとした。ホナミとエリはタイヨウを寝かせると、また豪利の前に座った。

「<がらがらどん>を読んでほしいのかい？」

「わたしたちも聴きたい。読むんじゃなくて、先生の語りでやってください。風の音が聴こえてくるもん」

合宿三日目。

朝、豪利がアッキーの朝食作りを見ていると、「タイヨウが太郎にウンチふいてもらったんだよ！」と叫んで、中二のシオ子とアユ子が駆けてきた。

「タイヨウ、お目目覚めたらお姉ちゃんもチャンちゃんもいなかったの、ホッホのところへ行って何かしゃべったの。そしたらそばにいた太郎が『たいへん、たいへん』と言って、タイヨウの手を取って走って行ったの。私たち、どこへ行ったのかって探したら、トイレの前で、太郎が紙おむつを手にして立っていてね、タイヨウは和式便器の丸い所につかまってウンチしてたの」

シオ子が表情いっぱいしゃべると、アユ子が子どもを見つめる目になって続けた。「ウンチすんだら、タイヨウ、『でました！』って大きな声で言ってね、トイレから出てきて、太郎の前で床にお手手ついて、お尻を高く上げたんです」

二人が楽しそうにその姿を描写しているところを、お尻を出したタイヨウの腕を、太郎とホッホが片腕ずつ持って、ひょーい、ひょーいとジャンプをさせながら、風呂場に連れていった。豪利が風炉場をのぞいた。

「おお、タイヨウ、お尻きれいになって気持ちがいいなあ。お兄ちゃんに、ウンチふいてもらって、ありがとうって言うんだよ」

「ウンチふいてもらって、ありがとう」

「おお、えらいなあ！ 太郎は弟に、こんなふうにしてやっているのかい？」

「はい、小さい時はやってやりました。もう小二です」

「そうか、昨日のセミの時もそうだったが、今のお尻も、きみの雰囲気はいいねえ」

朝食が終わって、アズミが高校生たちと中三生たちを木崎湖を見下ろす庭に集めた。「いよいよ中三生親分たちが全てをリードする一泊二日のキャンプとなります。中三生たちは<自分たちが合宿の花になっている。下級生たちに見つめられている>と自覚し、生徒同士が良い出会いになるように、その結果が自分との出会いになるように張り切ってください。ミスは当然あります。ミスがあったら成長の元だと思って、思い出になる笑い話に変えましょう。ではヒッポ、中三生にはなむけの言葉をお願いします」

「そうね、ぼくが中二になると、ぼくよりたった一つしか変わらない中三生たちが、リーダーになって活躍する姿がかっこよくなって、さらにその向こうには高校生のツッパリくんと門次が屹立し、オッチャンのお姉さんでハズキという女親分みたい人がいたし、うっとりするくらい気品のある美音ちゃんもいて、ぼくはこんな先輩たちみたいになりたいって思ったの。そして中三生になってリーダーをさせてもらったら、ぼくはどんな大人になろうかって、自分の姿を意識するようになったんだ。中三生は自分の成長を意識してやってね。ところで先生、タイヨウは今日はずいぶん歩くことになりましたが、ぐずったらどうしましょうか？」

「おぶってやれ。体力を育てる塾ではないチーチー塾が、一年に一回くらい三歳児にがんばらせても意味がない。それはおれの実体験から思う」

豪利は八年前、小学生サマーキャンプで伊豆高原の天城山に登ったときの理王のことを話した。「理王は小一だったが、もう一人の小一の男の子と、登りながら『まだ着かないの?』としょっちゅうきいてきて、豪利はがんばらせるのが大変だった。このとき宿泊した民宿天露庵のお爺さんは、天城の自然を守る会の会長で、『天城山は自然の宝庫だから、観察しながらのんびり登るように』とアドバイスをしてくれたのだが、豪利は理王をがんばらせてしまった。その二年後の中学生合宿で、生物に興味のある中一の男子が、夏期大学から鹿島川までの道々、虫や草花を見つけては立ち止まるので、行程がはかどらずに困った、という高校生の報告を豪利は受けて気がついた。『何かを見つけるたびに立ち止まるということは、興味のあるものに出会って、その時を生きているのだ。道草が子どもを育てているのだ。理王を励まし歩かせたということは、知的関心の高い理王の遊び心を封じこめたことになる』と反省した。だからタイヨウには好きなように歩かせてやってくれ。ところでみんな、この生物に関心があった中一生とは……だれのことであろうか？」

「ヒッポ！」

柴崎マキトが空飛山の草地に立って、夕暮れの木崎湖を見下ろしていた。「この静かな風景の中で、ぼくはバイオリンを弾きたいです。ジュニアはこの景色を見た時、何か曲を思いましたか？」

「アンデスのメロディーだね。はるばると広がるこの風景を見ながら、ヒッポがフルートで、<コンドルが跳んでゆく>を吹いてくれたんだ。ぼくはここへ来るとそのメロディーが体の中から湧き出てくる」。二十リットルの水タンクを背負ったままジュニアが答えた。

「ぼくもさっきここに立ったら、<初恋>って曲が体の中から湧き出てきました。知ってますか？」とマキトは「砂山の砂に 砂にはらばい 初恋の……」と口ずさんだ。

「ああ、この風景に合っているね。ゴリ先生は、ご存知ですか？」

「メロディーは聴いたことはないが、歌詞は知ってるような気がするな。『砂山の 砂にはらばい 初恋のいたみを……』あとはわからない。だれの詩だろうか？ 中一の時の担任の先生が黒板に書いたんじゃないかな」

「石川啄木の短歌です、曲は越谷達之介です」。リサが目をくりくりさせてこたえた。「先生、

車の中に、ハーモニカを持ってきていますか？　すぐに覚えられます」

豪利はリサにメロディーを教わりながらハーモニカで音を作っていた。

「オーケー、これでいいかな。じゃありサが歌ってくれ。ハーモニカで伴奏する」

「リサ、『砂山の砂に』を『安曇野の草に』変えて歌ってよ」

「それだったら剣矢、みんなでこの風景に合った詩を創ってみたらどうだ？　ほら、トンビが木崎湖の風に舞ってるよ」

みんなで考え、できあがった。「先生、これでいいですか？」

「きみたちの気持ちが入っているんだからそれでいいさ。啄木の詩を一番にして、きみたちが創った詩を二番にして歌ってみよう」

ハーモニカがゆったりとりサを誘った。「砂山の砂に　砂にはらばい　初恋のいたみを
思いいずる日。木崎湖の風に　風にたわむれ　若き日のおもい　はるかなるかな」

静謐な風景の中に、ハーモニカののどかな音に乗ってリサの透き通った声 flowed。

軽トラックを止めて聴いていたおじさんと若者が降りてきた。「お姉ちゃん、きれいな声
だいねえ。おらも歌が好きでせ、大町の合唱団で歌っている者だがね、お姉ちゃんの声、こ
の景色にぴったりだわやあ。のお、そうずら？」とおじさんは日焼けの顔を若者に向けた。

「そうだね。ハーモニカの音もこの景色にぴったりだわね」

「あ、おらは近くの部落の小林ってもんでね。このせがれも合唱やってるですんね」

「やあ、ぼくは宮坂といいます。一木商店の店主はぼくの年下の従弟ですんね」

「ありゃあ、これさこれさ、陽ちゃの親戚かね！　じゃあなにかね、毎年夏期大学で合宿や
ってる町田の学生さんってことかいね？　ここでよくテント張ってる衆かね？」

小林さんは上機嫌で豪利と昔し話をした後、軽トラに乗ろうとした。リサが豪利に言った。
「先生、小林さんに『遠き山に日は落ちて』を吹いてやってください。わたしも歌います」

小林さん親子を囲んで、生徒たちは草の上に座った。薄暗くなりかけた景色の中に、ハー
モニカのひなびた音が流れ、リサの声が風に乗った。

「遠き山に日は落ちて　星は空をちりばめぬ　今日のわざをなしおえて　こころ軽くやす
らえば　風は涼しこの夕べ　いざや楽しきまどいせん」

小林さんがリサの手を両手でにぎって、「ありがとね。ありがとね」と帰っていった。

リサが指示した。「足元が見えるうちに林の中で薪を拾ってください。茂樹は食材のチェ
ックをお願いします」

「ごめんなさーい！　塩とショウユを持ってくるのを忘れてしまいました！」

「あら、ごめん。わたしがチェックしなかったからよ」

「ドンマイ、ドンマイ。よくあることだよ」とジュニアが笑った。「メニューは何なの？」

「ギョウザと、松田牛乳で煮る＜初恋の味＞の山賊鍋です。だけど塩味なしで、みなさん食
べられますか？」

「むりです。先生に車で買ってきてもらいたいです」

「もし先生がいなかったらどうするんだ？」とジュニアがきいた。

「どこかの民家で分けてもらいます」

「民家は遠いよ」

「先生の車があるもん」

「まあ、そういうことだ。買って戻ってくるまで一時間はかかるぞ。……ん、何の音だ？」

「先生の携帯電話が鳴っているんです。カウンセラーか親分からです」

「携帯か？ 使い方、さっき教わったが、もうやり方忘れた。キイロ、出てくれ」

キイロが電話に出て豪利に言った。「鷹狩山の理王からです。中一の太一がTシャツと短パンだけで、寒くて震えているんですって。だれも余分な衣類を持ってないそうです。夏期大学に戻って、太一の荷物から着る物を持ってきてほしいと言ってます」

豪利が電話に出た。「太一の荷物がどれかなんてわからないな。車の中におれの雨具があるから、それを貸してやる。だが、こっちの班の買い物をしてから鷹狩山に向うから、二時間はかかる。ところで理王、おれと連絡が取れなかったとしたらどうしたんだ？……うん、そう、それがいい。新聞紙は温かい」

豪利が鷹狩山に着いて、無人の駐車場に車を置き、山道を懐中電気で照らしながら登っていくと、暗闇の向こうでキャンプ場の薪の火がちろちろ燃えていた。生徒たちの姿はなかった。豪利がいぶかしく思いながら進んでいくと、暗闇の道の真ん中に、白い物がぼーっと立っていた。

豪利は足を止めた。白い物は人間の形をしていて、頭の先から足の先まで白かった。豪利はゆっくり近寄って、その顔に光が当たらないように照らして、しばらく見つめた。

「太一か？」

キヤーッという少女、少年たちの声が入り混じって、木の後ろから生徒たちが飛び出してきて豪利を取り囲んだ。象兄ちゃまもにここにしてその中にいた。

「怖かったでしょ、先生？ 透明人間、怖かったよね？」

「おお、怖かった。透明人間、怖かったなあ」

太一はトイレットペーパーで頭、首から腕、足の先までぐるぐる巻きにされていた。「いい格好じゃないか。温かいだろう？ ほら、これを着な」

生徒たちが大笑いで太一からトイレットペーパーをはがしてやった。

「太一、みんなに世話になったんだ。ありがとうって言いなさい……このまま何も言わないでいると、きみは『透明くん』と呼ばれるようになってっちゃうぞ。声を出して、ありがとうを言うんだ」。豪利は太一の肩を押して、生徒たちと向かい合わせた。

「ありがとうございました」。太一が小さな小さな声を出した。

豪利が夏期大学に戻ったのは夜の十一時を過ぎていた。豪利はシャワーを浴びてから、鷹狩山班が握ってくれたおにぎり夕食をとりながら、キャンプ地めぐりを振り返った。

豪利が一番気になっていたのがホッホの親分ぶりだったので、最初に湿原に寄ると、ホッホがタイヨウの小さな手にナタを持たせ、両手をそえながら、薪を割らせているところだった。ヒッポが豪利に寄ってきて言った。「ホッホが親分をやると、緊張してキャンプを楽し

めないと言うので、親分をはずしてやりました」

豪利は次にお姫池で見たことを振り返った。中一の次郎が、まだ声変わりをしていない声で、アッキーにしきりに話しかけていた。

「アッキーは馬鹿笑いするけど、どうしてなの？」

「人におれのこと言われて、それがいい意味か、悪い意味かわかんないとき、笑うの」

「言葉で説明されるとわかんないってことは、アッキーはバカってこと？」

「それ、言いすぎ。おれ、バカだって思ってないけど、説明がわかんないことある」

「どんなふうかわかんないの？ ぼく、わかんないことがわかんないなあ」

「話が難しくなってくると、言ってる人の言葉が、ただの音だけになっちゃう」

「ふーん、そうなん？ でもゴリ先生はアッキーのことほめてたし、怖い感じのタバコの人ほめてたじゃないですか。ぼくもアッキーをほめる人になりたいな」

豪利は笑いながらキララ子とデップリンのところへ行った。キララ子が「あの二人の話、漫才みたいでしょう」とほほえんだ。「次郎は人なつっこいんです。太郎とケンカばかりしているなんて思えません」

「まったくだ。授業では見えない生徒の姿が、こうやって遊ばせてみると見えてくるものだなあ。デップリンが太郎と次郎を離れたのは正解だよ」

「ありがとうございます。先生は次郎をどう思いましたか？」

「あの人なつっこさは、生きていく上での力になる」

豪利は夏期大学のただっ広い講堂のど真ん中に布団を敷いた。点々と散らばっている荷物に、生徒たちの息吹を感じながら眠りに落ちた。

合宿四日目（人の目を見ない太一）

昼の十二時前後にはキャンプ地からそれぞれの班が戻ってきて、班ごとにたくさんの野菜、肉を入れた即席ラーメンを作って昼食をとった。鷹狩山班は、ディパックを背負ったまま眠ってしまった太一を起こさなかった。三時ころになって太一は目を覚ますとぼんやりしていたので、小春がディパックを下ろしてやり、太一の分のラーメンの材料が台所に置いてあるから、自分で作って食べるようにと言った。太一はのろのろと台所に行ったが、しばらくすると戻ってきて、荷物の中に座りこんで、またぼんやりした顔になった。

「太一はラーメンの作り方がわからないんじゃないのか？」と豪利が親分の理王に言った。

「はい、でも、太一が自分から言い出すまでは助けしません」

「そんなのかわいそうだよ」。モトキンが涙声になった。「何にも言えない子なんだよ」

「ダメです。昨夜も温かい衣類を忘れたことを言わず、周りの人が気がつくまで、寒さの中でふるえていたんです。あれでは生きていけません。いい機会です。何も言わないことの結果がどうなるかを、骨身に染みさせる必要があります」

「そんなの見ていられないよ。助けてやろうよ」

「わたしは理王に賛成だわ」とキララ子がモトキンを見た。「理王は本当の優しさを持っている人です。怒ることもないです。その理王が厳しいことを言うのですから、理王は最後まで責任を持つつもりで言っているんです」

「ぼくは賛成です」とマキトが言った。「太一はぼくとアッキーに、町田から夏期大学までの行程をメモにして渡してくれたのに、町田駅にたった一人でいたんです。人を誘えなかったんだと思います。人を誘ったり、人に助けを求めることができなきゃあだめですよ」

「モトキン、太一はおれが貸してやった両具では、寒くてよく寝られなかったから、理王は太一を起こさなかったんだ。その太一が腹がすいていても言わないから、理王は厳しく当たっているんだ。きみは同情するだけじゃなくて、理王に反対だったら、それを行動で表したらどうなんだ？」

「わかりました。そうします」とモトキンが太一の方へ行こうとしたとき、アッキーが走って行って太一の前に座り込むと、太一に向かって何かを話し始めた。何を言っているかは聴こえなかったが、アッキーが真剣に説得している様子は、生徒たちには伝わってきた。

アッキーが立ち上がって太一の手を引き、台所へ向かった。

「太一の動きに意思が入ったぞ。どうするか、みんなで見に行こう」と豪利が誘った。

食堂のテーブルの上に食材が置いてあり、アッキーが太一に説明していた。「ガスコンロのつけ方、おまえ、わかる？……わかるかって、おれ、きいてんの！ うんとか、うんじゃないとか言えよ。うんじゃなきゃ、人にきけよ。おまえ、いつまで赤ちゃんやってんだ！ もう十三歳だよ。大人になってんだよ！」

「おもしろーい」と茂樹が喜び、「劇、見てみたい」と小春が足をばたばたさせた。

「アッキーはあんなことが言えるんだ。ありがとな、アッキー」と豪利はつぶやいた。

「あとは自分でやれ、わかんなきゃ、きけ！」とアッキーはみんなの中に戻った。

太一はラーメンの袋を手の持ったまま動かなかった。「袋を破って、中身を出すんだよ」と茂樹が声を飛ばしたが、太一はぼーっとしたままだった。理王が動いた。

「ラーメンを食べたいんだろ？ おれの顔を見なさい。しゃべっている人の目を見ろ！『ラーメン、食べたいです。作り方、教えてください』って言いなさい」

身長百五十センチの太一が、百七十五センチの理王を見上げた。太一が「はい」と小さく声を出した。太一はとつぜん床に正座して、両手を膝の上に置いた。「ラーメン、食べたいです。作り方、教えてください」

理王があわてて正座した。「よござんす。作り方、お教えいたしましょう」

「やったーっ！ 太一が赤ちゃんから脱皮した！」と生徒たちが声を上げた。

理王が振り向いてゆるやかに言った。「あとは中一生たちが、教えてやりな」

「はい！ 太一、ラーメン、作ろう！」

豪利は「よかったな」とうなずいた。「カウンセラーと象兄ちゃまはここに残ってくれ。相談したいことがあるが、その前に今のことをどう見たかな？」

「太一、よかったです」

「こんなこわい理王を初めて見た」

「理王にはユーモアと品があった。年下の生徒たちが理王を尊敬する理由がわかった」

「先生は、『太一には何も働きかけをしてこなかったから、太一のことには任せる』とぼくたちに言いました。でも先生らしい何もしなさがあったんだと思うんです。それを話してもらえませんか？」とヒッポがきいた。

「うん……おれはある生徒の成長を急ぎすぎて、指導を間違ってしまったことがあるんだ。その反省から、<生徒の姿が見えてくるまでゆっくり待とう>に変えて、待てるようになったつもりなんだが、太一は見えてこなかったな。ところが幸い、それが一昨日の小春の『わたしが太一を笑わせてやる』、理王の『荒療治が必要だ』ということから始まって、今日のような結果に発展したんだ。感動したよ。おれの間違い話は、おりがあったら詳しく話す」

「その詳しい話、ぼくも聴きたいです」と象兄ちゃまが言った。「太一は鷹狩山で、寒いことも衣類を持って来なかったことも言わないで、ただ震えていただけですから、理王に叱られて泣いたのです。夏でも凍死することはあるんだって、きつく叱られました」

「太一が泣いた？」

「素直な泣き方でした。反省したのだと思います」

「おお、そうか、指導の手がかりになるかもしれない。話を変える。タイヨウのパパとママに来てもらうことにした。タイヨウは『パパの家に帰りたくない』と言っているんだ。子どもがそんなことを言うとは、虐待されていることと同じだ。おれはそれを知った以上、合宿が終わったから、『はい、タイヨウをお返しします』ってわけにはいかない。それで親から話を聴くために、明日の夕方六時に来てもらうことになった。ただその時間は夕食前後で、おれと親だけで話し合うのは難しい。というか、おれはみんなの前、エリ、タイヨウもいる前で、親と話し合おうと思っている。どう思うかな？」

「先生は叱るんですか？」

「叱らない。ここへ来るということは、反省しているということだ。おれが電話したら、ママは泣いてしまった。そしてパパを連れて来ることになった」

「先生はお説教ということをしませんか？」

「しねえよ。ガラじゃねえ。それに上から目線が、人の心を動かすとは思えねえ」

「どう話すつもりですか？ タイヨウ、エリのいる前で？」

「そこなんだよ。エリはもう話の内容がわかるはずだ。おれが親を叱ったらエリを悲しませる。そうさせないことをおれの足かせにするためにも、エリの前で話す」

「タイヨウだって、先生や親の表情から感じとりますよね」

「だから親たちの表情がよくなっていくようにしなきゃいけない。どう話そうか？」

「二人の子が、ここで楽しんでいる姿を、親に見せることができればいいんですね？」

「そう。それにはきみたちの協力が必要だ。できるか？」

「できます。中三生たちも協力してよね。きみたち、知恵があるから」とアズミが言った。

「おお、そうか。じゃあ、先に各キャンプ地からの報告をきこう」

湿原班はホッホが自分の気持ちを語った。「昨日までは親分をヤル気になっていたんですけど、子どもの時からリーダーをやったことがなかったから、湿原に着いて親分やろうとしたら、体が寒くなって、震えが来て、周りから色彩がなくなってしまいました。ヒッポが気がついて、親分役から開放してくれたので、楽になりました。まだ親分やるのは無理です」

「おれがホッホの成長を急がせすぎたかな？ 人にはそれぞれの成長の仕方があるってことか」

「鹿島川班は崖の上のカモシカを目にできて、みんな感動でした」とアズミが言った。「オッチャンの親分ぶりは人柄を感じさせてとてもよかったです」

「だけとおれ、太郎が寝袋を持っていくのを忘れたこと、気がつかなかった。おれ、ダメだった」

「そんなことないよ。太郎が腕にマットを丸めて持っていたから、ぼくは太郎は寝袋を背中のディパックの中に入れていたよ。オッチャンの責任じゃない」

アズミはみんなに説明した。「寝るときになって、太郎が寝袋を忘れたことがわかって、オッチャンは『気がつかなかったのは自分の責任だ』と言ったんです。それだったらぼくにも責任はあります。オッチャンは自分の寝袋を太郎に貸してやり、寝袋なしで寝たんです」

「オッチャン、素晴らしい！ でも昨夜はひどく寒かった。オッチャンは寝られたのか？」

「おれ、寝られたよ」

「寝てないよ」とアズミが言った。「ぼくが明け方に目を覚ましたら、オッチャンは外を歩いて体を温めていたんです。それでぼくの寝袋を貸してやりましたが、寝不足です」

「問題は、太郎は自分が寝袋を忘れたことに気がつかなかったのは、オッチャンの責任だと言って、オッチャンに文句を言ったことなんです」

「うっそ」と生徒たちが驚いた。

「太郎はそんなことを言う子じゃないです！ だけど、太郎は合宿に来てから変なんです」とデップリンがとまどった。「中一クラスで何かあったんですか？」

「いや、六月に入塾したばかりだけど、何もない。家庭に何かあったのかなあ？」

「それはありえません。おじちゃまもおばちゃまも教養豊かな方々です」

ホッホが理解できない顔をした。「太郎はタイヨウのセミの相手やお尻のお世話もしてくれて、ぼくは楽になってるんですけど」。

「そんな子がオッチャンに責任転嫁なんてするのか？ 思春期は動揺期で、朝、言ったことと夜、言ったこととが真反対になっていて、人にそこを突かれても説明できないことも多い。だがそれにしても太郎は極端だな」

「太郎はキャンプ班を湿原から鹿島川に強制的に移されたとき、悔しそうだったんです」とキララ子が考えながら言った。「タイヨウといっしょにいたかったのかしら？」

そのとき、講堂の真ん中で遊んでいた生徒たちが、わっと笑い、その中から中二のアヤ子とヒロヨがぴゅーん飛ぶように駆けてきた。

「聴いて、聴いて！ おもしろかったんだよ！ タイヨウくんがね、『シリトリやろう』っ

て太郎を誘って、太郎が受けてやったの。そしてタイヨウくんが『リンゴ』って言って、太郎が『ゴリラ』って受けたの。そしたらね」

「そのあと、わたしに言わせて」とヒロヨが顔いっぱいの笑顔になった。「タイヨウが回らないお口でゆっくり、しっかり言ったの。『ちがうでしょ！ ぼくがリンゴって言ったら、<り>って言うんでしょ』って！」

二人はそれだけ楽しそうに話すと、ぴゅーんと戻っていった

「アヤ子って機敏な子ですね！」

「ヒロヨは目が合うと必ずにっこりしてくれる。こっちの心が溶けちゃう」

デップリンが腰を上げた。「ぼくは夕食当番です。このあと、食堂に移動してミーティングを続けてくださいませんか。夕食指導をしながらぼくも話に参加したいです」

みんなで台所と接する食堂の窓際に座った。「パパ、ママは体が冷えるくらい緊張してやってくると思う。どうやったらその緊張をほぐしてやれるか、アイディアを出してくれ」

「パパ、ママは車で来るんですか？」

「電車で来るようにと書いてある。パパは仕事一本やりで、夫婦間の話し合いが不足しているはずだ。電車だったら二人が向き合うよい機会になる。明日の夕方、稲生駅に着く」

「駅に迎えに行ったらどうかしら？ お迎えして、気持ちを楽にさせやるのよ」

「だったらヒロヨがああ笑顔でお迎えだね」

「ホッホ、きみも行きなよ」と理王が勧めた。「親はエリとタイヨウをきみの家で預かってもらっているんだから、きみに感謝の挨拶をする。そこから対話が始まるよ」

「そうですとも」とデップリンが台所の窓から太い首を突っこんできた。「あなたは以前のホッホとは違います。ずいぶん話せるようになっています」

「シオ子にも行ってもらったらいいわ」とキララ子が台所にいるシオ子を見ながら言った。

「あの子は口から生まれてきてるし、善意な人だから、駅からここまでをにぎやかにしゃべり通すことができるわ」

「ヒロヨ、シオ子、ホッホ、いい取り合わせね」とキイロがうなずいた。「パパ、ママは、緊張が少しでもやわらいだところで、エリ、タイヨウの遊んでいる姿を見たら、気持ちが楽になるかもね」

「先生、これは劇です。チーチーが得意な劇です」。デップリンがまた首を突っこんできた。

「みんなで台本作りをして、ぼくたちが演技をするんです」

「演出家はキララ子がいい」と理王が賛成した。

「わたし、やります！ 台本はみんなで考えます。エリちゃん、タイヨウくんをどんなふう
に遊ばせましょうか？」

「紙風船はどう？ 紙風船でエリとホナミが遊んでいると、タイヨウも遊びたがるわ」

「剣矢がサッカーボールで遊んでやるのもいい。動きが大きいし、みんなも参加できる」

「あっ、やる、やる！ エリもホナミもボールを蹴る意欲がある。だけど、おれ、タイヨウ
みたいな小さい子にサッカー教えるなんて、やったことないな」

「タイヨウの相手は太郎にやらしてもらおう。タイヨウは太郎になじんでいる」

「先生、理王がタイヨウと同じ年齢の時、どんな感じでしたか？」とキララ子がきいた。

「おお、おお、おっそろしく力いっぱいの子だったよ。たとえば、英語劇発表会の時では、三歳の理王が走って出てくると客席がどっと笑ったんだ。かわいいからさ。ところが理王は体を前に曲げて「うるさーい！」って客席に怒鳴り返したんだ。それがかわいくてまた客席が笑ったら、また怒鳴るを返した。あの年齢では笑われると、自分が馬鹿にされたと思って、泣いたり怒ったりする子どもがいるみたいらしいな。タイヨウが笑う姿をパパ、ママに見せたいけど、何か方法はないか？ おれは聞きたいこと言いたいことを、パパ、ママには率直に言うが、話しあいには三十分以内で終わらせ、食事にする。そこまでにパパがタイヨウと楽しく食事ができるような雰囲気になってくれているといいんだがな」

「お父ちゃん、話が終わったらみんなの前で、<おとうさん>という絵本を、タイヨウくんを読んでやったら？ ほら、わたしが小さい時にいつも読んでもらった絵本よ。あの絵本はパパの気持ちを動かすかもしれないよ」

「ああ、そんなこともあったな。どんな絵本だったっけ？」

「動物の子どもが次々にやってきて、自分のお父さんの自慢をするんだけど、最後のタヌキの子はお父さん自慢ができなくて悲しくなるの。だけど、最後のページをめくると、タヌキの子がお父さんを自慢するの。その自慢が思いがけなくって、わたしはだい好きだった。わたしがお父ちゃんやお母ちゃんに叱られて泣いていても、この絵本を持ってお父ちゃんのところへ行くと、お父ちゃんは必ずわたしとお姉ちゃんを膝の間に抱っこして読んでくれて、最後のページでその子の自慢を、お父ちゃんは優しい声で読んでくれたの」

「読んでやってください！ わたしたちも聴きたい！」

「おお、そうか。だが<おとうさん>なんて絵本はいっぱいある。出版社名はわからないな。大町図書館にあるかな？ 子どもの本の担当者にストーリーを話せばわかるかもしれない」

チャンちゃんが図書館に電話すると、佼成出版社の<おとうさん>という絵本で、大町図書館にもあることがわかり、貸し出してもらえることになった。

夕食後、食事当番デップリン班の反省会があった。「レストランで食べるくらいにおいしかった」とキイロがほめたので、デップリンは大満足だった。

班員のホッホは感動した表情で言った。「ぼくはお母さんの食事作りを手伝ったことがなかったんです。この合宿で食事作りの面白さと大変さを経験したので、お母さんの食事作りを手伝うつもりです」

「ホッホくんは家庭を持ったら、奥さんになった人の食事作りを手伝うことができ人になるわ」とリサが優しい目になった。

「おお、それはいいなあ。おれは子どものとき腹が減って台所をのぞいたら、婆ちゃんに『男は台所をウロチョロするでねえ。男はちゃっと座ってろ』と、怒られたことがあって、今でも台所を素直に手伝うことができない。奥さんの仕事って、こまかくて、いろいろあって、

際限なく続くんだ。チーチーの男は家事や子育てを、妻といっしょにやる人になってほしい」

他の二人の子分たちは「デップリンの指導が完璧だったから、班員は何にも考えなくてすんだから楽だった」と言った。

それに対して豪利が質問した。「みんなが同じ感想というのはおもしろくない。デップリンとおしゃべりのシオ子がそろったら、とんでもなくにぎやかなのに、今日は台所からデップリンの声しか聴こえてこなかったじゃないか。どうしてだ？」

デップリンがハッとなった。豪利がシオ子を厳しくうながした。「シオ子はどうしてしゃべらなかったんだ。何にも考えなくてすんだから楽だったというのは、本音か？」

「ほんとうは」とシオコが首をすくめた。「デップリンの指示が完璧すぎて、わたしは工夫できることがなくて、つまんなかった」

デップリンががっくりした。「ああ、ぼくはまたやってしまいました。＜一将功成りて万骨枯る＞をまたやってしまいました」

雷介の目がきらりと光った。「それって、どういう意味ですか？」

「あ、はい、おいしい食事ができたのはぼくの成果にはなったけど、子分たちはくたびれただけで終わってしまった、ということです。ああ、また反省です」

「そうだよ。親分の指示が完璧すぎると、子分たちは考えたり、提案したりする余地がなくなってしまうんだ。雷介はいたずらをしたいのだそうだし、シオ子の口は勝手に開くのだが、二人にそんな出番がなかったということだな」

「ぼくはどうしたらいいんでしょうか？」

「死ぬほど懂れているツッパリくんの言葉を、もう忘れたの？」とキララ子がにらんだ。

「あっ、はい！ 口数を少なくして、相手に場を与え、長所を引き出せ、ということです」

食後の片付けの後、チビちゃんたちが講堂を飛びまわって遊び、満足して眠ってしまうと、豪利は生徒たちに、タイヨウのパパ、ママに来てもらうことにしたことを詳しく話し、生徒たちはふるまい方を考えた。

合宿五日目。(タイヨウの両親が合宿に)

朝、キララ子と太郎が、タイヨウのサッカー遊びのことで話し合っているところへ、タイヨウが水の張ってあるコップを持って、そろり、そろり、とやってきた。コップの中には一羽のスズメが沈んでいた。

キララ子はヒッと声をあげかけたが自制した。「あら、スズメね？ どうしてお水の中にいるの？」

「チュンチュン、お水飲みたいの。死んだの」

「お水飲みたいの？ まあ、それでお水の中に入れてあげたのね。タイヨウは優しいな。ほら、ゴリ先生が来たわよ。見せてあげようね」

「おはよう、タイヨウ。何を持っているのかな？」

「チュンチュン、死んだの」

「チュンチュン？……おお、チュンチュン、死んだのか。どうして死んだのかな？」

「お水ほしいって死んだの」

「お水ほしいって死んだのか。どこで死んでいたんだ？」

「あっち」と、タイヨウはコップの水をこぼさないように、そろり、そろり、と歩いて玄関に下りた。軒下には昨夜の雨で水たまりができていた。タイヨウは庭に下りて、「ここ」と水たまりを指した。「お水飲みたいの」

「おお、タイヨウはお水を飲ませてやろうとして、チュンチュンをお水の中に入れてあげたんだね。チュンチュンは死んじゃったね。これからどうしてあげようか？」

「お墓入る。ぼくのお婆ちゃん、お墓入るの」

太郎がキャンプ用の携帯シャベルを持ってきた。「タイヨウ、いっしょにチュンチュンのお墓を作ろう。ほら、あの土手の花のところに穴を掘ろう」

「おお、いいねえ。ハギの花の下にお墓を作るんだ。木崎湖の水も見える。チュンチュン、お水がいっぱい飲めるぞ」

生徒たちがタイヨウを囲んで草をむしり、穴を掘り、チュンチュンを穴の中に横たえた。太郎がタイヨウにシャベルを渡し、手を支えて土をかぶせた。太郎は牛乳パックの紙にマジックインキで「チュンチュンのおはか」と書いて、タイヨウがその紙を土にさした。

今日は休養日であり、生徒たちは自由に過ごす。黒四ダム見学に早朝に出発したグループ、チーチー塾の生徒の父親で山岳写真家の岩橋崇至氏の写真展を鑑賞に大町山岳博物館に行ったグループ、木崎湖を見下ろすトレッキングコースを散歩するグループ。チャンちゃんとホッホと太郎は、チビちゃん三人を連れて大町図書館へ絵本を借りに行った。

牛の好きなリサは、空飛山からの帰りに見かけた放牧の牛を見に、夏のスキー場に行った。ジュニアと農業に関心のあるサユリもいっしょだった。

そのリサが空飛山で出会った小林さん親子を連れて、午後の早めに戻ってきた。リサたちが放牧の牛を見ていると小林さんが声をかけてきたのだ。そこは小林さんの放牧場だった。

小林さんは戦争でみなしごになったが、大町の農家に拾われて成人したことをリサたちに話ると、リサは小林さんの体験を、生徒たちに話してもらいたいと思って連れてきたのだ。

豪利は小林さんに、生徒たちと夕食を共にし、その話をしてもらいたいと頼んだ。小林さんは夕食にやってくることを約束して、いったん家に帰っていった。

「エリちゃんとタイヨウくんのパパとママはいますか！ エリちゃんとタイヨウくんのパパとママはいますか！」

大糸線稲生駅のプラットフォームで、降車客に向かって、シオ子が大声で呼びかけた。客たちが笑いながら通り過ぎていく中に、一組の若い男女が残った。シオ子とヒロヨとホッホが駆け寄った。「エリちゃんとタイヨウくんのパパとママですか？」

若い男女は困惑した顔でうなずいた。ヒロヨが親しい気持ちをいっぱい表して、<ようこそ、パパ、ママ>と書いた段ボール紙を二人の前にかざした。ホッホが「ぼくです、ママ。幸夫です」と呼びかけた。

「幸夫くん、まあっ！ 江川さんのお兄ちゃんよ、パパ！」

稲生駅から夏期大学までの間、シオ子がエリとタイヨウの元気な様子をしゃべりまくり、ヒロヨは朗らかになあいつちを打ち続けた。

夏期大学を見上げる坂の下に来ると、生徒三人が上の庭に向って「ヤッホー」と叫び、上からも「ヤッホー」と返ってきた。数人の少女が坂をかけ下り、「こんにちわ」とパパとママに挨拶をした。坂を上って庭に入ると、豪利がゆるやかな態度でパパ、ママを迎えた。パパ、ママは緊張しきって、何度も何度もお辞儀をした。

三人のチビちゃんは生徒たちの間でサッカーをやっていた。エリとホナミがパパとママに気がついて走っていった。太郎はタイヨウがボールではしゃぐ姿をパパたちに見せた後、パパたちを指してタイヨウに気づかせた。

タイヨウは三歳児のどうしていいのかわからない顔になった。太郎が何かを言って、タイヨウの背中を押してやった。タイヨウはお爺さんみたいに両腕を腰に組んで、首を落とし、ジグザグ、ジグザグとパパに近づいていくと、途中で立ち止まった。

「いま、呼びかけるんです」。豪利はパパにささやいたが、パパは声が出なかった。タイヨウは太郎のところに戻ってしまった。

講堂の廊下に立って様子を見ていた理王が、「タイヨウ、かくれんぼやろう！ <タイヨウはどこかな>をやろう！」と呼びかけた。

「うん、やる！」。タイヨウは走って行って廊下の上の理王に両腕を伸ばした。理王が手首を持って廊下に引き上げた。生徒たちは期待の表情で廊下に上がり、パパとママはチャンネルに背中を押されて講堂に入った。

講堂の畳の床に空の段ボール箱が五つ置いてあり、そのそばに中一生たちが立ち、一つの段ボールの中にタイヨウが入って立っていた。

「もういいかい？」と理王が言った。

タイヨウが段ボールにすっぽり体をおくし、中一生たちはひざをついて段ボールのかげに隠れる格好をした。

「もういいよ！」

「小春はどーこかなー？ 小春はどーこかなー？」と理王が歌うように叫んだ。

びよこんとタイヨウが段ボール箱の中から首を突き出した。「ちがうでしょ！ <タイヨウはどーこかな？>って言うんでしょ！」

「あっ、そうだったねえ」。理王が小手をかざした。「タイヨウはどーこかな？」

中一の雷介が畳の上でびよんびよん跳びはねた。「キャッ、キャッ、キャッ、ぼく、サルの雷介！ ぼく、ここ！ キャッ、キャッ、キャッ、ぼく、ここ！」

「ちがうでしょ！ タイヨウ、ここ！ タイヨウ、ここ！」

「ん？ あれはタイヨウではない。サルだ……タイヨウはどーこかな？ どーこかな？」
「ぼく、ここ！ ぼく、ここ！」。タイヨウが段ボールから転げながら飛び出し、駆け寄って理王のお尻を小さな手でたたいた。「ぼく、ここ！ ぼく、ここ！」

「へんだなあ。声はするけど姿が見えない。おーい、タイヨウ！ タイヨウはどーこかな！」
タイヨウが理王の前に回り込んでびよんびよん跳ねた。「ぼく、ここ！ ぼく、ここ！」
「あっ、タイヨウがいた！ みつけた」

「もう一回やって！ もう一回やって！」

同じことが続いた。小林さん親子もやってきていて、声を出して笑った。タイヨウのママは涙を拭きながら笑い、パパも少し笑っていた。

豪利はタイヨウの姿に三歳の理王の姿を重ね、今日の理王に十年前の自分の姿を重ねた。
「よーし、そこまで！ みんな集まってくれ。ホナミちゃん、エリちゃん、タイヨウくん、ぼくはこれからパパ、ママ、おじちゃんたちとお話があるからね、そこで遊んでいてね」

みんなが畳に座ると、豪利は「幼な子のつぶらな、期待いっぱい目の目に応えてやる姿は、いいもんですねえ」と、パパ、ママに向かって、あえてキザな言い方をした。

「タイヨウくんは自分から人に働きかけていく力がありますねえ。このお兄ちゃんに」と太郎を指し、「タイヨウはウンチのお尻をふいてもらっているんです」と言った。

ママは顔を赤くして太郎に何度も頭をさげた。

「タイヨウが赤ちゃん言葉を使うことが気になっているようですが、回らない口でも、しっかり自己主張していますね。言葉もおねしょも、自然に成長していくのに任せた方がいいんじゃないですかね。泣くのを我慢させるのもよくないでしょうね。泣くのは子どもの自己表現で、泣いて自己解放するんです。ぼくの長女ですが、三歳のころは泣く時には足を踏ん張って、腰のうしろに手を組んで、空に向かって思い切り泣いたんです。そのエネルギーたるやみごとなもので、泣くとすっきりしていました。自立心も強くて、うっかり手助けするものなら、ダメーって怒鳴ったんです」

「へー、だからすてきなお姉ちゃんになったんだ。チャンちゃんもそうだったの、先生？」

「あっは、まったくちがった。チアンは生まれるともう母親の声のする方に向かって笑いかけていたよ。首が座ったある日、母親が抱っこしていたら、壁の湯わかし器に向かってニコッと笑いかけたんだ。おやっと思って、もう一度湯わかし器の前を通り過ぎてみたら、チアンは振り向いて、また湯わかし器に笑いかけたんだ。湯わかし器が人の顔に見えたんだな。チアンはいつもニコニコ。叱られて泣いても、すぐにカーテンの陰なんかから首を出して、ニコッと笑いかけてきた。チアンは人間だい好き、弱い子や困っている人のお世話が好きな人間になった」。豪利はできるだけ穏やかな表情で話した。

「最後に一つききますが、パパはタイヨウくんを叩きますね。パパは加減して叩いているんでしょうが、子どもには恐怖です。まして親に叩かれたのでは子どもは逃げ場がありません。もう一つ、あなたは三歳児に『男のくせに』とか『男らしくしろ』と叱るのはなぜですか？」

パパはうつむいたまま言葉が出なかった。ママが「パパは父親に同じように言われて、叩

かれて育ったんです。父親もその父親から同じようにされたらしいんです」

「そうか。パパのお爺さんがパパの父親を叩き、その父親がパパをたたき、パパがタイヨウをたたき……タイヨウも自分の子を？」

こわばった顔になったパパを見ながら、豪利は言った。「あなたがお父さんと同じことをやるのは、お父さんを尊敬しているからですか？」

「憎んでました」とママが悲しくこたえた。「パパが小三のとき、お爺ちゃんが死にました。そのお葬式の日、パパはお葬式にやって来た人たちの前で父親になぐられて、悲しくて、川に飛びこんで死のうと思って、家を飛び出していったのです。大人になってその川に行ってみたら、田んぼの中を流れる細い、浅い小川だったんです」

「えっ」と豪利とチャンちゃんが目を合わせた。「もしかして」と思って、豪利はパパとママに、洗った食器が入っているカゴの中に、タイヨウが自分の靴を洗って入れたため、生徒の一人に叱られ、キャンプ場から飛び出して行ったことを話した。

デップリンが青い顔をして立ち上がった。「ぼくです。タイヨウくんの気持を考えないで、怒鳴ってしまったんです。もうしわけありません！」

豪利がデップリンを制しながら続けた。「生徒たちが探しに行くと、タイヨウくんは小川を見つめていたのです」

ママが悲鳴をあげた。「いやだーっ！ タイヨウはパパと同じことを思ったのよ！」

デップリンはパパ、ママのところに走り、「申しわけありません」と何度も頭をさげた。

豪利がきいた。「きみはなぜそんなにあやまるのだ？」

「タイヨウが川に飛びこんだかもしかかもしれないと思うと……」

豪利が声を出して笑った。「偶然の一致だよ。いいか、パパがそう思ったのは小三だぞ。だが実行はしなかった。ましてタイヨウは三歳だ。三歳が自ら命を絶つなんて考えもしない。川を見ていたのは何か別の理由だ」

少し間をおいて、豪利は独り言の振りをしてつぶやいた。「小さいころの悲しみやつらさは、記憶には残らなくても、心の底には不安として残るんじゃないのかなあ……そういう子はまともな大人になれるのだろうか？……その不安の感覚を取り除くにはどうしたらいいんだろう？」

豪利はママにきいた。「タイヨウに絵本を持たせたのはママかな？ 読んでやっているの？」

「はい。タイヨウは字は読めませんが、絵を見ながら一人でお話できるくらい好きです」

「おお、いいじゃないですか！ いいですねえ、そんなに読んでやっているんだ。セミの抜け殻をくぬいだお洋服>なんて言い方をしたのもママかな？」

「パパです。パパが教えたんです。パパは虫が好きなんです」

「おお、そうですか、二人とも遊び心を持っているんだね」。豪利は朗らかな声を出した。「その遊び心をたくさん出してやれば、不安の感覚……もしそんなものがタイヨウにあるとすれば、タイヨウの体から消えていくんじゃないのかな。さっきのかくれんぼで、『ぼく、

ここ』と叫んで、見つけてもらうことを期待していた瞳、そのつぶらな瞳に応えてやってください。ぼくね、こんな偉そうなことを言ってますが、ワイフからは『人の子どもたちのことを考えるくらい、自分の子どものことを考えてほしい』と言われます。この塾だって、ぼくは子どものことがわかっているつもりでやっていましたが、てんでわかってませんでしたよ」

パパが小さな声できいた。「気持ちとか、考え方って、変えられるものなのですか？」

「変えられますよ」。豪利はゆったりとこたえた。「ぼくはね、子どもが好きでこの仕事を始めたわけではないんです。行きがかりで始めちゃったみたいなものです。でも始めて見たら、子どもを好きにならなきゃいけないと思って、好きになろうとしたら好きになりました。覚悟ができれば気持ちは変えられます。パパがここへきてからまだ一時間そこそこですが、その間にあなたの表情がどんどんやわらなくなっています。あなたは人間に対する愛情を持っています。そういう人は考え方を換えられます。子どもをほめることができるようになり、自分勝手な叱り方もしなくなります。そうそう、三年前、ある小学六年生が書いた作文を思い出しました。次のような内容です。『ぼくは小三でチーチーに入りました。それくらい授業に来るのが楽しみです。それはゴリ先生がぼくのよいところをほめてくれるからです。ぼくは先生にほめてもらいたくて塾にやってきました。ぼくは先生の言葉に恋い焦がれています。でもときどき先生は冷たい目でぼくを見ることがあります。そうするとぼくの体は冷えていきます。骨まで冷えて、歩けば骨が折れてしまうくらいです。先生、子どもの良いところを探して、ほめて育ててください。そうしたら子どもは勇気がでて、やる気になります』……そういう作文でした。ぼくは反省と感動で胸がいっぱいになりました。その作文を書いたのは？」

「あの人！ デップリンで一す」

チャンちゃんがチビちゃんたちに呼びかけた。「先生が絵本を読んでもくれるわよ！」

チャンちゃんがタイヨウをパパの前に連れていった。タイヨウはパパの顔を見た。パパの腕が伸びて、タイヨウを腕の中に入れた。

豪利が絵本の表紙を見せた。タヌキの親子の絵が描かれていた。

「おとうさん」 (豪利が題名を読んで、ページをめくった)

(タヌキのおとうさんがこどもをだっこしている)

(ページをめくる)

(こどものゾウとこどものゴリラがむかいあっている。こどものゾウがいう)

「あのね ゴリラくん。ぼくのおとうさんって すごいんだよ」

(ページをめくる)

(大きなおとうさんゾウの長い鼻の上で、こどものゾウが宙がえりをしている)

(ページをめくる)

(ゴリラの子どもと象の子どもがむかいあっている。ゴリラの子どもがいう)

「あのね ぞうくん。ぼくの おとうさんって すごいんだよ」

(ページをめくる)

(ゴリラのおとうさんが、象のおとうさんを高々と持ち上げている)

「こ~~~~んなに ちからもちなんだから」

(ページをめくる)

「ぼくの おとうさんは もっと すごいよ」

(とライオンの子どもがとことこやってきて、ゴリラの子どもと象の子どもにいう。)

(ページをめくる)

「こ~~~~んなに かっこいいんだから」

(りっぱなたてがみのライオンのおとうさんの背中に、子どものライオンが乗っかっている)

(ページをめくる)

「ぼくの おとうさんは もっと もっと すごいよ」

(と小さな鳥がピコピコ歩いてきて、ゴリラと象とライオンの子どもたちにいう)

(ページをめくる)

「こんなに こんなに きれいなんだから」

(クジャクのおとうさんがきれいなきれいな羽を大きく広げている)

(ページをめくる)

(ゴリラと象とライオンとクジャクの子どもたちの前に、タコのあかちゃんがひろひろひろっとやってくる)

「なんたって ぼくの おとうさんが いちばんだよ」

(ページをめくる)

(タコのおとうさんが八本のあしでおもしろいかっこうをしている)

「こ~~~~んなに おもしろいんだから」

(ページをめくる)

(ゴリラと象とライオンとクジャクとタコの子どもたちの前にタヌキの子どもがやってくる)

「ぼくのお父さんはね……え〜と…え〜と…ちっともすごくないんだ」

(と豪利の声がだんだん小さくなる) 「でもね…でもね…」

(ページをめくる)

(おとうさんタヌキのおなかの中で、子どものタヌキがにっこりにっこりしている)

「だれよりも やさしいから だ〜〜〜〜いすま」

タイヨウがパパの膝の中でパパを見上げた。

「夕ごはんの時間でーす。子どもが大好きな食べ物でーす」。キララ子がきいた。「タイヨウくん、何のごはんでしょうか？」

「カーライシュ！」

「あたりでーす。カレーライスでーす。食堂に移ってください」

タイヨウがパパの手を引き、エリとホナミがスキップし、その後をみんながついて行った。食堂の真ん中に五つの椅子で囲まれたテーブルがあり、そこにタイヨウ、エリ、ホナミ、パパ、ママが座った。

生徒たちはそれぞれが二升五合炊きの大釜からライスを、大鍋からカレーを盛った。チビちゃん用にはボールに分けてあり、三人は自分たちで盛りつけた。タイヨウの盛り付けはエリが見守り、タイヨウがこぼしたものはホナミがきれいにした。

「いただきまーす」

デップリンが「これ、おいしい！ これ、もしかして」と言い出した。

「その先言わないで、デップリン。やっぱりあんたが気がついた」とキララ子が笑った。

生徒たちも「このカレー、おいしい！ 知ってる味」と言いだした。

「わかった！ カントリー・ジョウのカレーだ！」

「あたりでーす。カントリー・ジョウに電話して作り方を教わったんです」

小林さん親子もパパもママも「おいしい」と感心した。豪利は、チーチーのスキー合宿で毎年お世話になっている、小谷村柵池高原のカントリー・ジョウというスキー宿のカレーライスのことを話した。

食事の最後に小林さんからチーズのお菓子が出た。「おらの家の牛の乳から作っただ。この松田牛乳さんにもおらの乳を使ってもらっているだいな」

今度はパパ、ママが「うちのケーキにもこんな牛乳を使いたい」と話していた。

食事が終わり、小林さんから話を聴くために講堂に戻った。タイヨウたちは寝る用意をし、みんなは小林さん親子の周りに集まった。

リサが「空飛山で、小林さんと先生が方言で話したのが面白かったので、大町の言葉で話してもらえませんか」と提案した。

小林さんは日に焼けた顔で、にこにこ見回した。「みなさんは焼夷弾とか空襲という言葉
を耳にしたことあるかや？……おお、そうかね、そうかね、あるだかね。おらは浮浪児でね、
いま少しで飢え死にするところを拾ってもらっただね」

「浮浪児って、なんですか？」

「戦争で身寄りをなくして、寝る家も食べ物もなく、学校にも行けずに、街中をさまよっ
て、やっとこさ生きている子どもたちのことせ。おらもそうだった。昭和二十年、千九百
四十五年に、東京がアメリカの飛行機の大群に襲われて、焼夷弾という爆弾を落とされただ。
そりゃへえ、爆弾のカーテンだっただってせ。その爆弾は細長い筒になっていて、中に油や
火薬が入っていてせ、地面に落下すると火を噴いて、家に火事をおこさせるだよ」

「ゴリ先生の奥さんのお母さんは、屋根を破って家の中に落ちてきた不発弾を抱いて、庭に
放り投げたって聴きました」

「ああ、そうだったね、おらも先生からそのこと聴いただが、そりゃたいしたご婦人だわや
あ。気力と腕力がなきゃあ、男衆でもできることじゃないだよ」

「そのご婦人の孫がこのチャンちゃんです」とデップリンが自慢した。

「あれー、そうかね、そうかね。それでぴよこたん、ぴよこたん、お転婆やってるだね」

「小林さんもその火に追われたのですか？」

「追われたんずら。おら、タイヨウくんと同じくらいっこかったでせ、赤い火が燃えてる
のをなんとなく覚えてるくらいで、火の中を逃げ回った記憶はないだ。けどせ、一人じゃ逃
げられない幼児が、今ここにいるってことは、だれかに助けてもらって、逃げることができ
たってことだね」

小林さんはそう言って、リサの顔をじいっと見つめた。

「小林さんはさっきからリサばかり見つめてお話しになってますが、ここにはキララ子
というきれいなご婦人がいます。どうしてリサばかり見つめるのですか？」

デップリンの問いかけに生徒たちが笑ったが、小林さんはリサを見つめたままだった。と
つぜん小林さんの目から涙が落ちた。息子の美麻がそれを見て言った。「オヤジは命を助け
てくれたお姉ちゃんをきっと思い出してるだ。そのお姉ちゃんという人がリサさんに似
てるんじゃないかね。オヤジはね、今朝、放牧場で目鼻も見えないくらい遠くにいる女の子
を見て、リサさんてわかっただ。雰囲気でわかっただね。幼い時に感じたお姉ちゃんの雰
囲気を、オヤジは感じたんずら。そうずら、オヤジ？」

小林さんは土の色のしみこんだ手拭いで涙をふいた。「おらはいつ、どこで生まれただか、
名前はなんていうだかもわからないだわ。親きょうだいのこと覚えていないだ。あの空襲
でみんな死にしまっただね。だけど一人のお姉ちゃん、おらの本当のお姉ちゃんだったかど
うかもわからないだが、小学一年生くらいのお姉ちゃんが、おらの面倒を見てくれたらしい
だ。おらは顔は思い出せないだが、雰囲気は覚えているだ。優しくふんわりと包んでくれる
人だっただね。今朝、木崎湖を見下ろすところで、歌を歌っているリサさんを見た時、おら
はあのお姉ちゃんに会ったような気持ちになっただね。日本は戦争に負けてせ、食べ物もな

く、会社や工場も焼けて、大人は仕事を失う、家もない。そういう所へ兵隊さんたちが外地から生きて帰ってくる。外地で勤めていた衆が引き上げてくる。そう言う衆が職を求める。そういう衆のために政府は子どもはほったらかしせ。そんな中で、身寄りをなくした小さい子たちはどうやって生きてたかね。一人じゃ生きていけないで、大きいお兄ちゃんやお姉ちゃんがどこかから手に入れてきた食べ物を分けてもらったり、盗みを教えてもらったりしただね。大人に食べ物をねだって、野良犬みたいにじゃけんにされたらしいけど、優しい大人だっているだよ。わずかばかりの食べ物をゆずってくれたはずせ。そうでなきゃ小さい子どもはみんな飢え死にしたはずせ。生きて浮浪児やってる子がいっぱいいたってことは、そういう優しい大人もいたってことだね」

「小林さんはどうして大町に来られたのですか？」

「この近くの農家の小林って若夫婦に子がなくてね、東京に行けば身寄りのない子どもがごろごろいるで、だれか拾ってこようってわけで東京へ行っただ。そしたら新宿駅の地下道に、ぼろぼろの服を着て、汚れて、やせ衰えた子どもたちが寝転がっていて、その中の小さな男の子が「食べ物をください」って、弱々しい声だけど、しっかり言っただって」

小林さんはそこまで話すと「あとはワレが話してくれや」と息子に言った。

「小林って若夫婦はその後、ぼくのジジ、ババになる人です。夫婦がその子に身寄りをきくと、『お姉ちゃんがいる』って答えただが、そばにいた小学生の浮浪児が、『その子のお姉ちゃんは今朝死んだよ。大人がムシロに丸めて持っていった』と言っただって。小林夫婦はこの小さな男の子からいろいろきこうとしたが、名前がケンくんということと、両親、女きょうだいがいたらしいこと以外はわからなくてね、この子は放っておいたらもう死ぬ、って思ったもんで、教えてくれた浮浪児におにぎりをあげて、ケンくんは弱って歩けなかったもんで、抱っこして連れ出して、水筒のお湯で溶いたソバガキをあげただ。ケンくんは「おいしい、おいしい」って言っただってせ。そして夫婦はケンくんをSL列車に乗せ、大町に連れてきたけど、新宿から松本までの間、ケンくんは眠り続けただって。体が弱っていただね。そして家に着いて、風呂に入れ、近所から子どもの服をもらってきて着せて、「もう今日からケンくんはこの家の子どもだよ。寝るところはお布団の中、ごはんもいっぱい食べていいだね」と言うと、ケンくんはきちんとおつくべして、正座のことだがね、『ありがとうございます』って言っただってせ。この小林夫婦に数年して女の子が生まれて、成人してケンくんと結婚して、ぼくが生まれたんです」

「空腹はつらく厳しいことなんでしょうね？　小林さんは空腹の記憶はあるのですか？」

「ないだよ。そのお姉ちゃんはおらに食べさせて、自分は食べずに飢え死にしたと思うし、おらだって飢え死に寸前だったらしいだが、記憶はないだ。飢えて死ぬってのは急に死ぬんじゃなくて、意識がある中で少しずつ弱って死んでゆくだで、悲しくてつらかったずらね。宮坂先生はおらより二つか三つ歳上だと思うけど、空腹を覚えておいでかね？」

「覚えてないですね。ぼくは幼児期は台湾にいたんです。アメリカの飛行機の空襲があるということで、田舎に疎開して、住んだ家は床も壁も天井も竹だけでできた避難用の家で、一

部屋に一家族ずつが住んだんです。食べ物はなくて、ぼくがその部屋でひぎを抱えていたら、母が『どうして外で遊ばないの?』ときいたら、ぼくは『外で遊んだらお腹がすく』って言ったってけど、ぼくの記憶にはないね。母は子どもたちに食べさせるために自分は食べないで、倒れたこともあったらしい。オヤジが山から蛇をとってきて、それを焼いて食べた情景はふしぎに覚えていますね。日本が戦争に負けると、ぼくらは台湾から大町に引き揚げてきたのですが、母の実家が商店だったし、親戚もみんな農家だったで、なんとか助けてもらったらしいです。日本には食べ物がなくって、昭和天皇が国民を飢え死にさせたくないって胸を痛めた頃のことだと思いますが、ぼくの家もオヤジは仕事を始めたばかりで米を買う金がなくって、ぼくの記憶の中におかゆがあるのですが、おかゆと言っても、大根の葉っぱの緑の中に白い米粒が少しだけ浮いていてね、それをおやじが自分の茶碗から箸で一粒一粒つまんで、子どもたちの茶碗に入れてくれた情景を覚えています、空腹でつらかったはずの記憶はないですね。ソバガキもよく食べました」

「小林さん、ソバガキってどんな食べ物なんですか？」

「ソバの粉を熱湯で溶いて、団子にしてソバツユなんぞで食べるだね。この辺りは水が冷たくって、昔は売り物になるような米は作れなんだが、ソバはいいものができた。ソバガキはおらの初心の味せ。サバの水煮缶で煮た鍋のソバもうまいだよ。質問してくれた兄ちゃんはいらい立派な体をしてるで、きっとおいしい物を食べてるずらが、ソバガキみたいな素朴な味もいいもんだじ。食べて見ましょ」

生徒たちが笑った。デップリンは両腕を大きく広げて、「まあ、まあ、まあ、お静かに」をやった。「明日のキャンプの空飛山班は、ぼくの希望でお好み焼きをやることになってます。それでぼくが大きな鉄板を持って行くとしたら、ブタが鉄板を背負っていくんだ、って剣矢がからかいました。今、小林さんのお話を拝聴して、明日の空飛山班は、ソバガキとサバの水煮缶の山賊鍋に変えます」

「むりだよ！ 食べたがり屋のおまえが、素朴な味だけで満足できるはずがねえよ」

「いや、デップリンはできるぞ、剣矢。これはデップリンの一時的な思いではない。小林さんの話を聴いての本気だよ。ところでデップリン、きみの熱い心がだんだん人の心を見るようになってきているみたいだな」

「ありがとうございます。そう言っただけだと自信が持てます」

「やあ、えらい長くしゃべっちゃったわやあ。みなさん、おらの話を聴いてくれてありがとね。おらは戦争で死ぬところを拾ってもらって、こうやって生き延びたわけだが、そういう者として、最後に言っておきたいことがあるだ。

戦争ってことについてだがね、戦争は政府がやって、一般の人は協力させられ、死ぬのも一般の人たちだでね。憲法ってものは、政府が国民を縛るものではなくて、政府が悪さしないように国民が政府を監視し、縛るものだでね。憲法を大事にしておくれ。もう一つお願いがあるだ。みなさんは選挙権を持つようになったら、選挙には行っておくれ。良い政府を作るのも悪い政府を作るのも、国民の選挙の結果だでね……おやすみなさい」

小林さんは別れ際に、生まれたての牛がいること、明日、ソバを刈ること、家の裏の小川でイワナが釣れることを話し、「おらの家の敷地でキャンプができるだよ」と誘った。リサとサユリ、オッチャン、ジュニアがキャンプに行くことにした。

パパとママは千葉県の実家の整理に帰るのは明後日に延ばし、タイヨウが行くキャンプ地に参加したいと言った。「タイヨウがあんなにはしゃぐ姿を見て、ぼくが押さえこんでいたことがわかりました。明日のキャンプでは口出しをしないで、タイヨウの心を見るようにします。キャンプが終わったら、子どもたちを連れて大町駅に直行しますので、明日、キャンプ地に出発する前に、生徒さんたちにお礼の挨拶をさせてください」と言って、夜遅く、大町温泉郷の宿に帰って行った。

キャンプ地とメンバーを決めた。まだ親分をできないと言うホッホに、剣矢が「親分やれよ。理王に親分をやらせてもらえよ」と強くせまった。

「剣矢はどんな考えがあって、そんなに強く言うの？」とキララ子がきいた。

「こいつ、けっこう度胸がいいんだ。合気道にすぐ入門したし、おれの決闘の練習相手に自分からなってくれたんだ。けどどこいつ、人とかかわることになると、おどおどしちまって表現意欲がなくなるんだよ。せっかく尊敬する理王と同じキャンプ地に行くんだもん、親分やって、表現意欲を鍛えてもらえよ。おれ、おまえが医者になったらいいって思い始めているんだよ」

ホッホの白い顔がみるみる赤くなった。「剣矢はぼくが医者になったら、患者はもっと悪くなるって言いました」

「今は逆。おまえ、チビたちだけでなく、タイヨウと遊んでいる時の太郎を見る目もいいんだ。お前、人に優しい。けど表現意欲がない。表現意欲がついたら、おれ、ホッホは子ども相手の医者になったらいいな、ってちょっと思ってたんだ」

合宿六日目（ホッホくんのリーダー振り。太郎の合宿から追放）

朝食後、ホッホが理王に相談に来た。「ぼく、自分らしい親分というのが、わからないんですけど……」

「今、おまえ、自分らしい親分、やったじゃないか」

「はっ？……『自分らしい親分がわからない』って言ったことがですか？」

「そうだよ。それをみんなの前で言えばいいんだよ」

「ばかにされませんか？」

「しない。親分として育ててくれる」

豪利は車に象兄ちゃまとキララ子を乗せて食材の買い物に出かけた。途中でシオ子を迎えにクリニックに寄った。シオ子は足をブヨに刺されて腫れあがっていたのだ。

シオ子はクリニックから出て、豪利の車に乗り込むなり、「都会の子はブヨに免疫がない

ので腫れてしまっただけで、心配はないんだって」と言うと、おしゃべりの口をアヒルのように動かして、待合室にいたごく若い母親のことを猛烈な勢いで話した。

「その若いお母さんのこと、みんなの前で話してほしいわ」とキララ子が言った。

「そうだな。明日の夜、コンパの相談の前にシオ子からみんなに話してくれ」

「太郎のことですけど」とキララ子が憂いの表情を豪利と象兄ちゃまに向けた。「みんなと交わろうとしないんです」

「わたしたちを拒絶してるんだよ」とシオ子がすぐに反応した。

「拒絶とは違うわ。太郎はホームシックにかかっているんじゃないでしょうか？」

「ホームシックにか……どうしてそう思うんだ？」

「太郎はタイヨウたちと温泉郷キャンプに行くことになっていたんだけど、パパ、ママが行くことになったものですから、人数の関係から、デップリンによって、他のキャンプ地にまわされたんです。そのとき太郎ががっかりした表情をしたんです。太郎には弟がいて、かわいがっているということですから、タイヨウと重なっているんじゃないかと思うんです。もう一つあります。太郎は今朝、キイロちゃんを『お母さん』て呼んで、赤くなったんです。キイロちゃんは『間違えてもらって、うれしいわ』ってにっこりしてあげました。太郎はお母さんや弟を思って、気持ちが落ちこんでいるような気がします」

「ぼくも声をかけましたが、沈んでいるという感じでした」

「そうか、人の心がわかる象兄ちゃまとキララ子がそう感じたのか。うん、わかった。キャンプに出発する前におれが太郎と話してみる。人と交わらない理由をきいてみる」

四人でショッピングセンターで買い物をすまして外に出ると、「こんなド田舎にもケンタがある。食べたーい！」とシオ子がはしゃいだ。「買い物を手伝ってくれたお駄賃だ。ごちそうしよう」とケンタッキーフライドチキンに入った。

三人が注文した後、豪利が「ぼくはこのジャガイモの千切りの揚げたやつ」と写真を指すと、レジの若い娘がパッとレジの向こうにしゃがみこんだ。シオ子とキララ子がキャーッと笑って、「先生、日本語に訳し方が上手！」と喜び、レジの向こうから、真っ赤な顔をして立ち上がってきた店員の娘といっしょになって笑った。

夏期大学に戻り、買って来た食材を、豪利と象兄ちゃまがキイロに渡していると、中二の少女たちがドタバタドタバタと駆けてきた。

「先生！ わたしたちにも<ジャガイモの千切りの揚げたやつ>をごちそうして！」

「あは一、わかった。二学期の最初の授業でな」

デップリンと中三生、高校生たちが堅い表情で豪利の前にやってきた。デップリンがとつぜん床に正座した。「先生、もうしわけありません！ ぼくは出過ぎたことをしてしまいました。太郎を合宿から追放してしまいました。申しわけありません」

豪利は驚いたが、「おお、そうか」と気楽そうな顔を作った。「うん、デップリンがそうやったんなら、理由があつてのことだろう……よし、みんなの気持もきこう。アズミ、生徒を集めてくれ」

豪利が講堂の畳の上に腰を下ろすと、生徒たちがそっと集まってきた。

「キャンプの準備ができたかを、各班が点検していた時のことだったんです」とアズミが説明した。

オッチャンが太郎のところに行って、「寝袋、忘れないでね」と声をかけた。すると太郎が「うるせー、忘れねえよ！ おまえじゃあるまいし！」と言り返したのだ。生徒たちがハッとした瞬間、「てめえ！」と怒鳴り声をあげて、アッキーとマキトとが太郎に殴りかかった。ジュニアがさっと動いて二人を抱きかかえてとめた。そのときデップリンが怒声をあげて、太郎を壁まで突いていき、巨大な胸を小柄な太郎の体にかーん、かーんとぶつけた。

「なんてことを言うんですか！ あなたは感謝ということを知らないのですか！ あなたはこの合宿にいてはいけない人です。帰りなさい。出ていきなさい！ あなたはチーチーにいてはいけない人です！」

生徒たちは息をのんだ。大声を出しても、言葉の調子にはいつも温かさがあるデップリンの初めて見せる怒りだった。体をゆすって激しく息をはくデップリンを理王が抱いた。

太郎は荷物を背負って出て行った。アズミとヒッポが太郎の後を追いかけた。「ゴリ先生が戻ってくるまで待ちなさい」

「ぼくの意味で帰ります」。太郎は足早に坂道を下りていった。

「そうか、そこまでのことはわかった。言いたいことがある者はいるか？」

剣矢が立ち上がった。「悪いのは太郎です。太郎には、高校生も中三生も何度も声をかけしてきました。でもやつは無視し続けたんです。かばいようがありません」

「そうか、人の長所が見える剣矢がそう言うのか。リサどう思う？」

「わたしはオッチャンがかわいそうです」

「うん、わかった。なあ、デップリン、おれだったら太郎を張り飛ばしていたよ。叩かれた痛みよりも、オッチャンやきみたちの心の痛みの方が大きい……ただ、太郎が小さい子を見るときの目は本当の心の表れだと思う。その太郎が、なぜだ？……おれが太郎の様子に注意を払うべきだったな……デップリン、きみは太郎とは親しいが、この後をどう処理するつもりだ？」

「あー、先生、処理なんて、物を扱うような言い方はしないでください。ぼくは覚悟をして、太郎の家に電話をしたのです」

デップリンは太郎の父親に、太郎の今日までのことと、自分が太郎に言ったこととを詳しく話した。「おじちゃまは言いました。『日出くんは子ども剣道クラブで、太郎を親切に教えてくれた。日出くんの優しさ、正直さに、おじちゃんたちは感謝している。その日出くんが言うのだから、太郎に非がある。太郎のことは親が責任を持つ。宮坂先生は合宿が無事に終わるよう、生徒さんたちのことだけを考え、こちらには電話はくたさらないように言ってほしい。こちらからも二学期になるまでは、連絡を差し上げない』ということでした」

「そうか、ありがとな。この件はおれの責任だ。デップリンは合宿を楽しめ。カウンセラー

たちも責任を感じなくていい。さて、もうすぐタイヨウのパパ、ママがテントなどを買って戻ってくる。二人に太郎のことをきかれたら、「急用で帰った」と言っておけ。ソバ粉をたくさん買って来たぞ。ソバガキを食べたい者はキャンプで素朴な味を楽しんでくれ」

温泉郷班がキャンプに出発する時間になり、パパ、ママが生徒の前に立った。パパはお世話になったお礼を言った後、子どもに対する自分の反省と今後の心構えを、つまったり、言い直したりしながらとつとつと語った。「みなさんの活発な姿を見て、人と交わる大切さを学びました。ぼくも何かのサークルに入るつもりです」

パパ、ママが買って来たテントなどキャンプ用品を生徒たちも手伝って、温泉郷班が出発した。三人のチビちゃんをみんなで見送った。

(ホッホくんのリーダー振り)

鹿島川班は高原を抜け、鹿島川の岸に立った。日差しは強いが、木陰に入ると汗がひいた。「こういうさわやかな感覚って、ぼくは知らなかったなあ……このままこうしたいです……でもぼくは親分やらなければいけない。人に命令なんてできるかなあ」

ホッホの長い独り言に理王がくっくつと笑った。ホッホがはっとした。「みなさん、きいてください。ぼくは人の上に立ったことはありません。この後、どうすればいいんでしょうか？」

「ぼくたちが安心できるようにしてください」。中一の雷介が応じた。

「あ、はい……安心できるようにって？……どうやってですか？」

「そこを先ず自分で考えてください」

「あ、はい」。ホッホはそのまま雷介の顔を見て、長い<間>になった。

ホッホの顔がゆるんだ。「ぼくはみなさんが安心できることが何かを見つけられました。それはみなさんが行動できるように、この後のスケジュールを示すことです」

そう言って、ホッホは理王を見た。理王がうなずいた。「では、最初に、テントを張る場所を決めます。次に野グソの穴を掘ります」

「やったね」。桃香がのんびりと応じた。キイロとあや子と理王が笑いをかみ殺していた。「次に炊事用の薪を集めます。休憩した後、夕食作りを始めます。メニューは白いご飯、具がいっぱいの松田牛乳の山賊鍋、野菜サラダと、ソバガキです。ソバガキはみなさん初めてと思いますから、テキトーにやりましょう」

「理王のテキトーが出たわね。それでいいのよ、ホッホ」とキイロがにっこりした。

「みなさん、テントはどこに張りましょうか？」

「安全な所だよ」と桃香がまたのんびりと言った。

「この土手の下の河原に砂の所がある！」とアッキーが指でさした。

雷介がまた言った。「あそこには流木があります。大雨の時には水が来るってことです。山の天気は変わりやすいから、ここは天気でも、上流は雨になるかもしれません」

「対岸に広い所が見えるけど、あそこはどう？」とアヤ子が言った。

「古いがけ崩れの跡があります。やめたほうがいいです」

「あそこに草地が見える。木もある」。アヤ子がピューンと走って行き、草地から大きな声を返してきた。「平らな草地で一す。木の陰に穴も掘れま一す」

みんなで移動した。草地の向こうは畑になっていて、お爺さんがクワで耕していた。

「ホッホ、ここにテントを張っていいかをお爺さんにきいたほうがいいんじゃないか？」と理王が言った。ホッホは「ぼく、人に話しかけたことない」と気後れの顔になったが、生徒たちの目に押されてお爺さんのところへ行った。戻ってきた時には手に野菜を持っていた。

「高原野菜だそうです。無農薬です。生でも煮てもおいしいんですって」

「ありがとうございます」と生徒たちはお爺さんに手を振った。

ホッホが「テントを張りたい人？」と言うとアヤ子と桃香が手を挙げ、「穴を掘る人」にはアッキーとホッホ、石で炊事用のカマドを作り、薪を集める人には雷介と太一と理王になった。

理王は薪集めの三人を連れて河原に下りた。「ついでに、最終夜のキャンプファイヤー用の流木も集めよう。先生が車で取りに来るから、大きくて燃えやすい流木を集めてね」

小さな太一が体には太すぎる流木を拾って、ふらつきながら何回も往復した。理王が「太一、よく働くね。りっぱな戦力になっているよ」とほめると、太一が「はい」とうれしそうな声を出した。生徒たちが初めて見た太一のはっきりした表情だった。

ホッホは夕食の準備まで一時間の休みを告げると、裸足になって川の水に入り、バシャバシャと歩いた。河原の石に座っていた理王が、「北アルプスの雪解け水だよ。足が切れるくらい冷たいだろう」と声をかけると、ホッホは理王のとなりにすわった。「こういうことをぼく、やってみたかったんです」

「おまえ、よくその言葉を言うね。自然に触れる喜びって、おまえの体の中にあるんじゃないのかな。親分ぶりもいいよ」

「ありがとうございます。『どんなところが？』ってきいていいですか？」

「自分の弱みを隠さなかったことだ。みんなは協力する気にさせた」

「うれしいな、うれしいです……あの……東大医学部って難しいんでしょうね？」

「なんだよ、ここでそんなこときくのか？ おまえ、やっぱり東大医学部に行きたいの？」

「ひいお爺ちゃんも、お爺ちゃんも、お父さんもそうでしたから。家の伝統を守らないと」

「家の伝統？ おまえ、東大の医学部出たからって、良い医者になれるわけじゃないんだよ」

「はい……だけどぼくが小さい頃からのお母さんの夢なんです」

「お母さんの夢？」

「お父さんが医院を閉じてしまったんです。お母さんはそれを自分のせいだと思っていて、それでぼくを東大医学部に入れて、また医院を復活させたいんです」

「だったら東大である必要はないじゃないか。おれね、初めはおまえみたいな人が医者になっては困ると思ったけど、今はそうでもない。だけど東大に合格するためにはそれなりの勉強時間が必要だよ。おまえの人生にはその時間はむだじゃないの？ チーチーには高校生

になっても来たいんだろ？」

「来たいです。来ます」

「だったら人と交わることに時間を使いたいから、東大受験はしないって親に言えよ」

「そんなことを言ったら、お母さん、泣きます。ぼくが食事作りキャンプに遅刻したのも、出発間際になって、泣かれたからなんです。あの人、少女みたいに泣くんです」

「行くな、ってか？」

「はい。チーチーの人たちの間に入ったら、ぼくはズタズタにされてしまう、劣等感のかたまりになってしまう、って泣いたんです」

「ズタズタにされたね」

「されました。それをツッパリくんが救ってくれました。理王が導いてくれました。みんなが励ましてくれています」

「そして昨日、剣矢にいいことを言われた」

「はい、人を見る目が優しいから、子ども相手の医者になったらいい、って言われました」

「それって自分では気がつかなかったことだろう？ 東大出の医者って、患者の気持ちがわからないで、トラブル起こす人ってけっこういるらしいよ」

「ぼくのお爺ちゃんがそうでした。お父さんはそれが許せなかったらしいです」

「おまえは剣矢が指摘したように優しい。けどおまえは人と交わってきていないから、その優しさを表現できる力がない。そういう人は患者の気持ちがわからない。医者には向いてない」

「ぼくもまだ自信がありません」

「あたりまえだ……おまえは訓練されていないから、すぐに弱気になってしまうんだ。今は人間関係の中で自分を鍛えることが第一じゃないの？ ヒッポは楽に東大合格だけど、自分が学びたい先生がいる横浜国大を受けるんだってよ。おまえも医者になりたいんなら、自分に合った医療の道とは何かを考えなよ。お母さんもおまえの成長を喜んでいるんだろう？」

「はい。でも東大受けないなんて、ぼく、言えないなあ？ ぼくがちょっと口答えをしただけで、あの人、泣くんです。男の子って、母親が泣くのを見たくないですよ。理王のお母さんは泣きませんか？」

「泣かねえよ。泣く代わりに蹴りをいれてくる」

「理王はよけるんですか？」

「よけねえよ。空振りにはむなしいじゃん……おまえ、この場所が気に入ったみたいだな」

「はい、今日はこの自然の中で、気持ちよく振舞えています」

「ここは広葉樹が多い。秋になったら紅葉がきれいだ。おまえ、ここに一人でテント張ってキャンプして、のんびりと自分を見つめてみな。お前にとっての表現とは何かを考えてみな」

合宿七日目

「先生、おみやげ!」。サユリが笹の枝の先にイワナをつるして駆けこんできた。「オッチャンが釣ったんです」

「おお、これはいいイワナだ。オッチャン、釣りがじょうずだな」

「小林さんの土地の中、流れている川で、釣り人来ないから、イワナ多い」

「わたしたち、裏庭にテント張って、火をたいてイワナを焼いてたら、小林さんが牛肉とかいろいろ持ってきてくれたんだけど、ジュニアが他の班のようにキャンプ食を食べたいと言って、ていねいにお断りしました」

「でも、夕食が終わったらお茶に誘われたんで、おじゃまして、囲炉裏の火で、牛肉焼いて、しゃべりました。このソバはぼくが打たせてもらいました。先生のお昼ごはんです」

「ねえ、先生、ソバはゆでて、冷水にさらして、水を切ったらね、何も付けない食べて、次につゆを少しだけつけて食べて、その後で薬味などを加えて食べると、おそばの味が楽しめるんだってよ、知ってた? 先生にとって、このミョウガとソバ粉をくれたの。それとね、先生、小林さんはわたしがソバ畑に興味があって、リサちゃんが牛に興味があるのを見て、農業と酪農の話をしてくれたの。息子の美麻くんは、福島県の農業と酪農と水産を学ぶ大学で、寮生活をしてるんだって。そしたらリサちゃんがいろいろ質問してね、付属高校もあって、寮にも入れるだって。リサちゃん興味持ったみたい」

「ほお、リサは獣医になりたいんじゃないのか?」

「そう思っていましたけど、空飛山の帰りに、牛が北アルプスを背に草を食べているのを見たら、わたしは牛の病気を治す人よりも、生きている牛と生活したいなって……」

「おお、そうか。アズミが『リサは草原が似合う』って言ったなあ……リサが牛といっしょにいる……うん、いい景色だ。リサ、美麻くんの電話番号をきいておけ」

「わたしがきいてあります。リサちゃん、きけっこないもん」

「ジュニア、お世話になったお礼の電話をしておけ。コンパにも小林さんを誘ってみな」

十二時前後には生徒たちは戻ってきて、キャンプ班ごとに昼食を作った後、カウンセラーと親分たちとの合評会になり、生徒たち一人ひとりについて、プラスの面を中心に報告しあった。

「空飛山でリラックスできたかな、デップリン?」

「できました。アズミくんの穏やかさと、象兄ちゃまの大らかさを学びました。言葉数を少なくできて、その結果、それぞれの人の良さにぼくは目が行きました」

「言葉数が少なくなったのはほんとうだよ」とアズミが優しい笑みを浮かべた。

「へー、それで、どんな結果を得たの?」と剣矢が期待顔になった。

「はい、ぼくは草の上に座って、木崎湖の景色を眺めながら女子たちと話していると、アユ子は人を受け入れている風景のように思えました。桃香には乾草の芳しい香りを感じました」

「ふーん、デップリンがそんな表現できるんだ。それに今のは短くてよかった」

「でもわたしはいっぱいしゃべるデップリンが好きよ」とリサは言った。「心が温かいし、批判するときでもいやみがないもん」

「ありがとうございます。リサさんにそう言ってもらえて光栄です。では、理王はぼくに何て言ってくれますか？」

「ちょっと待った、デップリン！」と剣矢がさえぎった。「おまえ、夏期講習で、リサの魅力を表す言葉をゼツタイに見つけるって言ったけど、おれたちまだきいてないよ」

「あー、そのことなんですけど、先生。ぼくはツッパリくんやキイロさんがリサさんについて言った言葉ほど良い表現を見つけられていません。二人の言葉をぼくの言葉にしてはいけませんか？」

「それに同感なのだから、それがきみの言葉だよ」

「よかった！ ではリサさん、あなたの優しい目は、あなたがその場を立ち去ったあとにも、その場に優しさを残しています。あなたの本質は人を優しく思う心です」

「ありがとう。うれしいわ」とリサとキイロが交互に言った。

「では、理王はぼくのことを何て言ってくれますか？ いっぱいしゃべるぼくと言葉数の少ないぼくと、どっちがいいと思いますか？」

「うん、おれは小さいころからデップリンの、温かい言葉の海の中に安心してたゆたってきた。もしおまえの熱い心が、短い言葉に凝縮投影されるようになるのならすばらしい」

「ありがとうございます。努力します」

「デップリンの初恋の一人だったわたしも期待するわ」とキイロがにっこりわらった。「ホッホの親分ぶりのことですけど、とってもいい顔でやりました。理王はホッホに何かアドバイスしたの？」

「はい、ホッホには自分はリーダーのやり方がわからないとみんなの前で正直に言わせたら、中一の雷介から、班員を安心させるような指示を考えろって迫られ、ホッホはそれを受け入れて、そこから出てきた指示がよかったのです」

「へー、表現意欲のないやつが、表現できたんだ」と剣矢が喜んだ。

ホッホが豪利にきいた。「表現意欲ってどうやって育てたらいいんでしょうか？」

「おお、ホッホがそういう問いを持つようになったのか、いいねえ、ホッホ！ ではみんなが表現意欲について考えてみようか？」

「ゴリ先生、それ、ぼくたち中三生に考えさせてください。先生、象兄ちゃま、高校生たちは黙っていてください」とデップリンが言った。「では中三のみなさんは、表現力はどうやって育てればいいのかを考えましょう。その結果、ホッホが自分で表現力を育てる方法を見つけてくれれば最高です」

「意欲を持って、積極的に発言していけばいいんだよ」と剣矢が気楽にいった。

「その通りです。何よりの発言意欲を持つことです」とデップリンがすぐに応じた。

「剣矢やデップリンは発言意欲のあるからそう言えるけど」とオッチャンがもそっと言っ

た。「おれ、その意欲を持とうとしてないんだもん」

「ではオッチャンはその意欲がなくても困らなかったのですか？」

「あんまり困らなかった」

「わたしも意欲がなかったし、なくても困りませんでした。みんなが言うようにしてたらよかったもん」

「ということは二人とも、周りに流されていたということですよ？」とデップリンが厳しい顔になった。「自分の考えと違った方向に物事が進んでいってもよかったんですかね？こたえてください」

オッチャンもリサも困った顔になった。「教えてください」

「よかないことあった……だからチーチーに入ったらみんなしゃべるから、おれ、刺激されてしゃべろうとしている」

「わたしは流されてきました。でもリーダーシップを学ぶキャンプの経験で、自分なりに言葉を言おうとするようになってきているつもりです」

「オッチャンもリサも前進するようになってすばらしいです……ああ、ぼくはこんな当たり前のことしか言えません……だれか議論をリードしてください」

理王が発言した。「剣矢にききたいんだけど、ホッホは優しい心を持っていると言ったのは剣矢だったし、ホッホには表現意欲がないから、表現意欲を鍛えろと言ったのも剣矢だ。では、剣矢はどうやってホッホが表現意欲を鍛えたらいいと思う？」

「ああ……わかんない」

「リサ」とキララ子が呼びかけた。「あんた、自分なりに言葉を言おうとするようになって、って言ったけど、どうしてそうなれたの？」

「はい、キイロちゃんに『リサは心の優しさから出てくる気持ちを言葉にしていけばいい』って言われたことで、思ったこと、感じたことを言葉にできるようになりました」

「わたしはそれがリサにとっての表現意欲だと思います。だから<ホッホにとっての表現意欲は何か>もホッホの心から出てくるものだと思います。いま、理王はホッホについての剣矢の発言を指摘してくれました。わたしはその指摘に、なるほどと思いました。ねえ、理王はホッホのこと、何か思っているんじゃない？」

「はい……ホッホは医者になりたいんだよね。ではどんな医者になりたいの？」

「患者に寄り添う医者です」

「患者に寄り添う、って当たり前の言葉だ。きみにとってはどういうことなの？」

「ぼくのお爺ちゃんは技術のいい医者だったらいいんだけど、患者に寄り添えなくて、文句を言われることが多かったらしいんです。ぼくは患者の不安な心に寄り添って、励ましたり、安心させたり、納得させてやったりできる医者になりたいです」

「つまり剣矢が言ってくれた<ホッホの心の優しさ>だよ」

「はい、ぼくはその心を育て、その心から出てくる言葉をリサさんのように育てます」

「はい、やりました！」とデップリンが太い腕を挙げた。「ホッホが自分で表現力を育てる

方法を見つけられました。ぼくたちはそれに協力できました！」

合評会が終わって、豪利が象兄ちゃまにきいた。「空飛山はどうだったかな？ きみが空飛山に行ったのはアズミに誘われたからなんだろう？ アズミはきみに傾倒しているし、東大生活のイメージを作ろうとでもしたのかい？」

「ぼくもそれを期待したのですが、彼は北大に行って、ヒグマを追いかけてほしいそうです」

「ヒグマを追いかける？ なんだ、それ？ アズミは両親が安曇野で出会って結婚し、生まれた息子をアズミと名付け、アズミには信州大学に行って信州に就職してほしい、そうしたら親は安曇野に引っ越したいと言っているのだが、彼は東大に行くってきいているがな」

「そうだったんですが、先日の鹿島川キャンプで彼はカモシカに出会い、一昨年はこの合宿の爺が岳登山で天然記念物の雷鳥に出会い、去年は木崎湖トレッキングコースでツキノワグマの親子の出会って安曇野は満喫したから、今度は北海道でヒグマを追いかけてほしいんですって」

「ふーん、動物の研究者になりたいのかな？ 動物好きなのは知っているが、動物だけを追いかけたいアズミの姿は、おれは想像できないな。動物と彼との間には人間がいる方が彼の優しさが生きるよ」

「その優しさなんです、アズミの優しさの中には悲しみがありますね」

「ほう、どういうこと？」

「アズミは、太郎を何とかしなければと思いつつ、自分が通り一遍の働きかけしかなかったことと、道志川キャンプでホッホが剣矢にやっつけられたときも、アズミはまずいと思っているうちに、ツッパリくんが助けてやって、アズミは『何も行動しなかった自分が悲しい』という言い方をしていました」

「おお、そうなのか……それでわかった」と豪利はつぶやいた。「デップリンが小三の時のサマーキャンプでのことだったんだが、小高の男の子たちがデップリンを押さえつけて泣かせたんだ。デップリンはとんでもなくかわいかったから、年上の生徒たちはかわいがったつもりだったんだらうが、おれは『小さい子をいじめるな』と言って、事情もきかずに生徒たちをひっぱたいたんだ。その時アズミは輪の外にいたから、デップリンに手出しはしていなかったんだが、悲しそうな顔をして、デップリンを見ていたんだよ。おれはその表情がずっと心に残っている。小五のアズミのあの悲しそうな顔は何を意味するんだらうと、ときどき思い出してきた。今それがわかった。あれは＜行動しない自分を悲しい＞という表れだったんだ……太郎についてはおれは太郎と連絡をとって、アズミの気持を楽にしてやりたいが、アズミの知性は、いずれは自分の行動の仕方を見つけたらうな」

夕食と入浴が終わり、明日の合宿最終夜の打ち上げコンパの相談で全員が集まったところで、中二のシオコが話した。

「昨日、クリニックでの経験だよ。待合室でうんと若いお母さんが、赤ちゃんにおっぱいを飲ませながら、両手でずっとゲーム器をいじってたの。赤ちゃんが泣いても、お母さんは赤ちゃんの顔も見ないでゲームしてたんだよ。これ、女の子たち、みんなどう思う？」

「そんなのダメ！」「それじゃあ子どもは育たない」「その子の将来が見えちゃう！」

小春が言った。「わたしは小一からずっと不登校だけど、お母さんがいつも話し相手になってくれたよ。チーチーにも入ったから、わたしにはいる所があった。でもその赤ちゃんはお母さんに振り向いてもらえない。いる所がないじゃん」

「それでね、その若いお母さんは、おぼちゃんの看護師さんに、『おっぱいは、赤ちゃんの顔をちゃんと見ながらあげなさい』って叱られたんだよ」

「それでその母親はどうしたの？ ふてくされたの？」

「ふてくされなかったけど、あまりわかんない顔してた。そしたらお婆ちゃんの患者さんがね、『そんな育て方をしたら、赤ちゃんは精神不安定な大人になってしまうし、あなたは歳とってから、子どもに冷たくされたり、暴力を受けたりするわよ』って話してやったんだけどね。ゴリ先生、あとを続けてください」

「うん、しゃべり合わない母子ってどうなるんだろうね？」

豪利は十二人の少女たち一人一人に目をやった。「きみたちはよく育っている。親に感謝だよ。おれのワイフはね、お腹の中で子どもが動くようになると、適当な名前をつけて、お腹の中に向かって、『お目目覚めたの?』とか「お歌うたってるの?」とかって、しょっちゅう呼びかけていたし、生まれてくると、赤ん坊がちいちゃい唇をちょっと動かしただけで、『なあに?』って問いかけ、『お花がきれいね』だの、『あの枝でカッコウが鳴いてるね』などと話しかけていた。そうやってスキンシップを受けて育った子は、気持ちが安定した人になる。マキトは不良少年やっているけれど、たっぷりかわいがられて育ったから、本質はまともだ。ホッホの成長が著しいのは、もの心つく前に、親にいっぱいスキンシップされていたからに違いない。きみたちも子どもをいっぱいかわいがる親になってくれ。かわいがるほど子どもは育つからな」

明日のコンパの食べたい物を決めて、作る話になった。食べたい物をあげたところ、たくさんの品目が出て、その中から、食べる人が十人以上いるメニューに絞った。

町田市名産品の独逸屋のフランクフルトソーセージ、おでん、じゃがバター、焼きそば、もちチーズ、フルーツポンチ、信州名物のおやき、炊き込みご飯の焼きおにぎり、スイカ、飲み物となり、作る人も決めた。

高校生たちだけのミーティングになって、キャンプファイヤーの点火役に誰を選ぶかを話し合った。点火役の生徒は、タイマツに火をつけて林の中から現れ、積み上げた流木に点火する。点火役は「合宿で最もよく成長した人。最もよく遊び、働いた人」が選ばれる。

するとヒッポが「ぼくはホッホを推したい」と言ったので、他の五人の高校生たちは虚を突かれた顔をした。「目立たない生徒でも、視点を変えて眺めたら、『こんないい所がある』という人はいるよね。チーチーでぼくと同じ学年に、円形脱毛症になっている生徒がいてね、

ゴリ先生が気がついてきいたら、学校で数人からトイレにつれこまれてこづかれるなど、ひどいいじめにあっていることがわかったんだ。それでゴリ先生が心の持ち方、戦い方を教えてやったら、彼はいじめられなくなったんだ。そして先生が彼を点火役に選んでやったの。彼はそれまでどこでも選ばれたことがなかったはずだから、ずいぶん自信になったと思う。彼のような人こそ、チーチーでは選んでほしい」

生徒たちの共感の声といっしょに、キイロが「わたしは人の顔を見ることができるようになった太一を推します」と言った。

ジュニアは小春を推薦した。「ずっと学校に行っていないのに、あののびやかさはすばらしい。みんなの前でほめられる機会を与えてやりたい」

「アッキーも入れたい。合宿中の自分の食事を一人で作りきったなんて、ぼくが中二だったらできない」とアズミが言った。「でも四人も選んでいいですか、先生？」

「いいさ。高い評価を受ける生徒なら、何人いてもいい。やあ、良い選び方をしてくれた。点火がすんでリサの歌が終わったら、選んだ理由をアズミがみんなの前で言ってやってくれ。生徒たちも、こういう評価の仕方があったのかと、後の人生に役立てると思うよ」

「そのアッキーの食物アレルギーことなのですが、アッキーも食べたい物に手を挙げたんです」とキイロが言った。「食べさせていいんでしょうか？ アッキーにきいたら、最後の夜くらい、みんなといっしょの物を食べたいって言うんです」

「アッキーはみんなと同じ物を作って食べているじゃないか？」

「そうではなくて、みんなと同じお鍋や鉄板から、いっしょに突ついて食べたいんですって」モトキンが涙を浮かべた。「今夜くらい、同じ鍋から食べさせてあげましょうよ」

みんな考えこんだ。豪利が「そうか、そう思うよな」とつぶやいた。「数年前にひどい食物アレルギーの男の子がいてな、おれは知り合いのハリ灸の医者に相談したら、男の子は精子ができるようになり、女の子は生理が始まると、アレルギーから脱出できる子が多い、と言われたんだ。その生徒はまさにそうなった……アッキーを呼んでくれ」

アッキーがやってくると豪利がきいた。「高校生たちはアッキーに、自分たちと同じ鍋から食べさせてやりたい、と思ってるんだが、きみは添加物の入ってる物を食べたら、すぐにアレルギー反応が出るんだろう？」

「出るけど、だいじょうぶ」。アッキーがうれしそうにこたえた。「化学肥料とか添加物とか使ったら、口に入れただけでわかる。べろがぴりぴりする。そしたらすぐ口から出すもん」

「おお、そうか。わかった、きみの気持ちを尊重しよう。ジャガイモはチーチーの庭で育てたから、化学肥料、農薬はゼロだ。独逸屋のソーセージも添加物はほとんど使われていない。町田市の学校給食に使われているくらいだ。あとの食べ物はきみのべろにまかせよう」

キララ子が相談に来た。「リサが歌う時に、象兄ちゃまに低音部を歌って欲しがっています。象兄ちゃまは高校の合唱部いたそうですから、歌ってくださいますか？」

夜の十一時をまわっていた。講堂でキイロと数人の生徒が、黒板に書き出されたコンパのメニューと、買い出しに必要な食材を検討している時、講堂の隅で、リサが「遠き山に」を

歌い出すと、リサの澄んだ声に生徒たちはしばし耳を傾けた。象兄ちゃまがリサの音に合わせて、低音部を作っていた。

合宿八日目（コンパ）

コンパの準備が始まる午後四時まで自由である。レンタル自転車で田舎道を走り回る予定をたてた中一生七人は、昼食のおにぎり、ネギとおかかを混ぜ込んだミソ汁用のミソ玉、魚肉ソーセージ、セロリーと高原レタスを持って行った。

マキトとアッキー、中二の女子二人、ホッホは鷹狩山に登って、北アルプスの景色を眺めながら、山道を夏期大学まで歩いて帰ることにした。昼食は携帯ガスコンロで雑炊を作るために、昨夜の残りご飯と野菜を切って持ち、キュウリの浅漬一本づつと、魚肉ソーセージ、麦茶を持った。

夕方、中一生たちが日に焼けた顔で戻ってきて、夏期大学の庭に一行に並んで木崎湖を見下ろして叫んだ。「ぼくたち、わたしたち、安曇野の風になって走ったよー！」

全員がそろそろと、高校生のリードで、コンパの作業に入った。下の広場には、キャンプファイアー用に鹿島川から拾ってきた、太くて枯れた流木が形よく積み上げられ、その周りに椅子が置かれ、食べ物を置くテーブルが並べられ、裸電球がセットされた。台所と食堂ではそれぞれのグループが食べ物作りをにぎやかに楽しんでいた。

おやきは豪利が小学生時代の同級生に電話できいたレシピに従って、キララ子が中心になって作った。女子数人に男子が混じって、大はしゃぎだった。「一人二個ずつ六十個作りたいたんですが、半分は小麦粉、半分はそば粉で作ってみたいんですが、先生はそば粉のおやきは食べたことありますか？」

「いや、記憶がない。小林さんからいただいたそば粉があるから、それを使ってみろや」

「中身は茄子の鉄火味噌と野沢菜漬けにします」

「野沢菜漬けは冬の物で夏にはないぞ」

「お土産屋さんから買ってきました。塩抜きして味噌か醤油を入れて油で炒めてみます」

日が落ち、暗くなった。生徒たちは積み上げられた流木の周りを取り囲んだ。

アズミの言葉で始まった。「それぞれの人に発見があり、感動がありました。それをおたがいに交換してください。ではコンパを始めます」

設置された裸電球とそれぞれが手にしている懐中電灯が消され、真っ暗闇になった。坂の上の樹木の中にタイマツの火が遠くともった。四つの火がゆらゆらと、坂を下ってきた。

豪利のハーモニカに導かれて、リサと象兄ちゃまの二重唱が流れた。

「遠き山に 日は落ちて 星は空を ちりばめぬ 今日のわぎを なしおえて ころろ
かろく やすらえば 風は涼し この夕べ いざや楽しき まどいせん」(堀内敬三作詞)
タイマツの火が、積み上げられた流木の底にそっと置かれた。枯れ葉に火がついた。火は

横に広がり、縦に伸び、ぱちぱちとはぜ、炎が満点の星空の中に突き刺さり、星を消し、生徒たちの笑顔を写しだした。二重唱が終わり、ハーモニカの余韻が消えた。生徒たちは静かに長い拍手をした。

アズミが点火役に選ばれた生徒たちの名前と、選ばれた理由を説明した。生徒たちがうれしそうに拍手を送った。アズミが「小林さんの息子さんの美朝くんが、自分の家の牛乳で作ったケーキを持ってやってきてくださいました」と紹介し、大喜びの拍手となった。

キイロがどんな食べ物を作ったかを紹介した。「たくさん種類と量です。自分が食べたいと手を挙げたものはなるべく食べてください」

豪利が「アッキーは今夜は何でも食べてよいことにした」とその理由を話し、生徒たちが熱い拍手をアッキーに贈った。

大親分のデブリンが乾杯のグラスを天空に向かって掲げた。食べ、しゃべった。高校生たちは中三生たちを頼もし気に見つめ、中三生たちは中二、中一생たちと話し、象兄ちゃまと美朝くんは大学生同士で隣り合った。美麻くんが牛のことを話し出すとキララ子がリサを連れてきて二人の間に押しこんだ。

夜がふけ、講堂に戻って寝る生徒、地面にマットを敷いて星空を眺める生徒、小さくなった炎の揺らめきを見ながら話し続ける生徒、それぞれの思いを夜が包んでいった。

合宿九日目

朝食後、生徒たちは「夏期大学に来た時よりもきれいにしましょう」といくつかのグループに分かれて掃除をした。

解散式になって庭に円を組んだ。「ご苦労様でした。夏期大学を使わせてもらった感謝をこめて、掃除がきれいにできました。なお、来年は」と言って、アズミは中二のシオ子を見て笑った。「シオ子が愛している汲み取りトイレが水洗トイレに変わっています」

「えーっ、えーっ、ざんねーん！ 便器のウンチ、わたし、爪で落とせなくなっちゃうじゃん！」とシオ子が生徒たちの期待通りの大騒ぎをした。

チーチーでは難しい仕事や汚れる仕事は、一番の働き者がやる。シオ子は昨年、棒で落とせばすむ便器の汚れを、わざわざ爪で落とし、それを自分で宣伝して歩き、今年も選ばれたのだ。

「では、解散式を始めます。親分をやった中三生とチーチーを卒業するヒッポ、感想をお願いします」

大親分：ぼくは小さいころから、自分がリーダーであることを当たり前と思ってやってきました。ところが中三になって、リーダーシップを学ぶキャンプで親分をやったからの半年間は失敗の連続でしたが、今ぼくは自分の成長を自覚しています。ぼくは<愛の心>というバトンをしっかり受け取りました。それを伝えていきます。

リサ：わたしは牛と生活したい自分に気が付きました。来年の合宿の頃は近くの小林さん

の牧場でアルバイトで働いていると思います。合宿には顔を出します。

キララ子：人の成長を見つめ、喜べる自分を知って、自分の成長を自覚しています。

オッチャン：おれっていいじゃん、て思えるようになった。

剣矢：おれって人の欠点を軽薄に攻撃してしまうやつなんだけど、本当は人の長所が見えて、それを喜ぶことができるいいやつだってこがわかった。

ホッホ：チーチーに入って、ぼくは何も知らない、できない人だったことを知って……（涙であとは言葉にならなかった）

理王：ぼくは親分を相手に合わせることを考えてやりました。ホッホと太一の成長に少しでも手をかせたのがうれしいです。ぼくは中二ですが、この中三生といっしょに来年は高校クラスに移ります。

ヒッポ：ぼくはこの信州長野県の教員を目指します。こういう成長に出会えるような教員になります」

豪利：みんなの言葉がおれの言葉だ。高校生、中学生、象兄ちゃま、ご苦労さま。おれも学びがあった。ありがとう。合宿を解散！」

歓声と拍手がおさまったとき、マキトが豪利に走り寄った。「理王くんが中二って、本当なんですか？」

「うん、きみと同じ中二だよ」

「えーっ、高校生だと思ってた！ あー、おれ、何やってんだ、不良ぶってんじゃねえよ」

マキトの独り言に生徒たちから拍手が起きた。マキトはみんなを見て、ちょっと照れた。

「ぼく、不良をやめます」

チーチー塾を追い出された生徒の父親

夏休みが終わり、明日から秋の授業が始まるという日、豪利が庭で雑草を抜いていると、身なりの整った若い紳士が「宮坂豪利先生でしょうか？」と訪ねてきた。

「わたくしは八坂太郎の父親です。太郎が合宿で大変失礼なことをしてしまいました。まことに、まことにもうしわけありません」と深々と頭を下げた。

豪利は身なりが整いすぎている姿に、返す言葉を探していると、紳士は体を起こし、きっぱりした態度と明瞭な言葉づかいで話した。

「保科日出夫くんが電話で報告してくれました。彼が話してくれたことと、太郎がわたくしに説明してくれたこととが一致しておりました。太郎が生徒さんたちに不快な思いをさせ

てしまいましたこと、父親としてお詫びのしようがありません」

豪利は庭に咲いている百日草に目をやった。「これは百日草でしてね、ぼくが子どものとき、初めて育てた花なんです。それ以来ぼくは素朴なこの花が好きでしてね」

豪利は紳士を室内に案内した。「これはこのあたりのヨモギの葉を摘んで乾燥させたものです」と、湯飲みに葉を入れ、ポットの湯を注いで「どうぞ」とすすめた。

父親は品よくすすった。「わたくしはこのように、草からお茶を作ったり、花を愛するという心がなく生活し、それが太郎をあんなふうにさせてしまったのです」

「太郎くんのごことは生徒もぼくも許せませんが」と言って、豪利は太郎がタイヨウのセミの相手をしたり、お尻の世話をしたことを、タイヨウを見る目が優しかったことを話した。

「そういう生徒が、なぜあんなことを言ったのかが理解できません。保科くんは、太郎くんのご両親は素晴らしい人たちだと言います。そんな親に育てられた子が、なぜなのですか？」

「親の別居です。太郎は母親と別れたことで、心のバランスを急激に崩してしまったのです」「ああ……そうでしたか……それで沈みこんでいたのですか」

「はい……太郎の母親の方は保科くんのお母さんから、こちらの塾が子どもを大切にしてくださいることをきいておりました、わたくしどもが別居する直前に太郎をお願いしたのです。太郎の気持ちが落ち込まないようにと考えてのことだったと思います。しかしわたくし共は太郎があんなに気落ちしてしまうとは思っていませんでした」

「別居の理由をうかがってよろしいでしょうか？」

「教育観、生活観の違いです。母親はおおらかな人間で、こちらの塾の教育方針に心をひかれていました。一方わたしはきちんと育てたい方で、太郎には小さいうちから厳しく当たり、塾も進学塾に入れました。太郎は勉強もスポーツもよくがんばり、友だちも多く、いわゆるよい子に育ってくれました。『父親と息子の間には良い意味での緊張感がある』とわたしは誇りに思ってきました。保科くんの報告を受けたときには、まさか、と困惑しました。でも太郎は小二で子ども剣道クラブに入ったのですが、保科くんが何くれとなく太郎を導いてくれまして、保科くんの人柄にわたしども夫婦は全幅の信頼を寄せていましたから、彼からきた合宿での太郎の様子は信ずる以外ありませんでした。とても太郎とは思えない姿を、保科くんの涙の声で知り、わたしは自分の指導が間違っていたことを即座に悟りました。太郎は帰ってくると、部屋に引きこもってしまいました。夜遅く太郎の部屋をのぞくと、枕が涙でびしょりでした……わたしは長いあいだ見下ろしていました。そのとき、太郎が『おかあさん』と寝言で読んだのです」

父親はそこで言葉を切った。豪利も言葉が繋がらなかった。

「厳しく育ててきた理由はあるのですか？」

「よくある情けない感情です。わたしの家は貧しくて大学に行けませんでした。大きな企業に入りましたが、大学出の同僚が出世していくのが悔しくて、子どもにはそんな思いをさせまいと、勉強に生活に厳しくしたのです。太郎のその頑張りも、大好きな母親とかわいがっていた弟がいなくなったことで、もう続かないと思います」

「太郎くんがこの塾に戻ることをぼくが望んでいる、とお父さんが伝えたら、太郎くんはどう反応するでしょうか？」

「太郎は、人に対してやってはいけないことをやってしまったことを、十分理解しています。太郎はこの責めを一生背負っていくと思います。そういう子です」

「それはぼくにもつらいなあ」と豪利はつぶやいた。「ぼくは太郎くんのことを忘れることはありません。＜自分に責めを負って生きている太郎がこの世界のどこかにいる＞、とぼくは思うでしょうね。それに合宿で太郎の様子がおかしいこと気づいていたのに、ぼくは何もしませんでした。ぼくの問題は大きいです」

豪利は庭に降りて、咲きかけのつぼみをつけた百日草を一本摘んだ。「太郎くんにチーチー塾に戻ってほしい、その気持ちがこの花にこめられている、と言ってわたしてください。ぼくは今日の話を生徒たちに伝えます」

「ありがとうございます。お心遣いを感謝いたします。太郎がもし再びお世話になる気持ちになったときには、太郎はお詫びにうかがうと思います」

「ほんの数か月だけでもこの塾で学んでくれれば、太郎くんの気持ちが楽になります。この塾はそれができる生徒たちの集まりです」

「この花にこめられた先生のお心を太郎に伝えます」と父親は立ち上がった。

「余計なことを言うけどね」と豪利はくだけた調子で言った。「この暑い日に、あなたはいつもそんなにきっちりした身なりをしているのかね？」

「言われてしまいましたか」と若い父親は素直に笑った。「人にすきを見せないように、こうしてがんばって生きてきました。生き方を変えます。力を抜くように努力します」

「力は努力してぬくもんじゃねえやな。リラックスってえのは力を使うもんじゃねえ」

次の中三生の授業で、豪利は太郎の父親との話を語った。生徒たちは黙って聴いていた。豪利も「どこかで太郎を見かけたときには、顔はちゃんと見てやれ」と言っただけだった。

ホッホの家出

十月の中ごろ、ホッホの両親が「少しの間、家出します」というホッホの書いた紙を持って訪ねてきた。「少女みたいに泣く」とホッホが言う母親は泣いていなかった。父親はスポーティな格好をしていて、表情が生きていた。

「ほう、珍しい家出の仕方があるものですね」と豪利は笑いをおさえながら言った。

「こんなものを置いて行ったんです」

母親が領収所と貯金通帳と携帯電話を見せた。領収書はスポーツ用品を扱っているモンベルという店のもので、ザック、テント、寝袋、鍋、携帯用ガス器具などの金額が打たれてあり、キャンプに必要な物が最小限にそろっていた。貯金通帳には引き出された金額が示されていた。

「月々のお小遣いがきちんと積み立てられているだけで、引き出したことはありませんね。」

引き出したのなあ今回が初めてですね」

豪利は笑うことにした。「親としてはどう思われたのですか？」

「初めはびっくりしましたが、ちょうど主人が海外勤務が終わって戻ってきたものですから相談しましたら、目を丸くしました」

父親が「先生がお書きになったチーチー通信の合宿の報告の中に、幸夫をほめてくださっているところを読んだときには、情けないと思っていた息子が、こんなことができるようになったのかと、驚きでいっぱいでした。妻からはホッホというあだ名のいきさつや、米を洗剤で洗ったこと、ツッパリくんに助けられたことなどを詳しくきいて、ぼくはもう笑うやら涙が出るやら感謝するやらで大変でした。ぼくは幸夫のことは妻に任せきりだったものですから、いたく反省をしたと同時に、息子をこんなに成長させてくださったこちらの塾に驚嘆しています」

「ホッホくんはどこにキャンプに行ったんですかねえ。紅葉を楽しむなんてことをやっているのかなあ？」と豪利は愉快そうに言った。

「鹿島川です」と母親がすぐにこたえた。「モンベルの領収書の担当者名にイチハシとありましたので、その店員さんにたずねましたら、北アルプスの鹿島川でキャンプをしているはずだと、息子の様子などいろいろ教えてくださいました。中学生がたくさんの買い物をするので、イチハシさんは初めは慎重に対応したそうですが、どこかの塾でキャンプのことを鍛えられていると嬉しそうに話し、寝袋や防寒着のことなどもしっかり質問してきたので、お子さんは心配ありません、と言ってくださいました。主人にはゴリ先生に相談したいと言いましたら、バカヤロ、この先生だったら家出をおもしろがるはずだ、心配顔で訪ねて行くな、って叱られました」。

「おもしろいですよ。ヤッター！という気持ちかな。立ち入ったことをうかがってよろしいみたいですね。お父さんは江川医院をなぜ閉じられたのですか？ 幸夫くんが医院を復活させようとしているのはどう思われますか？」

「わたしはオヤジの医者としての在り方が許せなかったのです。患者の顔も見ず、患者の不安な気持ちにも寄り添うことがなく、自分の判断だけ押し付け、そのくせ患者とトラブルになるとおろおろしてしまって、人との付き合い方がわからない人でした。わたしはオヤジが死んだとき、患者に信頼されていない医院など、引き継ぐ気持ちになれませんでした。ちょうど海外の貧しい国の医療活動を手伝わないか、という誘いがありましたので、医院を閉じ、外国に行ったままになってしまったんです。その結果、オヤジが患者を振り返らなかったように、わたしは家族を振り返らなかったのです。今度帰国して、幸夫の姿を知って、今さらながらそのことに気が付きました。妻にはかわいそうなことをしてしまいました」

「わたくしはもう少女のように泣きません」

「ホッホくんは泣かないお母さんはつまらないんじゃないかな。ホッホくんが江川医院を再開したいということについてはいかがですか？」

「ホッホ次第です。わたし自身は医院を閉じて患者さんに迷惑をかけたわけですから、江川

医院で医師として働く気持ちはありません。今は国内の僻地の医療活動にかかわってみたいという気持ちです」

ちーちー塾はこの日は中三生の授業日で、豪利がホッホの家出と両親のことを話すと、デップリンが「ホッホの家出は、理王のそそのかしによるものです」と言って理王を見た。「おまえ、鹿島川へ見に行かなくていいの？ 行くのなら、ぼくもいっしょに行くよ」

「行く必要ない。携帯電話を置いて言ってるということは、『おれを探すな。心配するな』って意味だよ。ホッホはすべてを自ら考え、自らの意志でやってるんだ。今頃は鹿島の紅葉を楽しんでいるよ」

次の中三生の授業にはホッホの明るい顔があった。「ぼくが『ただいま』って玄関のドアを開けたらだよ、いつもすぐに出てくるお母さんが、台所から声だけで、『お帰り！ 今、手が離せないの』だって。久しぶりに会ったお父さんは、『いい顔してるじゃないか』だって。それでぼく、お母さんの顔見てすぐに、『医者にはなりたいけど、いい医者になるために高校時代はたくさん遊ぶから』って言ったら、『それがいいわね』だってさ」

朝日新聞「天声人語」にチーチー塾が載る

町田近辺に秋の色が深まったある日、豪利が中三生たちに「いい報告があるぞ」と言った。「朝日新聞から何か言ってきたのですか？」

「言ってきたぞ！ バカロレアを書いた記者さんが訪ねてきてくれたんだ」

「えーっ！ チーチーのことが新聞に載るんですか？」

「うん、近いうちに天声人語に載るんだって」

「ヤッター！ でも天声人語ってなあに？」

理王がチーチー塾でとっている朝日新聞の第一面の天声人語の欄をみんなに見せながら、「天声人語に載るってことは、おれたちがカッチョイイ活動をしているって意味になるんだ」と冷静な顔を輝やかせた。

豪利が説明した。「バカロレアの文章は中川さんという記者がパリ支局にいたとき書いたんだが、今は本社に戻って、社説や論文記事を書く論説委員をやっているんだって。そこへチーチーの生徒たちの感想が送られてきたものだから、中川さんが興味を持って取材に來られて、天声人語に書きたいって言ってくれたんだ」

そのあと、象兄ちゃまが数学の授業をやっている時、電話が鳴った。豪利が電話に向って「ありがとうございます。明日の朝刊の天声人語ですね」と言いながら生徒たちに合図をした。生徒たちが「ありがとうございます！」と電話の向こうに向かって叫んだ。

「先生、おれの家、朝日新聞とっていない。今夜はここに泊まっていい？ 朝の新聞配達を待ちたい」

「そんなのは学校へ行くとき、新聞店に寄って買えばいいじゃないか」

「子どもはすぐに読みたいです。大人は子どものわくわく感を大事にしなければなりません」

ん」とデップリンが言った。「ここでお喋りしながら、お泊り会をします」
「わかった。じゃあ、親に電話しろ。リサとキララ子の親にはおれから電話をする」
「自分たちで電話します。親はチーチーのファンです」
象兄ちゃまも泊まることになった。豪利は夜食代を渡して帰った。

「遠く日本から眺めたとき、フランスの教育はなかなか面白い」で天声人語は始まっていた。文章はフランスのバカロレアの哲学の問題を紹介し、フランスの高校生たちが自分の意見を明確に表現する姿に触れていた。

「東京都町田市の<ちいちゃいちゃい学習塾>の教育は『自分の足で歩き、自分の言葉で考える』ことを目標にしている、このバカロレアについて触れた文章を読んで、『感想を述べよ』と毎年中学二年の秋のテストに出題している。その塾生の感想文の何点かに当方も感想を述べてみよう。フランスに比べ日本では<積極的に発言しようとする気持ちがない。他人と違う考えを持つことが知れると仲間外れにされると思うのだ>という正悟君へ。とても重要な指摘だ。いじめ問題も、一つにはここに根がある。▼こんな難問に答えるフランスの若者は、考えが確立しているので<人の意見をきかないのではないか>と疑問に思う資季君。たしかにそうした面はある。だからこの国では議論がすごく激しい。これも日本では欠けがちなことだ。コラムの<私たち日本人>との言い方に、真汐さんは<私と書くべし。日本人に失礼だ>と異議を唱える。そう「私」と「私たち」をすぐ混同するのが私たちの悪い癖だ。▼コラムに触発されて藍さんは<ものの見方がうまい人こそ未来をつくる>と予感する。藍さんの表現が心に響く。

チーチー塾をなぜ創ったのですか？

「ゴリ先生はこんなチーチー塾をどうして創ったの？」という問いで、豪利は話した。
おれは学生時代は演劇をやっていて、将来は演出家になりたいと思っていた。学生劇団の仲間たちも「あいつは演劇を信念を持ってやっている。下手なアドバイスはいらない」と思っていたし、おれ自身も自分をそう思っていた。だが内心は「おれは演劇を通して何を表現したいのか？」ということになると確信がなく、演出家もやっただ底の浅い演出で、自分で劇団を立ち上げるには力不足をわかっていた。どこかの劇団の入団試験を受けて、下積みの苦勞をする気にもなれず、ふらふらしていた。飯を食わなきゃいけないから、当面のアルバイトのつもりで、ある会社に入った。ところがこれが出会いになってしまった。

配属された先が、英語力のある女性が自宅を開放して、近所の子どもたちに英語を教える<ラボ・パーティ>という教室を全国的に展開している部門だった。おれ自身は英語を教えるのではなく、女性先生たちの生徒募集や勉強会のお世話をする事務局員だったのだが、おれは女性たちが家庭を持ちながら子どもを教える姿や、子どもを見る眼差しに感銘を受け

て、気がついたらこの仕事にのめりこんでいて、あれほどやる気だった演劇のことを忘れかかっていた。「何だ、おれの演劇への思いはこの程度だったのか」と思ったら、演劇への思いがあっさり遠のいてしまった。ちょうどその時、上役から「東北地方にラボ・パーティを広げたいが、やってみる気はないか」と誘われたんだ。きみたちは<ぐりとぐら>とか<ぐるんぱのようちえん>」という絵本を知っているよな？」

「小四のときの英語劇でぼくが象のぐるんぱをやりました」とデップリンが言うと、「わたしも理王もお店屋さんの役をやりました」とキララ子が懐かしそうな声を出した。

「そうだったな。福音館が出版している良質の絵本を、おれの入った会社が、ラボ・パーティの英語学習のために英文になおし、それを英語の役者が英語で言い、すぐに日本語の役者が日本語で表現するという英日対応になっていて、ストーリーの展開に合わせて林光さん作曲の音楽が流れる、という物語テープを開発したんだ。おれはこれを聴いたとき、格調の高い物語作品に感動した。「これは日本の子ども文化の創造になる」と大げさに喜んで、東北にこの子ども英語教室を広めようと、三十一歳で仙台に支局を開いたんだ。

このラボ・パーティ用の物語教材は、絵本を広げ、物語を聴いていると、(子どもたちが自然に体を動かしたくなる。口を動かし、その先は必然的に英語劇になる)とおれは思った。そしてそうになっていった。たくさんの方の良き女性たちが英語の先生に応募してくれて、宮城県、岩手県、山形県、福島県にラボ・パーティが広がっていった。

この女性先生たちと、おれは数年間の充実した日々を送ったが、ある先輩からの誘いがあったり別の会社に移った。そしてここに、夏期講習の時に話した牛山美信という傑物がいて、『あなたは上等な人間せ。さっさと独立して、世の中のために自分を生かす仕事をしましょ』

と言ってくれたんだ。そうしたある時、おれの住んでいる藤の台の公団住宅の女性たちから、『大人のための演劇指導をしてくれないか』と誘われたんだ。おれはもう演劇熱はさめていたから、断りのつもりで、『子どもの劇あそびだったらやってもいいけど』と、うっかり言ってしまった。そうしたら『子どもたちを集めました。指導をおねがいします』ってわけさ。びっくりして行ってみたら、なんと十数人の幼児、小低がいた。おれは子ども演劇指導の経験はなかったから困った。そこでとりあえずその場所に置いてあった絵本を読んでやったら、子どもたちの表情が息づいていくのに気がついて、イメージが湧いたんだ。

おれの長女が三歳になった頃だったが、「お父ちゃん、カイジョ、カイジョやって」と言ってきた。カイジョとは怪獣のことだ。「うん、やろう」って受けてやったら、カーテンの陰にかくれた三歳の娘は、カーテンを開けて、「カイジョ、カイジョ、カイジョ」と言いながら、両腕を伸ばしておれを襲ってきてな、おれが「うわあ、たすけて!」と叫ぶと、もう大喜びで、「もう一回、もう一回」と催促だ。そばにいた一歳半のチアンもお姉ちゃんの真似をして、「ジョ、ジョ、ジョ」と腕をのばしてよちよち襲ってきた。お姉ちゃんが喜んで手をたたくとチアンも手をたたく。お姉ちゃんがピョンピョンやると、チアンはまだピョンピョンできないけど、アヒルのお尻を上下に動かして喜ぶんだな。おれはそれを思い出して、「子どもは劇遊びが好きなんだ。子どもが二人いれば劇遊びが成り立つ」とわかって、子ど

もたちに絵本を読んでやり、それをいきなり劇にしようと言って、子どもたちに好きな役を選ばせて劇をやらせてみた。

台本は作らない、セリフはやりながら考え、言葉はそのつど違っていい、というやり方でやったら、子どもが乗って乗って、第一回目の集まりで劇遊びが成り立ってしまった。全く想像外のできごとだった。以後週一回の集まりが、面白く続くようになったんだ。

たとえば<さんびきのやぎのがらがらどん>をやったときは『一番小さいヤギをやりたい人?』と呼びかけたら、「はい! はい!」と幼児が数人、二番めやぎは小一、小二が数人、一番大きいヤギは小二、小三全員。化け物のトロルの希望者はゼロだ。『どうして?』ってきいたら、男の子たちは『トロルはやっつけられるからいやだ』と言った。女の子たちは何て言ったと思う?」

「きたないからやりたくない、と言ったんでしょう?」

「おお、そうなんだよ。顔や腕から毛が生えていて、きたないんだってさ。こうして劇遊びが始まった。一番小さいヤギ数人がいっしょに出てきて、カタン、コットン、カタン、コットンと力弱く足を踏んでつり橋をわたる場面を、もう張り切って、全力の大声で、ガッタン、ゴットン、ガッタン、ゴットン、とまあ力いっぱい踏み鳴らす。トロルに「だれだ、おれの橋をわたるやつは!」とおどされると、「ぼく! わたし!」と、体いっぱい使って怒鳴り返すんだなあ。二番目ヤギも三番目ヤギもまるで元気。大きいヤギと戦うトロルは、見ている母親たちがおお喜びで演じてくれた。こうしてやっている子ども、やらせているおれ、付きそってきた母親たちがいっしょになっておもしろがってな、おれは(これが劇だよ)と思ったよ。<劇とは、書いた人、演ずる人、整える人、観る人、四者が一体になって創り出すものだ>ということ、このとき知った。そして<子どもの劇遊びサークル>というボランティア活動が続いていったんだ。

「それが発展してチーチー塾になったのですか?」

「いや、塾という発想にはならなかった。塾を思いついたのは会社の同僚の言葉からだ。会社で仕事をしていた時、ある同僚から『どうして仕事にニヤニヤ笑ってるのか?』ってきかれてさ、何のことかわからなかったが、その後も同じことを言われた。考えてみたら、決まって子どもの劇遊びをやった次の日にきかれていたんだ。おれは子どもの姿を思い出して心がなごんでいたんだな。(おれは子ども相手の仕事に向いている)と瞬間的に思った。おれは牛山くん『独立しろ』と言われていたことを思い出して、『子どもの成長に手を貸したい』ととつぜん会社をやめ、とつぜん英語教室を開いたというわけだ。

「先生は英語劇の台本も創っちゃうから、英語は得意だったんですね」

「全く得意じゃなかったねえ。中三生の学校の教科書を読んだみたら、訳せない文がいっぱいあった。本当だよ。それでも教室を開いた。教え方が工夫できればおれの英語力不足なんかたいしたことではない、子どもが英語を好きになるようにすればいい、と劇遊びサークルでつかんだ<好きにさせる>ことに自信ができていたんだ。もう一つは教材だが、これは劇遊びサークルで絵本を劇にする遊び方をつかんだものだから、英語劇を活動の中心におこ

う、ラボ・パーティの教材を使わせてもらおうと決めて、ラボの会社の一番上の人に交渉したんだ。そうしたらあっさり、『おまえがやるのなら自由に使ってよろしい』と許可してくれた。ラボ・パーティの英語教材はそのまま劇にはならないから、おれは劇用に作りなおして使っている。こうして英語教室を開き、やんちゃな赤ちゃん理王に出会い、鋭く深いツッパリくんに出会い、今、きみたちと出会っているというわけだ」

「先生は数学が苦手だったそうですが、どうして数学を教えるようになったんですか？」

「英語教室を開いて半年したとき、小五の生徒の母親から、算数、国語も教えて欲しいって言われたんだ。おれは数学は嫌いで、自分には向いてないと思いこんでいたんだが、教科書を開いてみたら、『おれがなぜわからなかったかを考え、子どもだった豪利くんに分かるように教えればいいんだ』とわかって教えたら、うわさになって、学習塾になってしまった。

けど中三生にはおれは数学は教えない。数学にセンスのある生徒がいてもおれは気がつかないはずだ。数学嫌いの生徒を数学に向き合わせることもおれにはできない。だからチーチー塾の初年度にドラゴンに出会って以来、象兄ちゃまに至るまで、中三生の数学教師は大学生にやってもらっている。じゃあおれは英語力はあるのかって問われたら、聴きとる力はないし、英語力をつける努力もしていない」

「そんな人が教えているのに、なんでみんな英語できるようになるの？」

「それ、ぼくに答えさせて。先輩から聴いて知ってます！」とデップリンが大声を出した。「門次が通っている高校の英語の先生が、ゴリ先生手作りの英語の基本文型集を読んで、『こんな素晴らしい文型集を作った方の授業を見学したい』と言って授業見学に来たのです。終わってその先生がチーチーの生徒たちの前で言ったことは、『自分は英語の教え方のノウハウを教わるつもりで見学させてもらったが、ノウハウなどという手先のことではなかった。この塾には人間と向き合っている姿があります』と言ったそうです」

「おれにとっても教育者からもらった中での最高の言葉だった」「

教師としての失敗と反省

「それからもう一つ、合宿中にキララ子からおれがきかれたことがあるんだ」

「先生には失敗や反省はあったのか、という問いだよな？」と剣矢が言った。

「そう、それにこたえる……あった。大きな二つがある。一つは生徒をぶんぐって、塾から追放してしまったこと。もう一つはある中学生の女の子の努力に、おれは感謝の言葉を言わなかったこと。いずれも生徒を導く者として、やってはいけないことだった」

リサが「先生は怖い顔することがあるから、生徒をぶん殴ったことはあったかもしれないけど、生徒の努力に感謝の言葉を言わなかったことがあったなんて思えません」と言った。

「あったんだ。Aくんという気持ちは優しいけど、恐ろしく気が弱い中三生がいて、おれは彼の気の弱さをなおすために、夏の合宿でいろいろ役を与えて、励ましてやろうと計画を立てていたんだ。ところが出発間際になったら、彼が参加しないとやってきた。その理由がく

仲のよい友だちが合宿に行かないから>だった。おれは猛烈に腹が立って、せっかくいろいろ考えてやっているのに許せない、とぶん殴って、『もう塾に来るな』と追い出してしまったんだ。だが後になって考えてみたら、彼を励ますために立てていた計画のことを、おれは彼に一度も話しやっていたに気がついた。もし前もって話してやっていたら、彼もその気になって参加したと思う。それを話してもらってなかった彼は、何が何だかわからないままぶつたかかれて、追い出されてしまったんだ。」

「ひどい先生」

「まったくだ。なんの説明もせずに、自分の感情だけを生徒にぶつけてしまった馬鹿者だ」

「先生はすぐに反省したんですか？」

「しなかった。追い出して、かわいそうなことをした、とは思ったが、おれの思いをわからない彼がバカなんだと思っていた。反省をしたのは数年も経ってからだ」

「もう一人への反省というのは、女の子ですよね？」

「Bちゃんといって、小さいうちから音楽をやっていた上に、文学的センスのある子だった。おれは英語劇で劇中に幾つか音楽を流したいと思って、彼女に選曲を頼んだんだ。彼女は選曲をしてくれた。だがその曲は有名曲ばかりで、おれのイメージに合わなくて使わなかったのだが、おれはその理由を彼女に言わなかった。彼女が音楽をやっているといってもまだ中学生だ。知ってる曲は少ない。その中で彼女は一生懸命に考えて選んでくれたはずだ。人の悲しみというものがわかる彼女は、その英語劇を創作するくらいの気持ちで音楽を選んだかもしれない。おれはそのことに頭が働かず、努力への感謝をしなかった。数年もそのことに気がつかなかった。おれの言葉の不足というより、心の不足だった」

「数年後に気がついたのは、何かきっかけがあったのですか？」

「デブリンが小六のときに書いた作文だよ。『ぼくは先生にほめてもらいたくて塾に来ています。ぼくは先生がほめてくださる言葉に恋い焦がれています。それなのに先生はときどき冷たい目でぼくを見ます。そういうとき、ぼくの体は骨まで凍って、ぼきぼき折れてしまいそうになります。先生、冷たい目で子どもを見ないでください。子どもはほめて育ててください』とあった。それを読んで、おれは胸が痛くなった。そしてA君、Bちゃんに対して自分がダメだったことに気がついた。反省と言うより、後悔になっている。それ以来『思ったことは言葉にして伝えよう、言葉を生み出す心を鍛えよう』と思ってきている」

「それからは思ったことは全て生徒に伝えてきているんですか？」

「全てを伝えてしまっただけとはいけないな。一つの言葉が決まるまでには、<ああではないのか？こうではないのか？>と考えるし、間違った見方、未熟な見方がいっぱいある。その繰り返しの中から、一つの励ます言葉、生徒に勇気を与える言葉が決まっていくんだ。おれとしては選び抜いた言葉のつもりだ」

「受験だ、偏差値だ、勉強しろ、ってゴリ先生は言わない。だけどみんな伸びていくじゃん。おれも数学、勉強するようになっている。先生も象兄ちゃまもほめてくれるからだよ」

「うん、数学嫌いの剣矢の点数をあと五十点も上げるなんて、おれにはとんでもなく難しい。」

剣矢の志望高校の出題傾向をおれが調べて、そういう問題を作ったり、手を取り足を取り、ケツをひっぱたいて勉強させるなんてこと、おれには難しすぎる。労力も大変すぎる。だけど剣矢がやる気になるような言葉をおれがかけることができれば、剣矢は張り切って自分で工夫し、勉強し、伸びていく。そうやって獲得した力は剣矢に自覚されて、将来を生きる力につながっていく。そんなことをおれはやりたいんだな。おれは労力いやだ、楽をしたいってことかな」

英語劇ブレーメンの音楽隊の練習

「英語劇の練習に入りたいというきみたちの気持ちのことだが、英語劇発表会は三か月も先だし、その前に高校入試があるぞ。なんでこんなに早くから劇をやりたいんだ？」

「チーチーの劇練習は気持ちが高まるじゃないですか。その高まった気持ちで入試も楽しめるじゃないですか」

「おお、そうか。ではきみたちは何を英語劇にしたいんだ？ ツッパリたちがやった『ブレーメンの音楽隊』をやりたいってんじゃないだろうな？」

「まさに『ブレーメンの音楽隊』をやりたいんです」

「ふーん、そうだよな、きみたちはずっとツッパリたちの姿を追いかけてきてるもんな」

「わたしたちは確かにツッパリくんたちのブレーメンには刺激を受けてます。でも真似はしません。このクラスらしい劇を創ります」とキララ子がきりりとした表情で言いきった。

「おお、いいねえ。だけど台本はツッパリたちが創ったものを使うんだろう？」

「いいえ、自分たちで創ります」

「ほお、それはすばらしいが、日本語でセリフを考えて、英文に変えて、おれがチェックをし、さらに牛山くんにもチェックしてもらうのだから、台本完成に日数がかかるぞ」

「そんなにちゃんとした英語でなくてもいいです」と理王。

「そりゃまたどうして？」

「夏期講習で先生はぼくにおっしゃったじゃないですか？」とデップリンが言葉を引きとった。『正しい英語をしゃべれないからといってうじうじするな。単語を並べさえすれば相手は理解しようとしてくれる。大事なことは伝えようとする意欲だ』って。だからぼくたちがブレーメンをやりたいという意欲を、先生は尊重すべきです」

「後輩たちがおれたちに憧れるような劇にすることを目指す！」と理王。

「わたしたち、それできます。それ、やりたいです」とリサ。

「そうか、チビンコだったきみたちが、そんなことを言うようになったのか」と豪利が象兄ちゃまを見ると、象兄ちゃまも楽しそうにうなずいていた。

「わかった。きみたちにまかせる。ではミーティングはキララ子がリードしろ」

「いえ、リードはデップリンです」と理王がきっぱりと言った。

「そうです。そうでないとぼくはどうしてもしゃべりまくってしまいます。ぼくはリーダー

をやって、自分の言葉数を少なくして、みなさんにしゃべる機会を与え、長所を出してもらいます……リサさん、そうですね？」

「はい、雄大な人物になるためにね。あ、ごめんなさい、言うてはいけなかった」

「とんでもありません。リサさんは心をこめて、雄大な人物と言ってくれました。アイラブ ユウ、リサ。では、キララ子、先ず日本語で台本作りを始めましょうか？」

「だれがどの役をやるかを決めた方が、役のイメージがわくんじゃないかな」

「あ、なるほど。この話には四匹の動物が登場します。このクラスは七人です。あと三人の役を考える必要があります。では主役のロバはだれがいいですか？……またぼくですか？ぼくは小三でチーチーに入ってから、毎年主役をやっています。ぼくでもいいのですか？……あっ、あーっ、いけない。ぼくはこうやって一人で決めてしまうんだ。ではロバの役は後まわしにして、他の役を先に考えましょう」

「おれはイヌの役をやる」

「へっ、理王がくたびれたイヌをやるの？」と剣矢があきれた。「おまえ、気品がある人って、キララ子に言われたんだよ」

「思いついたことがあるんだ」

「それならイヌは理王で決まりです」

「私はネコをやります」とキララ子。

「私はオンドリです」

「すばらしい！ おしとやかなりサさんが、大声で叫ぶオンドリ役に挑戦です！ 応援します！ さていよいよロバ役です……」

「あんたはブタ！」と理王が腕をぐんとのぼして指差した。「丸焼きにされるしか用がなくなったブタ」

「ああ、なるほど、それ、ぼくにぴったりです」

「理王はまた何かしょうもないイタズラを考えているな？」と豪利が笑うと、「いえ、いえ、いえ」と理王が手を振った。

「では、ぼくはブタです。どうぞブタを好きなように扱ってください。次、剣矢の役は？」

「サルだよ」とオッチャンがのんびりと言った。

「これもぴったりですね。ではサルはどういう理由でそこにいるのでしょうか？」

「何かに失敗して追い出されたことにしたら？」

「おれ、失敗、得意！ 失敗を考える」

「決まりました。ではロバ役を決めましょう」。デップリンがにこにこ中三生たちを見回した。「よろしいですか？……ぼくは……ロバ役に……オッチャンを推薦します」

みんなぽかんとした。目立たない雰囲気のおッチャンが指名されたからだ。するとリサから、「わたし、オッチャンのロバ、見たいな」というやわらかな声があがった。みんなの顔がゆっくりとほころんだ。

「けど……おれ、学校で……木3とか、小鳥5、しかやったことないよ」

「いや、オッチャンならおもしろいロバになる」。理王がオッチャンを優し気に見つめた。オッチャンのことを、剣矢が『親しみが持てる人』って言ったし、象兄ちゃまは『自然とこのものを感じさせる人』みたいなこと言ったよね。おれもオッチャンはロバの雰囲気を作れると思う」

「そうよ。ゴリ先生がオッチャンの良さをひきだしてくれるわ」とキララ子が後押しをした。

「おれ……やる」

豪利がびっくりした。「おもしろいことになったが、オッチャンはロバ役を積極的な気持ちで引き受けるんだらうな？」

「積極的な気持ちで引き受ける」

「どうしてなのか、話してもらえる？」とリサが期待の目で頼んだ。

「おれ、頭の中、いつもドラエモンといっしょだった。おれ、遊んでばっかだったけど、それでよかったんだって、チーチーに入ったら思った。合宿もおもしろくて、おれ、生きた。みんなにもほめられた。ここでロバ役ことわったら」

「男がすたりまーす！」

「決まりで一す。ではみんなでオッチャンを盛り立てていきましょう！ はい、拍手！ では、もう一人、ホッホの役を考えてください」

ホッホは青ざめていた。「ぼく、学芸会の劇ではみんなにバカにされてばかりでした」

「でしたらナレーター役でどうですか？ 演技はやらなくてもいい役です」

「だめよ。この塾に入った以上は演技をやらなくともったいないわ」とキララ子。

ホッホが理王を見た。理王は親指を立てて言った。「やりな。この塾の劇作りの過程は学ぶことがいっぱいだよ。登場人物をやれば、人前でしゃべる訓練にもなるしね」

尊敬する理王の言葉に、ホッホの顔が引き締まった。豪利がそれを見て言った。「ホッホはこのグリムの物語を知っているかい？……知らないか。じゃあ絵本を読んでみよう」

キララ子が本棚から絵本を取り出した。「先生の絵本の声を聴くのは久しぶりです」

「いや、理王に読んでもらおう。理王の読み方には香りがある」

「では理王、お願いします」とキララ子が絵本を差し出すと、理王は受け取って、絵本の表紙をみんなに見せた。表紙には四匹の動物が描かれていた。

「一人の男がロバを飼っていました」と理王は読み始め、ロバは自分がおいぼれたので主人に処分されようとしているのを知って、『ブレーメンの町へ行って音楽隊に入ろう』と逃げ出し、イヌ、ネコ、オンドリに出会い、四匹でブレーメンへ向かって歩いていくと、森の中で泥棒の住みかを見つけ、襲って泥棒たちを追い払い、「そこに住んで幸せに暮らしました」と読み終わった。

「気持ちが落ち着く声だね」と生徒たちがうなずいた。

「母親ゆずりだ。お母さんは鈴が転がるような声をしていてな、理王はその声で絵本を読んでもらって育ったんだ」

ホッホが小さな声で言った。「ぼくのお母さんは絵本なんか読んでくれたことない」

「では今日はここまで。もう象兄ちゃまの数学の時間になっている」

「先生、今日はこのまま劇の話の続けさせてください。みんな気分が乗っていますし、オッチャンもホッホもチーチーの劇は初めてですから、どんなものかわかった方がいいんじゃないでしょうか？ 象兄ちゃま、いかがでしょうか？」

「賛成です。入試のことだけだったら、数学、理科はもう大丈夫です。ぼくもみんなの劇に興味があります。このまま続けてもらってけっこうです」

ホッホの変化

休憩になって生徒たちがくつろいでいると、象兄ちゃまが豪利のところに寄ってきて、「楽しみですね」と声をかけた。

「うん、楽しみだ。だが思ってもみなかったことになっちゃったよ」。豪利がそっと言った。「おれはオッチャンが主役になるなんて思いもしなかったよ。劇で主役をやる人間というのは最初から華があるんだが、オッチャンはのそとしてるし、言葉が遅い。大きな声も出ない。そんな人を生徒たちはどうして主役に推し、オッチャンはどうして受けたんだろう？……おれはどうやって導けばいいんだ？ まいったな」

「先生、休憩は終わりです。始めてください」

「うん。では最初の場面をやってみよう。どんなふうにやろうか？」

「幕が開いたらナレーター役のホッホが中央に立っていて、ロバが逃げ出すところまでを説明的に言えばいいんじゃないでしょうか？」

「そのあとホッホは飼い主の役に変化して、ロバに語りかけるようにする」

「おお、そうか。では二通りやってみようか。先ずナレーター役で最初の場面をしゃべってみよう。ホッホ、言葉は自分で創るんだぞ」

ホッホが不安そうな顔で教室の真ん中に立つと、「ある男がロバを」から「ロバはブレイメンに向って歩き出しました」までをまったくの棒読みで言った。声も小さかった。

豪利は（これはどうにかなるのかな？）と思いながらも、「おお、いいじゃないか。きみは理王が読むのを一回聴いただけで、言葉を創ったじゃないか」とほめた。「ではもう一つの方法をやってみような。オッチャンがロバになって出てくると、ホッホは今のナレーターの言葉を言ったあと、飼い主に変化してロバに近づき、語りかけてみよう」

オッチャンのロバが荷物を背負って出てきた。ホッホがふわふわ出ていって、「ある男がロバを飼っていました」と言うと、不安そうに豪利を見た。豪利はうなずいてやった。ホッホは頼りなげにロバに近づき、感情のない声でロバに語りかけ、言い終わると、そのあとをどうしたらいいのかわからない顔になった。デップリンが小声で「退場するんです」と言うと、ホッホはとまどいながらさがった。

豪利は（ほめるところがない）と思った。どんな子どもでも声のこと、歩き方、体の使い方など、ほめてやるところが一つはある。それをほめてやることで子どもは勇気を得て、演

技が大きくなり、劇を楽しむようになる。だがホッホにはほめてやるところがなかった。生徒たちもホッホと目を合わせないようにしていた。

豪利は内心のとまどいをかくして、ホッホにうなずいてやろうとしたとき、剣矢だけがヒューンと笑っていることに気がついた。

「何がおかしいんだ、剣矢？」

「あっ、すみません！ でも、ホッホを馬鹿にして笑ったんじゃないです」

「わかっている。だが何がおかしいんだ？」

「だって、ホッホの落差が大きいんだもん」

「落差が大きい？」

「だってさあ、合宿のホッホは『さわやかお兄ちゃん』に成長して、三人のチビンコにも『お兄ちゃん、お兄ちゃん』ってまつわりつかれていたじゃないですか。それが今は色のない人みたいになっちゃって、さわやかお兄さんとの差が大きすぎるんだもん」

「おお、なるほど、そうだよ、ホッホ、きみはさわやかお兄ちゃんなんだぞ」

するとデップリンが笑わないで言った。「ホッホ、あなたはチーチーに入ったとき、幽霊でした。その幽霊がさわやかお兄ちゃんに成長したのです。幽霊に戻ってはいけません」

「幽霊には戻りません！」。思いがけなく、ホッホが強い調子で言葉を返した。

「おお、ホッホ、その意気だ！ よーし、よし、ではこの中三生たちを、あのチビちゃんたちだと思って、『ぼくはさわやかお兄ちゃんです』と言いながら出てきてごらん」

「ぼくがそんなこと言うんですか？」とホッホが赤くなった。

「だってきみはさわやかお兄ちゃんだったんだらう？」

「はい、さわやかお兄ちゃんでした」

「だったらさわやかお兄ちゃんをやらないと、チビちゃんたちががっかりするぞ」

「はい、やってみます」。ホッホが少し勢いのある姿勢になった。

「よーし、やるぞ、ホッホ！……気持ちを整えて……よーい……はい！」

ホッホがスキップをし、手を振って出てきて、「ぼくはさわやかお兄ちゃんのホッホくんです！」と突然、のびやかな声になり、『ある男がロバを飼っていました』と言った。生徒たちが即座に反応して、「さわやかお兄ちゃん！」と声を送った。

「おお、いいじゃないか、ホッホ！ おれはスキップしろとも手を振れとも言わなかったぞ。それなのに、きみはスキップをし、手を振った。うん、いいねえ。気持ちが乗ってくるとそうなるんだ。きみは工夫力がある。いいねえ」

「ほんとうによかったわよ」とリサがうれしそうにホッホを見た。

ところが剣矢がまた一人、顔を赤くして笑っていた。豪利が目を向けると、剣矢は「すみません！ ホッホ、ごめん！ だってさあ、ホッホのスキップが下手で、転びそうだったもん。後でおれがスキップのやり方を教えてやるね、ホッホ」

「うん、そうか、ではホッホ、続けていくぞ。ナレーターが終わったら、そこからロバの飼い主になって、ロバに声をかけてごらん」

ホッホはさっきよりも元気にナレーターの言葉を言ってからロバに近づいた。だが立ちどまると、何も言わないで豪利の顔を見た。

「うん、いいじゃないか。チビちゃんたちが喜びそうなさわやかお兄ちゃんが見えてきたぞ。ではロバに向って何かを言おう。どんな言葉がいいかな？」

生徒たちから「歳を取ってしまった、ということがわかる言葉」「これ以上むだ飯を食わせられない」「売り払おう」「追い出してしまおう」などが出た。

「ホッホ、そういった言葉をきみが創るんだ。やってみよう！」

「先生、もう少し時間を与えてやってください。ホッホくん、初めてなんだもの」

「おお、そうか。じゃあ、ホッホ、言葉が決まったら合図してくれ……おっ、決まったか！」豪利が手のひらをパンと打った。ホッホが小走りに出てきてナレーターの言葉を言ってからロバを見た。「あいつめ、年をとってしまった。もうこれ以上むだ飯をやれない」

豪利が喜んだ。「おお、よくなった。じゃあ、次にナレーターと飼い主の区別が、見ている人たちにわかるような演技をしよう」

やってみたが、ホッホは区別がつく演技ができなかった。

「じゃあナレーターの言葉が終わったら、ぐるりと回転してみたらどうかな？ きみの気分が変わるかもしれないぞ」

ホッホはぐるりと一回転した。「うまい！」と生徒たちが声をあげ、剣矢は「合気道で習った足運びじゃん！」と喜んだ。

一回転したホッホは、腕を上げてロバを指し、それから腕を下ろした。「あいつは年を取ってしまった。もう役にたたない。エサをやるのはやめよう」

「おお、腕を上げるという演技を加わえたねえ、いいねえ！ ところできみはその腕をすぐの下げてしまかったが、何のために下げたんだ？」

ホッホはこたえられなかった。

「なんとなくか……うん、なんというのは演技ではない。劇では動作は言葉と同じだから、意味を持った動きだけをやるんだよ。腕を伸ばした意味が観客に伝わるまでには、それなりの時間が必要だから、伸ばしたのならその意味が伝わるまでは腕を下げるな。そうすると自分の気持ちも乗るよ」

ホッホはもう一度やった。「よくなったね、飼い主の雰囲気も出そうだよ」とみんなで演技を考えた。「飼い主は粉ひき屋の主人だから、重い荷物を運んで筋肉隆々になっている男」「そんなのはホッホには似合わない」「年寄りのにしたらどう？ よぼよぼの飼い主がよぼよぼのロバをクビにする！」

ホッホはロバをゆっくり指し、ロバに近づくと胸の前に腕を組んだ。「こいつめ、すっかりおいぼれちまって役に立たん。肉にして食っちゃまうか」とぶつぶつ言った。

「ホッホくん、すてき！」

「素晴らしい上達です。でも、その上で言いますがホッホ、胸の前で腕を組むのはだめなんです」とデップリンが言った。「腕を組むと、そこで気持ちの流れが止まってしまって演技

が広がらなくなります。腕は力をぬいて楽にさせるのです。そうすれば肩も腕も指先も自由に動いて、いろいろな表現に使えるのです」

キララ子がころころ笑った。「デップリンはやっぱりリーダーね。ゴリ先生が教えてくれたことをしっかり人に伝えられるのね」

「そうです。『どうしていいかわからないときは何もするな。何もしないことが言葉になる』と先生は言います」

豪利が笑った。「キララ子もデップリンもよきリーダーだよ。ではホッホ、もう一回やって、ロバの場面に移っていこう」

ホッホがスキップをしながら出てきて、ナレーターの手を言うと、くると回転してよぼよぼの飼い主になり、腕をぶるぶる震わせて「あのやろう、おいぼれちまって役に立たん」と、声の調子もお爺さんぽくやった。

生徒たちが大きく拍手をした。豪利がキララ子にささやいた。「ホッホはおもしろい演技をする。喜劇のセンスもあるかもしれないぞ」

オッチャンの素朴

豪利は次にオッチャンに顔を向けた。「飼い主の言葉をきいて、ロバは何と思うんだ？」

オッチャンはゆっくりこたえた。「ブレーメンに行って音楽隊に入ろうって思う」

「じゃあそれを言葉にしてから歩き出そう」

オッチャンの声は小さかった。豪利は「もっと大きな声で言ってくれ」と求めたが大きくならなかった。

豪利は生徒たちにきいた。「合宿で、オッチャンは大きな声を出さなかったのか？」

「ときどきですけど、大きい声でしゃべったり笑ったりしていました」

「そうか。じゃあ、劇に慣れてくれば声が出るようになるんだな。それを待とう。ではもう一回、最初からここまでやってみるぞ。ロバは飼い主の言葉を聴いて、ギターを抱えて逃げ出す。オッチャン、チーチーでは小道具は使わないからな。ギターを手取るのも弾くのも、手振り身振りだけでやるよ。ではロバがイヌに出会う場面までやってみよう」

オッチャンはギターを弾くかっこうをして歩いて行った、理王がよろよろと出てきて床にうずくまった。オッチャンは立ち止まっただけで何もしなかった。すると理王がいきなりオッチャンに向かって「ワン！　ワン！」と吠えかけた。

豪利は（理王め、何かイタズラを考えているな。だがオッチャンがアドリブにこたえるのはむりだ）と思って言った。「ここはイヌとネコを入れかえ、先にネコが出てくることにする。理由はリーダーシップを学ぶキャンプで、理王がオッチャンの味を引き出してくれたから、今度はキララ子をオッチャンにからませてみたいってことだ。オッチャン、セリフはいくらとちってもかまわないから、自分で創って言うんだよ。キララ子はロバの身の上話を引き出すようにオッチャンをリードしてくれ」

キララ子がネコになってふらりふらりと登場し、ぺたりと床に座り込み、もの悲しい鳴き声をたてた。ロバは立ち止まってネコを見つめた。長い＜間＞になったが、生徒たちが微笑みながら見ていたので、豪利はストップをかけないで待った。

ようやくオッチャンが「ネコさん」と低い声で呼びかけた。キララ子は聴こえないふりをした。オッチャンはまた呼びかけ、そろりとキララ子に近づいて、腕をゆっくり伸ばし、「ネコさん……つらいのかい？」とかがみこんだ。

（おお、オッチャンの初めての演技だ。これ、いいぞ）と豪利は思った。

ネコはゆっくりロバを見上げ、「ああ、耳長くんかい？ まあ、きいていおくれよ。あたしゃね、長年女主人のためにネズミを追いかけてきたんだよ。それなのにあたしが年をとって、暖炉のそばでいねむりして、ネズミを追いかけなくなったっていうんで、あのババアめ、あたしを川に投げこんで、溺れさせようとしたんだよ。それであたしゃ逃げ出してきたってわけさ。だがこの先、どうやって暮らしていけばいいのかねえ」

オッチャンはじいっとしたままだった。豪利がオッチャンに、「『おいらはブレーメンの町へ行って音楽隊に入れてもらおうつもりだ。あんたもいっしょにブレーメンへ行って、音楽隊に入れてもらおう』と誘うんだ」と言うと、オッチャンは言われまを、ぼそぼそと言った。

豪利は（これでは劇にならないなあ）と思ったが、生徒たちは穏やかな目をしていた。

豪利はオッチャンに大きな声でネコに呼びかける練習をさせたが、オッチャンの声は大きくならなかった。

今日の最後の練習になった。ロバはギターを手に持つかっこうで歩きだし、ネコと出会い、ブレーメンへ行って音楽隊に入ろうと途切れ途切りに誘い、ギターを弾くかっこうをした。

ネコがそれを受けて「あたしもバイオリンが弾けるんだよ」とバイオリンを弾く演技をし、「あたしもいっしょに連れていっておくれ」と二匹で楽器を奏で、ブレーメンへと向った。「オーケー、いいね！ 今日はそこまでにしよう。ホッホ、きみは短い時間の間にどんどん変化している。成長力がすばらしい。それに度胸がいい。おれにはうれしい発見だったよ。キララ子の演技は伸び伸びとしていて気持ちがいい。オッチャンは素朴でいいねえ。ただ声が小さいことやセリフが少ないことはどうにかしないとな」

「それは指導者の役目です」とデップリンが横から口を出した。「ぼくたちはオッチャンを主演に推したのです。先生はぼくたちの気持ちを受けとめて、しっかり指導してください」

「はっきり言うなあ、きみは」

「あっ、すいません」

「いやいや、きみの率直な意見は教師としてはありがたいんだ」

「先生」とキララ子が豪利を見つめた。「オッチャンの雰囲気は素敵です」

生徒たちが帰って静かになった教室で、豪利はホッホの変化に驚きの気持を持って、象兄ちゃまの感想も求めた。

「生徒たちがホッホを励ますのがいいですね。それを受けてホッホの演技がみるみるよく

なっていくのにはびっくりしました。演技ってあんなに変わっていくんですね」

「そうなんだよな。おれは初めは、ホッホはどうにもならない、と思ったんだが、剣矢がヒーヒー笑っているのを見て、彼のああいう笑い方には何かヒントがあるかもしれない、と思って笑った理由をきいたんだが、そこからこんな展開になった。道志川キャンプのときもそうだったが、ホッホの前向きになる速さにはびっくりだ……勉強一本でがんじがらめにされて育った子とは思えない……なぜなんだろう？」

「オッチャンについてはどうお考えですか？」

「うん、そのことなんだ……どう導いたらいいのか、今日はつかめなかった。オッチャンはおれの思う正反対のところにいる。ところがだ、ホッホはちらちらと不安そうにおれの顔を見たのに、オッチャンはおれの顔を一度も見なかった。演技をやったことがない者は不安になるのが普通なんだが、なぜオッチャンはおれの顔を見なかったんだろう？」

「自分がそこにいることに安心して、ってことはありませんか？」

「うん……そうだとしたらすばらしい。オッチャンはにぎやかな女家族の中の男の子として可愛がられて育ったが、『ああしろ、こうしろ、それだめ、これだめ』って言われなくて大きくなった。オッチャンがリーダー経験がないのに、食事作りの親分役を受けたのも、劇の経験がないのに主役を受けたのも、かわいがられて育った子どもの持っている安心感があるからだろうか、オッチャンはびくびくしていないんだ」

「オッチャンはロバの気持ちになっていたのですね？」

「ロバの気持ちになっていた？……それはない。学芸会でその他大勢の役しかやったことがない者が、登場人物の気持ちになっていたなんてことはない……ん？……登場人物の気持ちになっていた？……待てよ、そう言えばオッチャンにおもしろいことがあったぞ」

豪利は過去に思いをめぐらせた。「英語の説明をしたときのことだがね、オッチャンに『わかったか？』ってきいたら、『聴いてなかった』と言われたので、もう一度説明しなおして、『わかったか？』ときいたら、また『聴いてなかった』と言われたんだよ。『あれ、今、きみはおれの顔を見ていたぞ』と言ったら、『先生、そのピンクのシャツ、似合うね』って言いやがってさ。オッチャンの説明によれば、ドラエモンがそのピンクのシャツをポケットから出してのび太にあげたら、ジャイアンが奪おうとしたので、オッチャンは自分がジャイアンと戦う姿を想像してたんだってさ……うん？……ということは……オッチャンはそのときドラエモンといっしょに生きていたってことなのか？ オッチャンは登場人物の気持ちになりやすいつてことなのか？……うーん、きみの指摘、これはヒントになるかもしれない」

次の授業で、豪利はオッチャンの演技を観ているときの生徒たちを観察した。生徒たちはやわらかな表情で観ていた。（そうか、生徒たちはオッチャンの雰囲気が好きなのだ）

豪利は「オッチャンの雰囲気は素敵です」と言ったキララ子の言葉、「みんながオッチャンを主役に推したのです」というデップリンの言葉を考えた。（生徒たちの言葉の意味に、おれは足をとめていなかった）

豪利はオッチャンに「飼い主の言葉をきみはどうきいたのか？」と聞くと、オッチャンは「悲しかった」とこたえた。

「ではその気持ちを演技で表わせればいいんだよ」

「やり方がわかんない」

「おお、そうか、ではロボの気持ちを表す動作をやってみよう。先ずギターをこんなふうにポロンとひくかっこうをやってみな」

オッチャンがギターをかまえ、弦を弾くかっこうをした。

「えーっ、手つきがいい！ オッチャン、ギター弾けるの？」

「弾けないよ」

「うん、いい感じだ、オッチャン。では自分が鳴らした音に耳を傾ける動作を、こんなふうにやってみよう……そう、次にその音が空中を漂っている、と想像してごらん。客席の後ろの上の方、つまり空にその音が漂っていると思うんだ。そして体全体をゆっくり回しながら音の行方を追い、耳をすまして聴いている演技してみな。そうするとその音がきみの耳に聴こえ、観客にも聴こえるようになるよ」

オッチャンが弦をポロンとつまびき、その音に耳を傾けるように顔を上げ、ゆっくり体を動かして遠い空に目をやった。ふーっと豪利の気持ちが空の中に吸いこまれた。

豪利は過去の記憶に戻っていた。学生時代、豪利はロシアの作家、ゴーリキーの劇のある役で静かに語る場面を演じたとき、池の水面を波紋が静かにゆらぐように、劇場の空気がゆらぎ、自分の言葉が観客の心に吸いこまれていく瞬間を体験したことがあった。

「先生……ゴリ先生」とリサがそっと呼んだ。「音が聴こえてきます」

豪利は我に返った。「おお、音が聴こえてきたか……みんな、ちょっと聴いてくれ。おれはオッチャンの素朴な味わいを生かすことを忘れていた。それをきみたちのオッチャンを見る目と、象兄ちゃまの『オッチャンは登場人物の気持ちになっていた』と言った言葉で、おれはオッチャンの魅力を再認識した。おれはオッチャンに大きな声を要求しようとしていたが、これは間違いだった。楽器でも小さな音ほど味わいを出せるそうだが、オッチャンの持っている味も小さな声の方が表現できるんだ」

「先生、ハーモニカってむずかしい？」と突然オッチャンがきいた。

「ごく簡単な楽器だよ……だが、どうしてそんなことをきくんだ？」

「おれ、ハーモニカを吹きたい。合宿のキャンプファイヤーの前で、先生がハーモニカを吹いて、リサと象兄ちゃまが歌ったドボルザークの新世界交響曲を、おれ、吹きたい」

「新世界交響曲？ おれはそんな名前は言わなかったぞ。『遠き山に陽は落ちて』という歌だと言ったけど」

「おれの父さん、クラシック音楽好きで、その曲、よく聴いている。おれ、この場面でその曲、ハーモニカで吹きたい。そしたら『ブレーメンの町へ行って音楽隊に入ろう』ってセリフが自然に出てくると思う。ハーモニカ、教えてください」

「おお、そうか、そうか！ いいとも！ ハーモニカはかんたんだよ。息を吐けば音が出、

吸えば音が出る。口をずらせていけばすぐ曲になる。おれは子どもの時にそうやって一人で覚えた。きみのお父さんは音楽好きだし、桃花はピアノやってるんだから、家で聴いてもらいながら練習したらいい。発表会まで二か月あれば十分吹けるようになる」

「オッチャンが本物の楽器を鳴らすんなら、他の動物たちも本物の楽器を鳴らしながら行進したい」と生徒たちが活気づいた。「私はギターを習っています」とキララ子、「おれはタンバリンを鳴らす」と理王がニヤリ、「リサさんはきれいな声で歌ってくれます」とデップリン、「おれはリコーダーが得意だよ」と剣矢、「ブタは何もできません」とデップリンは胸を張った。

「そういうことなら、動物たちの行進には歌があったらいいんじゃないかな。観ている子どもたちが喜ぶような歌がいい」

「だったらいい曲がある」と、七人の生徒たちが車座になり、額を寄せ合った。

「できました！ 先生、ハーモニカで伴奏してください。『線路は続くよ、どこまでも』の替え歌です」

豪利がハーモニカでリードし、みんなで歌った。「夢をもとめてどこまでも 野をこえ山こえ 谷こえて はるかな町まで おれたちは ミュージシャンの夢 追いかける」

「おお、いいねえ。これだったら客席の生徒たちも歌うな」

「ぼくは高校の合唱部でこの歌を英語で歌いました」と象兄ちゃまが歌ってくれた。

「おれよりはるかに上等な英語だ。本格的に学んだんだな？」

「はい、中学生、高校生時代に英語学校に通いました」

「おお、たいした努力家だ。それじゃあ日本語のセリフが決まったら、生徒たちの英文翻訳は、きみに見てもらうことにするよ」

理王のいたずら

次の授業日。「それでは最初からサルの登場までを、いきなりやってみよう。セリフは日本語で好きなように創って行って、相手役はそのセリフを積極的に受けてくれ。そこから何かおもしろい展開が始まるかもしれない」

ホッホの若々しいナレーターとよぼよぼの飼い主役の演技に、見学に来ていた高校生のヒポが声を出して笑った。

ロバが逃げ出す場面では、オッチャンがもうハーモニカを吹いていた。演奏はまだおぼつかなかったが、ハーモニカを吹く姿勢や、自分の奏でた音に耳をかたむける姿に雰囲気があった。ブレーメンへ旅立っていく場面では、見ている生徒たちも「線路はつづくよ」の替え歌、「夢を求めてどこまでも」を歌った。

ネコのキララ子がふらふらと登場し、床にべたりと座り込むと、オッチャンはなぐさめるように腕を伸ばしたが、オッチャンはセリフを言わなかったため、そこで劇が止まった。

「オッチャンが腕をのばしたところ、指の先から言葉が出ているみたいだったよ。これは素

晴らしい。心の中で何か言葉をかけていたんだろう？　どんなことを言っていたんだい？」

「ネコがつからそうだったから、なぐさめていた」

「おお、素晴らしい。ではその気持ちを言葉にしてみよう。どんな言葉が出てくるかな」

もう一度ネコが登場して倒れ、ロバの言葉を誘い出すようにあえいだ。ロバは腕をゆっくり伸ばし、「ネコさん、なにかつらいのかい？」ときき、ネコのセリフが終わるまで、腕を伸ばしたままでいた。オッチャンの低い声がロバの素朴な味わいになっていた。

「いいなあ、オッチャン」と豪利は思わず声を出し、生徒たちは無音の拍手をした。豪利は大きな声を出させることで、オッチャンの魅力をそこなうところだったと思った。

ロバとネコが歩いて行くと、怒り狂ったイヌが出てきて、ロバに激しく吠えかかった。オッチャンは想像もしていなかった理王の演技に立ちすくんだ。（オッチャンはどうするのか？）と豪利が思っていると、キララ子がネコパンチを加えるように腕を宙に伸ばし、「ニャオー！」と怒りの声を出した。イヌがネコの周りを激しく吠えてまわり、ネコは体を低くして跳びかかるかっこうでうなった。二匹のアドリブに生徒たちが浮き浮きして観ていると、ロバが「そんなに怒ると体に悪いよ」と実にのんびりした声を出した。イヌはすぐにそののんびり声に合わせて怒りをおさめ、「まあ、きいてくれよ。おいらは主人の狩りのお供を長年やって、獲物をたくさん捕まえてきたんだよ。ところがおいらが老いぼれて狩に失敗するようになったんで、主人め、おいらをこん棒でぶち殺そうとしたんだよ」となって、三匹の間でやりとりがつながり、イヌが「おいらもミュージシャンになりたいぜ。おいらのわざを聴いてくれ」と手のひらでタンバリンを打つかっこうでダンスをした。この二年の間に背がすっきりと伸びた理王のダンスはスピードとリズムがあった。

こうしてイヌも仲間に加わり、三匹で進んでいくとオンドリに出会った。オンドリ役のリサは細かく走って中央に立ち、「コケッココー、コケッココー」と鳴いた。いつもは静かなリサの思い切りのよい声に、生徒たちは感激した。

ロバがオンドリに「どうしてそんなに立て続けに鳴くんだい？」ときいた。

「今日がおいらがトキを告げる最後の日なんだよ。明日、客が来るってんで、おいらはスープにされてしまうんだ」

「スープになっちゃいけないや。あんたのトサカはまだみずみずしい。声もいい。おいらたちと組んで歌手をやってくれよ」

豪利が「オーケー。おもしろくなりそうだ。アズミ、見ての感想は？」とヒッポといっしょに見学に来ていたアズミに問いかけた。

「いいですねえ。ツッパリくんたちのブレーメンとは違った味わいの劇になりそうですね」

象兄ちゃまは「ぼくは劇がこんなに面白いとは思っていませんでした。やってみたくらいです」と言った。

「象兄ちゃま！　仲間に入ってくれませんか？」とキララ子が喜んだ。「ゴリ先生、いいでしょう？」

「おお、そりゃいいな。象兄ちゃまはどうかかな？」

「ぜひ仲間に入れてください！」

「ヤッター！」という生徒たちの輝く顔にうなずきながら、豪利が今日の感想に入った。「ホッホはメリハリがついてとてもよかったよ。ん？ 何か言いたいのか？」

「はい、ぼく、お母さんにブレーメンの音楽隊の話をしたら、ぼくが四歳くらいまではお母さんは絵本を読んでくれていたって言いました。ところがお父さんが医院を閉じて外国へ行ってしまったものですから、お母さんは医院を再建しなければって、ぼくの勉強に必死になって、絵本を読むことを忘れてしまったと言いました。今はまたお母さん、妹に絵本を読んでやっています」

「おお、そりゃよかったな。きみには読んでもらった記憶はなくても、心の中にはお母さんの声がしみこんでいるんだよ。そうか、それでわかったぞ。きみが落ちこんでも立ち直りが速いのは、お母さんの温かさが体の中に入っているからなんだ。よかった、よかった」

それから豪利はオッチャンについて言った。「オッチャンは登場人物の心になって、その心を言葉と動作に乗せていくことができる。素朴で、親しみのあるロバになりそうだな」

「理王のダンス、何の曲だったの？ リズムがあってよかったわ」とキララ子がきいた。

「おれとリサはわかったよ！」と剣矢がリサを誘って、二人で声をそろえた。「おもちゃのチャッチャッチャ！」

「正解！」と理王が親指を立てた。

「ほお、よくわかったな。リサ、この曲をオッチャンはハーモニカで伴奏できるかな？」

「この曲には半音があります。オッチャンが持ってきたハーモニカでは半音は出せません」

「だったら、ここはバイオリンです」。デップリンが断定的に言った。「理王のイメージの中にはツッパリくんたちがブレーメンをやったときの、美音さんのバイオリンの音があります。理王は美音さんのバイオリンで踊りたくて、この曲を選んだのです」

「先生、美音さんはチーチーの男たちのマドンナだったんですよ」とヒッポがにこにこした。

「女の子たちにとってもマドンナでした」とキララ子が言葉を重ねた。

「憧れのお姉ちゃまのバイオリンで演技をしたい、というぼくたちの気持ちを、先生は尊重してください。あとはぼくたちで美音さんをお願いします。さあ先生、リサさんの演技の感想を言ってやってください。リサさんが待っています」

「おお、リサ、とつぜん大きな声を出したね。どうしてかな？」

「はい。ホッホくんもオッチャンも成長しているのに、長い間チーチーにいるわたしが引っ込み思案のままではいけないと思ったのです」

「おお、そうか、じゃあな、オンドリが高い所から、コケコッコと叫ぶところと、そのオンドリをロバが下から呼びかけるところをやってみよう。大きな声を出さなくても、表現の仕方で二匹の間の距離感を出すことができる。その二つの違いを先ずおれがやってみる」

豪利は「コケコッコ」を先ず大きな声で叫び、次に「おーい、オンドリくーん」を小さい声でやってみせた。「どう感じたかな？」

「なるほど」と生徒たちが納得した。「最初の声は大きいだけで、オンドリが遠くの人たち

に時を告げる声にはなっていませんでした。あとでやった方は声は小さかったけれど、高い所にいるオンドリに呼びかけている距離感がありました」

「うん、そうだな。心を声を乗せたら、できるんだ」

みんなで叫んでみると、ほんの二、三回でその違いを表現できた。

続いて動物たちはサルに出会い、サルも仲間に入った。

「さあ、お待ちかねのブタの登場にいこう」

生徒たちが「待ってました」と張り切り、デップリンがブタの役になって登場した。

「お待ちください。ぼくもお仲間に加えてください」

「おーや、あんたはブタではないか？ ブタがどうして仲間に入りたいのだい？」

「ぼくは若くて腕のいい料理人なのです。ところがたった一度、塩と砂糖を間違えて料理を出したばかりに、クビになってしまったんです」

「そりゃあいけねえや！ 味見をしなかったんだ。クビになって当然だ！」

「楽器は何かできるのかい？」

「できません」

「それじゃあ、おれたちの仲間には入れないね」

「そんなことを言わないで、みなさんのお役に立つ方法を考えてください」

「一つだけある。ブタの丸焼きになって、おれたちに食べられることだ」

「ああ、なるほど、わかりました。どうぞぼくを丸焼きにして、めし上がってください」

デップリンは地面にどたんと横になった。動物役の生徒たちが嬉々となった。

「さあ、みんな、このでかすぎる体から、手足と首を切り離そうぜ。包丁よ、飛んでこーい」。

理王が空に向かって叫んだ。「包丁が飛んできた」と理王は包丁を一人ひとりにわたした。

「おいらはこのりっぱな太ももをもらおうよ」と剣矢がさわぎ、「おれはもう一本の太ももをもらおうね」とオッチャンがのんびり、「私はたくましい右腕」とキララ子が華やかに、「それなら私は左腕」とリサがおっとり。

「おれはばんばんに張ったほっぺただ。さあ、みんなで切りとろうぜ！」

ヒッポとアズミが困惑した顔になって豪利を見た。

「さあ、いいかい！ 切るぞ！」。動物たちが包丁を振りかざした。

「待ーてー」。豪利がゆっくりと言った。「そーこーまーでー」

生徒たちは包丁をかまえたまま動かなくなった。

「起きろ、デップリン」

デップリンがのっそり体を起こして、ぼんやりした顔になった。

「なあ、デップリン。きみはこのザマを、親に見せられるのか？」

「あー、あー、あー」。デップリンが小さな悲鳴をあげた。「見せられません」

「親が悲しむようなもの、親が不愉快になるようなものやっいていいのか？……理王、デップリン、キララ子、リサ……きみたちは小さいころからいっしょにやってきたから、安心して調子に乗ってしまったのだろうが、やりすぎだ」

キララ子が頭を下げ、小さな声で言った。「反省します」

「うん……あとはキララ子がリードしろ。いいか、デップリン」

「はい。ぼくは口を出さないようにします」とデップリンがしょんぼりと言った。

「いや、きみの言うことはたいてい正しい。ただみんなは同じように思っている、きみが言うてしまうから言わないのだ。口を出してもいい。だが自分にしか言えない自分の言葉を育てろ。ブタが楽器を弾けないとわかるころまではよかった。その後は作り直せ。象兄ちゃまにも出てもらえ。しっかりした役を考え出せ……では、今日はここまで。解散。もう夜が遅い。キララ子とリサはいつも通り、男子に送ってもらって帰るんだぞ」

生徒たちが解散したあと、豪利、象兄ちゃま、ヒッポ、アズミが車座になった。

「いい勉強になりました」とアズミが感慨深そうに言った。「ブタを切る場面で先生がストップかけたとき、理王はほっとしていました。理王は先生が止めてくれると思ってやっていたんじゃないでしょうか？」

「まあ、そうかもしれない」

「ストップをかけなければ、理王はどうしたのでしょうか？」とヒッポがきいた。

「そんなかわいそうなことはおれはやらねえよ」

アズミがうなずいた。「『親に見せられるのか？』と先生がきいたとき、理王は恥じ入った顔をしました」

「うん、そういう子だ。ああいう知性の子も、ときには勇み足をするさ。もともとエネルギーのある子だ。エネルギーを閉じ込めない方がいいし、この塾にいる間に勇み足を意図的にでもやっておいた方がいい」

次の週の授業で、最後の場面は生徒たちにまかせて、豪利がうたたねしていると、「ブタの登場から最後までできあがりしました。見てください」とキララ子が呼び起こしたに。

ブタはイタリア民謡が得意ということで、歌手として仲間に入れてもらうように変わっていた。動物たちが泥棒たちをやっつけたところへ、象兄ちゃまが演じる音楽家がやってくるという内容になっていた。

「おお、いい発想だ。象兄ちゃまの人柄と象兄ちゃまに対するきみたちの気持ちが表れている」

「イタリア民謡と音楽家は理王のアイデアです。全体はキララ子がリードしました」

「うん、楽しいできあがりになっている。ただサルとブタが増えた分、子どもの英語劇としては長くなりすぎてしまった。森の中で動物たちが寝る場面と泥棒の場面は短くしよう」

「質問があります」と象兄ちゃまが言った。「先生はキララ子や理王、りさ、デップリンには演技の指導をほとんどしないのは、どうしてなのかということと、演技経験がないホッホとオッチャンにも、同じ場面を何回も練習させることをやらないのに、二人とも見ている前でよくなっていってしまうのはどうしてなのか、ということをおききたいのですが？」

「うん、四人とも小さいうちから英語劇をやってきているから、のびのびと表現することができているんだ。おれは上手な演技をさせようという気持ちはない。心と体をいっぱい働かせて楽しむことを求めている。四人ともそれができるようになっているから、おれは好きなようにやらせている。その結果がおれが思ってもいなかった面白い表現につながることもある。あとの方の質問、同じところを何回もやらせないのはなぜか、ということについてはだれか説明できるかな？ デップリン、どうだ？」

「しゃべりたいですけど、キララ子にゆずります」

キララ子がキラキラ笑顔で説明した。「子どもの劇は遊びですから、途中で切らないで、なるべく長い時間、演技をさせて、子どもが表現を楽しめるようにさせたい、というのがゴリ先生の考え方です」

「おお、ありがとな、キララ子。これはな、おれの子どものときの体験から来てるんだ。おれは小一で野球を知ったんだが、教えてくれたのは近所の小四のガキ大将のお兄ちゃん、いつも赤ちゃんを背中にくくりつけてチビたちと遊んでくれた。このお兄ちゃんはボールの投げ方を教えてくれて、少し投げられるようになったらボールの捕り方、次には打ち方、走り方、滑り込み方までも一気に教えてくれた。日本が戦争に負けてすぐの頃だったから物がなくて、ボールはぼろきれを丸めて糸で巻いたもの、バットは木の枝だった。そのお兄ちゃんの一つのことを何度も練習させることをしないで野球全体を遊ばせてくれた。おれは夜中に寝ぼけて、起き上がって、バットを振るかっこうをして、「今日はおもしろかったな」と言って、また布団に入ったんだってさ。そしておれはこのお兄ちゃんの教え方と正反対の体験を小二のときにしたんだ。おれはピアノを弾きたくって、親が遠くの町に先生を見つけてくれた。当時はピアノのある家なんてない。先生は紙に鍵盤を書いてくれた。そういう意味ではいい先生で、おれはそれで練習して、一週間に一回、片道一時間かけて、一人で通ったんだ。だがその先生の指導方法は、できないところを何度も何度も弾かせるというやり方でさ、おれの方は弾きたい歌があって、紙の鍵盤でやって来た曲を、本物のピアノで最後まで弾いてみたかったんだ。その先生は、下手でもいいから曲全体を楽しみたいという気持ちに応えてくれなかった。おれはピアノがいやになってやめてしまった。おれの劇指導はその二つの経験を生かしている。ある部分をしつこくやらせないで、全体を遊ばせるというふうにやっていると、とつぜんその子の演技全体がよくなってしまうということがたびたびある。勉強指導でも同じ経験をすることがある。人間の不思議な成長力には感動する」

(以上の斜線部分、なくてもいいか？ 萩原)

生徒たちが一気に台本を作り上げていった。日本語から英語への翻訳では、象兄ちゃまが「なるべく中学校で学ぶ範囲内の英語だけで英文にしよう。優しい英文でずいぶん表現できるから」と提案した。生徒たちは、日ごろ遊んでいる英語のカード取りの文型とチャーチー塾が作った文型集を手にも、全文を完成させ、象兄ちゃまがCDに録音した。

剣矢の高校選び

中三生の劇の練習と教科の勉強が進んでいたある日、剣矢が飛びこむようにやってきた。

「ゴリ先生！ おれ、創育学園高校に入って、ラグビーやることにしました！」

「ラグビー？ きみは多摩丘陵高校のサッカー部から誘われているんだろう？」

「サッカーのセレクションに落ちた。いっしょに受けたやつは受かったんだけど、それはいいんだけど、そいつよりうまいおれが落ちたのが納得いなくて、多摩丘陵高校の監督に会いに行って、落ちた理由をきいて納得しました」

「えーっ、剣矢、いい度胸！」と生徒たちが驚いた。

「監督は、『きみは動きが鋭くていい選手だが、うちのチームとは呼吸が合わない』って言いました。おれ、それで引き下がった」

「それでラグビーに気が変わったのか？ きみはラグビーをやったことないだろう？」

「先生、そこから先、ぼくに説明させてください。ぼくが剣矢にラグビーを勧めたようなものなんです」とデップリンが誇らしそうな顔をした。「ぼくは図体がでかいから創育学園でラグビーをやらないか、って先輩から誘われていたものですから、剣矢の気分転換も考えて、剣矢を創育のラグビー試合の見学に誘ったんです。そうしたらこの人、一発でラグビーを気に入ってしまって、創育学園のラグビー部に入るって言いだしたんです」

「ほう、どうしてなんだ？」

「それが剣矢は観ているうちに試合のルールがわかっていくんです。そしてもうれつに興奮して、『そこだ！ ちがう！ そっちだ、そっちへボールをまわせ！ いいぞ！ 走れ！ よっし！』とか叫びまくっているんです。そこまで熱狂する剣矢は脅威でした。剣矢にはラグビーのセンスがある、ぼくにはない、ってこともわかりました。

「おれ、自分がボール持って走っていくコース、ボールを蹴っている姿が見えたんです。それにラグビーは殴ったり蹴ったりすること以外は、何をやってもいいみたいで、ボール蹴って、持って、走って、思いっきりぶつかって、取っ組み合って、最高におもしろかったです。試合は創育のゴロ勝ちでしたけど、創育の選手も応援の観客も相手校に対して感じがよかったです」

「ラグビーは試合が終われば、戦った相手を尊敬するらしいよ」

「やっぱり！ おれ、創育学園に行ってラグビーやる！」

「それでぼく、剣矢が創育学園を受験した場合の合格可能性を調べたんですけど、創育は難関校で、剣矢は今からかなり点数を上げないと合格は難しいです」

「だいじょうぶ！ おれ、合格する！」

剣矢のきっぱりした言い方にキララ子が軽やかに笑い、理王は「剣矢は受かる」と言った。「ほーれ、キララ子も理王もプラスに受けとめてくれた。ねえ先生、おれ、受かるよね？」
「うん、受かる。剣矢は人間素材として魅力がある。面接試験では剣矢の魅力を思い切り表現しろ。言葉づかいなんか気にしないでしゃべるといい」

剣矢の創育学園の受験があった日はチーチー塾の中三生の授業日で、試験を終えた剣矢が「おれ、合格したよ！」と意気揚々とやってきた。

「即日発表だったの？」と生徒たちがきくと、「まだだけど合格した」と剣矢は順を追って説明した。

「英語は満点、数学も全部できたつもりだけど、おっちょこちょいのおれだから二科目で百七十くらいかな。国語に作文があって、三つの題の中から一つ選んで二百字以内で書け、とあったので、『創育学園で私がやりたいこと』を選んで、問題は一つもやらないで解答用紙の裏も使って、創育学園と相手の高校との試合を見たときの感想を思いきり書いた。二百字なんて無視して思い切り書いた」

「おまえ、問題の手をつけないで、心配じゃなかったの？」

「心配じゃなかった。おれの作文読んだら国語力あるってわかるもん。ね、先生」

「うん、剣矢は良い文章を書いたとはずだ。何か高校から反応があったのか？」

「あった。試験中に試験監督の先生がおれの後ろに立って、おれの作文をのぞきこんでいたみたいだったんです。試験が終わったらその先生から『ちょっと残ってくれ』って言われて残ってたら、ラグビー部の監督先生って人が来て、その場でおれの作文読んで、『これはラグビーをやる人にとってはうれしい作文だね』って言って、幾つか質問してくれたんです。おれのサッカー選手としての能力のことは何にもきかなかった」

剣矢もリサも志望高校に合格した。都立高校の入学試験ではオッチャンが薬師が丘高校、デップリン、キララ子、ホッホが町田原高校に合格した。ホッホはチーチー塾に入って成長しているのでチーチー塾の高校クラスに来たい、地元の生徒たちと付き合いたい、親もそれを勧めている、ということで、町田市内の高校を受けたのだった。

デップリンが人を生かせるようになった

英語劇発表会の二日前に、高校生数人が中三生クラスの出来上がりを見にやってきた。

「チャンちゃん！」。半年ぶりに高校生のチャンちゃんに出会ったキララ子がかげよった。「モダンバレエ、楽しいです！」

キララ子はクラシックバレエを学んでいたが、中一の夏の合宿で、チャンちゃんから「キララ子の動きはモダンバレエに向いている」と言われて、モダンバレエに変えたのだ。

「劇の中で踊る場面はあるの？」

「ありません。イヌを相手のときに少しだけでも踊ってみたいです」

そこへ大学生になった美音がバイオリンを持ってやって来た。キララ子とリサがかけよって「お久しぶりです！ わたしたちのこと、覚えていますか？」と期待の顔をした。

美音は期待にこたえて目を大きくした。「リサちゃんとキララ子ちゃん！」

二人が飛び上がって喜ぶと、その隙間に「ぼくたちのこともわかりますか？」とデップリンと理王が顔をつっこんできた。

「わかるわよ！ チャップリン歩きのデップリンと……あらーっ、赤ちゃんだった理王くん！ みんな立派に成長しているのね！」

「ありがとうございます。美音さんもすてきなお姉ちゃまに成長していて感激です！」

チャンちゃんが笑った。「あーあ、お姉ちゃんあんなにあでやかに笑っちゃって」

「それじゃあ先にバイオリンとダンスの初合わせをやってみよう」

美音のリズミカルなバイオリン演奏と理王のスピードのあるダンスが合致した。チャンちゃんがいい笑顔でキララ子を見た。「キララ子、見ていて踊りたくなかったですよ？ 理王といっしょに踊っちゃいなよ」

「はい。先生、わたしも踊りたい！」

「おお、踊ってみろ。だがおいぼれを演じるからといって、体をぐにゃぐにゃさせすぎると汚い。体の軸はくずすな。キララ子は理王のことを気品がある人と言ったが、キララ子も気品の人だよ。理王のきびきびした踊りに対してキララ子はしなやかな踊りで合わせろ。二つの気品が香るよ」

「よぼよぼのネコとイヌでなくてもいいのですか？」

「いいんじゃない」とアズミがこたえた。「生徒たちはよぼよぼよりも、カッコいいキララ子と理王を見たいんだよ」

「その通りだ。親たちも、『自分の子どもも、いつかあんな素敵な人に育つんだ』と思って安心する。だからおれの劇指導は単純だよ。第一は子どもが生き生きと劇の世界の人物を楽しめるようにすること。第二は親が我が子の生き生きした姿を見て嬉しくなるようにすることだ」

中三生たちは劇の最初から最後までを演じ終わると、「高校生、大学生たちのみなさん、感想をおねがいします」と正座した。

「ホッホって、こんな愉快的やつだったんだ。」

「オッチャンのロバ、親しみが持てる」

美音は「ストーリーの展開がおもしろくて、それぞれの人が役を楽しんでいた」と言った。

象兄ちゃまも感想は「気が付かなかった自分に出会えた感じがします」だった。

豪利がキララ子にきいた。「象兄ちゃまの役はよく思いついたねえ。だれの発想なんだ？」

「理王の発想です。理王がいろいろ知恵を出してくれて、それをみんなでふくらませました。象兄ちゃまもいっしょに考えてくれました。それで先生、劇とは関係ないパフォーマンスを最後に付け加えましたが、いかがでしたでしょうか？」

「感心した。象兄ちゃまの人柄と象兄ちゃまに対するきみたちの親愛の情が表されている。ファイナーレとしても気持ちがよかった」

「おほめの言葉をありがとうございます」とデップリンがにっこにっこした。「明後日の発表会まで、劇の練習は中三生だけでやらせてください。発表会で先生を驚かせたいんです」

「おお、そうか、何かイタズラを考えているのか、理王？」

「いいえ、そういうことだけではなくて」とキララ子が説明した。「リサは福島県の高校へ入学し、剣矢はラグビー部に入部しますから、高校生クラスには来られません。この七人がいっしょを楽しめるのは明後日の発表会までです。ですから今夜はこのあと、練習を兼ねてお泊り会をしたいんです」

リサもくりくり目で言った。「今日はそのつもりで、食べ物も持って来ています。高校生も象兄ちゃまも美音ちゃんもそのつもりなの」

「ぼくたちは明後日の発表会まで先生とお会いできません。ですから先生はぼくたち中三生へのはなむけの言葉を、今、おっしゃってください」

「うん、お泊り会はオーケーだ……<はなむけの言葉>か？……とつぜんだなあ……ない……今はない。だがおれは一人ひとりにたくさん言ってきた。それを思い出して意識化して、それをはなむけの言葉にしてほしい。だがデップリンにはあるぞ。デップリンは<人を生かせる人>になってきている。その道を進め>。これがはなむけの言葉だ」

「うれしいです。もうすこし詳しく言っていただけたら、ぼくは意識化できます」

「きみがオッチャンをロバ役に指名したことなのだが、今までのデップリンだったら、ロバ役はきみが当然のように主張してなるとおれは思っていたし。みんなもそうしただろう。ところがきみはロバ役にオッチャンを推した。オッチャンがロバ役になったことで、オッチャンの良き姿が現れ、きみたちのオッチャンを見る目の温かさ、象兄ちゃまのオッチャンをほめる言葉で、おれはオッチャンの良さを改めて知った。オッチャン自身も自分の良さを知ることができたと思う。これはデップリンの功績だ。デップリン自身も自分の成長を自覚できていると思う。だからデップリンは<人を生かせる人物>に向かって成長している。励めよ>ということだ」

マチダの音楽隊

英語劇発表会の幕が上がった。小学校低学年クラスはロシアの民話「てぶくろ」、小高クラスは「三匹の子ブタ」、中一クラスは「赤ずきん」、中二クラスはグリムの「小人と靴屋」と続き、中三クラスの発表の前に、高校クラスが「おれたちオオカミ極悪人」を演じた。これは豪利の創作である。

二人の泥棒役のジュニアとヒッポが、英語と日本語で歌い踊りながら客席から登場してくる。「おれたちオオカミ極悪人。泣く子も黙るウルフギャング。銭を求めてあの町この町、悪を求めて津々浦々。犯した悪事は数知れず、手にした宝は山のように……とは真っ赤な偽り。」

おれたちやまぬけ、お人よし。だましたつもりがだまされて、奪ったつもりが奪われて、追われ追われてあの町この町、流れ流れて、今、おれたちや、ここへ逃げてきたというわけよ。なになに？　ここは子どもの国だと？　えっへっへ、いっひっひ、よしよし、子どもをだまからかしてこの国を乗っ取ろうぜ！」

ところが、チャンちゃんをリーダーとする子どもたちにやっつけられてしまう。極悪人のオオカミたちは、そのあと子どもたちの優しい心にうたれて、気持ちをあらため、痛快に活躍する、というストーリーである。毎年戦う場面は子どもたちの人気だが、今年は特に女子のチャンちゃんが、男子のヒッポとジュニアを投げ飛ばし、二人は思い切りよく投げ飛ばされてくれたので、子どもも親も大喜びの大喝采だった。プログラムの最後の中三生クラスの「ブレーメンの音楽隊」となった。幕が開いた。

ナレーターとロバの飼い主役のホッホが軽快に飛び出してきた。

ナレーター：みなさん、こんにちは！　ぼくはさわやかホッホくんです。（ホッホが客席に向かって手を振った。みんなが手を振り返し、ホナミが「おにいちゃん」と叫んだ）ではこれから「ブレーメンの音楽隊」の英語劇を始めます……

ナレーター　：昔、むかし、ある男がロバを飼っていました。（ぼろぼろのエプロンとうす汚れたシャツ、ズボンをもとったロバが出てきた。ホッホは若わかしく、くると回転すると、よぼよぼの飼い主役に変化してロバに向って進み、ぶるぶるふるえる腕で指した）

飼い主　　：あのやろう、老いぼれちまって役に立たん。肉にして食っちゃうか。

ロバ　　　：（飼い主がのろのろと去るのを見送りながら）おいら、まだ死にたかねえ。夢だった音楽家になれねえものかな？（ハーモニカを取り出し、そっと吹く。その音に心をとめる。また吹く。遠い空を見上げる）

ロバ　　　：ああ、いい音だ……おお、そうだ、ブレーメンの町へ行って、音楽隊に入ろう。（ホッホがまたくると回転。模造紙を広げて、「夢は続くよどこまでも」の歌詞を客席に見せる。ロバのハーモニカで客席の子どもも親も歌う。ホッホの母親は手のひらで顔をおおい、指の隙間からホッホを見ていた。その隣で父親がうなずいていた。オッチャンの妹の桃香はびっくりした顔で母親に語りかけていた。ロバがハーモニカを吹きながら進んでゆくと、ネコ役のキララ子が黒のセーターと黒のロングスカートを身につけ、ギターを持ってよろよろと出てきて、ぺたりと座りこんだ。ロバが立ち止まる）

ロバ　　　：昔のべっぴんさんじゃないか？　そんなにぐにゃぐにゃしてたんじゃ、べっぴんがだいなしだよ。どうしたってんだい？

ネコ　　　：あれ、まあ、あたしがべっぴんだってのかい？　うれしいこと言っておくれだねえ。まあ、きいておくれよ。（と逃げ出してきた理由を語る）あんたのハーモニカ、みごとじゃないか。あたしもギターを弾けるんだがねえ（ギターをつまびく）。だけど、この先、どうやって食べていけばいいのかねえ。

ロバ　　　：おお、ギターがうまいねえ。だったらおいらと行こうぜ、ブレーメンへ。音楽

団にやとってもらおうぜ。

ナレーター：ロバとネコがブレーメンへ向かって進んで行くと、たけり狂ったイヌに出会いました。

（真っ赤なセーターと真っ赤なロングスカートをまとったイヌが飛びだしてきて、ネコに向かって吠えたてる。ネコは体を低くしてうなり、前足を伸ばしてネコパンチのかっこうをする。イヌは右から左へ、左から右へと走って、激しく吠えたてた。客席の子どもたちが「えっ、理王？ 理王なの？」と騒いだ）

ロバ　　：おい、長耳くん、どうしたんだい？ そんなに怒ったんじゃあ、体に悪いよ。
（イヌが逃げてきた理由を語り、ロバとネコも語る）

イヌ　　：だったらおいらも仲間に入れてくれよ。おいらはタンバリンができる。踊りも得意だ。（イヌがポーズをとる。美音がバイオリンを持って出てきて、弓をかまえる。理王とキララ子がさっと左右に分かれ、美音のくおもちゃのチャッチャッチャ>」の曲に合わせて、前に出、後ろにさがり、交差し、スピードよく踊る。真っ赤なイヌの、切れ味の鋭い踊りと、黒いネコのしなやかな動きの対比がみごとで、客席から万雷の拍手が来た。二匹が決めのポーズで踊り終わったとき、タイミングよく「もう一回やって」という小学低学年の男の子の声があって、客席は爆笑。「アンコール！」とキララ子のお爺ちゃん。「じゃあ、もう一回ね」とキララ子、理王、美音が目を合わせ、バイオリンのリードで客席も歌い、子どもたちは立ち上がって動物といっしょに足踏みをした。豪利は（理王がやりたかったのはこれか？ ネコとイヌの衣装は理王の母親が作ったのだろうか？）と理王の母親に目をやると、母親が大笑いの顔で、『ちがいます！ ちがいます！』という合図を送ってよこした。オンドリの場面になった。リサが空に向って、のびやかな声で「コケコッコー」と叫ぶ。動物たちもオンドリへの呼びかけを空に向って放ち、お互いの声が遠い空の向こうでからみあった。四匹になった動物たちは剣矢のサルに出会った。剣矢は地面をくるくるくるくと前方へ回転して一周した）

動物たち　：サルさんよお！　なんで狂ったように木から木へ飛び移っているんだい？
サルが木から落ちちゃあいけねえぜ！

サル　　：それが落ちちゃったんだよ。おらあサーカス団で曲芸をやってたんだ。空高くに張ったロープの上で、宙返りをしたり、リコーダーを吹いたりして、やんやのかっさいをもらってきたんだ。それがよう、おいぼれて足がもつれて、客の前で墜落しちゃって、おはらいばこってえわけさ。それで体を鍛えなおしてるんだが、雇ってくれる人はいるのかねえ。

動物たち　：リコーダーを吹けるのかい！　いいねえ。いっしょに行こうぜ、ブレーメンへ。

（五匹の動物が客席の生徒たちの歌といっしょに進んで行くと、ブタの役のデップリンがチャップリン歩きでフニャーリ、フニャーリと登場してきた。子どもたちが「デップリン！」と喜び、デップリンは腕を振ってこたえ、キララ子のお爺ちゃんが「待ってました！」と声援を送った）

ブタ　　：みなさん、お待ちください、ぼくもお仲間に入れてください。

動物たち : あれっ、ブタじゃあないか。仲間に入りたいうって、どういうことだい？

ブタ : ぼくは腕のいいコックでした。ところがお客さんの料理に、塩と砂糖を入れ間違えてしまったんです。

動物たち : そりゃあクビになって当然だ。あんた、楽器は何かやるのかい？

ブタ : ぼくは歌が得意です。ぼくのバスバリトンの声を聴いてください。「森のブタさん」を歌います。

(美音が客席の子どもたちを向き、「森の熊さん」の導入のメロディーを弾く。ブタが「あるひ」と歌い、子どもたちが「あるひ」と続け、「森の中」「森の中」、「ブタさんに」「ブタさんに出会った。花咲く森の道、ブタさんに出会った」と歌った。)

動物たち : 暗くなってきた。どこかに寝るところを見つけようぜ。おや、あそこに明かりがみえる。

ロバ : (ロバが見に行き戻ってくる) 泥棒たちの住み家だ。ごちそうがいっぱいだ。

動物たち : うーっ、腹がへってきたぜ。やつらを追い出そうぜ。

(泥棒役のホッホが一人で出てきて、真ん中にすわりこみ、食べる演技を大げさにやる。動物たちは抜き足、差し足でのホッホの後ろにまわって、横一列に並ぶ。いっせいに鳴き声をたて、その場でゆっくり、ゆっくりと踊る。ロバがその場で後ろ脚で蹴るかっこうをする。ホッホが派手にのけぞる。ネコがひっかく。ホッホが顔をおおう。犬がかみつく。ホッホがびよこたん、びよこたん跳ねる。ホッホが逃げ去る。動物たち、床に座って食べ、眠る。バイオリンが朝の曲をかなでる)

オンドリ : コケッココー。朝だよー。ブレーメンへ出かける時間がきたよ。

動物たち : おお、豊かな森だ。目の前に池があるぜ。カワセミが止まっている。ここに住めたらいいんだがねえ。さあ、出発だ！(動物たち、<夢をもとめてどこまでも>を演奏しながら歩み出す。象兄ちゃまが扮する紳士が登場する。ここからセリフは日本語になる)

紳士 : いやはや、なんともお見事な演奏ですな。わたしはこの人間ですが、みなさんはどういう方々なのですか？

ロバ : おいらたちはブレーメンの町の音楽隊に入れてもらおうと思って、これから出発しようとしているところだよ。

紳士 : ブレーメンの音楽隊に入りたいですと！ これはこれは、わたしは幸運ですな。実はわたしはブレーメンの町のレストランで、音楽隊の指揮者をやっている者ですてね。

ネコ : 指揮者をやっているんですって！ そんな人がどうしてここへ？

紳士 : はい、この町はわたしのふるさとですてね、わたしはここへ戻って、音楽隊つきのレストランを開きたいと思って、調べにやってきたところなんですよ。

イヌ : 音楽隊つきのレストランを開きたいのかい！

紳士 : そうですとも。その音楽隊になっていただける方々に、今わたしは出会えたんですなあ。いやはや、なんとも運がいい！ あとは腕のいいコック探しです。

ブタ : コックならここにいます！ ぼくは飛び切り腕のいいコックで一す！

ホッホ　：ぼくは飛び切りおもしろいコメディアンで一す。
サル　　：おいらは曲芸ができるぜ！
紳士　　：おやおや、なんともうれしいですなあ。するとあとは建物探しだけですなあ。
動物たち　：建物ならあそこにきれいな空き家がある！
紳士　　：おお、おお！　ではあれをレストランにしましょう！
動物たち　：ところでここはどこなんだい？
紳士　　：ここは町田で、あの池は薬師池です。音楽隊の名前は何としましょうか？
動物たち　：マチダの音楽隊！
紳士　　：マチダの音楽隊！　けっこうですな！　それでは諸君、レストランを開く準備にかかりましょう。

ナレーター：レストランを開く日がやってきました。店はもうお客さんでいっぱいです。
紳士　　：みなさま、ようこそお越しくださいました。私は店長です。おお、ちょうど料理ができあがったようです。では店の諸君、お客様に料理を出してください。当店自慢の料理長、デップリンが腕をふるったものでございます。

（デップリンが客席にあいきょうをふりまく。中三生たちが客席に入り、「はい、お客さまはビーフステーキですね」「こちらのおぼっちゃまはカレーライスでしたね」「嬢ちゃま、チーチー自慢のミネストローネです」「おいしくて口がとろけます。とろけたら治りません」などと言いながら、アメ玉を子どもたちに配って歩く）

紳士　　：召し上がりながらわたしどもの楽団「マチダの音楽隊」の演奏をお聴きください。一緒に歌ってください」

（紳士の指揮と美音のバイオリン伴奏で、「夢を求めてどこまでも」「おもちゃのチャッチャ」「森のブタさん」をみんなで歌い、踊る。デップリンがイタリア民謡をヒッポのフルート伴奏で歌い、最後にリサと象兄ちゃまがオッチャンのハーモニカ伴奏で、二重唱「遠き山に陽は落ちて」を歌った。

中三生とチーチを卒業する高校生のヒッポが一行に並び、一人ひとりがチーチーでの成長を自分の言葉で語った。一番最後のホッホは、「チーチーに入ったおかげで……」と語り出したとたんに泣いてしまっ一語も言葉にならなかった。客席のホッホの母親も声をあげて泣いた。デップリンが「この泣き声二重唱を翻訳します」とホッホのことをユーモアのある言葉で話した。ホッホ親子へ長い拍手のあと、チーチー塾の一年間の締め言葉として、豪利が「今日の発表会がチーチー塾の姿です。来年もご期待ください。一年間のご協力、ありがとうございます」と短く言って終わった。

生徒たちが後片づけをしているとき、「日出くん」と、小低の男の子を連れた母親がデップリンに声をかけてきた。

「あれっ、おばちゃま！　太郎のおばちゃま、どうしてここにいるのですか？」

夏の合宿でデップリンからチーチー塾を追放された太郎の母親だった。

「日出くんのお母さんに誘われて来たの。太郎がみなさまに、すっかりご迷惑をかけてしまって、ほんとうに申しわけなかったわね。ごめんなさい。ほんとうにごめんなさいね。でもね、太郎が『この弟をチーチー塾に入れろ』って言うのよ。この子もお兄ちゃんと遊びたいって泣くし、おばちゃんたち、またいっしょに暮らすことにしたの。日出くんへの感謝の気持ち、わたしたち一家は決して忘れないわ。本当にありがとうね」

おわり